
脳内計算

ALISA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

脳内計算

【Nコード】

N3415X

【作者名】

ALISA

【あらすじ】

本城那津（19）

黒縁メガネにボサボサの黒髪。趣味は読書、体力ナシ。という地味人生を悠々と歩く女子大生。悪口？そんなの言わないよ？…頭の中でボヤくだけだから。

そんな孤高の彼女が、俺様なイケメンと出会ってしまったら。

脳内毒舌女×俺様美青年のラブコメディー！。

モバゲー（E）で掲載している小説の転載です。

どうぞ読んでみてください。

本編終了。現在、番外編・短編を更新中。

地味女、現る（前書き）

はじめまして。ALISAと申します。
笑えるラブコメ目指して頑張った（？）作品です。どうぞ読んでみてください。

地味女、現る

車が行き交う大道り。

多くの通行人が慌ただしくすれ違う。

サラリーマンのおっさん、OLのお姉さん、短いスカートの女子高生、チャラい暫定フリーター男。

たくさん、人がそれぞれの目的地に向かう。

こんなに大勢の人がみんな他人であって、それぞれの人生を生きているんだなあ、とか。

少し哲学的に思ったり。

ちよつと立ち止まり、また足を踏み出して歩き出す。

昨晚の雨のせいで路面は少し湿っていて、水たまりが所々できていたが、見上げると雲ひとつ無い青空が広がっていた。きれいな五月晴れだ。ピクニックにはもってこいだらう。

「……………いい天気だなあ。講義サボって散歩でもしたいなー。」

そうボヤいて空を仰ぎ、

ポケットに手をつ突っ込みながら通行人の一部にまぎれる女が、ひとり。

私は、本城 那津（ホンジヨウ ナツ）。

19歳。一応、女。

地元を出て、ただ今一人暮らし中の至って普通の大学二回生だ。

……………いや、

普通だと思いがね、私は。

あるヒト曰く、私はどうにも、『一般的な女子大生』とは異なっているとか。

私のことを客観的かつ単純に例えるなら

『陰キャラ地味女』らしい。

ほとんど化粧もしない上に常にジーパン、黒ブチ眼鏡。テキトーにそろえた肩くらいまでの髪。

その人からは女を放棄してる、とも言われたっけな……

…別にいいだろうが、どーでも。個人の自由だよ、諸君。

そんなことは特に気にしてないし、こんな容姿故に話かけられもない。

悠悠自適な一匹狼として過ごしているわけだ

…寂しい奴とか思っただろうが、私はこれで満足しているんだぞ。ええ、なんの不満もありませんとも。

歩いていたら、私の通うS大学がもう目の前にあった。ドンと、重厚感のある門が立っている。

退屈な講義を聴くのは実に面倒だし、精神的にも苦痛だが……
仕方ない、と肩を落として校門をまたぐ。

…今日は本屋に寄って帰ろう、うん。

何か自分にご褒美を与えないと、やっていけないや。

今日の講義室の場所を思い返しながらそこそこ広い棟内を歩き回ると、あった。プレート番号を確認して中に入る。

中では14、5人くらいの男女がそれぞれのグループで仲よさげに話している。

私はサツと教室内を見渡し、うるさいグループから離れた場所に座ることに…。

…おい、席は詰めるよ、邪魔くさい。鞆を座席に置いてるんじゃない。

そうして行き着いた先は窓際の、後ろから2番目という好位置。

…こんなことでラッキーを感じる私はきつと小さい人間だろうな。日当たりがよく、景色もよく見える。

窓の外をのぞくと中庭で大道芸まがいの ジャグリングか、あれをやっている男子が数人。

…あ、失敗した。恥ずかしそう。辺りを見回している。

…ゴメン、バッチリ見ちゃったよ。はは。

そんなところでチャイムが鳴り、ハゲた英語の講師が入ってきて、出欠をとる。

しゃがれた、いかにも年配らしい呼び声に私は気の抜けた返事を返して、授業がスタートするのをぼんやり眺めていた。

…あーあ、つまんね。

前の奴なんかゲームやってるよ。

そうばやっていると、英語教師の抑揚のない声が響いて教室を満たす。

最初の10分くらいはマジメに聞いていたが……いかんせん、ここは気温・日当たり・先生の死角という3条件をすべて満たした神席。当然(?)のごとく、私はゆっくりと舟を漕ぎだした。

…学生の本分？そんなの知らない。だって眠いもんは眠いんだから。

チャイムが鳴る。どうやら授業が終わったらしい。

私はムクツと起き上がって真っ白なノート等を片づける。

そつえば、もう昼だ……。今日は学食を食べようか。

思い立った私は食堂へ行った。

学食を販売する食堂は、私の学部棟からほど近いところにあって非常に便利だ。

着いてみると、まだ早い時間だからか、あまり人が見えない。

これまた、ラッキー、だ。私はさっとメニューに目を通し、適当に手ごろなものを頼んで席についた。

…学食って何気に美味しい、とかぼんやりと思いつつ、のろのろと箸を進め、完食。

…ごちそうさまでした。日替わりランチAセット。おばちゃんもい腕してるなあ。

ついでにコーヒーを頼み、ブラックのまま一口飲んだ。

そして、持参してきた、本屋でもらったカバー付きの小説を取り出し、開いて読む。さらに携帯音楽プレイヤーのイヤホンを耳につけ、再生。

あとは自分の世界に入るだけだ。
ゆっくりと耳に流れ出した音楽を聴きながらページを繰っていく。
1日のうち私が最も至福を感じる時間。今日もそれを存分に満喫することにする。

1時間くらい、そうしていただろうか。
人も随分と増えてきて辺りがザワザワしてきたので、私は音楽プレイヤーを止め、本を閉じて席を立った。

…人の多いところは好まない。集まってきたらすぐ退散。それが、私のルールです。
ふん、と鼻を鳴らし、こそこそとその場を後にした。

食堂から出たものの、まだ授業が残っているので、大学内をゆっくり散歩することにする。

外に一步出ると、爽やかな風が春の温かな雰囲気演出していた。
……ん、ちよつと詩人くさい表現だったか？

しかし、そのくらい気持ちのいい春風の中、足を鳴らして歩くのは最高に爽快だった。

いい。この新鮮な空気。都会の汚染された空気とは無縁みたいだ。
私はそのままブラブラ歩いた。

しばらくすると始業時間間際になったので、うんと伸びをして、午後の授業に向けてガッツを入れて、

私は再び学部棟へと歩き出した。

これが私の日常である。

たらたらとつまらない授業を聞き流し、時々バイトもして、たまには家族にも連絡して……。

…いや、最後のヤツは無いか。私、実家すらなかなか帰らないしなあ。

まあ、とにかく。

…こんなつまらない日常が私は心底好きだった。誰の目にも触れられず、山も谷もない平坦な人生。

少しのラッキーで幸せになれちゃう、お手軽な毎日。死ぬまでそうだろうと思っていたのに……

判らないのが人生なのか、それとも神サマとやらのいたずらか。

とにかく私の日々は見事なまでに崩壊することとなる。

地味女、現る（後書き）

那津さん、基本個人プレーです（笑）
出会うのはもうちょい先。

3匹のギャル

それは、突然訪れた。

今日もブジに講義が終わり、昼食をハンバーガーセットにするか、牛丼味噌汁付きにするかで迷っていた頃。

「ねえ〜っ本城さんっこの後ヒマあ〜？」

やたら語尾を伸ばす女ども（計3人）が私の正面に現れた。：言っておくが、少し後ずさってしまったのは、私のせいではない。

彼女らの、ハンターが獲物を刈り取るかのような勢いが、怖かった。ただ、それだけである。

てか、私の周囲の野郎どもも若干引いてたし。

目を向けてみると、やはり何処をどう見ても、ド派手な女子たち。髪はくるくると巻かれていて、マツゲは、瞬きする度にバサバサと音が鳴りそうなくらい。

さらに、化粧と言うよりはもはや仮面と言えるくらい塗り固められた顔面。

そう、いわゆるギャルの方々だ。：付け加えると、私が最も関わりたくない人種でもある。

ん？これから暇か、だと？

「…え、何で？」

一応返したものの、嫌な予感がバシバシする。そして、それは。

「あのさあ〜今夜、4対4の合コンするんだけどお〜ミーコとうちとアミでえ3人しかいないわけ。

もう1人女の子がいるの。それで、暇そうな本城さんにチャンスをあげようと思って！」

今日のメンツ、マジイケメン揃いなんだって!!」

次にそう続いた彼女のセリフで、ああ、クリティカルヒットしたな、と思った。

「……………」

…まあ、実は私は、『あのさ』の時点で状況は完全に把握していた。…合コンの人数合わせね、要は。

現れた時点で害のような彼女らだが…よくもまあ、なんとも面倒くさいことを突き付けて下さったな。

ミーコもアミも君も私は知らないし、『暇そうな』って失礼すぎるだろ。

私、今日はバイトあるんですけど。

つか、話が長すぎ。無駄が多すぎるな。

少しは、ナイ頭振り絞って、きちんと文を頭ん中で構成してから口を開け。

とは当然、言えないわけだが。いや、当然じゃないですか。

でもとつとと断らないとなあと、口を開く。

「悪いけどきよ…」「わあ〜っありがとう！行ってくれるんだあ!!」

「…いや、だか「ほんと助かったあ。あ、場所はねえ……。」

…人の話、聞けよ。

やっぱり強制参加かよ。拒否権すら認められてねーのか。

しかし、ヤツらの目が「断ったりするわけないよな…?」と言っている。

チキンな私がビビるには十分すぎる程の睨み。ちょ、怖いって。

結局、私はしぶしぶ頷いた。なるべく波風はたてたくないからな。

…しかも向こうは超強そうだし。勝ち目無さそうだし。何か起こったら面倒だし。…ねえ?

なんて、自分自身に言い訳がましく言い聞かせていると、3匹のギヤルは手早く場所をかいたメモを私に渡してきた。そして、「じやあよろしくー!!」と言って、嵐のごとくその場を立ち去りなされる。

…残された私はというとなんだか微妙な空気の中、周囲から白い目で見られていた。

ジロジロ、チクチク。好奇の目で私を見てくる野次馬共。

見んな。私だつて意味分かんないんだから!

厄日か。今日は厄日なのか。

私は愕然としたまま頭を抱えなくなった。

…とりあえず今日の予定は埋まったらしい(強引に)。

いやしかしマジでどうしよう…。こんな事態久々だな。

まだ『自分たちの引き立て役に地味なやつ誘おう。』なんて作戦、実行するような古い人間がいたのか。

しかも、よりによって、合コンなんて。何それ、都市伝説じゃなかったの？

ははは…笑えない。

頼みの綱のバイトも…シフト、確か10時からだっけ…。

ヤツらの言っていた集合時間は、6時…ああ、バリバリ間に合う感じ、だな…。

ちくしょう。シフト変更だしやがった竹内（31歳、独身男）を恨むしかねえ…。

…あとで一発殴ろう。うん、そうしよう。

内なる決意を心の奥にしまい、私はとりあえず、居心地の悪かった室内を飛び出し、外に出た。

もう昼飯はどうでもいいや。とにかく何か策を考えないと。そう思い立ち、幸い今日の授業は午前のみだったので、私は早々に帰ることにした。

私の家は大学を出て10分くらい歩いたところにあるアパートである。多少ボロいが、通学に非常に便利だ。

…そういうわけで、私はすぐに家に着き、悶々と考え始めた。

随分と考え込んだが、いい回避策は皆無だった。

今までああいったたぐいは上手く切り抜けてきたのだが、流石に今

夜となつては……。しかも実際に予定は無いので断る理由もない。あれこれシミュレーションするも、最終的に彼女らの押しに負ける結果となる。

本気で困つたな。どうしよう。

…なんて堂々巡りをしてる間に、もう、5時。向こうが指示してきた場所に行くには、もう出なければ間に合わない。

…行きたくない、が、行かないと後が怖い。やはり行ってイケメンたち（仮）のお目汚しになるしかない、か…？

…どうせあのギャルたち、いつも以上に派手なメイクとぶりっ子を決めてくるだろうしなあ。

浮きまくるよなー、私。

私は人の目にさらされるのは、好きじゃない。っーか嫌い。でも上から目線で鼻で笑われるのはもっと腹が立つ。

……なんか、あいつらの顔を思い出したら、怒りが…

「……………」

はあ…。なんかあんなギャルどものことで悩んでんの、アホらしくなってきた。

もう行くしかないのは分かってる。でも…

どうせならぶっ潰すか？この合コン。

どうせ私は地味な恋愛対象外女。なら、それを逆に利用しようじゃないか。

それで…話を聞かないバカどもに、ふ・く・し・ゆ・う？

…クツ…なかなか楽しそうじゃん？やってやるうじやないの。
私を呼んだのを後悔しろよ？

君らの合コン、台無しにしてやるよ。

私は思考をそこで停止して、シャワーを浴びにバスルームへと移動した。

そして、お湯を頭からかぶりながら今夜に向けて計画を練る。

今夜の合コンはカラオケだと言っていたから…

…こつきたら、……

………

ある程度思考がまとまった所で、シャワーの蛇口をひねった。キュツと音を立てて止まる水勢。

汗を流して、気分も幾分かさっぱりした感じた。

よし。多分、イケる。

気合いを入れ直し、バスタオルを巻きながら適当に服を着替え、たいた時間かけずに準備する。

間違ってもおよそ今から合コンだという女の心持ちではないだろう。例えるなら、戦場に赴く戦士だ。

私は鏡を見てニヤリと笑った。

……さて、ショーの始まりといこつじやないか。

今夜限りの、特別な『私』で、な。

私は不気味な笑みを浮かべ、目的地のカラオケ屋を目指して、ゆっくりと街道を歩き始めた。

3匹のギャル（後書き）

実はこのギャルたちの名前はあやふやで作者も把握できてないです

（笑）

さてどうなるんですかねえ、合コン。次話に続きます。

合コンと言つ名の戦場

待ち合わせ場所のカラオケ屋は、そこそこデカイカラオケのチェイン店らしい。

分かりやすい場所に立地しており、難なく見つけることができた。チカチカと目障りなネオン、バカでかい看板には『宴会大歓迎!』の文字が見える。

今から合コンですけどね。おたくで。

「あー本城さあん!!来た来たーっこっちー!」

すると、3匹のギャルがやたらテンションの高い声で私を呼ぶのを聞いた。

予想通り、3人も気合いの入りまくった服装に、メイク。露出もかなり高めだ。

しかも、さつきからしきりに鏡で顔をチェックしている。目つきもギラギラしていてすげー怖い。

これが、女子の本気、ね。私には一生無縁だなあ。…てか、無理だけどね

私は、ぼんやりとソレを観察して、暇そつにあくびをもらした。

…なんでも今日来る男子軍は、相当の男前らしい。ギャルの内の1人の、妹の彼氏の友達の子友達経由で知り合ったとか。…どうでもいいけど、遠いな。

「…だからあー！本城さんも、もう少しオシャレしてくればよかったのにいー！」

ほっとけ。

「そんなんじゃ、浮いちゃうよお？」

それが狙いだらうが。

「せつかくイケメンと知り合えるのに、それじゃあ損だよお。もうそんな機会ないかもじゃーん！」

失礼だな。しかもストレートに。

…ちなみに私は今、ジーンズを履き、ロングTシャツの上にジャケツトを羽織った格好。まるっきり普段着だ。確かに気合いとかは微塵も感じられないだらう。

君らと違って男を落としてきたワケじゃないんでね。

私はギャルたちの下品な笑い声を聞き流し、来るべきときに向け、最後のイメトレに専念する。

…ふう。なんか緊張してきた。

そんなこんなで店内に入る。カラオケに入るのも久しぶりだ。キヨロキヨロと辺りを見回し、凝った内装に目を奪われながらも、3人について行った。

「本城さん、こっちこっち。」

ハイハイ。

「向こうはもう部屋に入ってるって！待たせちゃ悪いから早く行こお！！」

そーでーすねー。

「そーだー！本城さんのこと、ナツって呼ぶね！友達なのに名字じや変だし。」

友達って…今日初めて話したくせにか？君の友達の定義って、一体何なのさ。

…あー、もうどうでもいいから、勝手にしてくれ。てか、帰りたい。行く前だけど、激しく帰りたい。

と、私は愛想笑いで全部スルーした。今日で顔面筋肉痛になるんじゃないかなー。

「あ、ここだ！部屋。」

奥へ奥へ入っていくこと幾分。たどり着いた大部屋で一行は止まり、ドアを、開けた。

その途端、

「おっ、合コンの子たち？」

「待ってたよー！」

「ん、入って入って。」

「何か飲みます？俺、注文しますよ。」

中にいた男性陣がわっとしゃべりだした。へえ。結構ノリがよさそうだ。

「お邪魔しまーす！」

「キヤー！話には聞いてたけど、皆超かっこいいー！」

「よろしくお願いしまーす！」

ギャルたちのテンションも最高潮。語尾も上がっていて、後ろにハートマークがついてる感じだ。

いつもより数割増しに高い声もキモ…ゴホン、まあ、頑張ってる感じでいいんじゃないかな。

私も、首を回し先に来ていた男性たちを観察してみる。

ふむ。確かに、4人ともどこからどうみてもイケてるメンズ。それぞれタイプは違うものの、皆整った顔立ちをしている。

全員、大学生らしいが、ちょっとチャラけた印象を持った。…これは、相当遊んでるだろうな。

てか、人種が違いすぎて怖いわ。彼らのオーラだけで存在ごとかき

消されるんじゃないかな、私。

…いや、別に消えてもいいけどね。許してくれさえすれば、私はすぐにログアウトしますけど？

…まあ、イマサラ無理だろうけどねー……

まだ騒ぎ続けるギャルどもを尻目に、私はそんな風に現実逃避をしていた。

「じゃあ、みんなが席についたところで……」

「自己紹介、ね。」

台詞とともにわーっと盛り上がる室内。…まあ、私も適当に合わせて盛り上がっておいた。一応。

空気読める仕様ですからね、今日は。

さて、いよいよ本番だ。

彼女らとともに私も身を乗り出した……ら、正面から視線を感じた。不審に思い、ちらつとそちらを見ると、3番目に座っているイケメン君と目が合う。

……あれ？なんか、私、超凝視されてる……？

私は眉をひそめ、顔を若干しかめる、が。思い当たる理由が瞬時に浮かび、ああ、と手を打つ。

…やっぱ浮いてるよなー。この中じゃあ。
ギャルと地味子じゃフィールド違いだろうし。もの珍しい、みたいな感じだろうか？
私は珍獣じゃねえぞ。

私はふいとそいつから目をそらし、自己紹介を聞く。……訂正、聞いているフリをする。
なんか双方、色々と言ってるが、聞くつもりはない。だって完全アウェーだから全然耳に入って来ないんだもん。興味無いし、この場限りだしねえ。

「…アミです。S大の2年生で、ただ今彼氏募集中です！」

そのうちに。余計なウインクまで入れた完璧（らしい）紹介の後、やっと私の番が来た。

きたぜ。俺の、ターン！！

私はすうつと深呼吸した。

「本城 那津、19歳。S大生。」

今日は彼氏探しじゃなく……純粹にう・た・い・に！来た！！マイクを持ったら絶対的に離しません！！

今夜は日ごろの鬱憤晴らしに、歌いまくります！

…と、いうわけで、よろしく。」

…親指を突き立て、言った。言い切った。

最後にペコリと頭を下げて席に着く。さあ、反応はいかに……！？
私は期待と不安交じりに辺りを見回した。

が、室内はシン……と静まったまま凍りついている。

あちゃ、ハズしたか……？

反応が全く返ってこないの、そわそわと落ち着かない気分になる私

しかし

やっぱり方向性間違ってたかな、と思った、その時。

「……ぶっ、ははははははっ！！」

イケメン様方が一斉に大爆笑なさった。

「……ちょっと、なにそれ！ギャップありすぎだろ！？」

「おとなし目な子かと思っいたら……いいね！。歌、好き？」

「何歌うんですか？聞きたいです。」

「最初に入れなよ。ハイ、デンモク。」

などなど。リアクションは、上々だった。

私は心の中でガッツポーズをする。

うっしやあっ！よかった、つかみはOK、みたいだ。

……ククッ、ギャルども、啞然としてやがる。……その口、閉じたほうがいいですよー？なんて。

「じゃあ……お言葉に甘えて……行きます！サン！！ものまねver
で！」

「いきなりサザ！？」

「しかも、ものまねって……。」

「みいとうめあ〜うとおすな〜おにい〜」

「うっわ、しかも超似てるし!」

「すっげえ!」

「マジ何者?君。」

ざわざわとまたいいリアクションを取ってくれるイケメン様方。私はまたいい気分になって声を張った。

フフ…見たか。これが私の秘伝キャラ…

『KYムードメイカー』だ!」

…ゴホン。あ、ネームセンスは気にすんな。どうせ私は名付け下手だ。

とにかくこのキャラで大暴れしてやる!!ものまねはこっぴどく見えても得意だったりするし!

予想通りの盛り上がり様に私は満足し、もう1曲入れようとする、
が…

「っ次!私が歌います!」

しばらく呆然としていた女性陣の内1人にデンモクを奪われた。ほかの2人も我に返ったように慌てて曲を選びだす。

ふーん?

歌、歌ってれば私みたいに注意が引けると思ったか?ナマ言っただけじゃねえ。

おもしろキャラをなめんなよ?もう流れは完全に私のものさ。

「ヤッバい、超受けた！」

「本城さん、おもしろいねー。次、何歌う？」

「うーん、何にしよう。玉 浩二か…郷ひ みか…」

「チヨイス、古っ!？」

「悪いか!どうせ古い人間だよ!なつメロのどこが悪いんじゃー!

!30字以内で説明しろおっ!」

「うわっ熱いな。逆ギレすんなって。」

「ふふ…楽しい人ですね、ナツさん。」

そう、男性陣らの注目を一身に受けるのは私なのだ。私はニヤニヤと心の中で笑った。

…いやー、悪いね。目立つちゃって。でもこういうキャラだからさ。仕方ないよね?ははは。

そして、さらに悪いことに、ヤツらの歌なんざ誰も聞いていない。

つーか、こんなところで恋愛バラードなんか歌う方がバカだろ。チヨ

イスミスもいいとこだ。

ヤツらの顔も引きつっているように見える。

…さぞかしみじめだろおな?この空気。ははははは。

その後、ギャルたちは、何曲か歌うも、微妙な雰囲気のままだった。…可愛い子ぶってアイドル曲なんか歌ってたって無駄、無駄。

「……っねえ！歌もいいけど、何か頼もうよ！」

見かねた女子のうちの一人がそう提案した。

「おっ、そうだねえ。なに、飲む？」

「俺、ビール！」

「おい、お前、車だろうが。烏龍茶にしとけて。」

「俺、飲みたいときは飲まなきゃ死んじゃうの！」

「馬鹿か、お前。」

イケメンもノツてきた。どっと笑いが起こる。

私はそれをうすら笑いを貼りつけたまま眺めた。

…ふーん。話題転換したか。

とりあえずトークで女子特有のアピールをするつもりだろう。

男子を持ち上げて、調子にのらし、自分の良さを何気なく伝えるパターン。

「あははっシンジくんおもしろーい！」

ほら、ね。ちなみにおもしろいのはお前の顔だ、ギャル子。

さつき歌った曲がガン無視されて、結構堪えてるのが丸分かりだぞ。

「マジで？ミィコちゃんも可愛くておもしろいよ。俺、結構タイプかも。」

うん。これも、合コン常套句。やはり、この男ども、慣れてるな。

「ええ〜っそんなことないですよおっ。もうっ！」

ハイ、ぶりっ子ウザイ。『もうっ』とか、いつの時代？ウケるんですけど〜？

ハッと、脳内で思い切り笑い飛ばしてやる。

…しかし、少し面倒な展開だな。雰囲気合コンに戻りかけだ。他の2人も、そろそろ狙いをしばっているのか、ガンガン攻めているみたいだし。

……ふむ。どうするかな。

「那津は何飲む？」

と、そこに私に呼びかける男が1人。

は？いきなり呼び捨て？なに、誰。そう思っていると、例の3番目の男子だった。

…なんか何かと引っかかるなあ、こいつ。

まあでも、聞かれたなら返しますよ。今の私にベストな返答は……

「あ、オレンジジュースで。」

…これだろ。

すると、

「は??」

男性陣は声を揃えて私に疑問符を投げかけた。
ナイス、リアクション。

「え、何で？飲まないの？酒、超強そうじゃん？」

彼らの一人が、私を覗きこんで聞いて来る。

…何の決めつけだ。しかも結構気安く話しかけるようになってきたな。

そして、また別の人も、声をかけてくる。

「もしかして、車で来たとか？俺が送るから大丈夫ですよ？」

わー、紳士だこの人。でもここは譲れないんですね。

「…いや、だって未成年だし。」

…ねえ？

きよとん、とした表情をつくって言ってやる。

すると、

「ええ!??」

一瞬、空気が固まったかと思えば、今度はさらに大量の疑問符を送

られた。

しかし、それを聞いて、女子たちが、これ見よがしと棘を刺してくる。

「えーナツ、ノリ悪い。こういうのは飲む所でしょお?」

ニヤニヤ笑う彼女らは『ふっ、失敗したな!』と言外に語っている。

バカめ。これも、作戦の内なのさ。

「ダメなの!」

タイミングを計り、私は突発的に立ち上がる。

「お酒は、満八タチになってから、というじいちゃんの教えなんだ! 私が破るわけにはいかない!!」

再び、室内は笑い声に包まれた。うん、中々のウケだ。

「っ何だよ! 何者なんだよ、お前のじいちゃん!」

「力説しすぎだろ。漫画のキャラみたい。」

「え、じゃあいつ20歳になるの?」

「お。聞くからには誕生日プレゼントを用意してくれるわけ?」

「あ、やっぱいいわ。」

また、爆笑の渦が巻き起こった。…今日のメンツはノリがよくて助かる。おかげでなんとか巻き返せた。

やっぱりこういう明るい空気じゃねえと、な。

ちらつと後ろを向くと、女どもは一応笑顔をつくっているものの、目はこつちを睨んでやがる。

…その顔やばいよ？ボロを出しちゃまずいんじゃないの？

まー、いいけどさ。君らの心配なんて、してないし。

私は私で、好き勝手やるから。

「っしやーっ次はアニソンだぁあー！！！」

「待ってましたー！」

「ナツちゃん、カッコイイー！」

お酒も入って皆の頭がゆるくなってきた頃。完全、私ペースの合コンが繰り広げられる。

…合コンってよりも、もはや宴会のノリだ。

男性陣も何曲か歌った後は私にマイクを譲ってくれたので、私は自由で歌う・笑かす・盛り上げる。

まさに FREE DOM！！

ノリノリで歌い終わり、次、何にしようか、と曲を選ぼうと

「……………」。

すると、突然、女性陣がガタツと無言で席から立ち上がった。

……来たか。そろそろだと思ったよ。

男性陣は女性陣を見上げ、私も、デンモクを置き、3人を見た。

「ちょっとー、私たちお手洗いに行ってきまーす。」

「皆、歌っててねー。」

ギャル3人は私の腕を掴んで（半端なく痛い）部屋から連れ出した。カラオケ開始から、約2時間半……まあ、潮時だろう。

ガタンツ バンツ！！

トイレに入るや否や、いきなりドアに叩きつけられた。派手に頭と背中を打つ。

…痛いな。予想はしていたけども。

「あんだ、何様のつもり？」

ものすつごく低い声でそう言って私を睨みつけるギャルその1。

おーコワ。これが本性ですかー。

「何様って…ただ普通に歌ってただけだけど。」

しれっとそう言ってみる。…火に油をそそぐな、このセリフ。

「そっじゃねえよ！何目立ってんだって聞いてんだよー！」

ホラ、ね。まさに鬼のような形相のギャルその2。
…化粧落ちてんの、言った方がいいかな。黒い涙みたいになってん
だけど。

「ホーント、騙されたわ。あんた、実は男好きだったんだね。あんな風にチャホヤされて、うれしかった？ええ？」

ギャルその3に髪を引っ張られる。
ちょ、毛根が傷つくからヤメテ！

なんて、脳内で展開されていることは欠片も知らない彼女ら。
しかしそろそろ終わらせよう、と、私は怯えたような顔を作り、上
目使いに見ながら言った。

「ゴ…ゴメン！気に障ったなら謝るよ……。私、今日バイトあるし、
もう帰る！これならいいでしょ？」

本当にすまなさそうな顔を作り、手を前でくつつける。
ちよつと声を震わせるのも、ポイントだ。満点だろ？どつよ。

「…フン！じゃあとつとと帰れ！」

「席ついたらすぐに店出てってよね！」

「割り勘、2000円でいいわ。今払って。」

予想通り、私の演技にコロツと騙されたギャルたち。難なく成功、
だ。

お金も今払うらしいし、ますますラッキー、てなもんだ。

さて、私の道化もここらで終了と行くこうかね。

「遅いよー、ナツちゃん。次、君の曲だよ。」

戻ってきて一番に一人の男性にそう言われた。

…思えばこの人たちにもすまないことをしたな。合コンに来たはずが、宴会につき合わせて。

まあ今日のこととはさっぱりと忘れて、次回頑張ってください。

「ゴメン！それ、演奏停止にしといていいよ！今日、今からバイトあるの、忘れててさ！」

「えー、もう帰んの？」

「うん…、ごめん。後は皆で楽しんで！」

本当にすまなそうな顔（パート2）を作ると、男性陣も、承諾してくれた。

「あ〜じゃあ、しょうがないね…。」

「気をつけて帰りなよ。」

…イケメンズのみなさま。温かい言葉をありがとう。

「え〜マジ残念〜。」

「じゃあねえ、ナツ。」

…ギャルズのみなさま。全く心のこもってない、むしろ殺意のこもったセリフをありがとう。

私は静かにドアを閉め、カラオケ屋を後にした。

外にでると、もうすっかり辺りは暗くなっていて、肌寒かった。私は新鮮な空気を目いっぱい吸い込んで、吐く。

ひと段落。

そして、数歩歩いたところで後ろを振り向き、ほくそ笑んだ。

「…さて、今頃は気まずい雰囲気だろうな。もうすぐ解散、かもね。」

背をむけて、私は夜の街の中に消えた。

02 (後書き)

ヒロインとしてどうなんだろう、コレ……
ちなみにページ数が段々長くなっていくのは仕様です。

君の名は

p i p i p i . . . p i p i p i . . .

無機質なアラーム音が、狭いワンルームに響く。

「…………ん。」

どうやら我が家の目覚まし時計は、今日も正常に役割を果たしてくれているらしい。

私はスヌーズ2回目でようやく布団をはねのけるのに成功した。

「…………ふあ…………」

特大あくびをひとつかまして、寝ぼけ眼をこする。

私、本城 那津は、超低血圧人間であり、さらに二度寝の常習犯でもあるので、起きるのに毎回ひと苦労なのだ。

しかし、今日はいつもよりは気持ちよく目覚めた感じた。…いつもよりは、ね。

何故かというと、昨日の出来事だ。

全く不本意ながらもしぶしぶ参加し、かきまわすだけかきまわした合コン。

…あの人たちがあの後どうなったか、想像するだけで、笑えて来る。見事にフラれて絶望したか？それとも、なんとか押し切ってテイクアウトに成功したかな？

…クク、やっぱ性格悪いね、私も。自分で言うのもなんだが。

まあ、実際どうなるうが、私には関係無い。
昨日の私はもういない。あるのは今の『私』のみ。

今後はあのギャルたちに関わらないようにしよう。そしたらあの人たちもだんだんと忘れるだろう。

怒りも、さつさと冷めてくれることを願おう。

あのイケメンたちにも、もう会うことは無いだろうから、気にしないでいい。

両者とも、また新しい出会いを勝手に求めちゃって下さい。ただ、私にはもう関係無いから。

よし、昨日のことはもう消去しよう。無かったことにしておこう。そうして、また私のつまらない日々の始まりだ。

エンジョイ・マイ・オリジナル・ライフ！！

やっぱり人生には多少の面倒くさいイベントもあるよなー。今回、勉強になった。

今度はああいう人種の上手いあらしい方を研究せねばな。応用させりゃ、結構使えそうだ。

なんて考えながら、

合コンことなど、すっかり過去のこととした私は

いつもの通学路を歩き、いつものように通行人に交り、大学に入り、講義を受け ……

だが、しかし『いつも』のように済んだのは、ここまでだった。

昼下がりに、私は例によって昼食を食べ終わった後、小説を開き、携帯音楽プレイヤーを鳴らして、自分の世界に浸っていた。
今日は天気がよかったので、大学内にあるオープンカフェの白いイスに座って、カフェオレを飲みながら。
なんとも快適、かつ優雅な空間。

「何、読んでんの？」

それが突如ブチ壊されたのは、背後から聞こえた、一人の声。イヤホンをつけていてもよく聞こえた、低く、甘い声。

ものすごく、聞き覚えがあった。しかも、ごく最近。正確に言う
と、昨日。

つ ま り …… ?

私は恐る恐る後ろを振り向き…絶句した。

そこには、私の座っている席の後ろには、なんと、
もう会うことは無いと思っていたイケメン あ の、3番目の
が、いたのだ。

つて、えー！？ななな、なんですとー！っ！！？

「…っ何で、ここに！？」

慌てて本を閉じ、鞆に突っ込む。私らしくなく動揺して、他人のフリすりゃよかったのに、つい声に出してしまった。

男は気だるげに椅子の背にもたれかかり、フツと、軽く笑う。

「…だって、俺、ここの大学の理学部だし、専攻。聞いてなかった？」

…その言葉に、またも、絶句。おいおい、妹の彼氏の〜ってくださいはどうした！？ギャル子！こんなに近くににいるじゃねえか！！

…いや、自己紹介聞いてなかった私も悪いけど！

「那津。」

若干パニックに陥っていた私に、ヤツの声が降りかかる。ゾクリと背中に悪寒が走った。

…危険信号だ。

頼むから名前、呼ばないでくれるかな。この男、声にまで色気があるようだ。

しかし、私の気持ちなど露知らず。男は眉根に皺を寄せながら続きを話した。

「…それで、何で昨日帰ったんだ？バイトじゃ、なかったんだろ？」

確信を秘めた、やたら責めるような口調もプラスして。

…バレとるー！！？いや、バイトはあったけど！いや、若干嘘だけ！

しかも何でコイツ、こんな不機嫌（？）ばい顔してんの？

意味分からんっ！てか、美形ってなんでこんなに迫力あるのさ！？

怖いよっ！

…いつもの冷めた私はどこへやら。思考回路はショート寸前 っってこんな感じだろうな…。

まだ5月だったのに、変な汗が止まらねえよ、八八…。

それでも、なんとか冷静さを取り戻そうと努力する。

落ち着け、本城那津。ここでうるたえたら、もう、なんかグダグダだ。

そんなグダグダな女になんか、なりたくない。そうだろ？

自分の日常を取り戻すんだろうが。これくらい、するっと切り抜ける。

…よく考えたら、慌てる必要は全くないぞ。悪いことは(多分)してないはず！

自分で自分にエールを送りながら、私は今日初めて、男と目を合わせた。

綺麗な茶髪と、切れ長な瞳が視界に入る。男は、改めて見ると本当に整った顔をしていた。

私はそれに、少し気後れしてしまいそうなのを押し込めて、

「…いや、ホントにバイトだったんで。」

シンプル、かつ余計な内容を含まない返答をした。

…ま、本当のことだし。若干ね。

すると、ヤツも私の方を見てニヤリと笑った。

「…へえ？計算じゃなくて？」

……………え。

表情が、固まった。今度は別の意味で、背筋が凍る。ブワっと、嫌な汗も吹き出る。

……何だ、この男。何を、言ってるんだ。

「…何が、計算だつて、いうんですか？」

かなりのショックを受けながらも、慎重に聞いてみる。

…ここは、本当に陽のあたるテラスなんだろうか？さっきまで暑かったのに、今ではシベリア並みに寒く感じるんだが。

私のリアクションに満足そうに、またもニヤリと笑いながら至極楽しそうに、男はまだまだ話す。

「全部。最初っから、最後まで。今のそれが、素でもなさそうだな？まだ少し違和感あんだけど。」

そっけなく言い放たれたその言葉に、コイツはすべてを理解している、と、なんとなく感じた。

衝撃音。………ガンと、頭を殴られたみたいだ。ヤツの放った言葉が頭に響く。

………ああ、こいつは、やられた…

昨日の茶番が全部見破られたつてのか。この男に。この私が。

………嘘だろ？

よほど私が変な顔をしていたのか、目の前の男は吹き出した。

「くくつ、何、その驚いた顔。俺に言わせりゃ、まだ白々しさが残ってたよ、昨日のキャラ。」

まだまだ未熟だな。」

うるせえ。

ピキツと額に青筋が浮かぶ。

あのな、私はあのキャラ作りには自信があつたんだよ。それをあんな短時間で、

しかも君みたいな男に見破られるなんて思ってもみなかったから、シヨック受けてんだよ。

放つとけよ。

私は目だけで男にそのように伝えたと、ふとあることが引つかかった。

コイツに分かったんなら、他の3人にもバレたんだろうか？

『キャラ作られる』ってなかなか良い気分じゃないよな。それで文句つけに来たのか？それとも単にあざ笑いに来た？

……どうであれ、何か逃げたくなってきたな。ダメかな。

この男、このまま側にいると危険だ。

ホント、予測不可能すぎて、次に何が来るか全く分からない。マジで、有害以外の何物でも無し。

「黙ってないで、なんか言っつてよ、那津。」

あーもう。

今考え中だから話しかけるなって。あと、呼び捨てやメロ。昨日知り合っただけで、何、その親しき。

…まあ、でもずっと黙っているわけにもいかない。私は口を開いた。

「…気付いたんだ？どうして？」

肯定。そして何でもないフリをして理由を問う。

…内心、ボロボロなわけだが。

まったく、今まで親にさえ気付かれずにコレで中・高を乗り切ったつてのに、よりによって、この性格の悪そうなヤツにバレるとは。なんとも屈辱だ。

ヤツは笑みを崩さないまま、私を覗き込んだ。

「まあ、俺もお前と同じ…ってか、似たようなもんだし？と、いつでもレベルが違うけどな。」

私は、ヤツの言葉を心の中でリピートして考えた。

『同じ』、だと。ああ…コイツもそついえば昨日と性格が違うな。

…なるほど、多重人格者、か。

多数の性格を使い分け、人と表面上の付き合いをするヤツ。確かに、私と似たようなもんだな。

ふーん。それで親近感(?)が湧いて私に近付いたのかな。

…そのまま、放っておいてくれたらよかったのになあ。やっぱり珍獣扱いか。ちくしょう。

私は、はあ、と息をついた。

もう、それだったら。

「…ふう、だからあんなに私を見てたってわけ。穴があくかと思っ
た。」

…いいや、面倒くさい。素でしゃべってしまえ。
この男の前では、とぼけたって無駄だ。

私がなんか気に入くわないことをしたのなら、素直に謝ろう。それで
静かに、去ろう。それが1番てっとり早い。

すると、私の変化に気付いたのか、ヤツは口角をあげた。

そして、嬉しそうな笑みを浮かべる。ニヤニヤ笑いでない、ホンモ
ノに近いもの。

『やつと正体を現しやがったな…』みたいなの？

…私、悪役^{ヒール}じゃ、無いんだけど。そして、君もどっちかつつー
と悪だろ。

「…うん。お前はなんか、俺と同じニオイがしたから。」

そう言いながら、ヤツはいつの間にか私の目の前の席に腰掛けてい
た。

…ちょ、それ困るな。コイツは、性格はともかくとして、外見は文
句なしにカツコイイ。

なんか、テラスにいる他の女子たちがめっちゃこっち見てるんです
けど。

…明らかに敵意こみで。

…オーケイ、みんな、落ち着こうじゃないか。

コイツと私は知り合いですらないぜ？というか、むしろこっちから
テイクアウトをお願いするよ！

誤解してもらっちゃ困るな、ハハハハ……

……

「…オイ、お前、考え込むタイプ？口に出して言えよ。」

ハッと気付けば、不審そうな顔が私を見ていた。

おっと、いけない。トリップしてた。ちなみに、考え込むのは私の癖ですから。直すつもりも、ありませんから。

「…えーっと、ゴメン。それで、君は何の用で来たわけ？文句でも言いに来た？」

さて、気を取り直して、本題だ。

とっとと済ませて、コイツとはさっさとおサラバしたい。罵倒でも何でも、どんと来い。免疫なら、ギャルたちとの対戦でついたから。

しかし、予想に反し、彼は怪訝そうな顔を作った。

「は？お前に何の文句があるんだよ？むしろ、言うんならあの女どもにだろ。」

…アレ、そうじゃないんだ？さらに、彼は美しいお顔の眉間にシワをよせ、いらだったように吐き捨てた。

「全く、那津が帰ってから散々だったよ。場が完全に白けちゃってさ、俺も、他の3人もお開きにしようって言ったのに、あいつら、さすがりついて止めようとしたんだぜ？しかも、スゲー顔で。」

あれは引いたな…っーか萎えた。」

ほう。それは俯瞰^{フカン}して見たかったな。さぞ恐ろしい顔だったことだろう……

てゆうか、君、結構饒舌に話すじゃん。素は案外おしゃべりだったり？

「…あーそれは、ご愁傷さま。」

「人事だな。お前のせいだってのに。」

「ま、そうだけど。っーか、私、あの合コンつぶそうと思って参加したし。」

「あ、やっぱそれが目的か。ハハッ、性格悪いなー那津は。」

「君こそ。お互いさまでしょ。」

それから、私と彼は昨日のギャルたちをネタに、時折毒を吐きながら、話した。

…案外話してみると普通だなー。ポンポン会話が成立しているし……ハッ！……って、ダメじゃん！

バツと周囲に注意を払ってみると、もの凄くこちらを睨んでいる女子の方々が……！
うう、視線がさらに痛くなってきた……！しかもさつきより数、増えてるううー！！
目で人が殺せるって、ホントかもしれない。なんかまたうすら寒くなってきたし……！

訪れる戦慄。

身の危険をぞうぞくと感じる。

…うん、もう、さっさと行こう。早いとこ脱出しよう。スイマセン、もう消えますからね、私は。

「っあー、とにかく。もう用無いんなら私、帰るから。あの3人もよろしく言っといて。じゃあね。」

言いながら、私は鞆を持ち、そそくさと席をつた。

「まあ、待てよ。」

否、立とうとしたが、阻まれた。目の前の、男らしく、角ばった手に。

…要は、ヤツが私の腕を掴んだのだ。
唐突なことに、そして意外と強い拘束力に私はびっくりした。

「うえっ！？離せえ！」

っ、あー！なんか変な声出ちゃったじゃん、アホー！！
何だよ、まだなんかあるの！？

恥ずかしさから若干顔が赤くなっている私。

キツと、手を掴んでいる男を睨むと、彼は頬杖をつきながら余裕そうな笑みを見せた。

「ふっ、何、その顔。急いでないならまだ話そうぜ。」

…は？私はポカン…とした顔を作る。なに、のんびり言ってんの、コイツ。

だーかーら。そんなことしたら、心臓ショック起こすっつーの。
こんな中で君とトークを楽しめる程、図太くは無いんだよ、私は。

私は舌打ちしたくなるのをぐっとこらえ、冷めた視線を送った。

「あー、急いでるから、無理。じゃあ、サヨナラ。」

そう言って足を踏み出そうとするが、腕を掴む手に力を込めているのか、全然動けない。

「…離してくれない？」

「断る。」

うわ、ムカつく。

「あのさ、本気で言ってるんだって。私。」

「俺も、本気だけど。ホラ、座れって。」

言葉のわりには、真剣な顔でこっちを見る彼。私は困った顔を作り、うんざりと肩を落とした。

オイオイ……完全に拒否してんだから、行かせてくれよ。

それに、そんなに話したいんなら、その辺にいる女子を誘ってやれ。

…これ以上私を巻き込むない。

その後も不毛な言い争いを続け、ついにヤツが折れた。

「……分かった。解放してやるよ。」

それを聞き、私はふう、とため息をついた。

やっと分かってくれたか。若干上から目線なのがムカつくが、気にしないでおこう。

「あ、そう。じゃ…」「じゃあ、俺の名前呼んでよ。」

…？

「は？」

「だから、俺の名前。」

……何て？

いや、聞こえたよ。聞こえたけどさ……名前？君の？何で？突然、突き付けられた条件に、『？』を浮かべる私。

「……何で？」

あ、ヤベ、そのまま口にだしちった。

「……呼んでほしいから。」

しかし、彼は少し拗ねたような口調でぼそっと呟いた。

呼んでほしいから、ねえ。……うーん。イケメンの思考は理解できないな。

…そして、どうしてそんなに私をじっと見るのか。

ちらちらと流し目でこっち覗いてくるの、止めようか。後ろで女の子が、またひとりご臨終になったよ？

私は、仕方なく腕を組み、肩を軽く回す。

まあ、名前を呼ぶくらいお安い御用だし……とっと呼んで……

……
……
……アレ。

コイツの名前、何だっけ？

……ダメだ、ぜんっぜん、思い出せない。

思えばさっきまでも、『コイツ』とか『ヤツ』とかしか、呼んでないじゃん……

.....。
だんだんと青くなっていく顔色。滴りおちる冷や汗。

.....っ、ゴメンなさー！っ！聞いてませんでしたー！っ！
そういえば、小学生のとき、通知表に『もっと先生の言うことを聞きましよう。』って書かれてたっけ...

あれから10年近く経つのに、未だに直ってません！！先生ー！
ー！！

先程のあわてぶりを上回るくらい、内心うろたえる。

.....や、やばいよな、コレ。お、怒られるよな、絶対。

私の名前はバツチリ覚えてもらってるのに、私の方はさっぱり...なんて。

あーっもう！こんなことなら自己紹介、キチンと聞いときゃよかったよ.....

動揺を知られないように必死で顔を作っているものの、そろそろ返事をしなくては、時間的に怪しい。

さっきからずっとアイツ（名前不詳）に顔を見られてるし.....。逃げ場もない。

つええい、ここは恥をしのぐしかないわっ！覚悟決めろ！本城那津！

私は息を吸い込んだ。

「.....あの、私、君の名前、知らない.....。」

うーわーっ 恥ずかしっ！大人として恥ずかしいわいつ、これ！せめて覚えてないって言えばよかった！？

いや、一緒か！？レベル的に！

心の中でもだえ苦しみながら、私は顔を真っ赤にして、俯く。目の前のイケメンも目を丸くしている。

イタすぎる静寂が、辺りを包んだ。

……ゴメン。ホントにゴメン。私は申し訳なくて、顔を上げるこ
とができなかったが、

相手の反応が気になり、しばらくして視線をあげた……

その時。

ヤツは、呆れた様子で、くしゃりと顔を崩して…笑っていた。

っ！

あまりの完璧スマイルに胸がドキッと鳴る。

…うつつわ！やばい！何コレ！？王子スマイルか！？核ミサイル並みじゃないか！この破壊力ー！

後ろでまた女子が数人倒れたよ、絶対！バタツて音がしたし！

そしてソレを私に向けるんじゃないーい！！笑顔が腐るよ！？

自分で言っという悲しくなるけど、私にその技を使う価値は無いんだよ！？

…やっぱ、私と貴方様とじゃ、生きてる世界が違うんだって！！

私が合コンに参加したこと、ひいては生まれてきたことにまで後悔していたとき、男は諭すように話した。

「…じゃあ、覚えて。俺は、国崎 聖悟（クニサキ セイゴ）。

那津と同じ2年で、20歳。」

そう言つてにこつと笑う彼に、私は安堵した。…どうやら怒つてはいないらしい。

…ああ……。さいですか。よかつたあ……。心の広い人だ、国崎様は私が君だつたら、軽くぶつとばしてた所なのに。

…とりあえず、私は彼の名前を呼んでこの場から立ち去ることにした。

「…分かつた、国崎君。私もう帰るね。」

「うん。じゃあまた明日、12時にここで。」

にこつと笑顔を作つて言い、また彼も笑顔で返す。

……ん？待て。

なーんか変なの聞こえたなあ？幻聴かな？

マタアシタ？ジュウニジニココデ？

…もしや、また明日も会おうとか言つちやてる？この人。

無理 だろ！！

「…あの、丁重に断らせて…」

「拒否権なし。」

俺、自分の名前を忘れられたどころか、覚えられもしなかったこと、軽くキズついてただけど？」

……う。それを言われると…

「じゃ、じゃあなんか奢りま…」

「今、腹いっぱいだから、オゴツてくれるんなら、明日にしてくれる?。」

うう。最後まで言わせてすらもらえず、全部返される……

やっぱコイツ……じゃない、国崎君は、私より何枚も上手らしい。

しかも、わざとポリウム大きくして言ってますん?ギャラリーが増えてきてるじゃないスか。

逃げ道、ゼロ。回避、無理。

……。

……っあーもうっ!降参だよ!こんちくしょう!

「分かったよ…また明日、ね…。」

私があつくりと肩をおとして、力なく返事する。

…なんだ、この敗北感……。国崎君の勝ち誇ったような笑みが、さらにムカツク。

「そ、じゃあね。」

国崎君はようやく私の手を離すと、笑顔を貼り付けながら、ヒラヒラと手を振った。

手を解放されると、私はすぐに踵をかえし、かなりの早歩きで歩き出した。

…1度も振り返らずに。

ただひたすら、ずんずんと歩いていった。なので、国崎君が私をじっと見ていたのにも、もちろん気付かなかった。

あああ……目立つのキライなのに！

あの国崎のボケのせいで私まで注目が集まったじゃないか！！
なにあの視線！コワイ！空気のように生きるのが人生の目標だった
つてのに！

しかも！明日も会うとか、本気で、ヤダ。

まんまと私をはめやがって……！あいつ、絶対私をからかって楽しんでるし！

あゝもう、死ね！滅べ、ボケナス！

心の中で、悪態をついてついて、つきまくる。

しかし、『また明日』という約束が私の首を絞め、全く気分は晴れない。

ああ……！何でこうなったんだ！何かバチあたるようなこと、したか？私っ。

こんなに全力で、明日なんか来なければいい、と思ったのは初めてだっ！

どこをどうやって帰ってきたのか覚えてないが、気付いたら、私の家の前だった。

乱暴に鍵をあけて中に入り、積み上げてある布団に倒れ込む。

「うぐあああーあ………」

……女子にあるまじき妙な唸り声は、今日だけは目をつぶってくれ。

マジで、混乱してるから。私。

「くっ……」

私は、目を閉じながらぐっつと拳を握りしめ、ただ、思った。

…願わくは、目覚めたら、

今日の ついでに昨日の 出来事がすべて夢でありますように。

……。

…本気で頼みます、困ったときの神様あああ！

私にはロマンスより、平穩をくれ！

02 (後書き)

那津の口の悪さは最早デフォルトです。ちょいちょい男口調にもなりますが。

よづやくヒーローが登場しましたが、こいつも黒いな……ww

変な男たち

朝起きたらすべてが夢だったことに気付いた。

いきなりギャルに絡まれたりしてないし、合コンにも参加してない。あの国崎のポケと会ってない。カフェで会話なんてもつてのほか。

あー…よかった。夢かあ。びっくりさせんなよお、全く。そーだよね、私がこんな面倒くさいことに巻き込まれてるワケないよね。

さ、今日も1限からだ。いつもやる気なさそうな教授に会いに行こう。

アハハハハハ……

…よし、

現実逃避はこれくらいにしておくか。そろそろリアルに戻らないと。

夢であってほしかったが、めったに着信の無い、私の携帯電話に来ていた1通のメールがすべてを物語っていた。

『今日、忘れるなよ。』

国崎』

そう、昨日の別れ際にメールアドレスを交換し（させられ）たのだった。

で、今朝早速来た連絡が、これね。

…「丁寧」に名前まで入れてありますね……………ハイ。

……………。

…あー、困った。合コンのときより50倍はうるたえている自分に気付く。

…なにしろ生まれたときからこの外見に、この性格。あんな、生まれながらのスター みたいなヤツにどう対処していいか、全然分らない。

…はーあ、なんでまたあんなヤツと会うハメになるかな。

……………正直会いたくねえ。

あんな読めない男は初めてだ。関わるとまた、なにか厄介なことになる気がする。

…いや、そもそも。私をイジってそんなに楽しいか？

私は、ごらんの通りの本城那津よ？可愛いわけでもなければ、スタイルがいいわけでもない。

地味で、暗いし、貧相だし……………ああ、自分で言っていて空しくなってきた…。

とにかく、外見にセールスポイントはゼロ。かといって、中身に自信があるかって言われても微妙だけどさあ。…私って、男側からするとむしろ避けたいタイプじゃないか？

昨日だって、あのままサヨナラ。の方があっちにとっても都合が良かっただろうに。

……………ホント、あいつ謎。

私のがしがしと頭を掻き、寝ぼけている脳を目覚めさせる。そして、ふらりと立ち上がり、そのまま洗面所に向かった。

そろそろ換え時な歯ブラシを口にくわえていると、ぼんやりとしていた頭がだんだんはつきりしてくるのが分かった。

そして、思考を続ける。

いや実際、まったく謎、というわけではない。一応、あいつが私なんぞにカラむ理由は分かっている。

…原因はあの例の、KYキャラだろう。私の予想以上にアレが受け、後を引いた。それだけだ。

あんなんやつたから、国崎なんぞに興味持たれたんだ。

あーあ、変に意地はらずにひっそり息を殺して、地味で終わるときやよかつたよ、全く……。

『後悔先立たず』、だな。まさに。

洗面所を出て、頭をすっきりさせるためにコーヒーを入れる。さらに、6枚切りの食パンを1枚、トースターに放り込む。普段、朝食は食べない派だが、今日は国崎に言い負かされなかったためにも、カロリーをとっておくことにした。トーストにかじり付きながら、コーヒーを飲むと、幾分か落ち着いた気分になる。

さて、もう、過ぎたことを悔んだってしゃーない。やめとこう。…別に国崎は何をするってわけでもない。ただ私のことを珍しがっているだけ。

私はただ、今日を無難にやり過ごし、もう借りを作らなきゃいいんだ。そしたらあいつだって、その内私のことなんか飽きるし。

…うし、頑張ろう、私。
私はガチャンとシンクの中に皿を入れると、ガッツを入れ、気合い
十分に家を出た。

…
…
…何か、緊張してきた…。

時刻は11時50分。待ち合わせの、10分前。私は約束通り、例
のカフェの白いイスに座って、国崎を待っていた。

それにしても、あんなに90分の授業って短かったか？誰かが時
計進めたんじゃないか？チャイムが鳴ったときビクツとしたのは初
めてだぞ。

ふう、と息を吐きだし、辺りを見回す。学生らしき男女が談笑して
いるのが見える、が、
未だ国崎聖悟は現れない。

…少し早く来すぎたかな、と、私はデート前の乙女（キモイ）のよ
うにソワソワとしながら視線を戻す。

と、理学部の棟から、標的である国崎が、ゆっくりと歩いてく
るのが見えた。

少し長い茶髪を揺らしながら、長い足で1歩1歩近付いてくる。

…何、その余裕そうな顔。ムカツクな。笑顔なんか浮かべやがって。

「お待たせ。」

私の目の前にまで来た男は、そうやって定番なセリフを吐く。から、
「待つてないよ、今来たところ。」

私も、これまた定番なセリフを返した。

そのうちに国崎が私の前の席に座る。私はそれとほぼ同時に話し出した。

「えーっと、じゃあ、何奢って欲しい？昼はもう食べた？」

先手必勝。当たり前だ。私は早く帰りたい。そして縁を切りたい。

「そう、急がなくてもいいって。お茶でも飲もう。」

私の心情を察したのか、国崎は呆れたように言いつつ、こっちをチラリと見た。

…あー、ゆっくり話すつもりは無いから。昨日みたいにズルズルいくとか、冗談じゃないし。

「いや、借りは早く返したい性質なもんで。用事もあるし。」

『用事』をいやに強調して言い、ニコリと口だけで笑いながら国崎を睨む。

訳すと』とつとと飯を奢ってテーマと離れたい。私は忙しいんだ。』
国崎にも裏の意味は読めたらしい。苦笑をこぼした。

「…ククツ。やっぱお前、面白い。そんなに、俺が嫌い？」

嫌いです。言えないけど。

「高いもんでもいいよ、どうぞ。」

私は国崎の言葉を全無視して、先を促した。

……………。

すると、国崎は口を閉じて少し黙る。何を言おうか迷っているのか、メニューを思い返しているのか。

「…じゃあ、スペシャル苺パフェ。」

……………後者だった。てか、本当に高いヤツ頼んだな。しかも甘党か。今流行りの甘党男子か。意外すぎるわ。

「OK。じゃ、待ってて。」

しかし、彼の趣味に言及するつもりはない。

特にリアクションせず、私は鞆をもって席を立ち、カフェに並ぶ人の最後尾に並んだ。

よしよし、後はパフェを買って終わりだな。結構、簡単に済んでよかった。

国崎に会わないためならパフェでも何でも買いますとも。ええ。

さて。

無事に『スペシャル苺パフェ』を手に入れた私は、国崎のもとへ戻ろうとしたのだが、

何、アレ。

私からはヤツの姿が見えなかった。ものすごい女子の群に埋もれているのだ。

多分、20人前後はいるだろう。どいつもみんな顔を紅潮させているのが分かった。

それを見て、呆然と立ち尽くす私+パフェ。

……うわ、やつぱりすごい人気なんだ国崎のヤツ。危ない危ない。これ以上関わったら、あの内の誰かに刺されるところだったよ。…夜道とかで。

早めに見切りつけといて、助かったあ、と心の中で安堵のため息をつく。

しかし……どうしよう。パフェを渡して終わり、のハズが最後にこんな障害が。

いや、モチロン渡すよ？いったん約束したことは、最後までやりとおすのが義理というものだし。

でも、かと言って、こんな群のなかに突っ込む勇気もないしなあ…

……。

うん、とうなっている。

「ナツちゃん!!」

国崎……じゃない男の音が、恐ろしいことに集団の中から聞こえた。
…まあ、あいつは私のことを図々しくも呼び捨てで呼ぶからな。
こんな、某清涼飲料水みたいには呼ばない。

…て、いつか、今、私を呼んだのか？他に夏子さん、とかいるんじゃないか？

夏子さん（仮）？呼ばれてますけど。

「本城那津さーん!!」

「っ!!」

だが、次いで耳に届いたのは、明らかに自分の名前。ビクツとして、思わずパフェを取り落としそうになった。

あー！フルネームで呼ぶなよ！何か予想はしてたけど、やっぱり私のことですか!!

あわあわと分かりやすくうるたえる私。絶賛パニック中なう。

うわ…女子のみなさん、冷たいまなざしを一齐にこちらに向けないで。

ん？っ！かこの声、聞き覚えが…。

「あ、ちょっとキミたち、通してあげて！」

混乱の最中、色々ごちゃごちゃと考えてると、女子の中にいるらしいその男の声が響き、パツと道が開けた。

直後、私は衝撃的な光景を目にする。

増 え と る 。

…正確に言えば、合コンに参加していたイケメン全員が、国崎を囲んでイスに座っていたのだ。

………。…っっそうきたかー！！

予想をオオハバに超えた展開に、私は軽く眩暈を起こした。

…お前かつ、国崎い！！頼杖について、ニヤニヤしている男を振り返り、ギロツと睨む。

様々なパターンを想定してはいたけど、これは予想外すぎだった！
……というか、みんなS大生だったのね……。知らなかった。やたら親しそうですし。

「ナツちゃん、1日ぶりー！」

「ちよつと、俺にもメアド教えてよー。聖悟だけなんてずるいしー。」

「パフエ、美味しそうですね。俺も買おうかな。」

ちよ、一気に話し始めんなって。何コレ。何この状況。イケメン達に囲まれた1人の女……？

ベタな逆ハーレム少女マンガか、コレ？

…だったらもつとマシな主人公選べよな。私が主役なんて、シャレにもなんねえよ。

「…ちよつと、一遍にしゃべられても。」

とりあえず、困った顔で正論を言うことに。ホントはちょっとどこるか、かなりまいってるわけだけどね。

…もう、君ら、みんな消えてくれないかな。私のことは放って。って。

「…ああ、ゴメン。でもまた会えてうれしいよ、ナツちゃん。

合コンのとき連絡先も教えてくれなかったし、聖悟が出くわさなかったら、もう会えなかったかも。」

私が心の中で国崎をメツタ刺しにしていた時、

黒髪をワックスでたたせ、左耳にピアスを1つ付けた、爽やか系イケメンがそう言った。

…名前はもちろん知らない。

いや、私は会いたくありませんでしたけど。一生。

故意に国崎が会いに来させただけですけど。

「あー、ハイ。そうですね。」

私は黒髪の言を適当に流し、国崎の前にパフェを置いた。…若干、力をこめて。

ヤツはフツと笑って、「どーも。」と受け取った。ああ…殺してえ。

と、

「おい、聖悟。女の口に奢らしてんの？フツ逆だろー？」

4人の中で1番チャラそうな、茶髪メッシュの体育会系イケメンが口を挟んだ。

…名前はもちろん以下略。

そう、もっと言ってやってー。

コイツ最低だからー

そして、もう1人の黒髪眼鏡の、インテリ系イケメンも私に顔を向ける。

…名前は以下略。

「そうですね。スイマセン、俺がお金払いましようか？」

「…いや、私が奢るって言ったから、いいよ。ありがとう。」

わー、なんて紳士。そういやあの日、この人が1番私的に印象良かった気がする。

いい人だな、眼鏡の人は。…それに比べて最悪だな、国崎は。

どうせ皆を集めて、私があたふたするのを見たかったんだろ。

悪だ。君は『聖悟』から『悪悟』に改名すべきだ。こいつの親も何考えてこんな漢字あてたんだか。

聖人でも何でもねえよ、実際のこの人。

その後も、私は引きつった笑顔を貼り付けながら、彼らと雑談を交わす。

その間、分かったことが、1つ。

どうやら他の3人には、キャラ云々の話しは知られてないらしい。彼らが合コンのときのまま、変わらないテンションで話しかけて来るのがその証拠。

……まあ、そうじゃなきゃ、私にまた会いたいなんて酔狂なことは言わないだろうが。

そんなわけなので、私も無理してテンションを上げて話すハメになった。

しかし、…まいった。このまま話してんの、疲れてきた。

ただ下がったテンションをムリヤリ普段以上に上げるのって、かなり高レベルの苦行だ。

もともと私を守るために作ったキャラが、ここまで後を引くとは思わなかったなあ。

後腐れなく終わろうと思ったが、無理みたい。

……。

あー、もう、いっか。国崎にもバレたことだし、どうでもよくなっ

た。ここはもう、カミングアウトして怒って帰ってもらおう。

多分、大学の空気は悪くなるだろうが、コイツらと慣れ合うよか、よっぽどマシ。

…そうだろ？本城那津。

そう思い立つと、私はすうっと息を吸いこみ、意を決して口を開いた。

「…あのさ、合コンのときの私は、私じゃないから。」

いきなり真剣な目でそう言った私に、びっくりしたような顔をする3人。

「…んー？じゃ、君じゃなきゃ誰だったのー？」

私の雰囲気が変わったことに気付いたのか、少し真面目な顔をして、茶髪が尋ねた。

私は、ふっと一瞬笑うと、お得意のやぶ睨みで全員をジロリと見ながら、一気に

「…私が作ったキャラだよ。明るいムードメーカー、合コン仕様。素の私は地味で暗い、毒舌女だから。なんの面白いことも無いから。分かったら、とっとと消える。迷惑なんだよ、君ら。」

毒を、吐いた。

瞬間、しん……とした静寂が訪れる。脳内の私は高笑いをしながら男たちを見下していた。

…よし、言った。流石にここまで言われたら、お調子者のコイツらといえども、怒るに違いない。

『うわ、超ムカツク。』

『そんな人だったんですね。幻滅しました。』

そんなセリフを期待していたのだが。

「ぶっつはははははっつ！！！」

あ、れ？

突如響いた大きな笑い声に、私だけでなく、周囲のギャラリイも目を丸くする。

……何故に、爆笑？え、私、今そんなに面白いこと言った？

「えーアレ、作ってたの！？全然、気付かなかったし！」

「しかも、フツーそれ暴露するー？」

「地味で毒舌つて…素の方がよっぽど面白いですよ。」

3人は思い思いの感想を言って、さらに笑い声を上げる。

…う、ウケてるよ……コイツらのツボがよく分らないんだけど。

…あれ、もしかして何か失敗、した？私。

「おい、聖悟！お前の言う通り、かなり面白いな、ナツちゃん！」

こと、茶髪の彼のウケようは尋常でなく。隣の国崎の背中をバシバシと叩いて言った。

て、ええ！？失敗確定！なんだか分からないけど、マズい方向に行ってる！

好感触、とか、望んでないから！！こっちは！

そして国崎。さっきから黙ってるが、この人たちに何を吹き込んだんだ？テメエ。

話しかけられた男は、パフェを食べながらニヤリと笑った。

「だろ？でも、盗るなよ。」

は？取る？撮る？トルって何？？爽やかな顔で笑ってんじゃねえ。
最早怒りの矛先が迷子になった私はギンツとヤツを睨みつけている
と、ついに、黒髪から決定打が打たれた。

「…ね、友達になろうよ、ナツちゃん。俺ら、君のこと気に入ったよ。」

瞬間、体中に電流がバリバリと走った。

これは…

うわあっつ！？最悪の結末じゃんかつ！？何故か私、彼らのお気に入りカテゴリーに分類された！？

何で！何が起こって！？

…ダメだ、私にとって、コイツらは完全に理解不能です！もう、手に負えないよ！！

ゾクリ……

そして、背後に突き刺さる、たくさんの、視線、死線、四川。

…ああ、そっぴや、推定20名の女子に囲まれてたんだっけ…？じ

ゃあ、黒髪の言った、トモダチ宣言もバツチりお耳に届いたわけで

……。

……。

は、はは……。は……

もう……

……プツン。

私の中で何かが切れた音が、確かに聞こえた。

ドンッ！

「キヤッツ！？」

私は突如、適当にその辺にいた女子を引っ掴んで、男たちの前に押しやった。いきなり前に出された、全く知らない女はびっくりしている。

…そらそーだわな。でもゴメン。身代わりヨロシクね。

「友人は作らない主義なんで。作りたいんなら、この子とトモダチになってあげてください。じゃ、サヨナラ。」

私はそう言い捨てて、足のターボエンジンをフルに回して、全速力でその場を逃げ去った。

4人のあつげにとられた顔とか、国崎が何か叫んでいたこととか、直後、女子たちがワツと押し掛けだしたこととか、
…もう、どうでもいいわ。

とにかく、走った、走った。こんな強制逃亡は、無様以外の何物で

も無い。

でも、限界だった。

っあー！っあー！っもうっ！

トモダチ、だと！？何ハゲたことぬかしてんだよ！？なるわけねー
だろうが！！

私はな、わが身が1番可愛いんだよ！

君らみたいな主役級俳優と、スタッフの下っ端にもなれないような
私を知り合いなんて、

客観的にもおかしすぎんだろ！

しかも、君ら全員、かなりの人気だよ？女子の嫉妬をナメんなっ！
無視したつもりだったが、私にはボソボソ呪いの言葉が聞こえたん
だったの。

『何、あのブス。何で国崎くんたちと仲良さ気なワケ？』

『身の程をわきまえろよ、ちゃんと鏡見えてる？』

『どんな手を使ったのかしら。あの貧相な体で。』

こ、怖えええ！！マジで怖え！！大学生にもなつてあんな低レ
ベルな妬み！！

…でもヤツらは、本気だ。本気で、私を殺^ヤる……………！！

女つて、これだからイヤなんだよね……………。ハア……………。

もう、いいさ。これからは、あのカフェに近寄らないでおこう。
学食はやめて…………、面倒だが、弁当を作って近くの公園で食べるか、
どっかの喫茶店に入ろう。

…あーもう。おとといより昨日、昨日より今日と、事態が悪化して

いつてない？

今が人生で最大に面倒臭いわ。

どうしてこうも、上手くいつてくれないんだろう。…私は静かに暮らしたいだけなのに。

それも、これも、何もかも、全部アイツ、国崎のせいだ。アイツさえいなけりゃよかったんだ。

私は振り返ることなく、街道をひたすら突っ走った。

どのくらい走っただろう。私はピタッと足を止めた。

……キツイ。

やっぱり運動不足の体に全力疾走は無理があったか。ものすごく息が切れている。

気がつけば、大学からかなり離れた、とある公園に来ていた。

私は休憩がてら、近くの自動販売機で缶コーヒーを買って、ベンチに座る。

ゆったりと腰をかけて、天を仰ぐと、すでに日が傾きかけているのが見えた。

私以外、誰もいない空間を確認。そしてポツリと呟いた。

「……国崎…死んでくれ……」

「なんで」

……！！

独りだと思っていた空間から、突然の返答。私は飛び起きて、声の主を振り返った。

目の前には、彼。

国崎聖悟の、馬鹿みたいに整った顔があった。

……つな、なんで、ここに？

瞬間移動でもしてきたのか、この野郎！？

02 (後書き)

微妙な所ですが、ここで切ります。

那津の心の声と地の文の改行どうしようか迷う……

奇妙な夜

……しばらく見つめ合う私たち。

…うん、何度見ても、ヤツはそこに実在していた。つーか、こんな顔が2人も3人もいるもんか。

私の目の前には、国崎聖悟がいた。

何を言えばいいか分からなくて、数分、ボーっと立ち尽くす。なんだか微妙な雰囲気壊したのは、国崎からだった。

「お前、」

「ひっ!?!」

うはっ、また変な声出た。オーラが怖いって、国崎さん。

「…逃げてばっかだよな。あの後、俺ら大変だったんだけど?」

低い声で脅しつつ、私を睨む彼。

そんなん知らんがな。私は私で、いっばいっばいだっただから。

「…もう、私のことは放つといてって。」

「イヤだ。」

「…何で。」

「俺らに気に入られるなんて、そうそうないことだぜ? 光栄に思えよ。」

何様だよ。俺様かよ。

女子はみんな、君らに気に入られるために動いてるとでも？バカか。

「……そりゃ、どうも。余計なお世話で。」

「可愛くねえ。」

「自負しております。」

無駄な会話もそこそこに打ち切り、私は立ち上がった。そして、飲みもしなかった缶コーヒーを片手に去ろうとする。

「オイ、待て。」

…途中で止められたけど。ちえ。

私は仕方なく振り向いて国崎を見る。

私は無表情。ヤツも、無表情。両者とも、何も言わない。

「……どうして、ここに来た？やたら早かったけど。」

しばらく睨みあっていたが、結局、私が根負けした。肩を落として、国崎との会話を続行する。

……早く帰りたいな。

「こっちに走っていったって、聞いた。俺は車で追いかけてきた。」

…おー。大学生でもう車持ちですか。いいご身分で。

…って、そうじゃない。私が聞きたいのは、だな。

「どうして、私を追ってきたかって、聞いてんの。」

「…ムカついたから。」

……………は？

「…1発殴りに来たってこと？」

「…別に、女を殴る趣味はない。基本、俺、紳士だし。」

どの口がそれを言うか。紳士で。ブツ……………

「…笑ってんじゃねえ。」

「……………っは、君、絶対紳士ってガラじゃないって。」

「そういうキャラでいるっての。普段。」

少し不機嫌そうに言う国崎に、私もふと思いつく。

あ、そついやコイツ私と同類、だっけ？

…でも、それは……………

「似合わん。」

「は？」

「そんな性格、絶対合ってない。むしろキモい。」

そんなんじや、騙される女子いないって、多分。

こんなに違和感あるのに。

「……………へえ。じゃあ何なら、俺に合って？」

「ふむ、そつだな……………俺様ドSキャラ？あ、これは元々か。」

「…クツ、俺がドS、ねえ。」

「そつでしょ。こんなか弱い乙女いじめて。」

「乙女って、誰だよ。どこにいるわけ？」

「…ああ、君、目つきだけじゃなくて目も悪いんだね。」
「ひとこと多いんだよ、那津は。」

そうやって、しばらく話しあった。

……何だか、笑える。国崎と、公園で毒吐きながら、会話してるなんて。

…少し前の私なら、ありえなかったシチュエーションだ。

でも、もう終わり。終わりにしておこう。私と彼は同じようで、その実、全く違うのだから。

私はくるっと彼の方を向いた。目が合う。

約束は、果たした。もう、用はないはずだ。…私にも、国崎にも。だから、今度こそお別れだ。

「…じゃあ、私、帰るから。もう明日からは関わるなよ。」

そう言い残して、ヤツからくるりと背を向け、公園を出ようと……出ようと……？

………へ？

何で、足、動かないんだ？

「………行くなって。」

………気が付くと、国崎が私を後ろから抱き締めていた。

身長差もあって、私は完全に国崎の腕の中にすっぽりと収まってい

る。

……っ！！

一瞬遅れて、顔面の体温が急上昇する。

…自慢じゃないが、私は男性経験はゼロに近…いや、完璧ゼロだ。

…だから、こんな風に抱き締められるのも初めてな、ワケで。肩ハバが広いな、とか、腕長いな、とか……。

……。

…っわ、何だ、キモいぞ、私。絶対顔真っ赤だ。後ろは振り向けません。

…そして、一体何だ、コレ。ドラマか。そういうのは現実でやっちやダメだろ。

やるならホンモノの女優を選べ、国崎。

この間、およそ3分。たっぷり時間をかけたパニックでしたよ、ええ。

そして、少し長めの沈黙の後、

「……国崎、離せ。」

意外と冷静な声が出たことに、自分でもびっくりする。

「イヤだ。」

でも、彼の方は聞く気が無いらしい。…なにが『イヤだ』だよ。駄々っ子か。

「何で。」

「……ム力つくから。」

そのひとことで、ようやく私はこの意味不明な行為の理由を理解した。

ああ、コレ、殴らない代わりに精神攻撃なのか。なら、他のが良かったな。てか、殴ってもらっても別に良かったんだけど。

内心でため息をつき、

「とにかく、はな、せー！」

今度は強引に腕を振り上げる、と、パツと、簡単に拘束は解かれた。途端に安堵の息が出る。

なんだ、強く反抗すりゃよかったのか。もっと早くそうすりゃよかった。

てか、よく考えたら、……いやよく考えなくても。

痴漢、だよな？今の。……顔で騙されるところだった……危ない、危ない。

放たれた、と同時にヤツと少し距離を置いた私は、ジロリと国崎を睨みつけた。

「……オイ、次やったら叫ぶからな、変態。」

「……変態じゃねえし。」

だったらこの世のほとんどの男が変態だったの。」

……マジか。いきなり抱きつく変態どもが、大半？うわ、怖。もう街中歩けないじゃん。世の中の女性。

「で、何よ？変態。」

あえてこのネタを引っ張ってみる。と。

「国崎だつ。人の話、聞けよ。」

彼が少しイラついた口調になったので、しばらく黙った。そして再度口を開く。

「…引きとめた理由は、何？」

「……送ってく。」

「結構です。」

再び歩き出そうとしたら、今度は手を掴まれた。

「だから、何よ？」

いい加減、ウザイぞ。国崎。

「…ホント、可愛くねえのな。」

「知ってるって、そんなこと。」

だが、国崎は意外と強い力で私の腕を握り、意見を譲ろうとしない。

「…もう暗いんだから、夜道は危険だろ？黙って送られる。」

なんて、いかにも、デキル男が言うセリフも言っ。

私はハッと、鼻で笑い飛ばした。…脳内で。

頼れる男アピールか？……これまた、ベタな展開だな、俺様王子さん？

でも、その必要はないぞ？

「私を襲うヤツなんか、いないし。むしろ君と一緒にのが、危険。」
「言うじゃねえか。でも、世の中には、マニアックなおっさんだっているんだよ。」

遠まわしに失礼だな、マニアックで。…いや、ホントのことだと思っただけ。

「いいから、来い。」

まだ、うだうだと抵抗していた私の腕を、グイッと引きながら、国崎は歩く。

…つと、痛いわ！ボケ！力加減考えろ！離せ！おかまいなく！！

色々と叫んだ気がするが、国崎は首にもかけず、公園の傍に停めてあった黒い車の前で止まった。

…どうやら、この黒い日本車が、ヤツの愛車らしい。

私は車種に詳しく無いからよくは知らんが…、高そう。

「オラ。」

と、国崎は私を助手席に押し込み、自分は運転席に乗った。

…ちょ、誘拐犯の乗せ方だろ、今の。国崎って、変態の上に、犯罪者なわけ？強引すぎる。

「失礼なこと考えてねえで、家の場所、教えろ。」

ナビに向かつて人差し指を突き付けている国崎が、不機嫌そうに言う。

…うわ、出たよ。エスパーが。私にも心の読み方、教えてほしい。何かコツでもあるのかな。

「…早く教えねえと、俺の家に「S大を出て2つ目の交差点を左。さらにX町の所の交差点を右に曲がって、突き当りのアパートが我が家です!」」

……なんつー恐ろしいことを言いやがる、この野郎。ちよつと黙ってたからって、何でその結論に行き着くかな?

…流石、変態俺様。何考えてんだか、ワケ分からん。

私が行き先を教える（聞きだされる）と、国崎は、「了解。」とだけ呟いて、車を発進させた。

夜の車道を、闇に紛れて黒い自動車が走り出す。時折、街灯のオレンジ色の光が車内を照らす、私も運転席の男も、黙って前を向いたままだった。

聞けば、私の家まで約10分ほどかかるらしい。…思ったより遠くまで走って来たもんだ。

車でそれくらい、ということとは、徒歩だとその倍以上の時間を要していたらう。

…一応、感謝すべきか？好意かどうかはともあれ、ちゃんと送ってくれるらしいし。

「那津、」

口を開こうとしたとき、国崎から話しかけられた。前を見て、ハンドル片手に運転する国崎。

…何をしても絵になる男だ、ムカつくことに。

「…何？」

とりあえず聞いてみる。

いや、聞かなきゃよかった。

「お前のメアドと番号、あいつらに教えといたから。」

それを聞き、ピシッと、私は見事にフリーズした。漫画風になら、石化、だ。

ナンデスツテ??

「っはあー！？何してくれてんの、君！！」

突然、ガバツと起き上がった私に国崎は多少の驚きを見せたが、気にせず詰め寄る。

「どーして、そんなコトするかな!？」

「どーしてって…聞かれたから。」

ヤツは何でもないように答える。

「ちよつ、プライバシー！プライバシーの権利を主張します！」

テツメエ……せめて確認とれや、こつちに！！事後承諾で！

「残念ながら、プライバシーは却下されました、那津さん。」

法律で認められてる権利すら、無いわけ！？私！

…私は意気消沈した。そうだよ、こんなヤツなんだよ。…血迷って感謝なんてしなくて良かった。

「…だいたい、何でダメなんだよ。減るもんでもねえだろ。」

「減るわー！主に、私の精神面とか！」

ヤツベエ……携帯、開くの怖い。

携帯電話なんて、普段使わないもんだから、ずっと電源切ってたよ…何てこつたい。

「精神で…何だよ。」

国崎は苦笑しながら私の方を見る。…ハイハイ、カツコイイネー。

「…君のメールアドレスだったら、いくらで売れるかなー？」

「売るなよ。」

「私のは無断で売ったくせに？」

「俺は、いいの。」

いいのって……何がいいの？またも俺様なの？ホント、一遍死ねばいいのに。

ぶつくさと文句を言うも、結局送ってしまったものは仕方がない。私がついには黙って窓の外を覗きこんだ。

車がS大を通り過ぎる。私の家まではもう目と鼻の先だ。しばらくしてふて腐れている私に、国崎はまた話しかけてきた。

「分からねーんだけど、お前、何がそこまで嫌なワケ？」

「何がって…何が？」

「質問を質問で返すな。何で俺らとダチになんのが嫌なのかって、聞いてんの。」

何だ、そんなこと。……んなの、答えは、1つ。

「私は、君らと関わりたくないからだよ。」

「……。」

国崎は、黙って私の方を見た。…運転中は前を見ようぜ？

「…あ、別に、君たちにだけじゃないよ。私は誰とも交流しない。1人でいたいだけ。」

言っただろ？私に、友人はいらない。私には、一匹狼がお似合い。大学に入ってようやく自由になれたんだ。私は、このまま普通に過ごしていきたいだけだから。

どうか、このまま放つとして下さい。

国崎の綺麗な眉根にしわが寄る。ハンドルを握ったまま、彼は口を開いた。

「……人嫌い、か？」

「あー、別にトラウマとか、そんな大層な過去はないけど、多分そうかな。…だから、君たちのお友達にはなれません。ごめんなさい。」

国崎と視線を合わせ、ペコリと頭を下げた。そのままの姿勢を保ちつつ、男の反応を待つ。

……ここまで人が真摯になって謝ってた。そろそろ私のことなんか諦めて、他の、もっとキャラの強い子でも見つけてはくれまいか。そっちと遊んだ方が、よっぽど面白いと思うぞ？ 私なんかより。

そう願いながら待っていると、国崎が静かに口を開いた。

「……それで？」

「…は？」

『それで』、とは何ぞや。これ以上話すことなど、何も無いが。

「それで…俺たちが納得するとも思ってたの？」

………え？

目を瞬かせる私に彼の眼差しが重なる。どこか暗い色を施したソレは、私を真っ直ぐ見ていた。

「那津、もう一回言っけど、」

赤信号で車が止まる。同時に国崎は私の方へ身を乗り出した。

「『俺は』、お前を気に入った。そう簡単に逃げられると思うなよ？」

……！？

私は、再びフリーズした。顔もひきつってたかもしれない。隣で国崎はフツと笑うと、前を向いて運転を再開した。

………こ、この…オレサマがああー！！！！？

嘘だろ？なんでそうなる？普通、『あ、そう。』で済む問題だろうが！

男前はそんな執着なさそうって、私の勝手な妄想だったのか？いくら私が君に興味ないからって、イケてるメンズのプライドなんて発動させなくていいから！！
マジでうぜええええ！！

「…しつこい男は嫌われるよ？」

とりあえず恨みを込めてそう言ってみる。

「しつこくて結構。…さ、着いたぞ。ここじゃないか、家？」

しかし彼は意に介すことなく。さらりと流されてしまった。

………って、着いた？…あ、ほんとだ。いつの間にかやら。

眼前には、まさしく、私の住んでいるアパート。3階建のグレーの

物件。

…よかった、帰ってこれた。…無傷じゃあ、無いけど。
国崎はアパートの前に音も無く車を停めた。

ボタン。

私は助手席のドアを閉めて、国崎の車を降りる。そして、持ち主の男も、反対側のドアから降りた。
………つて、何故に？

「…何で君まで降りる？」

「別に。なんとなく。」

…あ、そーですか。

「あゝ、じゃ、どうも送っていただいて、アリガトウゴザイマシタ。」

…一応お礼を言っておくでしょう。ま、人として、な。

「何で棒読みなんだよ。誠意が感じられねえ。」

………るっせ。言ってもらえるだけマシと思えよ。今、腹わた煮えくり返ってんだから。

私は振り返って、男に向かって人指し指を突き付けた。

「………国崎。」

「？」

「君も早いとこ帰って、寝て、夢から覚めた方がいいよ。君はどうやら、一昨日から幻覚を見てるらしいから。」

「…まったく。俺は正気だったの。何で信じねーかな。」

信じられるワケないじゃん。

こいつの今日の行動は、はっきり言って奇行としか思えない。それとも、マヤクか？今流行りの。

「那津。」

「！？」

ジーツと睨んでいると、突然ヤツの腕の中に引きずり込まれた。そのままぎゅっと抱き締められる。

……………本日2度目！？

「っわ！？オイ、離せ！叫ぶぞ！」

「もう叫んでるし。近所迷惑だからやめた方がいいんじゃない？」

「…！」

てめっ！卑怯だぞ！

「ま、運賃だと思って。那津って中々抱き心地いいんだよね。」

「…デッカイぬいぐるみ、郵送してやるから！とにかく離れるお！」

…じたばたもがいてやると、国崎は舌打ちして私を離れた。

…舌打ちしたいのはこっちだったの。こんの変人が！また顔が熱くなるじゃんか！

「っじゃ！もう帰る！」

「おう。また明日。」

「永遠にサヨナラ！！！」

最後のヤツの言葉は無視して、ヤケクソ気味にそう叫ぶと、私はそのままアパートの中へと消えた。

残された男はしばらく立ち尽くした後、嫌な笑みを浮かべ、自分の車に飛び乗った。

「っはー…、何だつての…。」

部屋に入る。しっかりと鍵をかける。お腹がすいたので、カップラーメンにお湯を入れる。

…何やっても、先の出来事が頭をかすめる。気を抜いたら、すぐに国崎の顔が浮かんでくる。

…これは、ヤバい。ヤツの毒気にあてられたようだ。何、この脳内に占めるあのアホの割合の大きさ。

…こんな、乙女脳、私じゃない。

……。

「っだー！もう、ヤメヤメ！」

思考をブチ切って、頭をぐしゃぐしゃとかく。

やっぱり、アイツの顔が良すぎるのがいけないんだ。あんな感じで迫られたら、誰でも…こっ…ドキッとするにきまつてる！私

の女の部分（どうやらあったらしい）が過剰に反応してしまつてるに過ぎない！

ああいう……、多分、国崎にとつちや何でもないことに動揺する自分が腹立たしい。

私だけこんな悶々と悩んでるなんて、不公平だ！

もう、忘れてしまえー！！

そうして、私は雑念を払うため、シャワーを浴びることにした。

シャワーを浴びると、まあ、少しはスッキリした。チューハイを飲みながら、髪を乾かしていると、

「……………あ。」

鞆から飛び出た私の携帯電話が見えた。

そういえば……あの3人からメール、きてるかも……

まだ今日やるべきことがあったのに戦慄し、私は慌てて携帯を取り上げた。

しかし。

……………うつ。見たくない。

電源ボタンに触れる親指が震える。携帯片手に、顔を青くしながら苦悩する私は、どう見ても不審者だ。

……………。

っええい！自意識過剰だぞ。本城那津！

アドレスが渡ったからって、あつちはメールなんか打ってないかも

しれないじゃん！ハイ、メールボックスは空でした　かも！！！！
そんなこんなで、私は覚悟を決め、携帯の電源を入れた。

結論から言おう。

メールなんざ3日に1通ペースの可哀想な我がブルーの携帯は、前代未聞の事態に陥っていた。

『着信　18件

新着メール　39件』

まさに、驚きの数字だ。こんなに連絡がきて、我が携帯もさぞ驚いただろう。

……どうすんの、コレ。電源切つといて良かったわ。

着信は全部、知らない番号3つから。やはり、あの3人で間違いなかるう。

ちょっとしたストーカー並みじゃあないか………お顔がすばらしく整った方々だが。

着信履歴は放置し、メールを読もうと、次にメールボックスを開く………が。

ここで問題浮上。

私、あの人たちの名前……知らないじゃん。

どうしたものかと、あごに手を当てて、考え込む。

……うむ。国崎のように直接聞くのは避けたい。……もう懲りたし。どーしよっかな。

結局、考えた結果、誰が誰だか分かんないが、1番古いメールから開けてみることにした。

文字の羅列を目で追う。

ほとんどが、昼のときの謝罪…と明日の誘い、だ。

大体書いてある内容に大差は無かったが、幸運にも、なんとなく文面で顔と名前が一致した。

…いやー、文章って性格出るんだな。助かった。

爽やか系黒髪ピアスの男が、

斎藤 宏樹（サイトウ ヒロキ）

チャライ茶髪スポーツマンが、

水谷 信二（ミズタニ シンジ）

ジェントル黒髪眼鏡の人が、

乾 圭太郎（イヌイ ケイタロウ）

と言っらしい。一応、ちゃんと記憶しておかねば。

しかし、この人たちも半日でよくもここまでメールを送れるもんだ。私は物臭だから、メールは基本、しないのだ。

すべてのメールを読み終え、メールアドレスと携帯番号を登録し終えた私は、

今度は新規メール作成画面で頭を悩ませる。

…返事、どうしよう。流石にこれだけのメールを全無視する度胸は、無い。

しかし……さっきも言ったが、メールは大の苦手だ。

絵文字も、顔文字も、特には使用しないし。

…というか、事務連絡くらいにしか、メール使ったこと無いな。

そんな女子失格の私は、苦心して、同じ文面を3人に宛てて作成した。

『今日は突然逃げて、すみません。』

でも、女子の友達が欲しいなら、他をあたって下さい。
おやすみなさい。

本城』

コレ…で、いいか？そっけなさすぎ？

いやいや、でも、正直な気持ちだし。怒ってもらった方が逆にいいか。

…よし、送信。

送信完了画面を確認し、私は携帯を放り投げた。そのまま自分の体も布団に投げ出す。

なんか、今日、超疲れた。まだ寝るには早い時間だが、すごく眠い。

「……………もう…うぜえ……………」

思わず零れた、心の声。

もう、ヤダ。あいつら、めんどい。…何なんだよ、トモダチって。今まで友人なんざ、数えるほどしか作ったこと無いから、よく分かんねえよ。

面倒なことは大嫌いなのに。

もう、学生時代の繰り返しはゴメンだ。なんとかして逃げ切らない

と。

どうやったら、飽きてくれるのかな……
誰か、他の人紹介しようか……

……。

そんなことを考えながら、私は微睡ミドロんだ。

02 (後書き)

お、なんかちょっと恋愛小説っぽくなってきましたかね？
3人の男子は口調とキャラで区別してください(笑)

混乱

PLL L L L … PLL L L L …

私の携帯から、固定着信音が鳴り響く。のそつと起き上がり、ぼやける視界の中、時計を確認。

只今の時刻 …… 5時 …… 12分 ……

… 誰だ、こんな時間に。非常識な。どうせイタズラ電話だろう。もう少し寝よう。

私は無視を決め込むと、再度布団にもぐりこむ。

PLL L L L … PLL L L L …

… コールが、長い。もう20コールは鳴ったんじゃないか？ いい加減あきらめろよ。

PLL L L L … PLL L L L …

長い …… 長い …… なが ……

PLL L L L … PL 「あーっもう！ 誰だ、こんな朝っぱらから！」
相当ムカついていたので、私は相手が誰かも確認せずに、電話に出た。

ウザい、ウザい！ 私の安眠を妨害すんな！

「だれ」

『俺。今日、お前んとこ行くから。』

プツッ……………ツーツー……………

そうひとこと残して、電話は切られた。

……………は？

なに、この謎の着信。おそろおそろ着信履歴を見ると、「国崎聖悟」の文字が。

…国崎。お前には、常識というものは無いのか？いや、私に何か恨みでも？

覚えは……………あるけど。

…いや、それより、さっきのヤツの言葉だ。…今日、来るって？
オイオイ、午前5時に送る冗談にしちゃ、ヘビー過ぎんだろ。…え、
本当？マジッスか。しかも決定？決定なんスか。

…大学、休みてえ……………

一気に脱力した私は、枕に頭を押しつけ、がくりとうなだれた。

重い足取りで、キッチンまで足を運ぶ。誰かさんのおかげで、すっ

かり目が覚めてしまった。
冷蔵庫を開けてミネラルウォーターを飲むと、冷たい水が私を潤してくれる。

…無駄に早起きしちゃった、か……
どうしよう。今からまた寝たら、起きられなくなりそうだし。

んー。

1分ほどの思考の後、私は早朝の散歩に出ることに決めた。何気に散歩は好きだ。走らなきゃ、ね。

パジャマを脱ぎ、ジャージの上下に着替える。こんな朝なら、誰にも会わないだろうと予測し、顔を洗ってすっぴんのまま外に繰り出した。…元々、化粧はそんなする方じゃ無いけど。

外はまだ薄暗く、日が出てまだ間もない、といったところ。
通りには誰もいないし、日中渋滞する交通路も、今の時間帯は車がまばらにしか走ってない。

私は、新鮮な空気を胸いっぱい吸い込み、歩き出した。

ああ…久しぶりに散歩するけど、なんか気持ちいいな。少し肌寒い気のある気温も、街路樹の青々とした様子も、私には好ましい。

そう。私にはやっぱり、こういう1人のゆったりとした空間が合う。

若者のくせにババくさいとか思われるかもしれないが、こつした時間は何よりも好きだ。

…最近、少し余裕が無かったのかもしれない。ここらでリラックスしとこつ。

1人である、セカイ。このスタイルを変えるつもりはない。やと手に入れた私の自由だ。みすみす逃すものか。そう、改めて願った。

大通りを歩き、交差点に差し掛かる。ほとんどの店は、まだ閉店中だ。

いつもは活気にあふれるショップ街も、今は閑散としていた。ちよつと立ち止まって、腕時計を見る。…6時ちよつと過ぎ、か。まだまだ時間には余裕がある。

調子にのって、いつもは歩かない道を通ってみることにした。

そう決め、歩き出すこと10分。

「あれ、ナツちゃん？」

早くも…後悔した。何故、まっすぐ帰らなかった、自分。

目の前には、今最も会いたくない3…いや、4人の中の1人。
斎藤 宏樹がいた。

私と同じく、ジャージ姿。額には汗が浮かんでいる。

「ナツちゃん、家この辺なの？」

わ、なんかいきなり親しげに話しかけてきた。…爽やかだ。背景がなんかキラキラしてる。

「…はあ、一応。」

一応って。何だ、自分。

「へえ。朝の散歩中？」

「あ、今日は珍しく早起きしたんで。斎藤君は、ロードワーク中ですか？」

「うん、そう。あー、…敬語はいいよ。同い年だし。なんか、他人行儀でヤダなー。」

言いながら、笑顔を向けられる。

…るっせ。私はその一線を引きたいんだって。

「遠慮します。」

私も、作り笑いを浮かべる。

「えー、聖悟にはタメだったのにー？」

ここでアイツを出すな。てか、黙れ。もう、散れ。

心の中で毒づくも、全く効果は見られない。にこにここと笑う彼は、なんで？とまた聞き返してきた。

「……国崎は、ムカツクから。」

なんかいい理由が思いつかず、とりあえず、そう言う。

「ハハツ、ムカツクって……。そんなこと言う女子、ナツちゃんくらいだよ。」

そっすか。ソイツは、私の中で呪いたい奴堂々の1位なんです。

「…あ、えっと、ランニングの邪魔ですよ。失礼します。」

会話を無理矢理中断させて帰ろうと、来た道に戻ろうとするも、

「まあ、待つてよ。」

と、斎藤が立ちふさがった。

…うわ、コイツ、身長でかい。180後半はありそう。

「…何ですか。」

身長差に怯みながらも、そう言葉を吐く。少し、不機嫌が混ざったのを知られたかもしれないが、まあいいや。

「あのさ、メール読んだけど、俺たちとつるむの、そんな嫌？」

斎藤は笑っていたが、真剣な目で聞いてきた。ああもう、この際はつきり言うておこう。

「嫌です。」

「…キツパリ言うね。何で？」

「何でも何も…、あなた方といると、私の生活が乱れるんです。」

そつだ、私の平穩を返せ。利子つけて。

「…あー、それはそうかもね。素のナツちゃん、目立つの苦手そつだし。」

「そつです。カラオケでの私は死にましたから。私を相手にしても、つまらないですよ？」

「そんなことないよ。」

は？

「は？」

…あ。思わず声に出して聞き返してしまった。慌てて口を塞ぐも、もう遅い。

斎藤はくすつと笑つて私に目を向けた。

「俺たちはさ、確かにカラオケでの君を見て面白いなとか思つたけど、それだけじゃわざわざ友達になろうなんて、サムいこと言わないよ。」

…サムい自覚はあつたのか。

「……じゃ、何故？」

「…聖悟がさ。気に入つたつて言ってるんだよ、君のこと。」

あいつ、めちゃくちゃモてるからさ、恋愛関係はどつか冷めてんだよ。でも、ナツちゃんに関しては、自分から関わりたいらしいんだ。

「
は？え、何それ。…だから、それは私のキャラの話であって……
…てか、恋愛って、ナニ。何の妄想トーク？これ。」

「しかも、素の方がずっと魅力的なのに、わざわざ性格作ってる所も面白いって。俺、絶対アレがナツちゃんの素だと思ったのにさあ…。聖悟ってスゴイよねー。」

カラカラと笑う、斎藤。対照的に、私は顔面が赤くなったり、青くなったりと忙しい。

…な、なに言っちゃてんの、斎藤……、いや、国崎、か？

冗談にしても、キモ過ぎるぞ。私をつかまえて、ミリヨクテキて。やっぱり、目…いや、脳が腐ってたんだ。…可哀そうなヤツだ。

「…それで、俺や他のヤツらも興味が湧いたの。今までの子とは、全然違うし。ナツちゃん。」

1歩、斎藤は前に出てきた。

………な、何さ！

「俺も、君が気になるよ。」

オレモ、キミガキニナルヨ

………ちよ、待て。

これ、なんてギャルゲ？今流行りの乙女ゲーか？それで、今、主人

公が『きゅん』とかなる場面？

…アホか、お前ら全員！国崎にも思ったことだが、現実でそんなこと、やっちゃ、ダメ！！

そして、相手が私とかやめようか！絶対、合わない！

私は真っ赤になってるであろう顔をぶんぶんと振り、ハツと、気付く。

！！まさか、コイツ…天然タラシとか！？性質悪い！！しかもソレにいちいち反応する私って！！！！

容量いっぱいになった使えない私の脳はエラーを掲げ、私は。

「…るっさいわ、ボケ！私は君らのことなんか知らん！！

あと、そういうセリフは、もっと乙女な君んとこのファンに言うてやれ！

きつと泣いて喜んでくれるからあ！！！！」

恥ずかしいやら、屈辱やらでかなりの暴言を吐いてしまった。

……………。

あ、しくった。と思う。しかし、時すでに遅し。

「ククッ…、それが素ー？やっぱ、いいわ。ナツちゃん。」

斎藤に、爽やかに笑われた。私は自分の行動が恥ずかしくなり、俯く。

…うつ。私って、こんな短絡的な人間だったか…？いつも自爆して
る気がするよ……………。自重せねば。

「…っ、とにかく！もう帰る！斎藤！君なんか、もう2度と会いたくないわー！！」

悪役の捨てゼリフを言い残して、走り去る。視界の隅で斎藤が手を振っているのが見えた。

……っ。

本当に私、最近走ってばかりだ。苦しい。心臓が、うるさい。あの…天然タラシ、何て事言いやがる。

素の方が魅力的

聖悟がさ、気に入ったって

関わりたいらしい

君が気になるよ

『那津。』

「…っ！」

顔がボツと赤くなる。き、昨日の国崎が出てきた…
……もう、何だコレ。制御不能だ。

からかうのはもう、止めてくれよ。心臓が、ヤバい。

「…破壊力、ありすぎ。」

私は、混乱した。ぐるぐるの、ぐちゃぐちゃの、混沌とした渦の中
にいるようだ。

かき乱される。アイツに。

チャイムが、鳴る。今日の授業も、滞りなく終わった。窓をのぞくと、雲1つない青空が広がっている…が、私の心境は曇天模様だ。まるで、ロンドンの街中のような。

…今朝から悩みすぎて、頭が痛い。そのくせ、何の解決策も糸口も見出せない。だから、腹が立つ。

私らしくないな、絶対。

ハツと自嘲気味に笑ってみる。こんな、ぐじゃぐじゃな感情、知らない。

私はもっと、飄々としていて、受け流し上手だったはず。なんだってんだ、もう……

片づけながら、またも思索にふけっていると、ふいに3人の影が私の席の前に現れた。

…あれ？デジャビユか？前もこんな……？

「本城 那津。この間はよくもやってくれたわね。」

低い声が、聞こえた。…あは、嫌な予感 again。

恐る恐る上を見上げると、件の3人のギャルたちが、いらっしやいました。

…すっかり忘れてた。この人たちの存在。今まで授業、かぶってなかつたのか。

なにやら面倒なことになりそうな予感だけが、する。心の中で、そつと舌を打った。

「昨日、あのイケメンたちと、カフェで仲良さ気に話してたんだって?」

「……………」

もう、そんな噂が出回ってんのか。…仲良くはありませんけど、まあ、事実といえば事実。

「ホント、なんでお前が!? こんな地味ブサイクより、もっと可愛いコがいるだろが!」

激怒して、叫ぶギャル。

…そんなこと、私に言われなくても。少なくとも、君はそのカテゴリ外みたいですけど。

「何とか言えつての!!!このメガネ!」

眼鏡をバカにすんなよ。全国何万人の人がかけてると思ってんの? 常々思っていたが、『メガネ』って悪口なのか?

…何とか言え、と言われたので、口を開く。

「…ごめん。今、君らの相手してる暇、無いんだよね。」

本当だよ。今、他のことでメツチャ悩んでんだから。

「ハアツ!? 何だよ! 調子こきやがって!」

「テメエさえいなきゃ、今頃彼氏出来てたかもしんないのに!」

「マジ、ウザい! 死ねば!」

あー、うるさい、うるさい。どうせあの合コン、私がいなくても失敗だったって。

それにあいつらが欲しいんなら、遠慮なくあげるから、もってつてよ。

「っこのっ!!」

無言で睨みあげる私の態度にしぶれをきらしたのか、ギャル子の一人が、手を振り上げる。

あ、殴られるな。あんま痛いのは嫌なんだけどなー。

しかし、スゲエ顔。ゴリラ顔負けだね。

他人事のようにそんなことを考えて、来るはずの衝撃を待つ。

……………。

しかし、待てども痛みは起こらない。…アレ。痛く、ないな。はずしやがったか?

何故だか届かない衝撃を疑問に感じ、そつと、目を開けてみる。

「何してんの、お前。」

聞こえてきた声と共に、私が見た光景。

国崎が、振り上げたギャル子の腕を掴んで、立っていた。

……わお。またも、王道展開だな。これで私が超美少女ヒロインだったら、完璧なのにねえ。

そう、ぼんやり思っていると、

「せ、聖悟くん!!」

手を掴まれた女子の、1オクターブ上がったような声が聞こえた。

「ど、どうしたの?こんな所まで来て!」

「会いたかったよ、聖悟君!」

パアツとバツクに花を咲かせて、上目使いに男を覗きこむギャルたち。

…さつきとはえらい変貌ぶりだ。最早尊敬の域だよ、君たち。

しかし、国崎は不機嫌そうに一刀両断した。

「俺は、全く会いたくなかった。今度、コイツに手え出したら、女でも容赦しないから。」

その刺すような声に、ギャル子たちは猫かぶりスマイルのままピシ

ツと固まる。それを横目に、国崎はぐいっと手を引っ張り私を教室の外へと連れ出した。

……痛いっつの。自称紳士はどうしたんだよ。今日はのっけから地、丸出しじゃん。

「離せ。」

とりあえず、教室から出ると即、手を振り払った。国崎は険悪な顔をしながら、軽く舌打ちする。

……舌打ちしたいのは、こっちだ。アホウ。こんな、脳内がぐしゃぐしゃなときに会いに来やがって。

「何、ケンカ売ってんだよ。」

「別に。どーでもいいでしょ。」

つーんと顔をそらす。…最近既存のキャラまでも崩壊してきてるな、この男のせいだ。

「何だよ、何怒ってんだよ。」

「君に関係ない。」

言い捨てて、速足で歩きだす。…君は知らないだろうが、こっちは頭ん中がカオス状態だったの。

「待てよ。」

国崎は難なく追いつき、私の横に並ぶ。ついてくんな。

「…理由を教える。」

「理由なんて、無いし。」

「嘘つけ。」

「嘘じゃない。」

「那津。」

国崎の漏らした声に反応し、私は何故かぴたつと足を止めてしまった。

場所は中庭の隅だ。振り向くと、ヤツと目線がかち合う。

「…何が、あつた？昨日と様子が違う。」

国崎の熱い視線が私を貫く。私は、居たたまれなくなって、顔を俯かせた。

「……………何もな「言えよ。」

肩を掴まれ、強引に目線を合わせられる。

……国崎の顔は迫力がある。こっちが委縮するには十分過ぎるくらい。

私はまさに、蛇に睨まれた蛙、だ。

「…っ、っ、」

ぎゅっと、唇をかむ私。

見れない。ヤツの顔が。自分が今、どんな顔をしてるか、知ってるから。
声も、肩にかかる力も、…追い詰めるような、視線も。すべてが私を苦しくさせる

「…っ君が…っ悪い…」

息がつまりそうで、居心地の悪さから抜け出たくて、つい、本音が零れる。

「…俺が？何で？」

そう、さっきとは打って変わって優しく言うから、私は、それに甘えてしまった。

「…っ分からないっ！君のせいで、もう、なんか頭がぐちゃぐちゃだ！！」

国崎になんか会わなきゃ、こんなことにならなかったんだ！
いちいち私をからかいやがって！

君なんて、最低だ！変態！アホ！女たらし！」

ひといきに言葉を並べ立て、ありったけの音量で叫ぶ。

TPOというものも、何を言ってるかすら意になく、ひたすら文にもなっていない罵詈雑言を口から出す。

まるで、小さい子供のように散々わめき散らす。

こんなの、只のワガママだ。分かってるけど、やめられない。それほど、私はまいつっていたのだ。

しかし、国崎も何も言わずにただ聞いているだけで。

止めるものがないので、私は、思う存分気持ちを吐きだし続けた。

…ひと通り、言い終えた。息もつかず言ったからか、呼吸が苦しい。肩を大きく上下させる。

本当に、私らしくない。乱されっぱなしとか、なんてカッコつかないんだ。

しかも結構大きな声でさげんでしまった……

恥ずかしい。酷いザマだ。

「…言いたいことは、全部言ったか？」

「！……ん……」

静寂の中、イキナリ発せられた国崎の声に少しびっくりし、私は1拍おいて、国崎の顔を睨みあげた、が………ヤツは口角を上げ、嬉しそうに笑っていた。

「……は……」

怪訝そうに眉をひそめる私。

……なに？Mか？君。罵倒が好きなんて。そんな、本格的な変態だったのか？

だがそんなアホらしい思考も長くは続かず。

一瞬、ふわりと国崎のにおいがした、と思ったら、私は、ヤツの腕に包まれていた。

「！」

国崎の体が、近い。互いの心臓の音も聞こえそうな距離。私は身動きすらできずに固まってしまった。

これ、は、どういう意味だ。

昨日のプレイバックか？こういうのを、ヤメロってのに。ぜんぜん、分かってない！

「っどけ！離せ！！」

ドンドンと、胸板を力いっぱい叩くが昨日のようにすんなりと離れてくれない。

それどころか、さらに力を入れて抱き締められる。

っうあーっ、ヤメロヤメロ！！苦しいい！

「那津、」

抱き締めたまま、国崎がささやく。
なんだ！ハナセ！！

「…そんなに、俺のこと考えてくれてたんだ？」

くく！

はたから聞いても明らかに嬉しそうな声に、一気に体温が上がる。

…っ、なんだ、自意識過剰だろ！この俺様が！！そういつ…恋愛的な意味じゃ、ねえし！！

…嬉しそうに笑ってんじゃねえよ。殺すぞ。

「ちっ…違うし！誰が君のことなんか！」

うっわ、キモ。何、私。今時、ツンデレの人もこんな言わないし。

「可愛い。」

クスクスと、さらにヤツは笑う。

その様子に、ふつぶつと怒りがこみ上げてきた。なんだか、馬鹿にされた気分で、イラツとくる。

私がこんなにあせって、ドキドキ（？）してんのに、コイツの余裕そうな態度。

…そりゃあ、百戦錬磨の国崎君は、怖いもんナシでしょうけど、私は、人生のサブロードを地味に地味に生きてきたワケですよ、19年間。

気まぐれとか、ちょっとからかってやろう精神でこんなんをやられても、困る。

「……国崎。」

「ん？」

げしっっ！！！！

ひとこと断りを入れ、私は国崎の革靴を、思いっきり踏みつけた。

……カカトで。

「……！！？」

国崎は、声にならない声を出し、抱いていた腕をゆるめたので、その際に、私はヤツから脱出した。

ステップを踏み、国崎から遠ざかる。

…ふう。心臓確保。ザマアみやがれ、変態国崎。

「…っ、那津……………」

余程痛かったのか、恨めしそうに私を呼ぶ声が聞こえたが、フンと鼻を鳴らして冷たい視線を彼に向けた。

「君が悪い。」

先ほどと、全く同じセリフを、今度はややスッキリとした気分で言う。

そうだ、コイツは変態なんだ。マトモな神経で相手したら、負けだ。何を血迷ってたんだ、私は。

思考を転換させ、体も国崎の方へ向けて、ヤツを見下ろす。なんか、視界がクリアになった気がする。

よかった、これぞ、本来の私だ。戻ってきた。

私が仁王立ちしてたたずんでいると、ふいに複数人の足音が聞こえた。

「ナツちゃん！聖悟！こんな所にいたー！！」

斎藤だ。後ろから水谷 信一と乾 圭太郎も歩いて来るのが、見える。

…あーあ、オールスター、揃っちゃったじゃん。

嘆息したくなるのを堪え、彼らが来るのを待っていると、斎藤が私に向かって手を振る。

「ナツちゃん！今朝ぶり！どう、調子は？」

黙れ、斎藤。こんな醜態をさらしたのは、もとはと言えば君のせいだ。

「え、宏樹、ナツちゃんと会ったの？いいな。ね、今度、俺とも駄弁ろうよ。」

見在目通り、中身もチャライな、水谷。そんな予定は作りたくない。

「とりあえず、外に出ましようか。ここにいと、また昨日の二の舞になりますよ。」

あ、やっぱりこの人が1番常識人だ。乾のもつともな意見に、私は頷く。

ちらつと後方を見ると、女子がちらほらと集まってきた。……恐ろしいことに。

「……あ、そう。じゃあ私は、これで。」

もう昨日のように強制的に逃亡はしたくない。私は颯爽と、右手を拳げて去ろうとする。

「どっ、行くんだよ。」

…やはり、国崎からストップがかかったが。あ、やっぱり？つか、これで通算何回目？

彼は、どうやら足の痛みから解放されたいらしい。足を軽く振りながらこちらに来た。

…ずっと沈んでくれて良かったのに……。

「…だって、見てよ、あの女子軍。私100%カンケーないし、巻き込まれたく無いから。」

冷静な声でそう反論する私。

正論だ。…正論だろう？単なる自己防衛のためだから。とっとと行かせてくれ。

だが。

「……悪いけど、ソレ、無理。」

「…は？」

「どうも…困まれたみたいですね。相変わらず、スゴい方々だ。」

！

乾のその声に、私は絶句する。

こんな短時間で…だと？どんだけネットワークが繋がってるんだよ！？

てか、なにしみじみと言ってんだ！乾！

「んじゃ、逃げっぞ。」

「!?!」

国崎がそう言うのと同時に、私の体は、宙に浮いた。
はあ！？な、なんだ、なんだあ！？

混乱の中、突如変わった視界。お腹辺りに圧迫感があり、足は投げ出されたまま。

そう、ヤツが私を抱きあげ、左肩にのせたのだ。簡単に言うと、米俵のように担がれている状態。

「…ちよつ、何してんの！降ろせ！」

私は足をバタバタと動かして、叫ぶ。
が。

「ヒュー 聖悟、やるねえ。」

「じゃ、行きますか。」

「裏門イケそう？」

「一気に抜けるぞ。」

彼らに『聞く耳』は無いらしい。………や、人の話、聞けよ。何で私も、逃亡班に編成されてんの？

勝手なヤツらばっかだな、マジで。

そうやって私を無視し、2言3言、言葉を交わした後、4人は走り出した。………+私。

かなりのスピードだ。周りの景色がビュンビュン流れていく。

「っわー！速いつ！速いつて！！落ーちーるー！！」

「うるせえ。あの女共の中に落とすぞ。」

「！…！」

ひいつー！ドS再臨！！そうくると私は黙るしか無いじゃん！！
あとの3人も、クスクス笑いながらも、余裕でついて来る。四方八
方から迫り来る女子を避けながら……
…って女子、怖っ！！

「き…君ら、いつもこんな感じなの！？」

思わず、走る彼らに問いかける。

…これ、異常だろ。

よく1年間同じ大学にいて気付かなかったな、私。

「んー？いつもよりは、ちょっと激しいかもなー。」

『ちよつと』、なんですか？水谷君！！

「この学部は、初めて来たから、興奮してるだけでしょ。理系学部
の子も、初めはこんなだったんじゃない？」

…はあ、そうですか。スゲエ。マジでアイドル並みだ。

「ゴチャゴチャ言っただけで、走れ。」

4人（+私）は、文字通り女子軍団の中を駆け抜けた。
もちろん、女子の皆さんは1人残らず私を睨んで行きましたよ、え
え。

…明日から、どうしよう。死亡フラグ、何本か立ったな、こりゃ…
……。

……。いや、明日にはもうこの世にはいないかも……。過激派に爆撃されるとか？

…ああ、思えば短い生涯だったな……。ゴメン、兄ちゃん。私は先に逝きます

「……………那津？聞いてんの？」

私が遠い目をしていたら、国崎に話しかけられた。

…何さ。私は帰って遺書を作成しなきゃ

「那津がいいなら、俺はこのままでもいいけど。」

……………え。

そう言われて今の状況を確認すると、国崎に担がれたまま、校門前。

「……………わあっ！？降ろせ！」

一瞬の沈黙の後、私は再び暴れ出す。

そうじゃん！何、この体勢！女子軍のせいだ、すっかり忘れてたあ！

「ハイハイ。」

しかし、今度は、素直に降ろされる。すとん、と両足そろってコンクリートを踏みしめた。

…ハア、良かった。久しぶりに地面と再会……………。

「はは、ナツちゃん可愛いな。顔、真っ赤ー。」

「…見んな、水谷。」

と、思ったら水谷に顔を覗きこまれた。…どうやら私はすぐ赤面するらしい。

しょうがないじゃん。なんたつて男性経験0女ですから。

「…うん。やっぱり、そっちの方が素敵ですよ、ナツさん。なんか生き生きしてます。」

不機嫌な私の顔をまた覗きこみ、上品に微笑む乾。

へ？そつちつて、なに。地が？こんな、毒舌で陰気なんか？

頭の上にハテナマークを飛ばしていると、また笑われた。

……なんか、感じ悪。やっぱりこの人たち、私と感覚違う。

「おい、圭太郎。口説いてんなよ。それよか、どっか店入らない？俺、腹減っちゃった。」

唐突に、そう斎藤が提案したので、私たちは近くのファミレスに入ることになった。

……そう、私も、強制連行だ。

帰らせる。

最近、家が恋しくて仕方ないのは、気のせいでは無いだろう。

03 (後書き)

さて、那津は逃げ切れるのでしょうか…？次回に続く。

オトモダチのなりかた

大型チエーンファミリーレストラン。

大学から程近く、値段もお手頃なので、この付近の学生によく利用される。

私もよくここに食べに来るが…入ってすぐにこんなに視線を感じるのは、恐らく初めてだ。

…主に、女子の熱い視線。言うまでもなく、私の前に入って行ったあの男たちに。

しかし、やはりコイツら、どこ行っても目立つのか。迷惑な。

1人ならまだしも、こんなのが4人も揃うと、なあ……

…イケメンはイケメンを呼ぶ？そういうもん？

「ナツちゃん、こつちこつち。」

「ナツちゃん、ここ、座ろつか。」

「那津？早く来いよ。」

…そして、どーしてこの中に私がいるのかねえ……。手招きして呼ぶの、止めてくれないかな。このアホ男どもが。

客はもちろん、接客のお姉さんまで信じられない、みたいな眼差しを向けてくれるし。

…安心しろ。それは、客観的に正しい反応だ。ため息を吐きながら立ち尽くしていると、国崎に顔をのぞき込まれた。

「どうした？気分悪いのか？」

「……ああ、視線に酔った。帰りたい。」

……いや、マジで。

「視線??？」

4人がおかしそうに首をかしげる。

「……って、酔うもんなの？」

「こんなの、大学内に比べれば、まだマシですよ？」

「ホラ、とつとと座れって。」

……もしや、皆さん、免疫出来てます？なんか小慣れてる感じなんですけど。

私は、一生慣れそうにありませぬ。

「……いや、やっぱり帰「今から皆でお前ん家行くのと、どっちがいい？」

「……座ります。」

……クソ、この俺様野郎オ……：テメエなんかこっぴどく振られちまえ。

……無理か。絶対追われるタイプだよなあ……：国崎は。

「さ、嫌がる彼女も座ったし。」

ええ。嫌がってますけど。分かってるなら、解放したまえ。

「注文していい？俺、もう腹ペコ。」

斎藤がそう言うので、各々メニューを見て、オーダーをとる。…特にお腹の空いてない私は、ブラックコーヒーで。

「そんだけー？もっと食べないと大きくなれないよ？」

女性に言うセリフか？それ。相手は小学生じゃないんだぞ。これだから天然斎藤は…。

「奢りますから、何でも頼んでください。」

「おっ圭、太っ腹ー俺のもよろしく！」

「信二、俺はナツさんにだけ言ったんですけど。」

「冷たっ！」

私はそんな乾と水谷の会話を聞き流し、「結構です。」とだけ言うておいた。

我ながら、そっけない。…ゴメン、わざとだけ。

「……あの、何で私、ここに居るのかな？」

注文したものがちらほら来始めた頃、私はそう切り出した。

「ん？聖悟に聞いてない？」

……朝の通話はひとことで切れましたけど？

「……聞いてないし。」

「言っていないから。」

私は国崎をジロリと睨みつける。ヤツはさらりと流す。

膠着状態に陥った私たちを見、水谷は苦笑しながら話した。

「今日、飲みに行かなくて。ちょうど、タダ券あんのよ、居酒屋の。」

……。……はい？

何、その拷問。

「そー。お友達になった記念にさ、いいでしょ？」

ニコニコと笑いながら、ハンバーグを頬張る斎藤。

……いや、全然いきないんですけど。そもそも、いつトモダチになりましたっけ？私たち。

しかも、飲みに行くのにここで飯食ってていいのか？

「那津に拒否権は無いから。」

……んで、どうやら君の中では、私は人間じゃないらしいな、国崎。そんな横暴が許されるとでも？

「……いや、普通に拒否したいんですけど。」

「ええー！？何でえー？」

キツパリと否定の意を伝えると、駄々っ子のように頬を膨らます水谷。

「いやいや、全然かわいくないから。」

「…友達になつた覚え、無いし。」

「今、なつたじゃんか。」

そう重く考える必要は無いって。楽しくお話して、仲良くなったらもうダチ。

Take it easy . OK ?

斎藤はニツコリ笑つて、私の方を見た。

…最後、無駄に発音いいな、君。ムカツクよ。

どうにもよろしくない展開に、私は内心、頭を抱える。

えっと、どうすりゃいいかな、これ。

とにかく、『友達にならない』ルートに持っていきたいんだけど。

とすると、

「……そういや、君ら、彼女とかいるワケ？」

悩んだ末、私はガラツと話を変えた。新たな突破口を模索だ。

…いるだろ。彼女の1人や2人や3人。セフレでも構わんから、いるって、言え。逃げ道が、欲しい。

だが、

「俺、いない。」

「最後に別れたのは、2か月前かな。」

「俺は、かれこれ1年くらいいませんね。」

「セフレも随分前に、全員切ったしなあ。」

希望はブクブクと沈んでいった。……撃沈。

そっか。女子共が群がるのは、全員がフリーだからか。…私、さらに不利じゃん。

「…作る予定は？」

てか、作れ。

「ナニナニ？立候補してくれるの？」

水谷がちやかかしてそう言うと、

「信二、一遍死ぬか？」

何故か口を挟んできた国崎が怒った。

…この人、友達相手にこんな冷たい視線送れるんだ……！

「冗談だつてー。」

でも、あまり気にした様子の無い水谷。慣れてるのか。

「…まあ、欲しいと思ったら作るけどさあ、今んトコ、予定ナシかな。」

「だから、安心していいですよ、ナツさん。」

斎藤と乾が笑いながらまとめる。

う。見抜かれてたか。
彼女いるんなら、仲いい女友達とか、気まずくね？…と、いうわけ
で辞退しまーす 作戦。

「……………」

意気消沈。私は無言でじつと自分の膝を見る。

……どうやったら断れるか思考をめぐらすも、全然コイツらに勝て
る気がしない。

っああ！面倒くさ！！

それにしても、しつこい。しつこすぎる。国崎の時も思ったが、
何でここまで食いつく？

基本、来る者拒まず・去る者追わず体制じゃないのか？君らは。そ
れとも、恋愛と友情は別なのか？

…こんな女、面倒臭いって言って、捨ててくれればいいのに。

じつと、あらぬ方向を睨みつけていた私に、ふいに水谷が話しか
けてきた。

「…聖悟と宏樹に聞いたんだけどさ、ナツちゃん、人嫌いで目立つ
のが嫌なんだろう？あと、寄ってくる女の子たちが怖いとか。別に、
俺らと一緒にいることが嫌ってワケじゃないんだよね？」

瞬間、苦い力オをしてしまう。

…ゲ、そう捉えたか。しかし、

『君らとトモダチ』『目立つ、女子の目の敵にされる』
の方程式が成り立つこと、分かってんのか？

「ならば、俺らが女の子たちをつまーくあしらえば済む話じゃん。」
「その、『うまく』が大変なんですけどね……。」
「圭は女子嫌いだからな！。でもなんとかなるでしょ。」
「……まあ、」

からからと陽気に笑う水谷に、やや同意する乾……
「……い、いかん。このままだと、ノンストップで流されてしまう……！
異議あり……！！」

「……ちよ、待て。だから、私は1人がいいんだってば！君らとも、
誰とも付き合いたくないの……！分かる……！」

私、必死。

しばらくの、静寂。私が必死に反論した後、4人と私は黙り込
んだ。

しかし、次の国崎の行動によってソレは破られる。

「ちよつと、来い。」

「……え？は……！」

「ちよつと、外出てくるわ。お前ら先に、居酒屋行って。」

国崎は3人の了承も聞かないまま、私の腕を引っ掴んで外に連れ出
した。

私はただ、引かれるままだ。いきなりのことで、頭がついてかない。
は？え？こ、コイツ、何するつもりだ？なんか怖いんだけど！

「座つて。」

行き着いた先は、ファミレスの裏にある、公園のベンチ。小さな公園だからか、人はいない。

「……何。」

不信任感を全面に出す私。いいから、と国崎が催促するので私はしぶしぶ座つた。

「……。」

「……。」

お互い、無言を貫く。…ナンだよ。連れて来たんだつたら、なんか話せよ。

すぐ隣に座っている男の方に首を傾けると、ちよつと国崎も私を見ているのに気付いた。形の良い唇が、縦に開く。

「…那津つてさ。ホント変な女だよな。」

「あ？」

聞き違いかとも思ったが、確かに彼の口から放たれた言葉。

考えたセリフが、それか？失礼以外の何物でも無いじゃん。

とはいえ、馬鹿にされたのは変わらない。多少、苛立ったような

気持ちになった。

「…失礼だな。変わってんのは、重々承知だよ。…で、そんなヤツをここまで呼ぶとは、どういう了見？」

「…いや、なんとなく。」

「気分かよ！」

気まぐれに付き合わせんなよ！何かと思っただじゃん！！

「那津。」

「…だから、何」

と、そこで私のセリフは止まった。

…国崎に、いきなり片手を掴まれたのだ。顔も、かなり近い。

相変わらず行動が唐突なヤツだ。少しは心の準備期間をくれよ、アホが。

それでも目は逸らさずに、国崎に向かって何だ、と問う。

すると国崎は、一瞬目を逸らし、

「…那津って、弱いよな。」

呟いた。

……What?

今度こそ、耳がおかしくなったと思った。

『ヨワイ』なんて。そんな単語が私に発せられるなんて。

「……なんて？」

「いや。那津は弱いな」と思って。他人と関わりたくない、一人でいたって、社会的に弱い証拠だろ？」

……んだと？……ピクツと、額に青筋が浮かぶ。若干顔が強張ったかも。しかし、ヤツはそれを知ってか知らずか、好き勝手に話し続ける。

「俺たち4人と付き合う社交性すら、持ち合わせて無いつて……人間として失格じゃね？可哀想なヤツだな。」

私を見降ろし、ハツと鼻で笑う国崎。

拳を作り、ぎゅつと握りしめる。怒りで手が震えている。

……くっ……落ちつけ……、私。怒ったら、負けだ。こんな、安い挑発にのるんじゃないっつたら。

「じゃ、悪かったな。弱い者イジメして。俺も大人げないコトしたわ。」

最後に鮮やかな笑顔でヤツはそう言い放ち、席を立った。

……。

……

……

私は、突如、無言で勢いよく立ち上がる。

そしてそのまま、国崎の方へつかつかと歩み寄り、自分より頭2つくらい背の高いヤツの胸ぐらを掴みあげた。

「……誰、が。弱いつて？」

あまりの怒りで、女子とは思えない程極端に低い、ドス黒い声が出る。眼鏡の奥の瞳は鋭く男を睨みつけていた。

しかし、睨みつけられている当の本人はどこ吹く風で、全く気にしていない。

「お前。本城那津が、だよ。心の狭い社会不適合者サン？」

俺らと遊ぶこともできない、可哀想なお前をいじめてゴメンネって、謝ってんの。理解できた？」

至近距離で私と目を合わせ、冷笑する、国崎聖悟。

…完璧に、蔑んでいる。

この私を。独りで生きて来た、この私を。

元々、話始めたのは最近で。お互い何も知らない状況で…なのに、なんで、そこまで見下されなければならぬのか。

君に、私のなに分かるというわけでもないのに。

……ふざけるなよ。

怒りのボルテージがMAXに上がり、私は国崎の方へガバツと顔を

上げた。
そして。

ゴツッ！！！！

「　　っ！？」

鈍い音が、公園に響いた。

私が頭を振りかぶって、彼に頭突きをかましたのだ。
突然の攻撃にヤツは相当痛み、たたらを踏んでそのまま尻もちを
ついてしまった。

私はそんな国崎にゆらりと近付き、見下す。

「…黙って聞いてりゃ、勝手なことぬかしやがって……。」

「……」

「私が弱い？人間的に不都合だと……？」

すっつ

「ふざけんなーっ！！」

今度は、大声が公園に響き渡る。私の、血の叫びが。

「私は！そんな人間不審者でも、ネガティブなニートでもねえ！！
もつと高尚な、気高い一匹オオカミだっ！！何言ってやがる！」

へたり込んでいる男に人差し指を突き付け、何度目か分からない暴
言を吐く。

しかし、いつもは私が息をつくまで放っておく国崎が、何故か今回は反論してきた。

「…なんだよ、ソレ。結局は変わらないだろ。人と関わるのが怖いって時点で。」

「…は！私は怖いなんて、ひとも言ってる無い！別に、上辺だけの付き合いならいくらでもやってのけるわ！！」

「それって、キャラ作って逃げてるだけじゃん。やっぱり素の自分を出せる程、強くないんだな、お前。」

「！黙れ！そんなん、全然楽勝だ！私はそんな弱いヤツじゃねえし！！」

「へえ。じゃ、見せてよ、俺たちに。楽勝なんだろ？」

「当たり前だ！そこまで不愉快なことぬかすんなら、今すぐ、オトモダチ登録でも何でもしてやるわああ！！」

「……………」

「……………」

ゼイゼイ、ハアハアと息を切らす私を尻目にヤツはゆっくりと立ち上がった。パンパンと、ズボンについた砂を払う余裕まで見せて。そして、とびきり『悪い』笑みを浮かべる。

「……………言ったな？」

！！

その言葉に、私はすべてを一瞬にして理解した。

そして、つい10秒前の自分のセリフを省みて、顔面が蒼白になる。

え、今、何て言った？私。

なんか地獄の果てまで後悔するようなコトを……言ってしまったよ
うな気がするのだが。

真っ青になっている私と対照的に、景気良く笑う国崎。

手を差し出し、

「……さ、居酒屋行くかー。マイフレンド。」

「……っぐー！」

図々しく『フレンド』を強調してきた。

……や、やっぱり私……

やっちまっただ！？

「……ま、待て、国崎。今のは言葉のアヤで……女に2言は無しだ
る？バツチリこの耳で、聞いたぜ？」

うー！グサツと言葉が心臓に突き刺さる。

「ちょ、待「はーあ、疲れた。慣れないコト、言っもんじゃねえな。
なんか頭突きまで食らったし。」

んーと伸びをして、あー頭が痛い、と額に手を当てる国崎。

……もしかして……いや、確実に……

……ハメられた？私。この、悪魔に。

「…ククツ。なーに固まってんだよ。そんな上手かった？俺の誘導尋問。」

「……………卑怯だ……………」

「那津って、怒り方ワンパターンだよな。慣れたら、扱いやすい。」
「……………」

もう国崎の方を振り向く気力すらない。

完敗。そんな言葉が脳裏に浮かび、さらに気分が落ち込んでいく。反対に至極嬉しそうにニコニコと笑う国崎は、完璧に沈んだ私に顔を近づけた。

「だから、言っただろ？そう簡単に逃がすつもりは、無いって。仲良くしようぜ？那津ちゃん？」

すると、ヤツの顔が急接近して

ちゅ。

頬に柔らかい感触が。

……………
……………つ！！

数秒後、状況を理解した私は、慌てて国崎の傍を離れる。多分、頬もろとも顔全体が朱に染まっている。

…な、なにをした！？今！？人が放心してる間に！！あまりのことに、脳が3秒ほどフリーズしたではないか！！

「なっ！なにすんのー！！」

「ん。お近づきのしるしってことで。」

「んなの、いらんわー！！マジで一遍死ね！」

変態男を置いて、ダッシュで公園を抜ける私。楽しそうに、その後からついて来る国崎。

…ありえない。ありえないだろ。

この私としたことが、完全にヤツの手の上で踊らされたなんて、冗談じゃない。

うっかり自殺してしまいそうだわ。

いや、精神的に殺されるかも。近々、確実に……………

……………。

あー……………！！！！（叫）やっちゃまったああ……………！！！！いきなり都合よく猫型ロボットとか現れないかな！タイムマシン、早急に1台くれ！！

02 (後書き)

はい、捕まっちゃったー。残念。

国崎も那津も、かなり頭がいい設定です。作者も台詞に頭を使いま
すww

in居酒屋（前書き）

前回までのあらすじー

主人公、地味メガネの本城那津は、3人のギャル子の力モにされ、合コンに連行されました。

ムカついた那津は、それをブチ壊すために、ご自慢の面白い『キラ』で大暴れ！！

結局、その合コンはご破算となりましたが、何故か相手のイケメンたちに気に入られ、攻められたり、追いかけられたり、すったもんだしました。

平穩を望む那津は、抵抗し、拒否し続けましたが、イケメンの内の1人、国崎にまんまと騙され、ついに、晴れて彼らとお友達になることになりました

あらすじ おしまい

……わー。何て下らない展開。
ベタすぎて誰もウケないって。

しかも、主人公が私とか。

ハハ……日本もここまで腐ったか。

「おい、いつまでも現実逃避してねえで、戻ってこい。」

「……うるさい。逃避くらい、させるや。」

次ページから本編だよ

in 居酒屋

「那津？」

「……………」

「なーっー？」

「……………」

「黙ってないで、何か言おうか。」

「……………」

……………ピッ。

『……………なら、今すぐ君らとオトモダチ』 「っわーーー！！分かった！分かったから、止める！！」

慌てて遮ると国崎の野郎はにんまりと笑った。

… やっぱり、魔王だろ、君。

今、私は国崎の車の中にいる。

前回と同じく、運転席に国崎、助手席に私。…もちろん、例の居酒屋に向かうためだ。

……不本意だが、ひっっじょーに、不本意だが、私は、彼ら4人の友人となってしまうらしい。

しかも、ご丁寧にも先ほどの会話はすべて録音済み。…言質も取られたか……………ハア。

「そんな落ち込むなって。別にカノジョになれって言うてるわけじやねーんだし。」

「……トモダチでもなりたい子たちが、どんだけいると思ってるの。」

「さあ？10ダースくらい？」

……この野郎、人事だと思って気楽に笑いやがって。120人程度で済むワケねえだろ。

各ファンが集まったら、もの凄いことになるに決まってる。

「ま、いざとなれば、俺が脅しにかかるから、大丈夫だって。」

「……脅し、ね。」

確かに国崎が本気で怒ると、怖そう。……きっとニコニコと仮面をかぶったまま、追い詰めていくんだろ。女子を。恐ろしい。

「……もうすぐ着く。あいつらは、先に席で待ってるって。」

「はあ……」

「これ見よがしにため息つくなよ。」

「つかずにいられるかよ。超憂鬱なんだけど。」

「あつそ。ま、頑張れ。」

彼は、そのまま前を向き、アクセルを踏んだ。

……返事、軽いぞ国崎。この胸の痛みは、どこにぶつけりゃいいのや
ら。

……今日はヤケ酒コースかな……。

「着いたぞ、ここだ。」

黒い車が駐車場に停まる。どうやら到着したらしい。

私たちは車から降りて、アットホームな感じの居酒屋ののれんをくぐった。

「お、来たね。」

「やつほー、ナツちゃん。」

「奥の席どうぞ。」

店に入るなり、私と国崎を出迎えるイケメン・s。

…にぎやかだね、ちくしょう。

私は促されるまま1番奥の座席に座った。国崎はその隣だ。

「あ、那津は説得してきたから。よろしくやって。」

「さっすが聖悟！」

「へー！どんな手使ったの？」

「んー、秘密。」

「教えて下さいよ。」

楽しく笑いあう4人を尻目に、私は無言を貫き、壁に目を向けていた。

石だ、私は石なんだ。だから、おかまいなく。

「…よっしや、じゃ、腹あ割って話そうじゃねえか！」

何を。

「とりあえず、生ビール、頼みますか？」

乾のスルー技術はなかなかのものだと思う。

「あれ？ナツちゃん、お酒ダメじゃなかったっけ？」

「……………」

ちら、と国崎を見ると、ヤツはニヤリと笑いながら例の録音機のボタンに手をかけて…………

…って、ダメツ！それ！

「…っ。れ、例のじいちゃんの教えは実在するが、私は去年から飲んでるから平気！」

慌てて、早口で言う私。　　「…っ。イヤな弱みを握られちゃったぜ…………」。

「ダメじゃん、それ。」

「大体飲み会とかで、『私、飲めません。』とか、白けるだろ絶対。」

「は、言えてる。」

4人は同感、といった風にニヤツと笑った。

グダグダと話していると家に店員が来たので、オーダーした。
…うーん、お姉さん、顔赤いね。そして、私に向かって『え？』って顔するの、やめてね。よかったら、代わってくれてもいいよ？

「じゃ、カンパニー!!」

ガチンツと、ジョッキをかち当てる音。そのまま、全員ぐいっと一口飲んだ。

…あーうめ。ビール飲むの、久々だなあ。

私はいくらか気分をよくして、白い泡を飲み込んだ。

その後、ぞくぞくと届く料理たち。

適当に枝豆などをつまんでいると、サラダを山盛りに盛っている斎藤が、徐オモムロに話しかけて来た。

「…ね、自己紹介とか、いる？」

「え、合コンで言ったじゃんか。」

「那津は、何一つ聞いちゃいねえよ。」

「うわー、酷っ！ホントに俺らに興味無いんだ!!」

…悪かったな。その件に関しては、すげえ後悔してるから、触れるなよ。

私はまた一口ビールを流し込むと、バツが悪そうに視線を下げた。

「…別に、いいよ。顔と名前覚えときゃ、いいでしょ。」

「ダメだって。せつかくムリに友達になっただんだから!」

…ムリに、ねえ。

そして、何だか知らんが、自己紹介をし始めた男たち。

……ああ、うん。一応聞いてるから、大丈夫だって。
だからそんな何回も聞き返してくんな。ウザいから。

「……斎藤 宏樹。19歳ね。今は、彼女より彼氏が欲しいかなあ。」

そして、斎藤 宏樹のターン。今日もキマッてる黒髪の彼は、そう言った。

……って、…………は？
ちよっと、待て。聞き流すところだった。何か引っかけたぞ。

「……彼氏？」

ま さ か 。

「ああ、俺、バイだから。」

斎藤は至極簡単に、あっさりとした口調で答えて下さった。途端に、
空気が凍った気がした。

……主に、私周辺の。
ま……まさかのリアルBLが身近に！？しかも、こんな爽やかな男
前が！！？

「冗談、だよな？」

「んーん、マジマジ。」

「……彼氏とか、作ったことあるんだ？」

「詳細に聞きたい？」

「や、遠慮しときます。」

「そ？あ、でも女の子でも全然OKだから。」

ニコリと笑って手を振る、斎藤。…フォローになってねえよ。

「…ククツ。驚いたろー？ナツちゃん。俺らも聞かされた時は、本気で貞操の心配したよな。」

「聖悟なんか、一時期、本気で狙われましたし。」

「え、マジで!？」

「…食いつくな。今は、何でもねえから。」

…昔は、あつたんだ？

その昔を想像し、少し哀れみの視線を送ってやると、小突かれた。いて。

しかし、斎藤がまさかのホモ…いや、バイ、か。

B.Lとか、別に偏見は無いが、…意外すぎるわ。世の中は広いなあ。

「…あ、でも、それ女子に言えば?」俺、男にしか興味無いんでとか。」

「言つて、聞くと思つ?。」

「…なるほど。」

イケメンも苦勞しているようだ。

「…いやーしかし、聖悟もよく落としたよね。こんな頑固な子を。」

空になったジョッキにビールを並々と注ぎながら、斎藤がケラケラ

笑う。

…落とした、とか。人聞き悪いこと言うな。頑固で悪かったね。

「別に、たいしたことしてない。何か自爆してくれたただけだし。」

「は、よく言うわ。思いつきりハメたくせに。国崎いつか殺す。」

「ハハハ。」

笑い転げる水谷、傍観しながらひたすら食べている斎藤、時々助け舟を出す乾、そして、睨みあう私と国崎。

居酒屋の1室で、酒を飲みながら、静かに夜は更けていく。

アルコールの熱に浮かされ、陽気に笑う男たちをぼんやりと見ながら、私は1度、冷静に考えることにした。

本当に、奇妙な野郎どもだ。

正直、ここまでするのは、思わなかった。最後は国崎の罠にかかった私が悪いが、こんな…ゴキブリ並みにしぶとくつきまとってくるとは。

もう、何度もきっぱり断った。手札も全部使い切った。

…それでも、ダメだったんだから……もう、私が折れるしかない気がする。

なに、どうせコイツらの一時の世迷言。私など、すぐに飽きて捨てられるにきまつてる。それまで、適当にやればいいか。

私はついに降参した、と同時に、『これからどうするか』に思考をシフトチェンジさせた。

…… よろしい、なら私のやることは、1つだ。

私は、眼鏡の奥の瞳を細めた。

「あのさ、」

私はすくつと立ち上がって、4人を見下す。

「私と友達になるにあたって、お願いがいくつかあるんだけど。」

「は？オネガイ？」

「何だ、それ。お前にそんな権限無…」いいから、聞いて。」

…おお、初めて国崎の言葉を遮った。ちよつと、快感。

いい気になりながら、私は息を吸い込んだ。

「…まず、私以外の女友達を早急に作れ！しかも、複数！」

ビシツと人指し指を突き付ける。良い子はマネしちゃ、ダメだぞ。

「…は？女、友達？」

「え？」

当然のごとく、目を丸くする4人。私は気にせず続ける。

「口答え無用！とにかく可愛い子、数人選んで来い！むしろ、彼女でもよし。」

「…防波堤かよ。」

「悪いか！このままじゃ、女子からの被害を被るのは、確実に私なんだよ！何人かで怒りを分散した方が、得策。見目麗しい子なら、私は上手く隠れられるし！」

「…策士ですね、ナツさん。」

「…ああ、こつちのことは、全く考えてないあたりが。」

ふーん。どうせ自己本位ですよー。

君らと一緒にいるってのは、それだけリスクがあるんだっての。我慢しやがれ。

「ま、それはよろしく頼む！…んで、次ね。私、君らのメールアドレス、さらすから。」

「おいっ！売るなっつたるー！」

「何言ってるの、国崎。あんだけ目立つこととして、明日私はどうなると思う？下手すりゃ、身ぐるみはがされんのよ？とりあえず餌まいて、彼女たちの怒りを鎮めてもらわなきゃ。」

「…なんか、イケニエみたいですね。」

「なるほどー。で、俺たちの携帯は、パンクしてもいいって？」

「すぐにアドレス変えりゃ済む話でしょ。もしくは機種変更するか。」

「…ホント、性格悪すぎ、お前。」

「ありがと。褒め言葉としてもらっとく。…で、あとはー。」

「まだあんのか？」

「最後だったの。んーっとね、…必要以上に、私には関わるな。」

……………。

水を打ったように、突然静まり返った室内。う、空気、重。

「…何それ。やっぱ俺らと一緒にいるのは嫌ってこと？」

不審そうに尋ねる水谷。いつもみたく、軽いノリではない。私も、覚えず喉がごくりと鳴った。

「………違う。そこはもう、諦めたから。私が言いたいのは、最低限のプライバシーは守れってこと。」

誰でも人に干渉されたくないことって、あるでしょう？ましてや、私らは異質なワケだし。」

「……………」

「…私は、キチンとけじめさえつけてくれたら、後はどうでもいい。普通に仲良くできると思う。だから、コレは守って。」

「…ちなみに、それが守れないと？」

「大学内では話しかけずに、他人のフリする、かな。」

「えー、そんなん、ヤダー！」

彼は打って変わって顔を崩し、クスクスと笑いだす。

……………お、よかった。元の陽キャラに戻った。真剣な水谷は、ある種キモイからな。

「…以上。どうかな？諸君。」

フンツと、満足気に鼻を鳴らしてみる。

言い終えた後、各々何か考えている様子の4人を眺めながら、私は勝ち誇った気分でした。

へっ、腹あくくった私は強いぜ！！文句でも何でも来いや！むしろ、キャンセル待ち！！（まだあきらめてない）

すると、しばらくして。

「…うーん、ナツちゃんの言うことも分かるよ。俺ら、あんだけ君の前で好き勝手したからね。」

斎藤がうなりながら呟いた。

「メールアドレスを変えるくらいなら、わけないんですけど…今すぐ女友達を作れっつのは、難しそうですね。」

続いて乾も難しそうな顔をする。

…へえ。真剣に悩んでくれちゃってる。案外マジメだね。それとも女子に対して、か？

「…別にリタイアでも「やだ。」

言いだしかけた提案は、即座に却下された。…声、ハモらせなくてもいいじゃん。言ってみただけだって。

「…俺は、」

そのうちに、今度は国崎が口を開く。

「…俺は、別にそれでいい。ただ、最後のは分からないけどな。」

「……何が？」

「…干渉するなっつっても、俺には那津の、触れていいギリギリのラインが分からない。」

まだお互いのことをよく知らないわけだから、ちょっとしたことでも心の琴線に触れる可能性だってある。だから、無理。3つ目は保留にしとけ。」

と、思いがけず真面目な顔で、熱く語ってくるからビックリした。

「…へえ、いろいろ考えてるんだね、国崎も。」

「お前と同じくらいには、な。」

互いの顔を見合わせる、私と国崎。その表情からは、何もつかげえない。

そして彼の黒い瞳には、私はどのように映っているのか。

「…うん、分かった。女のコの件は、なんとかするよ。」

でもナツちゃんと仲良くしてくれるかどうかは、知らないからね。2番目のも、特に問題は無し。

…ただ最後のだけは、聖悟の言う通り、徐々に慣れてくしかないん

「ただ、いい？」

斎藤も考えがまとまったのか、そう言ってきた。その言葉に、私は少なからず驚く。

「マジか。全部クリアするとは。私は、友人になるのに面倒くさい条件を出すような、とんでもない女だぞ？」

「……なんか、申し訳ないとか、思っちゃうじゃないか。」

「……分かった。でも、女友達は集めといてよ。なるべく面倒臭くない子。」

「ナツさん以上に面倒臭い人なんて、そうそういませんよ。」

うぐ。い、意外と毒を吐くじゃないか、乾。

「ホントだよなー。全く、トモダチになるのにこんな手順踏んだの初めてよ？俺。」

「……そら、そうだろ。私は『面倒臭い女』らしいからな。」

「ま、いーんじゃない？これから、楽しそうじゃん？」

「……お手柔らかに。」

「……ただし、私の平和は、乱すなよ……」

その後も、ワイワイ騒ぎ、下らない言いあいが続けた。

こうして話してみると、彼らも案外普通の人だった。顔がいいというだけで、私も無条件に身構え過ぎたのかもしれない。今日1日で、考えが少し変わった。その意味では、今回の飲み会、成功だったのかもな。

「…そろそろ、お開きにする?」

夜もだいぶ深まった頃。斎藤がそう、シメる。

「ええ、まだ飲もうよお。」

「お前は、飲みすぎ。」

やたら語尾を伸ばし抱きついてくる水谷を国崎がドツク。

…水谷は、酔うとさらにウザイ。絡み酒かよ、厄介な。

「じゃ、帰るか。」

私たちは、席を立ち始めた。

帰りも、国崎の車だ。他の3人も一緒に乗っている。飲み疲れたのか、無言の車内。

…私も疲れた……。寝たい。

「…今日は、ありがとございました、ナツさん。」

うつらうつらと瞼が降りようとしていたころ、唐突に乾が話しかけてきた。

「…ん、何が？ごちそうになったの、こっちじゃん。」

「いえ。ナツさんといると楽なんですよ。俺も、みんなも。」

「……へえ。」

「よけいな気遣い、いらないし。」

あ、さいですか。

「…そりゃ、よかったわ。」

適当に返事をしながら、私は、ぼんやりと窓の外を眺める。真っ暗な闇の中に、ぽっかりと浮かんだ光。

今日は、満月だ。

月明かりに照らされながら、再び車内は沈黙した。

後ろの席から水谷のいびきが聞こえる。

その隣で斎藤が携帯をいじっている。

乾は空に浮かぶ月を見上げている。

国崎は…眠そうに、運転を続けている。

私は彼らを一瞥し、また窓の外に視線を戻した。

いつ崩れるのか、分からない。友人関係なんて、そんなもんだろっ？

こんな穏やかな時間なんて、いつか必ず壊れる。忘れる日も、やって来る。

…そうだな、それまでは、このお遊戯に付き合っただけでもいい。

でも、

私は最後まで、君らを信用したりはしないだろう。

そんなことを、思いながら。

「…じゃ、また明日。」

「寂しくなったら、俺らの棟、来てよー。」

「おやすみなさい、ナツさん。」

数分後、手を振りながら車から降り出す男たち。

3人は同じマンションに住んでいるらしい。仲良く家路についた。

そして、再び自動車を発進させる国崎。どうやら送ってくれるらしいので、素直に甘えておくが……

少し気になった私は隣の男に聞いてみた。

「…国崎は、家、どこなの？」

「……俺も、あいつらと同じトコだけど。」

「え？ちよっと、それを早く言ってよ！地下鉄でもバスでも使って帰ったのに……！」

弾けるように顔を上げる私。…国崎は酒も飲まず、運転続きなのだ。さすがに心苦しい。

「別にいいっての。最後まで、送る。」

「…そういや、女の子に優しい設定だっけ、君。」

「設定って何だよ。最初から優しいだろ俺は。」

「どこがだ。」

「いや、感謝はするが、最初らへんの鬼畜っぷりを帳消しになんかさせないからな。」

「 那津、」

しばらく車に揺られていると、国崎に呼ばれた。

「…ん、なに。」

「ありがとな。」

「…なんか、感謝された。」

「…何が？」

「ちょっと驚いた。コイツから、お礼を言われるなんて。…ったく、乾といい、何なんだってんだ。」

「ああいう条件だしてきたってことは、認めてくれたんだろ？俺らのこと。」

「…別に。諦めた…ってか、ほぼ強制だったじゃん、主に君の。」
「ククッ、ま、そうだけだな。こんな普通に女子と楽しく飲むの、」

初めてだから。」

…初めて？

「……………どういう意味さ。」

「お前は、他の女とは違うってことだよ。褒めてんだから、ありがたく思っつけ。」

…なんか、納得いかんが……………まあ、悪い意味じゃないらしいんで、よしよしとこっぴ。

「でもあんまり仲良くなるなよ、…あいつらと。」

「……………は？なんで？」

しかし、続けて言った彼の言葉は、まさしく不可解だった。
…なんか、矛盾しまくってないか？こんだけ『トモダチ』を押し
おいて、あの人たちと仲良くなるな、て。

「なんでも。…俺が困るから。」

「????？」

意味不明の回答に、さらに目を白黒させる。

君、が？さらに分かんないな。なんのこっちゃ。

「まあ、面倒臭いから私から近付くことは、無いと思っけど。

…もちろん、君にも。」

「……………」

言っつて、国崎の方を向くと、私を目視するヤツとまた目が合った。
車は、ちょうど赤信号で止まっている。

しばらくそのまま互いの顔を見ていると、

「……那津ってさ、猫みたいだよな。」

「……？」

突然、何の話だ。

「……ネコミミとかは、死ぬほど似合わないと思いますが。」

「誰がコスプレの話をしてんだよ。性格の話だっつもの。自由奔放で、掴みどころがない。そのくせ他人には中々懐かない。」

「当たってるような、当たってないような……」

へえ、そんな風に見られてたのか、私。

「……難しいな。」

ポツリと国崎が呟いた言葉は、私には届かなかった。

車が、再び動き出したからだ。吹き込んだ風で彼の言葉はかき消えた。

「……何か、言った？」

「別に、こっちの話。」

ふっと笑う彼。私は首をかしげたが、そのまま気にせず正面を向いた。

程なくして、車は私のアパートに着いた。

もう2度目だからか、慣れたものだ。国崎はちょうど正面でブレーキを踏んだ。

「…わざわざ、どうも。それじゃ。」

そう言って、車を降りようとしたところ、突然、運転手に腕を掴まれる。

私は少し眉をひそめたが、もう、いきなりコイツに腕を掴まれるなど慣れたもの。

静かに、ヤツに問いかけた。

「…何さ、忘れ物？」

「ん。」

振り向いた時、国崎が身を乗り出して、

一瞬。

額に、柔らかい口唇の感触。

「じゃあな、おやすみ。」

国崎は、妖艶にニヤリと笑い手を振った。

数秒後、我に返った私はバツと車から降りる。

「…！ちよ、なにしてんの君！！」

「別に？ただなのでこ「あー！言わないでよろし！！」

つく！今度は額か！セクハラも大概にしろや！引っかかる私もアレだけど！

てか、コレは慣れてねえからっ！慣れる予定も、ないから！

「宣戦布告だよ。覚悟しとけよ？」

何についてデスカー！！？

……国崎はニヤニヤ笑ったまま車を発進させ、この場を後にした。

「あ……いつつ！絶対楽しんでやがる……！」

私は額を押さえて、車が走って行った方向を睨み見る。

どんなに目をこらしても、あの黒い影は、もう跡形もなく消え失せていた。

02 (後書き)

本作品、BL要素はありません。斎藤君の属性はただのネタです
笑)

香るコーヒー屋

それからというもの。

「ナツちゃん、やつほー！暇だから遊びにきちゃった」

だの、

「ナツさん。今日の昼、一緒に食べませんか？」

だの。

わざわざ講義室にまで現れる男たち。

…棟が違うんだから、いちいち来るな、アホどもがつ！君らが来るたびに女子たちがざわつくんだよ！

おかげでもう……毎日瀕死状態ですよ……ああ……

「…何、死んでんの。那津。」

「今日はお前か、国崎……」

机に突っ伏していると、国崎に話しかけられた。途端、女子たちの黄色い悲鳴が上がる。

ホラ、ね。相変わらずだな……。

居酒屋で飲んだ日の翌朝。やはり予想した通り、私は登校するなり女子に囲まれた。

『ねえ、あの4人と知り合いなの！？紹介してよ、本城さん！！』

『もしかして、親戚とか？私のこと、紹介しといて！！』

『まさか、あの中の誰かの、彼女じゃないよねえ？知らなかったなー、本城さんがあの人たちと仲いいなんてー。』

……エトセトラ。全く知らない、学部すら違う女子にも話しかけられた。

通りすがりの人にさえ、興味深そうに目を向けられる始末。

……下心丸見えだなー。女って、やっぱりコワイ。

私は台本通り、「彼らは友達です。」と丁寧に受け答え、4人のメールアドレスを彼女らにバラまいた。

餌効果は抜群だったらしい。歓喜した女どもは私には目もくれず、携帯を取り出してメールを打ち始めたのだから。

おかげで難なく逃げおおせた。

その夜。4人の新・メールアドレスが私の元に到達した。

…そついや、昼から夜にかけて来たメールの数も報告してきたっけ…

斎藤 68通

水谷 72通

乾 63通

国崎 …101通

…これで国崎の人气が1番高いことが判明した。3ヶタのったのか
……ほんの半日で。いや、他の3人も十分すごいけど。

……どこがいいんだか、あんな変態俺様の。
携帯をパタンと閉じ、ちっ、と舌打ちを打つ。

あの夜以来、国崎は私の中で有害危険人物一位に認定された。

…なるべく近寄らないようにしよう。抜け出せなくなったらヤバい
んだからね!!

ダメ、ゼツタイ!!

メールアドレスによってひとまずは危機回避。彼らも、即アドレス
を変えた。

…さて、ここまでは計画通りだ。

しかし、あれから1週間が経つというのに、一向に、彼らから新たな
女友達は紹介されない。

……おかげで、このありさまだ。毎日毎時間、メス共が、うつつとう
しくてしゃーない。

「…どういことだ、国崎…。」

所は変わって理学部近くのカフェ、…の、カゲ。私は神経を尖らせながら、国崎に恨めしげに尋ねる。

一応外からは見えにくいと思うが……見つかるのは時間の問題だろう。

彼女らはハイエナのごとく、瞬時に群がるワザを持っているからな。

「…だから、俺は知らないって。アイツらにまかせつきり。」

「だーっもう！早くしねえと私が危ないだろうが！！早いとこ作られて！友達が無理なら、彼女の2、3人くらい！！」

「二股も三股もする趣味、無いんだけど。」

そういう意味じゃねえーっ！

全く気にしていない様子の国崎に苛立つ。コイツ、この私が生死をかけている時に…っ！

「っ、……そう、君さえ何とかなってくれりゃあいいのっ！国崎って、4人の中でも1番人気でしょ？」

「1番人気……人を人気商品みたいに…」

「シャーラップ。私だって必死なの！ここ数日、マジで生きた心地しなかったし！！」

「…そりゃ、ご愁傷さま。」

黙れ。何でそんな不服そうなんだ、君は。

ギリギリと歯を食いしばってイライラを隠しもしない私。

すると、そこに人が近付いて来る気配がした。

コンマ2秒で気付いた私は、バツと振り向く。

！マズイ、バレたか！70%オーバーの確率で、この男を捜しに来た女子の誰かだろう。

「…っ！国崎、話はまた後でっ！」

じゃっ、と手を挙げ、駆けだそうとすると

「ダメ、行くな。」

国崎に後ろからぎゅう、と抱き締められた。

国崎の顎が、私の頭に乗る。ふわりと彼の息がかかり、背筋がうすら寒くなった。

…ちよ、待て、このタイミングで！？嫌がらせ！？
ひい！死亡フラグ立ったああ！

「くく、国崎君！？離してくれないか！？」

いかん、声が震える。この恐怖感、ヤバイぞ。

「ヤダ。離したら逃げるだろ、那津。」

もちろん、そうだがっ！今は行かせてくれえ！！

…うっ、なんか目が潤んできた。視界がぼやける。

それでも私の後ろで手を回す国崎を見上げて必死さをアピールすると、ヤツは目を見開いて驚いた表情を作った。

…初めて見る顔だ。

……あり、何で？

「…お前、そういう顔もできるんだ…。」

ぼつり、と呟く国崎。

…どういふ顔だろう。そんな酷い顔面だったんだろうか？いや、ヒドイのは元からだが。

とにかく、何故か知らんが、国崎は力が抜けたように私を離し、顔を逸らした。

っしやあ！なんか知らんがラツキイイ！脱兎のごとく走りだそうと私は足を1歩踏み…

「聖悟君、見つけたあ。」

…踏み出したまま、固まった。…お、遅かったか！？

やたら高いぶりっ子声が頭上から降ってくる。

…頭上？な…何！？上から…だ、と？

テラスの影は死角になるが、なんと理学棟の上階からは丸見えだったのだ！！

う、うかつ…っ！

そして、さらに。

「聖悟君っ！今日、暇？」

「一緒に遊ばない？」

近付いてきた足音。女子5名。もあらわれた！！

…どうしよう、敵が多すぎるよ。国崎もぼつっとしたまま、素知らぬ顔してるし。

「ちょっと、本城さん。何してるの？」

そうこうしている内に、頭上の女子の内1人から低い声で話しかけられる。

…知らぬ間に私の名前は広まってしまったらしい。

以前は、大学内の98%の人は知らなかったハズなのに、今では見知らぬ女子からも敵意を向けられる程の知名度に。

…アハ、もう死にたいな。いや、むしろ君が死んでくれないかな国崎。

「…えっと…今そこで会っただけ。じゃあね国崎君。私、帰るから。」

だから君はここでコイツらの相手を頼む。

国崎は裏の意味も読み取ったのだろう、眉をしかめた。

…うん、ゴメン。でも、元はと言えば君が彼女を作らないせいだから。

私は眼だけでそのように伝えようと、女子たちの矛先が私に向かないうちにこの場からフェードアウトを試みた。

が、

「ちっ

国崎が忌々しそくに舌打ちを打って、

「!!--」

グラリと視界が揺れる。彼は一瞬で、私を担ぎあげた。

…2回目ー！この短期間で、2度も宙に浮く体験て！

「ちょ、君つ何す「俺、こいつと遊ぶ約束してるからさ。今日は無理。」

「…えっ!?!」

驚愕の声を上げる女子たち。…こつちも、『えっ!?!』なんですか
どおおお!!

「…じゃ、そういうことなんで。」

国崎は長い脚で地面を蹴って、走り出した。…私を左肩に乗せたまま。

「オイ!国崎っ!国崎聖悟!!君は何を言っちゃってんの!?!」

「何って、聞いただろ?」

「約束なんざ、した覚えもされた覚えも無いんだけど!?!」

「そうか、俺も記憶に無い。」

なら、大ホラついてんじゃねえよ!!しかもこつちに不利な嘘を!

国崎と私はギャーギャーと口論を繰り広げる。だが、走りながら話すのに、流石に疲れたのか、

程なくして国崎は私を下ろし、大学内の芝生に座りこんだ。

…私も大声で叫んだからか、喉が痛い。お互いしばらく休んでいたが、怒りの収まりきらない私はすぐに隣を向いた。

「…また君は目立つようなことを……っ」
「どうせ俺といたら目立つにきまつてるし、今更だろ。」

もう恒例にするには、早すぎるわっ！しかもさらっと自過剰！！
ピキツと青筋を立て、私は改めてこいつを『敵』と認識した。

「黙れ。全く、国崎ってホントワケ分かんない。他の3人はもっと普通に接してくれるのに。」

「…は？なに、あいつらお前に会いに来てんの？」

「…毎日のように来るけど。おかげでこっちが大変だったの。」

「へえ、そう。」

そう言つて、国崎はちょっと黙った。…と、思ったら、いきなり頭をがしがしとかいた。

…？なんだ？

「…なにいきなりイライラしてんの。コーヒー飲めば？」

もしくはカルシウムか？よくは知らんが。

とりあえずそう助言すると、彼はびたつと手を止めた。
そして

「…俺、苦いの不得意だから。」

そう、小さな声で、言った。

……。…つぶ。不得意って……

合わねー！その顔で！？そついや、国崎は甘党だったけか！？
にしても、可らしい！可笑しすぎるー！！

「…笑うな。」

「…ツクク、アハハハ！だ、だって、コーヒーダメとか、子供みたいでっ！君、合わなっ、い……！」

…あー、ヤバイ。笑いすぎて腹筋痛いわ。

ひとしきり笑い終え、国崎の方を向くと、ヤツはムスツとふてくされて、そっぽを向いている。

うーわーっ。マジでいじけてるっ！コイツの方が猫っぽいって、確実。

なんだかその様子が可愛くて、毒気を抜かれた、というか。さっきまで怒っていたことを忘れてしまった。

「くくっ、ゴメンゴメン。じゃ、美味しいコーヒーの店、教えようか？」

ふて腐れていた国崎は、それにぴくっつと反応しこっちをちらりと見る。

「…連れてつてくれるなら、いく。」

…お、なんか釣れた。

こりゃ、女子の皆さんに耳よりな情報だな。いい店紹介すればついて来るらしいぞ、こいつ。

「オツケー。歩いて行けるから、今から行く？今日、まだ授業ある？」

「無い。今日はあとバイトだけ。」

「じゃあ、行こう。」

私と国崎は立ちあがり、並んで歩き出した。校門を通り抜け、大通りに差し掛かる。

相変わらず、すごい人だ。信号待ちの歩行者は、車道にまではみ出している。

私たちも信号が青に変わるのを、待つ。

その間も、周囲の女性（時折男性も）が隣の男を見ているのが分かった。

…ここまで来ると、芸能人でいいんじゃない？君。

信号が青に変わり、再び時が動いたかのように、人の波は一気に前方へと押し寄せる。

私もその波に逆らうことなく、歩き出す。

と、突然、手を握られた。

「っえ？」

握った相手はもちろん、国崎聖悟。私の隣にいる男だ。彼の大きな右手が私の左手を覆う。

首をかしげると、ヤツは口パクで、『はぐれるから』と言ってきた。

…確かに人通りは多いしはぐれるかもだけど……、

……。…ま、いいか。コイツが、迷子になっても面倒くさい。誰にも分かりやしないだろう。

どうせ、この人ごみで私は隠れるだろうから

私は特に気にせず、国崎の手を握り返し、目的地に向かって歩き出した。

手を引かれて、男もおとなしくついて来る。足のコンパスはだいぶ違うハズだが、国崎は私に合わせてゆっくりと歩いているらしい。自然に、いつもと変わらぬ速度で歩いている。

…へえ。こついう所はいい男っぽい。やっぱり、経験がものを言うのだろうか。

大学を出て、徒歩7分（私計算）。大きな道路から少しはずれた所に、私のお気に入り入りのコーヒー屋がある。

：「コーヒー屋といっても、喫茶店のような所で、中でマスターがコーヒーを入れてくれるのだ。」

カランカラン。

いまだき珍しい、古風なドアベルがついたドアを押し、店内に入る。

「いらつしゃい。」

柔らかな笑みを浮かべ、私たちを迎えてくれたのが、この店のマスターだ。

御歳、35歳。独身。丸メガネとヒゲが、トレードマーク。

「こんにちは、マスター。」

私はとりあえず挨拶をして、カウンターに座った。

国崎はその隣の席に腰掛ける。なんだか物珍しそうに、店内を見回していた。

「那津ちゃん、久しぶりだね。こっちのカッコイイおにーちゃんは、
彼氏？」

…定番トークしてきやがった。

「違います。友達、しかもなったばかり。」

「仲よさげに手、つないでるのに？」

は、しまった。つなぎっぱなしだったか。

瞬時に私はパツと国崎の手を離れた。なんか汗かいてたし。最悪。

「…まあ、これは、成り行きで。」

「いいねえ、青春。オジサンはもう枯れ果てたからなあ。」

聞いちゃいねえな、このオヤジ。

「…国崎。マスターはこんなんだけど、コーヒー入れるのは上手い
から。」

「こんなんって何よ、こんなんってえー！」

口うるさいオヤジだよ、もう。

「…はいはい、うるさいから黙っててー。私、ブルーマウンテンね。
それと」

「マスターさん、俺コーヒー苦手なんですけど。飲みやすいのあり
ます？」

ちらりと隣を覗きながら言うと、いきなり国崎に遮られた。おお、
敬語だ。

「僕のことはマスターって呼んでよー。そっか、コーヒー苦手なの、君。じゃとっておきの、ブレンドしちゃおうかな？」

「うわ、マスター、実は男好き！？だから35にもなって結婚できないんだって。」

「やかましい。年齢のことは言うんじゃないの。」

マスターは舌を出してそう言い残し、店の奥へ消えた。

しばらくお互い無言でいると、視線を感じたので横を向く。…と、国崎が、なんとも言えない表情で、私を見つめていた。

「…何、国崎。」

目を細めて聞いてみる。

「…ん？ああ、なんか那津がくつろいでるの見て、意外な感じがしたから。」

と、なんだかぼんやりとした様子でそう返ってきた。…くつろいでる、ね。

私はふっと笑った。

「……確かにそうかも。私、コーヒーの香り好きだからね。なんか癒される。」

そう言って前を向き、少し黙った。

マスターの店は感じがいい。

忙しい街の中で、ここだけ時が止まっているかのような錯覚を覚える。

国崎もそう思っているのか、いつもより若干、顔の表情が柔らかいような気がする。

「…はい、おまたせ。」

程なくして、マスターが戻ってきた。手には湯気の立つ、コーヒークップが、2脚。

「さ、飲んでみて。」

私はいつも通り、香りを堪能してからカップを口に運び、一口飲んだ。

…うん、今日も美味しい。このオヤジからなんでこんな美味しいコーヒーが出るのか、不思議。

「…えっと、国崎君、だっけ。最初は何も入れないで飲んでみてよ。」

マスターに促された国崎も、恐る恐る手渡された一杯を一口飲んだ。すると、

「…おいしい……。」

ヤツの顔は、パツと花が咲いたようにほころんだ。これには、私も

ぎよつとする。

うわ。バックに花が飛んでるよ、花が。……客観的に見ても、超可愛い。

こりゃ、ファンには鼻血ものだな。なんだ、その汚れなき少年のような表情は。

「やったっ！それ、僕の自信作なんだよ！よかったー、気に入ってくれて。」

マスターもなんかやたら嬉しそうだ。…若干引くほど。

「俺、こんな美味しいコーヒー、初めて飲みました。」

「おうおう、嬉しいこと言ってくれるね。もう一杯どうよ。」

「じゃあ、いただきます。」

国崎のカップに新しくコーヒーが継ぎ足される。マスターも同じのを自分のカップに入れていた。

マスターと国崎は、すっかり意気投合したようだ。親しげに話す2人を横目で見ながら、この店を紹介して良かったと思った。

……あ、そうだ。

「ね、マスター！私もそれ、飲んでみたい！」

忘れるトコだった。国崎も大絶賛するそれを、コーヒー愛好家の私だって、ぜひとも飲んでみたい。

そう思って申し出てみたのだが。

「残念ながら、もう無い！また次回、だな。」

…あつさり断られた。しかも笑いながら。

「えーっ嘘！もつと入れといてよ！」

ニヤロ、国崎には2杯も入れたくせにい！男女差別か！？顔差別かっ！？ズルイツ！！

私は最後の手段、とばかりに、じいっと国崎の持っているカップを見つめる。

「…………欲しい、か？」

国崎が笑ってそう聞くと、

「うんっ！」

私は素直に即答した。やったっ！国崎イヤツ！（単純）

国崎からコーヒークップを受け取ると、綺麗な茶色を一口すする。途端、口が緩んで笑顔になった。

「あ、ほんとだ。スッキリしてて美味しいっ！」

あのオヤジ、こんないい豆を隠してやがったか。不公平だぞ。ありがと、とカップを返すと、国崎は苦笑して残りを一気に飲み干した。カップを置き、そして呟く。

「…………なんか、ここにいる那津って、子供っばい。」

…………。

「…え、マジで？」

自覚ないんだけど。君の目にはそのように見えたのか？子供っぽい私って、なんかキモくない？

「うん、マジで。」

「…子供っぽいっていや、君もだろ。」

「え、俺も？」

「さつき、ファンにバラまいたら軽く10万は稼げそうな、あどけない笑顔を漏らしてましたけど。」

「…うわ、怖いな。気をつけとこう。」

国崎は身震いして、自分に言い聞かすように呟く。

すると、カウンターから両腕が伸びて、私と国崎の頭をがしっと掴み、豪快に撫でた。

「ハツハツハツ！いいのよ、若者たち！！ここにいる時は存分に子供に戻りなさいっ！お父さんがコーヒー入れてあげるから。」

「…えー、こんな父さん、ヤダな。」

髪をかき交ぜる手を振り払って、冷たくそう言ってみる。

…「…たたく、何でこんなテンション高いのこのヒゲオヤジ。髪が乱れたじゃあないか。」

「傷つく言葉を言うなっ、娘よ！反抗期か？」

「…じゃ、俺はこいつの兄？」

「勝手に設定作るなよ。それなら、私のが姉でしょ。」

「お前はどうみても妹だ。」

なんか、あーだこうだ言いながら、馬鹿らしい設定を作られた
(勝手に)

最終的に決まった役(?)は
マスターが妻に逃げられた30男で、国崎が離婚の際、引き取った
息子、私が再婚相手の連れ子。

……どこの昼ドラだよ。
確実に何度か修羅場を迎えるだろ。私、血繋がってないし。しかも
再婚相手が非常に気になるトコロだな、コレ。

ま、でもある種リアルな偽装家族ごっこも、なかなか楽しめた。国
崎も、マスターも楽しそうだったし。よく笑ってたし。

私も、なんだか楽しい気分になった。

気がつくとも時間はだいぶ経っていて。もう夕日が傾きかけてい
た。

「マスター、そろそろ行くわ。」

私は席を立った。ついで国崎も立ち上がる。

「ん、またいつでも来てね。」

カランカラン

マスターの笑顔の見送りを背に、私たちは外に出る。

夕日であかね色に照らされた街。

行きは混み合っていた通りも、だいぶ人通りは少なくなっていた。そんな街中を、私は国崎と肩を並べて歩く。

「…いい店だったでしょ。」

歩きながら、隣で歩く男に尋ねた。

「……ああ、そうだな。」

…なんだ、そのぼんやりとした返事は。いつもの国崎らしくない。

「…どうしたの？」

私は違和感を感じ、足を止めて国崎の顔を見た。夕日で照らされていて表情はよく読めないが、多分笑ってはいない。ヤツも、足を止めた。

「……那津は、何で俺をあのお店に連れて行った？」

しばらく考えこんだ後、私を見つめて言う。国崎は、真剣な目をしていた。

また、だ。この目。この真剣な眼差しに、射抜かれる。私は思わず、目線を下に向けて、顔を逸らした。

っ、え、なにこの空気。何でコイツ、こんなマジなの？

私は焦って弁解の言葉を口にする。

「だ、だって、君がコーヒー嫌いとか言うから！コーヒー程美味しい飲み物は無いってのにつ！！」

焦りつつも、口を尖らせて、答えた。
え、合ってるよね、私。これ以外の理由なんて、無いんだけど。何を求めてんの？君は。

「……でも、お前のお気に入りがなかったわけ？いいの？」

国崎は真面^{マジ}のまま、小さく聞いてきた。

……。ああ、なんだ。コイツ、私のテリトリーの心配をしてるワケか。

……私の言ったこと、覚えてたんだ。

「……別に、いいよ。国崎も気に入ってくれたら、私も嬉しいから。」

うむ。

紳士な配慮はありがたいが、別に気にしてもらわなくても、いい。マスターの店が広まるのはちょっと嫌だが、国崎は言いふらすタイプでもないし。

君はトモダチ、だから。今は、ね。

しかし、気遣ってくれたのはうれしく思い、私は歯を見せてニカッと笑った。

「……ふーん。」

そっか、と国崎も嬉しそうに笑った。

……やっぱり紹介して、良かったな。よほど気に入ってくれたらしい。

夕暮れの中、再び並んで歩き出す。

「…また、ちよくちよく行ってあげたら？マスターも、息子のよう
に思ってくれてるワケだし。」

「行く時は、那津と一緒に行くよ。」

「そ？」

「俺は、お前の兄貴だし。」

「…まだその設定、続くの？」

「しばらく、これでいこうかな？」

…やめなさい。私の本物の兄が泣くかもしれん
私たちは、そのまま人のいない道を歩き続けた。

02 (後書き)

ほのぼの系の話でした。次回も新キャラ登場です。

美女、来襲

「ちょっと、本城さん。話があるんだけどいいかしら？」

時刻は、朝もまだ早い時間。1限の講義前である。

…目の前にいる、美女と呼ぶのにふさわしい、ブランドで固めた女に話しかけられたのは。

私は、昨日徹夜で仕上げたレポートをファイルケースに入れ、提出しようとして教授の部屋を訪れるところだった。

「…あ？」

ジロリと見返したところ、謎の美女は若干、後ずさった。

…あ、スイマセン。徹夜明けなんで、目つき悪くて。

「…話があるの。時間はあるかしら？」

コホンと咳払いをし、改めて私に話しかけてきた。

なかなかいい人のようだ、見かけによらず。

マナーの悪い女なら、無理矢理引きずっていくだろうに。

…と、というか、もう用件分かってますけど。あなたが来た時点で。

「…レポート提出して、3限の講義が終わった後ならいいですけど。待てます？」

「いいわ。じゃあ、大学前の喫茶店で、待っててくれるかしら。」

……いい人ってだけじゃなく、気も長いらしい。
別の言い方をすると、暇人。

じゃあ、後で。と手を振って彼女は階段を上っていった。

私も、ため息を一つついて、研究室に入る。

………ついに、来たか。女子からの呼びだし。

………つたく、高校生じゃ、あるまいし、男くらい実力でゲットしろよなー。

講義もすべて終わり、私は例の喫茶店に行くために、帰り仕度をした。

鞆をかつぎ、講義室を出る。中庭を通り、出口にさしかかる。そして最後の角を曲がり

「やつほー！ナツちゃん！」

「今終わり？一緒に遊ばない？」

きる前に、見なれた顔がひよこつと飛び出してきた。

………う。出た。

眩しいくらい満面の笑みで近づいてくる、男たち。

今日は水谷・斎藤ペアだ。

…何故にヤツらは毎日日替わりで現れるのか。なんか示し合わせているんだろうか。『今日は俺たち』みたいな。
……迷惑以外の何物でもないな。

「…悪いけど、今日は無理。先約があるんで。」

手を前で振り、とりあえず断る。

「えー、嘘だろー?」

「もしかして、金欠?金なら貸すよ?別に。」

…オイ、先約つてのは、嘘確定かい。
ちがうから。ホントだから。むしろ、君らのせいだから。

「ああ、もう。今日メールするから、とりあえず帰れ。」

「マジっ!?約束だからね!」

「ナツちゃんのメール、レアだからなあ。」

……うっさい、レアで悪かったな。面倒臭いんだよ、打つの。

…4人とつるむようになってからも
相変わらず、メールはめったにしない私だった。

その後、しっかりとメールするよう釘を刺された私は、2人に見送られ大学を後にした。

……なんだか、私、あの4人に懐かれすぎてる気がする。
こっちはマスコットじゃ、ないってのにな。

今度、私のプライバシーを侵害すんな、とか言ってみようか。

それはそれで厄介なことになりそうだ、と思いながら待ち合わせの喫茶店へと足を進めた。

数分後、目的地にたどり着いた。…いや、たどり着いた……のか？
本当に、ここであつてる？

でも、大学前の喫茶店つて、ここしかないし……。
…何というか、入るのをためらう店なんだが。

彼女が指定してきた店は、

なんとも乙女チックな(?) 感じの、超ファンシーなカフェだった。
レースのカーテン、フリフリエプロンの店員、そこら中にあるぬいぐるみや人形。もちろん、客は全員女性。

……何、この空間。私、完全に浮いてるよな？

つか、何でわざわざこんなトコ選んだかな、あの女。

私は、いささかげんなりとして、パッチワークの引いてある椅子に座った。相手はまだ来ていないらしい。

「…注文は、お決まりでしょうか？」

席に着くなり近寄って来た店員に、コーヒー、とだけ告げて私は机

に突っ伏した。

…頼むから早く来てくれ。居心地が悪すぎるぞ、コレ。

地味メガネ女×フリフリレース×ふわふわぬいぐるみ

……………罰ゲーム？

女が来たのは、それから10分後だった。

朝見たときと変わらず、見目麗しい彼女は、ごめんなさいね、と言謝り席に着く。

私はそのときようやく頭を上げて、紅茶とケーキを頼む女を観察した。

セミロングの髪は丁寧に巻かれていて、メイクにも余念なし。綺麗というよりは、可愛らしいという感じに仕上がっている。

淡いボーダーのシャツもピンクのロングスカートも彼女にぴったりと似合っていて……典型的なお嬢様タイプだ。

…罪な男よな、あいつらも。こんな美人に好かれるなんて。

彼女の頼んだ紅茶とケーキも届き、ひと段落したところで、目の前の美女は話し始めた。

「……………じゃ、まず、自己紹介ね。私は高宮 麗奈（タカミヤ レイナ）。

文学部の3回生で、20歳よ。」

へえ、先輩なんだ。

それにしちゃ、丁寧で感じ良さ気だな。

「丁寧に、どうも。本城那津、法学部の2回生です。年は19。で、どういったご用件でしょう?」

私はしらじらしく、そう返す。

すると、少し気分を害したのが、高宮さんは綺麗に整えられた眉を多少ひそめた。

「……分かってるわよね?私知りたいのは、S大の王子様たちと貴女がどういう関係かってことよ。」

…は、王子様だって。ひねりも無けりゃ、センスもねえ呼び方。私にとっちゃ、ただの面倒な男どもだけだな。

「どういって、ただの友人ですけど。」

「嘘。友人にしては親しすぎるわ。あの中の誰かの、彼女なんでしょう?」

「誰の彼女だったら、困るんですか?」

そこで、高宮さんは、カツと顔を赤くした。

…案外、表情が豊かだな、このお嬢様。

「っ、それは、どういう意味?!?」

「…いや、誰か狙ってる人がいるんでしょう?4人の内、誰かなくて思ってた。」

「……………」

…あれ、そんなおかしなこと、聞いたか？黙っちまったぞ。

無言の彼女の方を向いたまま待機する私。
すると何秒か後、

「……き……くん……よ。」

高宮さんは、俯いたまま、ボソボソ呟いた。

…物事は、はつきり言おうか？若干いらついたまま、もう一度聞いてみた。

「…すみませんが、聞こえませんか。誰です？」

「くっ、国崎聖悟君、よ！」

顔をガバツと上げた彼女は、顔面を真っ赤にして、『キヤー』と恥じらっていた。

…乙女だ、この人。ああ、だからこんな喫茶店が好きなのか。

にしても、やはり君か、国崎。さすが1番人気だな。モテるモテる。

「…はあ、そうですね。」

ちよっと冷めた目で見ながら、答えた。

「あ、貴女がこの間、国崎君と仲よさそうに歩いてるのを見たのよっ！どついついことっ！？」

あちゃ、見られてたか。この間の。それ見て誤解したんだな。

これからは誤解を招かないように、複数で行動するとか、なんとかしないとなあ。

「えっと、彼に私のお気に入りコーヒ屋を教えてたんです。」
「な、なにそれっ！デート!？」

違い。

「違います。友人として、です。貴女も仲のいい男友達くらい、いるでしょ？」

「……そう、かしら。」

うーん、と疑り深い眼差しをこちらに向け、考え込む高宮さん。

…ていうか、何？やっぱりアレって、友人としては距離が近すぎるのか？

別にそうでもないと思うんだけど。あれ？私の感覚のが、変？

「…ま、そういうわけなんで。」

大丈夫ですよ、国崎と私がどうこうなるなんて、100%ありませんから。私もどっちかというと、嫌いよりですし。」

私はニツコリと笑って言った。

だから、自信持ってください先輩！

ついでに私のことは空気と置いていただいても構いませんよ？

私の完全な否定に高宮さんも納得したのか、ほっと一息ついて、紅茶を飲んだ。

「…そう、分かったわ。ごめんなさい、変な勘違いして。」

まだ顔がうつすらと赤いままの彼女は、やはりとても綺麗だった。

…国崎、こんな美人見逃すなんてどういっつ見だ。

バチ当たんど、いつか。

…しばらくお互いに何も話さなかったが、
頃合いを見て、私は口を開いた。

「…あの、ついでお聞きしたいんですが……」
「何？」

「国崎の、どこがいいんですか？」

失礼かとも思ったが、一応聞いてみる。

人気の理由が分かれば対策も練れるかもしれない、と思ったからだ。

「……………何、貴女……………」

「へ？」

と、

いきなりガシッと両肩を掴まれ

「国崎君の良さが分からないのっ！？あんな完璧な男性はいないっ
ていつのこー！」

そのままガクガクと揺さぶられる。

…うわ、また熱くなったよ、この人。
国崎関係の話だと、冷静さを欠くのか？それとも私、何か変なスイ
ッチでも押したか？

「私、国崎君のことなら、小1時間は話せるわ!!」
「いや、長引くのもアレなんで、かいつまんで結構です。
あと、声のポリウムも少し落として。」

小1時間も話されたら、困る。

「…コホン、ちょっと熱くなりすぎたわね、失礼。…いいわ、彼
のすばらしさを語ってあげましょう。」

180センチを軽く超える長身、スラツと長い脚、男らしく、でも
しなやかな手、やせ形なのに程良くついた筋肉、サラサラの茶髪、
何より、整った美しい顔!!

…まさに私の描く王子様そのものだった……。」

高宮さんは、うつとりとした瞳を虚空に投げかける。

…誰が、君の妄想話を話せと言った。

外見が特上クラスなのはもう、とうに知ってるって。

「……………」

私はしらけた気分で、先を待つ。彼女の話はまたさらに熱さを増し
た。

「……………そして、あの紳士的な態度!!」

私が彼に初めて会ったのは、彼が入学してまだ間もないころだった

わ…私、その日は高いヒールを履いていたものだから、足をひねって倒れこんでしまったのよ。

でもそんなとき、国崎君が来て、『大丈夫ですか？』って声をかけながら起こしてくれたの。私、すごくときめいちゃって、もう心臓がドキドキして仕方なかった……。

今思えば、あの時一目惚れしちゃったのね…

そして、その後彼は医務室まで連れて行ってってくれて、

『今度から、ヒールの高い靴は避けた方がいいかもしれないね。危なっかしいから。では、お大事に。』と言いついて、颯爽と去って行ったの！」

言いきると、彼女は満足そうに、バラ色のため息をこぼした

。(どんなだ)

……。

……ハイ、ノーカット版でお届けしました。

恋する乙女の回想録。

感想。高宮さんも、国崎もベタすぎ。以上。

つか、そんな簡単にオチるもんなんだな。やっぱ、ルックスって、武器？

うーん、まいった。全く有力な情報が得られなかったぞ。

国崎が、本当に普段はベタ紳士やってることと、

この人が妄想暴走乙女だったことくらいか。分かったの。

私はため息を吐いた。

…最近多いな、ため息。私、実際不幸だしな。

「……はあ、だいたい分かりました。で、告白はしたんですか？」

「…っな！あ、貴女っ…そんな…っできないわよ…！」

突如、顔がユデダコのように真っ赤になる高宮さん。

…え、マジで？1年以上も経つのに？

「…どうしてですか？」

「…だってっ、彼、ファンが多いでしょ？なんか怖くて近づけないし…。何より、彼に拒絶されるのが、怖い…。」

さっきの勢いとは打って変わって、消え入りそうな声で言った。

しゅんと小さくなって俯く彼女は、本当に真剣に悩んでいるみたいだった。

…この人、ホント純粹だな。

まるで漫画のヒロインのようだ。…私と違って。

……………。

だが、コレは使えるな。

あいつら、相変わらず女子の友達を作ってこないし、彼女は十分過ぎるくらい美人だ。

…よし。

「…なら、まずはお友達から始めてみては？」

「…え？」

決めた。この人をオトモダチ第1号にしよう。
目を丸くする彼女に構わず、私は手を組み、ゆっくりと話した。

「私が貴女のことを、私の友達として彼らに紹介しましょう。そうしたら近づけますよ、少しは。」

「…え？」

ぱちぱちと瞬きをし、驚いたような顔をする高宮さん。
美人はどんな顔でも美人なんだなあ。

「……っ！そんな…上手い話すぎるじゃないっ！」

ぼんやりと彼女の反応を待っていると、急に鋭い眼差しを向けて来た。
た。

…いきなり承諾はしないが、めっちゃ動揺してんな。
もうちょい。

「別に、こっちも親切心だけでこんなこと言ってるワケじゃありませんよ。私も女子に目をつけられて困ってたんで、貴女のような美人が必要だったんです。」

「…それって、私を盾に使うってこと？」

「ま、簡単に言ってしまうば。でも、高宮さんだって国崎と仲良くなりたいたんでしょう？ギブ&テイクですよ。」

「……………」

すっかり冷めたコーヒートの最後の一口を飲んで、再度彼女の反応を見る。

しばらくは、うるたえていたが、私をじっと見て、考えこんでいるようだ。

「……そういえば、貴女、どうやって彼らと友人に？」
「尤もな質問ですが、それは私が聞きたいです。」
「え、貴女から言い寄ったんじゃないのっ!？」

本気で驚いた顔を作られた。

……。普通の反応だろうが、なんかムカつくな。やっぱり世間的には
そう見られてんのか。

舌打ちを堪えながら、私は笑顔を作った。

「……違いますよ。」

「えっ?なら、どうやって?」

「成り行きは話が済んでから、で、どうです?」

「……………」

……こう言えば、どうかな。

そう大した話じゃあないが、気になるだろうしな。食いつく?

私はじいっと高宮さんを見る。

彼女は何も言わずに考え込んでいるようだった。

しばらくの、沈黙が流れる。

彼女の頭の中では、今、計算機がフル稼働中だろう。

考えてもらう時間も必要だから、私も黙る。

その間、特にやることの無い私は、ぼんやりと窓の外の道行く人々
を観察していた。

「……………」あの、「」

高宮さんはしばらく唸っていたがやがてパツと顔をあげて、ハッキリと言った。

「…分かったわ。お友達になりましょう？本城さん。」

その返事に、私はニヤリと笑った。

……ミッション、コンプリート。貴女ならそう言うと思ったよ。

「……ありがとうございます。私のことは、『ナツ』で結構。私も、貴女を麗奈さんと呼びますから。」

「ええ、那津。貴女、優しいのね。」

高宮さんは感動めいた口調でそう言う、が、

「それでもないよ。私、性格悪いし。彼らに紹介した後は、知らないからね。」

突然口調を変えた私に、驚いた様子を見せた。

友人となったからには、とりあえず、地で接しなれないとな。後々面倒だから。

「これからは、一応、素でいくから。よろしく、麗奈さん。」

手を差し出す、と、麗奈さんもクスツと笑って私の手をとった。

「よろしく、那津。」

かくして、高宮麗奈さんがパーティーに加わることとなった。
ジヨブは、『イケメンたちの女友達かつ私の友達』。

……この人も、なんかひとクセありそうだな。

まあ、いいや。

明日、アイツらに紹介することにしよう。

02 (後書き)

女子キャラ登場。でもやっぱり普通じゃないWWW

麗奈の憂鬱

「 というわけで、私の友達の、高宮麗奈さん。1コ先輩だよ。」
「 よ、よろしくお願ひします、皆さん!! 」

翌日。

私はいつもの理学部カフェに4人を呼びだし、麗奈さんを紹介した。
ヤツらは私のいきなりの行動に、ビックリしていたようだったが、

「 うわーっ美人！ね、麗奈ちゃんって、呼んでいい? 」

水谷が最初に食いついてくれた。

よし、ナイスだ水谷。君はこういう時、ホントに役に立つ。

「 …あの、ナツさん。」

水谷が盛り上がっている横で、乾に耳打ちされる。

「 なに? 」

私も、小声で返した。

「 あの人、本当に貴女のお友達ですか? 」

「 うん。昨日、なった。」

「 …それは、貴女の目的のために? 」

「 当たり前じゃん。でも悪い人じゃないみたいだから、大丈夫だっ

て。だいたい、君らがいつまで経っても女友達を作らないのが、悪い。」

「それは、そうですが……。」

「反対なワケ？」

「……俺は、女性が苦手なものですから。」

「ああ、そう。じゃ、私もいらないじゃないの？それなら。」

「ナツさんは別です。離すつもりもありませんし。」

？どういうこった。意味分からん。

時々、コイツもよく分からん発言するよな。

頭の上でハテナマークを飛ばし、また口を開こうとするが、

「なに、話してんの。」

国崎が上にのしかかっってきたので、中断された。

のしつと体重がかけられていて、身動きが取れない。…ヤツは、完全に私に体をあずけて抱きついてた。

…お、重い。

「……別に、何も話してませんって。」

「嘘つけ。コソコソとウザいんだよ、お前ら。」

乾はあきれたように肩をすくめたが、国崎は、ギロリと彼を睨みつけた。

…心狭いな、国崎。そして抱きついて来るのに何の意味が。

すると、私は麗奈さんがこっちを見ていることに気がついた。

水谷との会話はそっちのけで、私の方を、なんか睨んでる？ような

……

……って、この体勢ー！！

そっついや、麗奈さんって、国崎が好きなんだった！

ヤバいつ！余計な内紛まで起こしたくないよ、私！

「くっ、国崎い！マジ何でもないから、離せっー！！」

瞬時に事情を察した私は、腕を振り上げて、慌てて国崎を引きはがす。

は、危なかった。

……ったく、こいつはスキンシップが過剰すぎて、困る。誤解を生む原因じゃんか。

そんなに私って、猫っばいだろうか？

疑問は残ったが、まあ、それはさておき。

「……とにかく、麗奈さんは私の友達だから。君らも仲良くしてやっ
て。」

っーか、しろ。

4人はその発言の指す意味が分かっているので、苦笑した。

そして、

「じゃあ、よろしく。」

「初めまして、乾といいます。」

「ねえーっ、また皆で居酒屋行こっぜー！！」

「…どうも。」

各々挨拶をした。

麗奈さんも顔を赤くしながらも、彼らと笑いながら話していた。嬉しそうな横顔が、見える。

…うん、これでこの男どもも、私に飽きてくれるといいなあ。自由になる日も近いか？とか思っているよ、

「おい、」

背後から、国崎に話しかけられた。

「なによ？」

無視する理由も特に無いので答える。

「…あの女、お前の計画とやらに、乗ったのか？」

「うん、一応話したし。」

「…どこにメリットがあるんだよ、あの女に。」

あるんだってば。君に近付けるといっ、ね。

「あの女、じゃなくて、麗奈さん。ちゃんと呼んであげなよ。」

「…俺は別に、仲良くするつもりは無いし。」

「冷たいな。君、麗奈さんに1度、会ってるのに。覚えてないの？」

「…は、俺が？いつ？」

「本人に聞いてみれば？」

そう言うと、私は走って麗奈さんたちの所へ戻った。

麗奈さんがいるんだから、あまり、国崎に近寄ってはいけない。私はあくまでも、彼女を応援する立場だ。

だから。

…ちょっと避けとこう、あいつ。

そんなこんなで、麗奈さんが『オトモダチ』になってから、数日が過ぎた。

麗奈さんも、だいぶイケメンたちに慣れたようで、楽しそうに談笑している。

そして、私も笑いが止まらない。

何故なら。

あれだけうざったく群れていた女子軍が、半数以下に激減していたのだ。

…何でも、麗奈さんは前々から美人で有名だったらしい。

敵わないとみた、中の上クラスの女子は、離脱したか。

アイドルの追っかけのようにキヤーキヤー言ってるヤツらが大半だったみたいだ。

おかげで私などは、以前と同じく、陰の薄い存在と認識された。

あるいは、『麗奈さんと仲良くなるためにイケメンたちに利用され

た女』と勝手に妄想してくれたのかもしれない。

いずれにしろ、愉快なことこの上ない。ここまで上手く転がってくれるとは。

麗奈さんには、大感謝かな。

しかし、問題は、あった。

「…ねえ、那津。明日はどんな服を着たらいいかしら？」

この恋する暴走乙女、高宮麗奈さん本人である。

日が経つにつれ、だんだんとなれなれしくなった彼女は、今では私に引っ付いて、レンアイ関係の話を振ってくるようになった。

正直、もはやあの4人の男前よりも厄介かもしれない。この人

はあ………なんて誤算……。……しかも、彼女。まだ本性を出してないっばいしな。

ま、どうでもいいけど。

私は呆れた顔をして、振りかえった。

「…だから、私は知らないって言ってるじゃん。自分でなんとかしなっただけ。」

単純に、しつこく絡んでくるのがウザイんだけど。君。

「えーっ。曲りなりにも友達なんだから、いいでしょっ!」

「…ほんと、不本意だけど、一応、そういう設定だね。」

「そうよ。だから買い物付き合いなさい!」

…何故『だから』なのか分からんが、強制かい。俺様は国崎だけで十分だつてのに。

「え、嫌「車呼んだから、行くわよ!」」

しかも車で。

……麗奈さんは、見た目だけでなく、本当にお金持ちだと聞いた。確か父親が、某有名会社を経営してるとか、何とか…。

……。ワオ、リアルセ・レ・ブ。

庶民には縁が遠すぎてワケ分かんないや。

「…那津っ!乗って乗って!」

私が呆けていると、目の前に……ベンツじゃない?コレ。が、停まった。しかも運転手付き。

……うわ、これは……違った意味で目立つわ。頼むから車の中で手招きしないでくれ。

私はイキナリ逃げ場を失い、逃げるようにしてピカピカのベンツの中に入った。同時に、車が発進する。

「…ああ、もう。どこ行くんだよ……。」

私は去りゆく景色を横目にげんなりとして、フカフカの座席に座った。

「んーと、私がよく行く服屋に。……那津も少しはオシャレすれば？」

「私、そういうの興味無いし、元が酷いから、着飾ったって無駄。」

「…なんでそんなにネガティブなのよ……。」

麗奈さんは呆れたように苦笑した。

「ネガティブなのは、私のデフォルトですが、何か？」

車はいつの間にも知らぬ風景の中を走っていた。しかし、流石高級車と言うべきか、走っている音も街の喧騒も聞こえない。

故に、沈黙が痛い。

…さつきから麗奈さん、黙ったまんまなんだけど。居心地悪いなー。私も同じく黙ったまま、座席の上で縮こまっていた。

すると

「……………ねえ、那津。」

突然、隣から声がした。

「うは、はあいつ？」

…ぐ、いきなり話しかけるから、変な返事しちゃったじゃん。
何だ、と麗奈さんの方を振り向く。

「…国崎君って、どんな子がタイプなのかな。」

だが、私の方は向かず、ポツリと零す麗奈さん。声色が深刻そのものだ。

私はビツクリして、彼女の顔を覗き込んだ。

「…え？」

「……貴女のおかげで国崎君の傍に接近することができたし、お話もするようになったんだけど…何て言うか、彼の視界に入っていないの。」

「……………」

「……なにが、いけないのかな。服？髪型？スタイル？性格？顔は…さすがに変えれないけど、他の所だったら直すのに。」

彼女は、すごく辛そうな表情で、悩んでいるように見えた。今にも、泣きそうだ。

私は無表情で、女を見つめる。

…恋は盲目、か。

昔の人も、よく言ったもんだな。案外本当のことかもしれない。私には理解できないが、な。

国崎のために悪いところ…つーか、好みで無いところを直す、なんて

そんなの。

「…バカじゃないの。」

「へ？」

「国崎程度の男に、麗奈さんが合わせる必要なんて無い。だいたい

気に入られようとするとか、多分アイツは嫌いだと思うよ。…いい？麗奈さん。貴女は綺麗だよ。国崎の好みはともかくとして、世間一般に見て、美人。だから、もっと自信を持ちなよ。そのまま自然体の自分でアイツを落とすくらいの根性がないと。」

正面を向いたまま、一気に喋りまくる。

人の気持ちなんて、分からないけど、とりあえず私が正しいと思っただことを。

…そもそも国崎ってエスパーだから、どんなに取り繕ってもバレるのがオチだろうし。

それに。…なんか、ここまで純粹に思われている国崎が、憎らしく思えた。

超美女がこんなに悩んでるんだよ、君のことで。

それで恐ろしいことに、私に相談してきてんだよ、君のせいで。

「那津……」

パチツと、瞳を潤ませる麗奈さんと目が合った。そのまま私をじっと見てくる。

む。やはり恋愛シロウトの助言なんて、蛇足だったか？

「あ…別にただ言ってみただけだから…」その通りだわ!!」

…断りを入れようかと思ったら、遮られた。すごい勢いで。

「そうよね！偽りの自分を好いてもらっても、空しいだけよねっ！なんで気付かなかったのかしら！ありがと、那津。元気でてきたわ！！私、国崎君に猛アタックかけて、絶対落としてみせる!!」

うわあ。イキナリ元気になりよった、この人。スイッチ切り替え早え。

「…そう、頑張れ。」

私は若干引き気味に、一気に血色が戻り、拳を突き出している麗奈さんに向かって呟いた。

単純って、トクだな。ある種、うらやましい。

「……ね、那津。」

「…今度は、何スか。」

「私。どうして那津があの人4人に気に入られたか、ずっと不思議だったの。もっと可愛い子もいるのにな。」

…突然、何だ。嫌みか。

「…でも、今ちよつと分かったわ。貴女はこだわらないのよ。ルックスにも、性格にも。だから話してて、疲れないの。」

「……………それ、気にすればよかった？」

初耳だ、そんなの。

「いいえ。そこが貴女の長所よ。誇っていいわ。私も、那津のこと好きになったもの。」

「…あの、百合とかに興味は無「そういう意味じゃない!!」」

車内は、笑い声に包まれた。麗奈さんは爆笑、私は苦笑。

……知らなかったが、私はイケメンとか、美女とかに好かれる性格らしい？…なんじゃ、そりゃ。

ま、とにかく麗奈さんが元気になって良かったと思う。

その後。

車は巨大百貨店に停まり、私は麗奈さんと一緒に買い物をした。

と、言っても買ったのは彼女だけだ。

…自分が気に入ったものを片っぱしから豪快に買いまくる麗奈さんを見て、スゴいと思いましたマル

私にも買ってあげると言われたが、丁重にお断りしておいた。買われても、金を返せる自信がない。

いつも私が買っている服とは、値段のケタが違っただろうから。

…これが庶民と金持ちの差だよ、諸君。

店に着いて正味3時間程過ぎたところで麗奈さんは満足したらしく、車を呼んでくれた。

や、やっと解放される……と私はほっと息をつく。

数分後、行きと同じく、黒塗りのベンツが私たちを出迎えた。
麗奈さんと後部座席に、座る。

荷物を積むのに時間がかかっているらしく、私たちはそのまま少し待った。

…しかし麗奈さん、君、どんだけ買ったんだ……

「…あー楽しかった！ねえ、那津。本当に何も買わなくて良かったの？」

「あいにく、金欠なんで。」

1着買ったなら、生活費すら、吹っ飛ぶからな。

「そ？でも、今日付き合ってくれたお礼に、ハイこれ！」

そう言って、彼女は真四角の箱を取り出した。手のひらに乗るサイズだ。

「…なに、これ。」

「開けてみてよ！」

言われるまま、私は箱を開けた。

「あ……」

中身は、薄いブルーの液体が入った、香水だった。

ガラス瓶に入っていて、高そう。なんか有名なブランドのロゴも入っているような……。

…いつ、買ってたんだろう。

「…え、これ香水？もらえないよ、こんなん。」
「いいのっ！お礼なんだから、受け取りなさい！」

返そうとしたら、ズイツと突っ返され、持たされた。
「たたく、強引な。」

私はしぶしぶソレを自分の手の中に収めた。

「その香水、シトラスミントの香りだって。那津にぴったりと思う
たから、選んでみたの！遠慮なく使ってね！」

…と、言ってもな…香水なんて、初めてだぞ…？

まあ、もらえるなら、もらっておくけどさ。
いつか使うでしょう。

「…うん、ありがと。」

「どういたしまして。でも、いいのよ。こっちがお礼を言いたいく
らいなんだから。」

麗奈さんは不敵に笑った。窓ガラスに自信に満ちた、美しい顔が映
る。

「私、那津の言うとおり、頑張ってみるわ。だから、貴女も応援し
てくれるかしら？」

ずいっと、顔を近づけられ、両手を握られた。

…近い。そして、なんかコワイ。

「と、言われても…恋のキューピッドなんか出来ないけど。」

私はちょっと後ろに下がった。

威圧が。えも言われぬ圧力がかかってますよ、麗奈お嬢様。

「いいの、見守ってくれるだけで。後は自分でなんとかするから。」

ね、お願い。と綺麗にウインクされてしまった。

…う、女の私でも結構クルな、その技。

「……。ま、国崎とはしばらく会わないことにするから。あとは女子を避けながら頑張ってる。」

「そう！良かった！」

最終的に私が承諾するカタチで話がまとまると、麗奈さんは再び綺麗に笑い、窓の外を眺め始めた。

……。私は横に座っている女を無言で見つめた。

行きとは違って、生気に満ちあふれている麗奈さん。

…流石の国崎も、この本気モードの麗奈さんには、コロッと落ちちゃうんじゃないの？

あ、でも、そうなら都合か。

国崎と麗奈さんがくっつけば、私は……

いつか来るかもしれないその想像を、少し先延ばししたいような、寂しい気持ちになったのは、気のせいだろうか。

答えは出なかった。

……まだ。

キキッ！

「さ、着いたわよ。貴女の家、ここでしょう？」

…何故か、私の家にピンポイントで停まった、ベンツ。

「…何で、家、知ってんの？」

「私は社長令嬢だもの。情報入手なんて、たやすいことよ。」

…権力行使の仕方、間違ってないか？

「……まあ、送ってくれて、どうもありがとう。」

「ええ。また明日。」

手を振る麗奈さん＋ベンツを見送り、私は我が家に入った。

ああ、なんかやたら疲れた……

女子相手にここまで振りまわされたのは、いつぶりだろうか……

『また明日。』

そう、明日からも、これは続く。

しかも、当分国崎に近寄らないようにしなければならぬ。神経使うなあ、ホント。

は、勘弁してくれよ。もう。

玄関にたどり着いた私は、そのまま膝から崩れ落ちてしまった。

02 (後書き)

お嬢様 vs 毒舌女。しかし主人公には戦う気はなさらずです……
ホント、どつしどつこの子。

国崎、激怒

カラ、カラン。

炭酸がグラスの中で弾け、泡をだす。

ぎっしり詰まった氷をかき交ぜながら、私はおもむろにグラスを傾け、黒いジュースを飲んだ。

うん、コーラって、たまに飲むと美味しいよね。

「ちよつと、ナツちゃん、聞いてる？」

「…ん？あー、聞いてる聞いてる。」

私はグラスを机に置き、彼らの方に向きかえった。

麗奈さんの猛アタック宣言から、数日が経過した。

彼女は有言実行派らしい。あの日から、誰が見ても分かるくらいの好き好きオーラを発し、国崎に迫っている。

「…ナツちゃん、麗奈さんスゴいね…。」

斎藤は困ったように苦笑する。

「…だね。でも、元々彼女、国崎狙いだっただから。」
「ちえ、まあた聖悟かよー。俺、麗奈ちゃん結構タイプだったのになあ。」

ストローを口に入れたまま、水谷が愚痴る。

「…でも、当の聖悟は、かなりイラついてるみたいですけどね……。」

乾は遠い目をして、アイスコーヒーを飲んでいた。

私と乾、斎藤、水谷は今、

おなじみの大型ファミリーストランでぐだぐだと雑談している。

『国崎君と2人きりになりたい』という、麗奈さんの希望だ。
国崎は、もちろん置いて来た。

「…ま、いいんじゃない？美男美女で、お似合いでしょ。」

私は今度はメロンソーダを飲んだ。
シュワシュワして美味しいな。夏はやっぱり炭酸に限る。

「…うーん、ビジュアル的にはいいけど、性格はどうだろう？」

「あの人、なかなか面白いよ。恋する暴走乙女だから。」

「…ブツ、暴走って…！」

「そんな激しい人なんですか？そうは見えませんが。」

「実はそうなんだよ。特に国崎の話になると、さ。」

笑いあう私と3人の男たち。

テーブル席に3人のイケメン＋私という構図だが、こいつらと付き合い始めて、もう1カ月弱、経つ。突き刺さる視線にも、慣れてきた。

…慣れって、怖いもんだな。

「あ、そうだ。君ら、麗奈さんとどう？ちゃんと仲良くしてる？」
ぱっと顔を上げる。

せっかく集まったことだし、ちょっと本音を聞いてみたくなった。
うまく付き合えているんだろうか。…上手くいってほしいんだが。

だが、

「…うーん、いい子なんだけど、ね。」

「俺は別に普通だけど、なんつーか……なあ？」

「前も言いましたけど、俺は苦手です。」

…なんだなんだ。

3人揃って茶を濁しやがって。

「…うまく、いってない感じ？」

聞かなきゃ良かったかな。

見た限りじゃあ、普通に仲よさそうだったんだが。

「いや、やっぱりナツちゃんというみたいには、いかないかな。」

「…私といるみたいにして？」

「本音では付き合えないかもって、言ってるの。その点、ナツちゃんも貴重だよなー。」

水谷に頭を掴まれ、ぐしゃぐしゃと撫でられる。
…痛いっての。

しかし…ううん、残念だ。

いい人なんだけど、こいつらの評価がコレだと、友達としてやっていくには難しそう。

「…ねえ、斎藤。女の子の方は、どうなってんの？」

私が選んだ子でダメなら、私は君らにまかせるしか、ないではないか。

しかし。

「ああ、アレ？どうも無理そう。」

斎藤はカフェオレを飲みながら、サラリとそう言った。

…What?

「おい、ちょっと。無理ってどういうことだよ。」

「そのままだよ。女のコたちって、俺たちが選ぶと余計な勘違いするでしょ。」

結構色々あたってみたんだけど、君みたいな子は相当レアだから。」

ちっ。それならそうと、さっさと見えよ。やっぱそうだったか。

「…私みたいって…口が悪くて、地味で、男に興味がない？」

「誰も、そこまで言っていないでしょう。自分を卑下するのは止めた方がいいですよ。」

恨めしげに尋ねると、乾にピシヤリと反論される。
そして、私と目を合わせてきて、

「ナツさんは口は悪いけど、可愛い女性ですから。」

ニッコリと胡散臭い笑顔を浮かべて、断言された。

「けつ。可愛い、とか。」

私相手に、リップサービスはムカツクだけだから、ヤメロって。
しかも口は悪いってトコは肯定するのか。わざと言ってやがるな？
コイツ。

「それは、どうもありがとう。」

棒読みでヒラヒラと手を振って見せた。

「褒めましたのに。」

クスクスと笑いを零す彼。……はー、ウザ。

「……とにかく、そういうことなら、麗奈さんに頑張ってもらわない
とね。あの人のおかげで、女子戦力はガタ落ちなんだから。」

アレはかなり助かったから、今後も活用したい手である。

「……へえ。それで、聖悟とくっつけばいいって?」

「そ。だから、ここ数日は彼女に協力して、国崎には近づかないよ
うにしているんじゃないか。」

そう。私は麗奈さんと約束してから、1度も国崎には会わずに過ごしてきた。

約束は、守る方だからな。基本。

「友達が無理なら、本物の彼女になればいいんだと思って、ね。」

私は再度グラスを傾けながら、ぼやいた。

麗奈さん。

自己中心的で悪いが、私のためにも、どうか1つよろしく頼む。頑張ってくれ。

「ふーん。」

興味なさそうだな、斎藤。なら話振るなよ。

「…でも、ナツさん、それはちょっとマズいかもしれませんね。」

「は？何が？」

「多分、今に酷い目にあうぞ。聖悟から。」

突然、彼らが深刻な顔を作った。

……国崎から？酷い目？

「…なんで？」

マジ不明。

「…ナツちゃんって、自分には鈍感なんだね、他人には敏感なのに。」

斎藤が苦笑しながらそう言う。

だから、なにが？

え、もしかして私、知らない内に地雷踏んでる？

私は考え込んだ、が、どう思い返してみても、問題行動は特になさ
…そう。

？全然分かんない。

「……で、でもいい機会だろ？国崎の猫離れには。」

「……は？猫？」

3人の疑問符はキレイに揃った。

「…国崎がこないだ、言ってたんだよ。私は猫みただって。」

人間になりきれていない所が、悲しいが。

「だから、いい加減現実を見て、新しい恋でもしてもらわないとさ。」

フンツと鼻を鳴らした。

…別に親切心からの行動じゃ、ないが、国崎にとっても悪い話じゃ
ないハズ。

これの、どこが悪いっての？

すると、これ見よがしに、男性陣からため息を吐かれた。

「ナツちゃん…現実をみなきやいけないのは、君の方かも……。」

「これは、聖悟も苦勞するはずですね……。」

「そんなこと言う聖悟も聖悟だけだね……」

だから！

さっきから何が言いたいんだよ！何のことだか、さっぱりなんだってば！なんか馬鹿にされてるみたいで、腹立つっ！

うー、と唸っていると、今度は水谷が、まじまじと私を覗きこんできた。

…何だ、水谷。アップで近付いて来んな。

慣れたとはいえ、こいつら全員顔が整い過ぎてる故、急な接近は心臓に悪い。

「…うーん、猫か。でも、言ってるかもなあ。」

「っわ!？」

水谷は目を少し細めたかと思うと、

突然私を後ろから抱き締めた。そして髪を撫でているらしい。

「ボサボサ頭に見えるけど、結構猫っ毛だしさあ。」

なんか抱いてると温かいとか？でもナツちゃん、痩せてるからそれはないか。もう少し太ったら？」

ゴチャゴチャ失礼なことを言う声が、頭上から聞こえる。

…オイ、水谷。私が猫なのは分かったから、離せ。

あと、腰回りを触んな。セクハラだっつの。

「……っだーもう！離ー」

パソコンッ！！！！

すると、突然。

私が催促するのと同時に、なんかもの凄い音が聞こえた。近くで。

…は？今、何が起こった……？

いきなりの出来事に目をパチパチと瞬かせる。目の前を見ると、水谷が気絶していた。

…えっと、原因は……

「…缶コーヒー？」

しかもへこんでいた。スチール缶なのに。

缶はコロコロと足元に転がってきた。

…どうやらコレが、思いつきり水谷の後頭部にぶち当たったみたいだ。

若干、彼の頭が赤くなっている。

…それにしても、すごいコントロールだな。水谷には悪いが、感心するわ。

私は投げた相手を見ようと、視線を後方へスライドさせ

すぐ戻した。

……ヤバイ。直視できない。

何アレ、人間？ターミターじゃないのか？私、まだ殺されたくないんだけどっ！

…いや待て、見間違いかもしれない。つか、そうであってほしい！

冷や汗をかきながら身動きひとつできない私に構わず、そいつは接近した。

そして、私の肩を掴んで強引に顔を向けさせた。…自分の方へと。そこで私が見たのは。

鬼のような形相の、国崎聖悟様。

…やはりさつき、ちらと拝見したお方は本物だったらしい。今まで見たことがないくらい怒ってらっしゃる。瞳が炎で燃えあがってるような気さえ、します。

……。

正直、命の危険を感じた。

私は、責めるように私を睨み続ける男に恐怖する。

「…あ。…えと……国崎……」

うわ、怖すぎてなんかかすれたような声しか出ない。どんだけ怯えてんの、私。

「…宏樹、圭。話は後で聞くから。あと信二が起きたら言っていて、殺してやるって。」

国崎様は、私から一瞬視線をはずすと、2人に向かって恐ろしく低い声を出した。

…まるで地獄の底から響くような。

背筋が、ぞくつとした。

っ！

なんか水谷が死刑宣告されているが、もう、どうでもよし！！今すぐこの犯罪者みたいなオーラを出す男から、逃れたいっ！！

…しかし、天への願いも空しく、

「…那津。」

っい、いやぁ！お呼びがかかったぁ！！

もう、私は俯くしかできない。体もガクブルだ。

そこらのヤクザ者よりはるかに恐怖感を与えてくれる国崎は、一体、何者なんだろう。

つか私、何かしたかつ！？

「……来い。」

腕を引かれて、立たされる。

…何だか分からんが、ここは従うほかあるまい。私は手を引っ張られながら、歩いた。

…引かれながら、斎藤と乾が後ろで「頑張れ」とか「生きて帰って来い」とか言ってるのが聞こえる。

わ、私、ホントに生還できるのかな……？

明日の日の目は見れるのだろうかっ！？

国崎に連れられ、彼の車に押し込まれた。

誘拐犯、リターンズ。

…いや、今度のは、シャレになんないな。ホントに誘拐かもしれない。

無言で車を発進させ、結構なスピードで国道を飛ばす国崎。

当然のごとく顔を見ることはできなかつたが、かなり怒っている雰囲気だ。

私は助手席に縮こまって座り、ずっと自分の手を見つめていた。

ちょっとやそつとのことでは驚かない私だが、今回はマジで危機感を覚える。

この私が、かawaii女子のように震えてることしかできないとか、前代未聞だぞ。

…こいつ、なんでこんなに怒ってるんだろう？

どれだけ経ったのか分からないがとりあえず、車が、止まった。

どこかに着いたらしいが、私は硬直したまま前すら見ることができ

ず動けない。

「降りろ。」

私は横からの彼の声に体をビクツとさせ、震える手で助手席のドアを開けた。

な、なに、ここ。どこだ……？

恐る恐る外に出ると、暗い地下駐車場だった。…見た感じ、マンシヨンの駐車場。

…と、いうことは……

「俺の家、行くぞ。」

ですよねーっ！やっぱ君の家かいっ！

…ヤベエ。監禁されたら……とか。想像したら、体が勝手に震えてきた。

「早く、来い。」

しかし選択肢は無い。またも手を引かれ、歩かされる。

…国崎さん、アナタ、さっきから単語しか言ってますね。それがまた、私の心臓を速めるんですけど。

エレベーターに乗り、ついに国崎の家の前にとどり着いた。5階の、奥から2番目の部屋。黒い扉が私たちを出迎える。

…魔王の城だ……

…ここに来るにはまだレベル足りないんじゃない？出直してきたいな！。

そんなことを考えてると、国崎は無言で鍵を開け、

「っ！？」

私を中に押し込んだ。

…かなりの力だ。玄関ですっ転び、私は鼻をしたたか打ちつけてしまった。

…っぐう。DVか！？めっっちゃ鼻痛い。

「っちよ、国崎！何すんの！！」

怒りからか、ようやく声のボリュームが上がってきた。私は男を振り返り、どなりつける。

「……………何、すんのって？」

国崎は後ろ手にガチャリと鍵をかけてから、こちらに近づいてきた。ゆらりとした動作が、また不気味だ。

…こ、声のトーンがまだ低いよおっ……………！泣くよ？いくら私でも、泣くからね？コレ。

「それは、俺のセリフなんだけど。」

急速に距離を縮める国崎に、私は身の危険を感じ、足を滑らせながらもリビングへ走った。

国崎の部屋は存外に広く感じられたが、今の私に余計な装飾を気にしている暇はない。

あちこちと逃げ惑ったが、男と女の体格差からか、すぐに追い詰められ、そして。

「う、わ!？」

ついに、ソファに押し倒されてしまった。

私の体重で、ソファが若干沈む。その上に国崎が覆いかぶさった。目の前に、彼が迫る。

「……っ!！」

…ボ、ボコられる!？」

私はぎゅっと目を閉じ、体を強張らせて衝撃に耐える姿勢を取った。

……。

しかし、何も起こらない。部屋の中がいきなり静かになったような気がした。

「…?」

私は恐る恐る目を開けてみた。国崎の顔が完全に視界に入る。だが。

「…え?」

思わず、目を丸くする。

彼は、…何故か、すごく苦しそうな顔をしていた。

真つ暗な瞳には、怒りはもちろんだが、悲しみ、憎しみなどその他のものも映しているように見える。

「君……、どうしたの？」

無意識に尋ねてしまう。国崎は明らかに様子がおかしかった。

押し倒されたままなので、互いの距離は異様に近く、吐息が顔にかかるほどだ。

しかし私は、この状況より彼の表情の方が気になった。

「……那津。」

長らく黙っていた国崎が、口を開き、私の名をささやく。

そして、吐きだすように言った。

「お前、やっぱりムカつく。」

「……え、……むぐっ」

言うのが早いか、大きな影が襲いかかり、私は口を塞がれた。

……国崎の、唇で。

「っ、っ、っ！」

感じたことのない感触に、大いに戸惑う。

…何だこれ。何してんの、コイツ。

…い、息ができな……

酸素の供給不足か、だんだん頭がぼんやりしてくる。

「くんっ、む！」

私はヤツを押しつけようと胸板を力いっぱい押すが、ビクともしない。それどころか、いっそう激しく私の唇を奪い、貪る。

もう、わけが分からない。苦しい。

酸素不足だけじゃない、この変な感覚に、私は完全に力が抜けてしまった。

「…っはあ」

やっと、ソレから解放される、と同時に私は室内の空気を思いっきり吸い込んだ。
全力疾走した後のように、息が切れる。どれだけの時間、唇を合わせていたのだろう。

…ん？唇…を、合わ…せて…？

…！！

ボンツと、突如顔が赤く染まった。

い…今、コイツ、私に…キ、キスした、のか？

…うわ、キス、とか自分の口から出るとは思いもよらなんだ！なんかやたら恥ずかしいんですけどっ！

「那津、顔真っ赤。」

私が人生最高に羞恥を感じている時に、国崎は鼻で笑いやがる。

人にムリヤリキスしといて、笑うとか。…テメエ。歯あくいしばね。

「…っはあっ…！！」

掛け声と同時に、私は自由になっている唯一の部位、足でヤツの鳩尾を思い切り蹴った。

「くぐつ!?」

不意をついた攻撃に国崎は身動きできず、腹にクリーンヒットした。よほど痛かったのか、腹を押さえて、悶絶している。

…は。股間じゃないだけ、マシに思え阿呆が。

私はその間に素早くソファから起き上がり、ヤツと距離をとった。

「はっ、おま……このタイミングで蹴るか？普通。」

ソファに寝転んで、苦しそうに息を吐きながら、私を見る国崎。

「じゃ、私は普通じゃないってコトだろ。」

けつと悪態をつく。

私から見たら、君も十分普通じゃないがな。

「……そうだな。頭突きはするわ、腹は蹴りあげるわ……お前みたいな女、他にいるわけねえよ。」

「褒め言葉と受け取っておこう。」

いつの間にか、私は恐怖から脱出していた。国崎も、もういつもの調子に戻っている。

私は腕を組んだまま、国崎を見下した。

「…それで国崎。どうしてそんなに怒ってるわけ？」
「…分かんない？」

分からねえから、聞いてんだろ。君の気持ちはいつも分からない。

「…さあ、分からん。多分、麗奈さんのこととは思っただけど。」

おそらく、彼女のアピールが余程うっとおしかったんだろう。それで私に八つ当たりしてんだと、予想した。

「…それもあるけど…、なに、那津。ホントに分かんないの？」

ヤツはジロリと私を見返した。…何だ、もったいぶりやがって。

「…君がなんか苦しんでるのは分かったけど、その内容は知らん。だから、聞いてるんじゃないか。」

すると、国崎は額に手をあて、はぁーつとため息を吐いた。

…なに、その『ダメだこりゃ』みたいなしぐさは。

「…ここまで鈍感とは、なあ…。」

「んなつ、失礼な！君が意味不明すぎるだけだろ！」

これでも結構『鋭い』って、言われてきてんだけど。
腹立つな。

「…まあ、いい。なら教えてやるよ。」

国崎は、1歩私に近づいた。

けど

「あ、ストップ。動くな。話ならここで聞くから。」

私は手のひらを突き出し、制止を呼び掛けた。

…また、さつきみたいなのされたら、今度こそ私の心臓は破裂する。

じりじりと後退する私を見て、国崎は吹き出した。

「……プツ、そんな警戒すんなよ。」

「するわっ！私、キツ、キス、初めてだったんだぞ！」

うわ。キスとか、口に出すのも恥ずい。また、顔が火照る。

「へえ〜。それは、結構。」

なあにが結構、だ。ニヤニヤしゃがって。

国崎はクスクス笑いながら、ソファに座り、私を手招きする。

「ほら那津、何もしないから、おいで。」

「うさん臭いから、ヤダ。床でいいですー。」

対する私はつーんと顔を背けて、フロアリングに三角座りした。

「…信用ねーな、俺。」

男はまたニヤリと笑って、私の傍に歩み寄る。

体をじつと硬くしてみたものの、ヤツは両腕でいともたやすく私を持ち上げ…結局ソファと一緒に座ることになった。

…っち、この細マッチョ。この身体のどこにそんな筋肉があんだよ。

「…どうせ強制なら、聞くなよ。」

ぶう、と不機嫌にふくれて愚痴った。

「床は冷たいだろーが。俺の優しさだよ。」

どこが。せめてもの抵抗に、人1人分間を空けて座ってやる。

国崎はしばらく苦笑していたが、
やがて真面目な表情を作ると私を正面から見つめた。

「…ね、那津。俺今めっちゃ怒ってるの。」

目が、笑ってない。

「それは、分かったから。…言ってよ。」

国崎は私の方に体ごと向け、ジロリと睨んだ。

「那津にけしかけられたあの女の相手すんの、ウザかった。毎日毎日、よく懲りないよな、アイツ。すげー疲れた。」

「…それは、素直に私のせいだわ。謝る。」

…けしかけたワケじゃないんだが、結果的にはそうなるかな。
どうやらコイツは、麗奈さんがタイプじゃなかったみたいだ。…この、警沢者が。

「…あと、那津が露骨に俺を避け出したのも。

どうせ、俺とあの女をくっつけようとか、思ってたんだろ。俺の意

見も聞かずにさあ……。」

「……………」

凶星。当たり前過ぎててなにも言えねえ。

……だってホントにお似合いだと思ったんだよ。麗奈さんとも約束したことだし。

でも、やっぱ、本人の意向を無視したのがいけなかったか。反省だなー。

「それに」

まだあんのか。

「俺抜きでアイツらとだけ会うとか、納得いかない。」

「……………」

……え、いや、それは私のせいじゃないだろ。……意外とナイーブな男だな。仲間ハズレが嫌、とか。

「え、最後のは関係ある？」

「大アリだし。」

へ。そうですか。

目を伏せていた私はしかし一瞬黙った彼を見上げ、おもむろに手を取った。

「……ごめん。」

国崎の手をそっと包む。

「……………」

「ごめんね、国崎。」

とりあえず誠心誠意をつくして謝る。どんな理由であれ、コイツを傷つけた私が、悪い。

それに、あんな顔されちゃ、いくらなんでも良心が痛んだ。

国崎はしばらくの間、黙って私を見ていたが、やがて肩を落とした。

「……はあ…………… 那津って本当に残酷だよな。」

「!」

言葉と同時に、掴んだ手をそのまま国崎に引かれ、一気に距離が縮まる。

そして、ヤツの胸に倒れこみ、ぎゅうっと抱き締められた。

ちよっ！何もしないと、言ったくせに!!

……とは、言えなかった。

事は私に非があるのだ。これが罰なら、甘んじて受けないと。

「……やけに、大人しいな。どうした？」

言いながら、国崎は私を抱く手に力をこめた。

「……別に……………罰なら、受けようと思って。」

ぼそっと呟くと、国崎は突然バツと身体を離れた。

……ものすごく驚いた顔をしている……？
どうしたというんだ。

「……おいちょっと待て。お前、さっきのキスとか、今抱き締めてるのとか、罰ゲームだと思ってるのか？」

え、違うの？

「は？怒りまかせに嫌がらせしてたんじゃないの？じゃ、なんで？」
「……………」

国崎は、絶句している。

え、何、その地球外生命体を見るような目つきは。
なーんか変なこと言ったか？

「……………もう、いいや。それで。」

しばらく固まっていたが、最終的にヤツはそう言った。…自分自身に言い聞かせているように。

一方、私は、首を傾げるばかりだ。
…えっと？結局、何だったんだろ。

「ちょ、国……………」
「じゃ、これも罰だ。受けるよ。」

リアクションも取れないうちに国崎は、今度は私の首筋に唇を近付け、

吸った。

「！？」

チクツと痛みが走り、思わず体をそらす。

「っ今度は何だよ！！」

私は慌てて自分の首筋を押さえた。国崎が口をつけた所が、熱い。ん、待て。……まさか、これは噂に聞く

「キスマーク、だけど？」

「！？」

再び、私は頬を真っ赤に染めた。またもや、人生初イベント。

……キ、キスマークって！

手鏡を覗いて確認してみると、確かに、鎖骨あたりに真っ赤な跡が見えた。

「……っ、ちょ、これ困るんだけど。」

……めっちゃ目立つ。元々肌が白いものだから、くっきりと赤く跡がついている。

「だから罰だつての。隠すなよ？隠したら、またつけるから。」

何プレイだ。君の趣味に私を巻き込むなよ。

「……この、ドS。変態。」

「もっかいキスでもしてみるか？」
「つい、いいです！遠慮します！」

私は慌てて否定した。

…この野郎、私が男に免疫ないからって、全部そっち方面に話をもつていくんじゃないか。

今日の、他の女子が見たら絶叫するぞ。……私もだが。違うイミで。

「とにかく、あの女とは絶交して来いよ。」

車の中、国崎は、私が帰る段になってそう言った。

…やー、それはムリだろ。普通に。

「……そう簡単に言うなよ。あ、そついや、君ら、今日どつやって別れたんだ？」

「ああ、俺が振った。」

え！？

「ええっ！？告られて、しかも振ったんかい！！！」

思ったより話が進んでるじゃないか！

あまりにもびっくりして、シートベルトにブザマに引っかかった私。

…しかし、国崎は何でもなしのように話した。

「告白はされてないけど、それに近いこと言われたから、拒否った。別にいちいち言うことでもねえだろ。」

…いや、そうだけど。うわゝあんな美人振るなんてもつたいない。やっぱり、こいつの趣味が違ったんだな。麗奈さんも可哀想に……。

「…一応、理由聞いていい？」

今後の参考に。あと、迫り来る女子たちの質問攻め対策のためにも。国崎はちらつと私を見て、また前を向いた。

「……無理だから。」

…完全な拒否だな。

「…いや、もうちょい具体的にお願いします。」

さすがにそれじゃ、彼女が不憫すぎる。

「…俺、がつついてくる女、嫌い。どんだけ美人でも引くわ。」

あ、アタックが裏目に出たか！？

「…じゃ、じゃあどんなコがタイプ？」

「…好きになったヤツ。」

……これまた、なんて抽象的な。こりゃ、ジャンルは絞り辛いな。私がかめつつらをしていると、国崎は一瞬ためてから、また口を

開いた。

「てか、…今好きなヤツ、いるし。」

「!?!」

……え、マジか！初耳だ。

……ってことは麗奈さん、最初から不戦敗だったのか……
タイミングが悪かったなあ。

「え、そうなんだ。じゃ、その子と付き合いばいいじゃん。」

「それが、中々落ちないんだよ。しかもすげえ鈍感だし。」

へえー。国崎に落ちない女とかいるんだ。

鈍感、ね。イメージ的にはド天然で脳内お花畑な不思議ちゃんかな。

私とは全く正反対だな。ふふ。

「ふーん、まあ頑張つて。」

「うん、頑張るよ。」

国崎は何がおかしいのか、笑いながら私を見送った。

…あ、なんか感じ悪いぞ、君。

「……………うーん。」

私は家に帰り、風呂に入ったあと座イスの上であぐらをかいていた。

…落ち着け、那津っ
あんなん、あいつにとってはただの衝動っつーか、遊びっつーか……
とにかく！そんな感じのモノだったんだっ！！
だから犬に噛まれたと思ってさっさと忘れろ！
消去だっ！deleteだっ！

ぐあーとか、うあーとか、よく分からない声を出して、悶えまくる
私。…キモイ？分かってるよ、んなこと。

……ああ、こついうとき、恋愛偏差値が低いと困る。
経験をそこそこ積んだ女性なら何でもないような感じなんだろうが、
いかんせん、私は恋愛の『恋』も『愛』も知らない女。
唇の皮膚接触ごときで、こんな始末だ。

「はあ……………」

私は思わず深いため息をついた。

抱きつかれるのは慣れ（？）だが、こんなことまでされるとは。
避けた結果がこれじゃあ、悪化してるじゃないか。

どうすりゃ、いいんだ。

国崎 聖悟。

……厄介だよ、君。私が今まで出会った男の中で、1番。

04 (後書き)

国崎も苦勞するねえって話です。次回も長くなるかも……

なにがなんだか。

「那津う〜っ!!」

私がいっつものように大学の門をまたぐと、いきなり正面から抱きつかれた。

…っと、危ない。倒れるところだった。

体のバランスが崩れ、たたらを踏んだが、何とかふんばり、転ぶことは無かった。そして、飛びついてきた本人、高宮麗奈を引きはがしにかかる。

「…分かった。話は聞くから、離れる。あと、目立つからこんな所で泣かないで。」

…そう、彼女は眼を真っ赤に腫らして号泣していた。

悪いがこんなくしゃぐしゃな顔じゃ、美人もカタなし、だぞ。校門前で泣かれても、私が困る。

すでに好奇の視線が集まる中、私は彼女を連れ出した。

私は麗奈さんをなだめつつ、人気のない所まで移動した。

「……グス……」
「……………」

麗奈さんはまだ泣きじゃくっている。

目の腫れ方からして、昨晚からずっと泣いていたのだろう。

…なんか、可哀想だ。

しばらくして、落ち着いてきたのか、麗奈さんは私に話し始めた。

「…那津……私、振られちゃった……。」

本当に、本当に小さな声で、ポツリと言った。

…まるで、そのことが現実であったと、自分自身で確認しているように。

「昨日……那津があの人を連れ立って行ってくれて、国崎君と2人きりになれたから、デートの約束しようと頑張ってみたの……っでも……ダメだった……っ！」

さらに透明な筋が彼女の頬を伝う。握っている拳も、かすかに震えている。

「…もう近付くなって……。私がウザいって……拒否、されちゃった……。」
「……………」
「…そう、か……………」

私はただ、相槌をうった。こんな時、何もかける言葉が見当たらない

い。
我ながら、薄情な女だな。

声をかけ辛かったが、私は少々の沈黙の末に口を開いた。

「…ゴメン。私の助言のせい……か？」

罪悪感が少し、募る。結果的に、私の言った言葉のせいだったら、私が、悪いのだから。

しかし、麗奈さんは首を横に振った。

「……いいえ、彼が私のことを好きでなかっただけよ。…仕方ないって分かってるけど……っすごく、つらいっ……！」

またも泣きじゃくる女を前に、私は少し哀愁を感じる。
そして、思う。

ああ、この人は、本当に国崎のことが好きなんだな。……多分、
今でも。
彼を想って、こんなに泣けるんだから。

……やっぱ、主人公交代した方がよくない？この人なら、素でお姫様
ができるって。

私は遠い目をしながらそんな馬鹿なことを考える。そして、再度麗
奈さんに視線を戻した。

でも、このままじゃいけない。こんなんで落ちぶれてるのは、
麗奈さんらしくない。

「……で、どうするの。」

「…どう、するって…？」

私が目線を合わせると、麗奈さんはきよとした表情を見せた。

「決まってんじゃん。君は選択しないといけないんだよ。国崎を諦めて、別の恋を捜すか、諦めずにヤツを想い続けるか。」

「…え……」

「メソメソ泣いてたって、何も変わらないでしょ。今しないといけないのは、これからについて考えること。」

私は麗奈さんの目をまっすぐ見て、言った。

失敗したって成功したって、いつだって人は、次に進めていかなければならない。

my持論だ。私はいつもこの考え方である。

…ネガティブなんだか、ポジティブなんだかよく分からないが。

「…え、でも…私は…」「昨日、ひと晩泣いたんだろ？」

だったら、そろそろ切り替えないと。いつまでも立ち止まってちゃ、チャンスは掴めないから。」

うるたえる彼女を遮り、強い口調で諭す。

ふむ。

私もおせっかいになったものだ。普段はこんな色恋沙汰、一瞬で切り捨ててやるのにな。一緒にいると情が湧くってヤツか。それとも、なんだかんだで私は彼女を応援したいのかな。

「…まだ、好きなんだろ、国崎のこと。」

私がボソリと呟くと、彼女はビクツと体を震わせ、赤面した。凶星のようだ。

「私は国崎なんて忘れることをオススメするが、君は忘れることなんて出来なさそうだな。…ま、決めるのは麗奈さん自身だから、自分で決めな。」

「……………」

麗奈さんは、目を見開いて、私を見る。戸惑いの表情だ。

…情報量が多すぎて、処理出来ないか。ま、じっくり考えてくれ。

私は立ち上がり、その場を後にしようとした、が、言い忘れたことがあったのに気づき、彼女を振り返った。

「……………あ、備考までに言っとくと、国崎には好きな人がいるらしい。」

私がそう付け足すと、

「……………な、なんで言ってくれなかったのっ!?!誰よ!」

麗奈さんが猛進してきて、掴みかかれた。

コラ、揺らすな。

「……………知らないって。私も昨日聞いたばっかだし。」

胸倉を掴んできた手を、そっと取り外す。

……………この女、国崎のこととなると、ホント見境ねえな。

「…コレを聞いてもまだ諦めらんないなら、頑張れ。一応、一途に想い続けて成功した例もあるっちゃあるらしいし。」

……漫画とか映画なら、だけどな。

コホン、と咳払いをひとつして、そうシメた。
そろそろ始業時間だ。行かないと。

「 那津っ！」

歩き出そうとしたら後ろから叫ばれたので、振り返ると、

「ありがとうっ！私、じっくり考えてみるわ！」

と、麗奈さんが私に向かって笑顔を見せた。

うん。元気が出たようだなにより。

その切り替えの速さが、麗奈さんのいいところなんだろう。

私は手をヒラヒラと振り、法学部棟に入った。

「…あれ、ナツさん。今日ツインテールなんですな。」

授業後、廊下を歩いていると、乾に出くわした。

…偶然、じゃねえな。こいつとは学部が違つし。また待ち伏せしてやがったか。

「…ああ、うん。ま、たまにはね。」

はあ、と息をつき、私は歩きながら答える。

……まさか、キスマーク隠しとは言えまい。

「でも、似合いますよ。その髪型も。」

「そ。ありがと。」

私はバレないように、わざとそっけなくそう返す。

そこで乾は一瞬沈黙したが、やがて意を決したように口を開いた。

「あの…ナツさん、聖悟に何かされましたか？」

「！」

私は意表を突かれて、思わず足を止めてしまった。

…わ、ヤバい。こんなん、動揺しているのがバレバレじゃないか。

案の定、乾はそれを見逃さず私の顔をじっと覗きこんできた。

「………されたんですね。ナツさん、顔赤いですよ。」

え。また赤いつ！？ちょっと私の顔面どうなってんだよ、全く。

「…ああ、ま、された………かな。」

頬で顔を隠しながら、私はゴニョゴニョと言い淀んだ。…ここまできたら、認めざるを得ないし。

「聖悟があそこまで怒るのは稀ですよ。信二もあの後、宣言通りボコボコにされてましたから。」

うわ、ここにも被害者が。…ご愁傷さま。

「理不尽だよー。国崎も。私にだって、怒ってんなら直接殴ってくれた方がまだマシだったのに。」

「男は女性を殴れませんよ。…それで、何されたんですか。」

「ん。…でも、国崎にどうせ聞いてんでしょ?」

「いや、聖悟も何も言いません。」

そうなんだ。

「……じゃ、私も秘密。」

その後も、乾に付きまとわれ、「えー。」「だの

「教えてくださいよ。」「だの言われたが、すべて受け流した。

……言えるか、ボケ。んなことしたら、顔から火がでるわ。

「ナツちゃんっ！こっち、こっち！」

「信二ー。もっと声のボリューム下げなよ。」

「…那津。何で圭と一緒にわけ?」

予想通りというか、なんとというか。ちょうど出口付近に友人×3が待ち構えていましたよ、ハイ。

……君らも暇だな。バイトとか、サークルとかないんかい。

ま、今日はちよいと用があるからいいけどね。

「……あー、君たち。話があるんだけど、ちょっと移動しようか。」

いつも通り目立っている彼らにそう言う。やはり彼らのファンは、今日もぐるりと3人を囲んでいた。

しかも、今回は麗奈さんというディフェンダーもいないからさらに、
だな。

……やはり、彼女。亡くすには惜しい人材だなあ。

「いいよー。じゃ、俺と信二のウチ行こ！」

私の発言に、ぱつと顔を上げた斎藤がそう提案した。

「へえ。2人一緒に住んでるんだ。」

「うん。圭と聖悟は1人だけど、ルームシェアした方が家賃安く済むし。」

……成る程ねえ。

特に断る理由もない私は頷き、そのまま女子たちを蹴散らしながら、駐車場に走った。

「俺、バイクで来たから。」

水谷はそう言い、

「圭と俺は圭の車で行くね。」

斎藤もそう言ったので、

「ホラ、早く乗れ。」

必然的に私は国崎の車に乗ることに。

……なんか、昨日のこともあって、ちょっと気まずい。私は無言で、黒い車の助手席に座った。

「……隠すなって、言ったのに。」

車内、開口1番でそう言われ、ツインテールの髪を持ち上げられる。

「……これくらい、勘弁しろ。あの3人に茶化されるのも、嫌だし。」

私はさっきの乾とのやりとりを思い出し、不機嫌にそう返した。そして、ピシヤリとヤツの手を振り払う。国崎は、フツと笑みをこぼした。

「あつそ。ま、珍しいモンが見れたからよしとするか。」

…上から目線ヤメロ。

私はジロリとキーを入れる男を睨み返した。

「……へえ、君、ツインテール萌えとか？意外に隠れオタクだね。」
「違え。」

くすくすと笑いながら、国崎は左手で私の頭をくしゃっと撫でつけた。

そのまま隣の男は昨日とは別人のように、機嫌よさそうに運転を続ける。私はその横顔を見て、ホッと胸をなでおろした。

よかった。とりあえず、普通に戻ってる。やっぱり昨日のこいつはどっかおかしかったんだな。一安心だ。

人知れず、顔をゆるませた私。

…つて……おつと、ダメだ。

私はハッと我に返った。なごんでる場合じゃない。

麗奈さんがあんなに傷ついてるってのに、私のがんきにコイツと会話してるとか。

こじは、ひと言物申しとかないな。

「…オイ、女の敵。」

思い立った私は、ビシッと人指し指を国崎に突き付けた。

「……急に、何。」

国崎は眉をひそめたが、私は構わず続ける。

「……麗奈さん、超泣いてたよ。あんな美人泣かすなんて、最低だよ、君。デート1回くらい、してやったらよかったのに。」

「……何かと思えば、その話か。仕方ないだろ。俺、あの人に興味ないし。」

「でもチャンスくらいは与えてやれって!」

一発で切り捨てたら可哀想だろ!

私が熱弁をふるうと、国崎は冷めた目でこちらを見た。

「お前な……俺がいちいち女の相手をしてたら、軽く2ヶ月は予定が埋まるぞ。」

「え、嘘。自分でそんなこと言っちゃうんだ、国崎は。」

「事実だ。それと、この話はもう終わり。」

そう言ったきり、国崎は何も言わずに運転に専念してしまふ。

うーん。モテる男は辛い、ってか?

こんな、何もしなくても女子が寄ってくるようなヤツ、どうやった
らオトせるんだろう???

最早見慣れたマンションの駐車場に車を止め、降りて歩く。すると、国崎は何の脈絡もなく質問してきた。

「……じゃあさ、逆に那津だったらどうすんだよ。好きでもない男に言い寄られた時は。」

私は振り返って隣を歩く男を見る。

「……さっきの話は、もう終わりじゃなかったの？」

「や、ちよっと気になったから。」

……なんとも自分勝手な。流石、国崎。

しかし、先を促すような鋭い視線を感じたので、私は答えてやった。

「……うーん、そういう奇特な男もいるにはいたけどね、

デートしてやったよ、1日。」

「はあ!?!」

いきなり、国崎は柄にもなく大声をあげる。…声、響いてるけど。

「うるさ。何だよ。」

「……いや、マジで?」

「マジで。」

なんだよ。流石にデートの1回や2回はしたことあるっての。どうしてそんなに驚いてんのさ。

ヤツはしばらく何やら考えていたようだったが、やがて視線だけ私

に向けて尋ねた。

「…何で？」

何でって。

「誘われたから。」

…に、決まってるじゃん。何言ってるの。

「……………」

「…それに、1日付き合ってたやって本性バラせば、大抵の男は逃げてくから。そっちの方が手つとり早いんだよ。国崎もあるでしょ。

紳士キヤラに騙されてた子に、『想像と違った！』って言われた経験。」

「……………ああ、あるな。確かに。」

いくつか覚えがあるのか、国崎は頷いた。

「ま、そんな恋愛的なイミで私に近づくヤツなんてそうはいないけどね。君と違って、人気者じゃありませんから。」

私は腕を組んで自嘲気味に笑った。

……………やっぱりこう考えると、イケメンよりは普通の顔の人の方が楽な人生を送れるのかな、うん。ちょっと国崎が可哀想に思えた。

「…ま、要するにだな、私が言いたいのは、一遍麗奈さんともデートしてから……………」

「じゃ、頼んだらしてくれるワケ？」

は？

「何を？」

「だから、デート。」

…さらに、は？なんですけど。

「…誰が、誰と？」

「俺が、那津と。」

瞬間、しんっと辺りが静まり返った。

そのまま数秒が経過。

私は一瞬の思考の末、国崎に向かって、言った。

「無理。」

きつぱりと。

その返事に、国崎はガクツと肩を落とした。

「…おい、デートくらいなら誰でもいいんじゃないかねえのかよ。」

「別にいいけど、君はダメ。2度と言うなよ、そんな恐ろしいこと。」

「恐ろしいって……。」

…本当のことだろ。

想像してみる、私が君とでーと、なんて。意味不明過ぎて話のネタにもなりやしねえ。

「そんな暇があるなら、他の女のコたちと遊びなさい。私を優先してたら、彼女なんかできないよ？」

「はあ……。」

国崎は呆れたようにため息をつき、キツと私を正面から睨みつけた。

「あのなあ、那津。俺は、女とつかえひつかえ遊ぶ趣味はないし、そんなサービス精神があるワケでもないの。」

「うん、それは分かってる。大変だよなー、顔がいいと。」

あ、ゴメン。口調がまるで他人事だ。

「…俺はお前と遊びたい。いいだろ？1日くらい。」

は？いやだから無理ですってば。何故にそんな食いつく？

「だーかーらー、嫌だって。行くんなら他の…」

「っだー！そのループはやめろ！」

俺は那津と行きたいって言うてんだよ！遠慮なく誘われとけ！」

わーまた俺様ですか。つか、なんでそんな必死になつてんだよ。

どうでもいいけど、最近、レアな国崎をよく見るな。

後ろを歩く国崎の前で立ち止まって、私は軽く目をつむり、また腕を組んだ。

「…ったく。私みたいな奴誘って何が楽しいんだよ。こんな、超イ

ンドア派に爽やかお出かけは合わないだろ。」

「いや、爽やかかって…、なんだその勝手なイメージ。どうしてそんなに卑屈なんだよ。」

negativeは私の代名詞だって言ってるんだろ。ボケが。

「ハハ、君は自信に満ちあふれてるからねえ、私とは違うわー。ごめんね、陰気で。」

私は軽く受け流し、知らぬ間に着いた斎藤たちの部屋むすぶのインターホンに手をかけた、が。

「待った、流すな。返事聞くまで入れさせねえ。」

国崎の大きな手に遮られた。

…っち、騙されなかったか。つか、いい加減うぜえ。

私はうっとおしい国崎の手を振り払った。

「あーもう、だから返事はNO！さっきも言ったじゃん。」

「。。。何でそんなに嫌がるんだよ…………。」

彼は苛立ったようにガシガシと頭を掻く。

「そりゃ目立ったりとか、女子の目の敵にされたりとか、逆ナンとか。」

「そんなん、今更だろ。」

「プライベートとなると別だろ、被害が。」

「…………。」

そう、ふんぞり返りながら放った台詞を聞くと、国崎はうつむいた。

「…もういいでしょ？じゃ、入ろう？」

何も言わなくなった彼を不思議に思いながら、私はまたドアノブに手をかける。

だが、諦めないのがこの男だった。

「…じゃあ、実力行使だ。」

「え？」

トン。

国崎がそう言うなり、私の体は反転し、後ろの壁に押しつけられる。

「つちよ、何」

パツと顔を上げると、ヤツのバカみたいに綺麗な顔……、のアップ。顔同士が極端に、近い。

「…今週の日曜、付き合え。」

そして、国崎は低く甘い声で私にささやいた。

…近い。近いって。離れる。

「……嫌だ。」

恐怖はひしひしと感じる。

だが、私は勇気を持って目は逸らさず、ぼそりと拒絶の言葉を吐いた。

すると、国崎は

「じゃ、今からキスされると、どっちがヤダ？」

…とんでもねえことをぬかしやがった。笑顔で。

瞬間、強張る私の頬と表情。

！だ、だからそういう2択やめようよ！私には刺激が強すぎるって！…

「ど、どっちも嫌」どっちが、嫌だ？」

ひっ！この男、口は笑ってるのに、目だけ笑ってない！危険！

「……………つわ、分かった！じゃあ、1日遊ぼう！」

長らく見つめあった末、私は結局、そう言ってしまった。

……………否、言わされた、かな。このアホに。

「忘れんなよ。」

悪魔（国崎）はニヤリと満足そうに笑うと、ようやく私から体を離す。

私はぐったりと力なく頷き、やっと家のインターホンを押した。

こ、この男の相手、疲れる……………やたらセクハラすんの、やめてくれないかな……………

…いや、別にしてもいいけどね。私以外には。

「どした？遅かったじゃん。」

水谷が、ドアを開けると同時にそう言い放つ。

「…いや、何でもない。」

「那津がグズツた。」

私と国崎は同時に答え、私は反射的にヤツの背中に平手打ちを1発かましといた。

「っ！」

「じゃ、おじやまします。」

痛がる国崎は無視。そして悠々と中に入る。

斎藤と水谷の部屋は、国崎の部屋と構造は一緒らしい。向きは違ったが、リビングなどの配置や部屋の広さは同じだった。

「…前も思ったけど君らの部屋、広くていいね。確かに1人で住むには広すぎるかも。」

うらやましい。家賃いくらなんだろうか、ここ。

「でしょ？聖悟たちもルームシェアすりゃいいのにさ。」

斎藤がキッチンに立ってお茶の用意をしながら答えた。

「ま、あれだよ。聖悟は女の子を連れ込み……」

水谷も椅子に寄りかかって口を挟む、がセリフは、突如横から飛んできた蹴りに中断させられた。

…相当のスピード、そしてパワーだ。痛ぞ。

「あ、わり。足が滑ったわ。」

国崎は無表情のまま足を上げている。悪びれる様子は、ゼロだ。

「…つぐほつ、テメエ……ッ足なんかどうやったら滑るんだよ！」

「さあ？信二がいらぬこと言うからだろ？」

彼は足を下げ、そのままソファに腰を下ろした。……私も手を引っ張られたので、隣に座る。

「……で、ナツちゃん。話って、何？」

斎藤は全員分お茶を入れて、配りながら本題に入るように促す。私はふう、と息をついて話始めた。

「…高宮 麗奈さんが、昨日国崎に非道いことされた。」

…言つと同時に男3人は茶を噴出した。

わあ、漫画みたい。

3人は苦しそうにせき込みながら、国崎に詰め寄る。

「つげほっ、マジか！聖悟!？」

「は!?!なに聖悟、ヤッ……」「違う。誤解を招く言い方すんな、那津。

ただ振つただけだったの。」

は、んなモン知ってるよ。わざと言ってみたんだよ。さっきの仕返しに。

「へえ。……結構早かったですね。」

乾はティッシュで机を拭きながら冷静にそう呟いた。

「ん？乾、予想してた？」

「まあ、聖悟は全く興味なさそうでしたし。時間の問題かと思っただけです。」

成る程ね。客観的に見てもそんな感じだったか。

「で、それが何？」

「…いや、このまま一緒にいても気まずいから、彼女とは縁を切れと国崎が言っただよ。」

「…俺のせいじゃないだろ。」

いや、君のせいだろ、100%。

私は国崎をジロリと一瞥すると、他の3人に目を向けた。

「なんか君ら3人の反応見ても微妙だし、このまま麗奈さんと友人続けていくのは苦しいんじゃないかと思ってね。やっぱ、彼女と一緒にいるの、ヤダ？」

斎藤、乾、水谷は互いに顔を見合わせた。

「……そーだね。やっぱ俺たちとナツちゃん、5人の方が気楽でいいな。」

やっぱ気い使ってたのか。

「高宮さんには申し訳ありませんが、俺もそっちの方がいいです。」

ああ、君は女嫌いだったけ？

「麗奈ちゃんはどうしても女子として見ちゃうからなー。」

私も女子なんだがな。そういう結論に至るか。

結果、

この件は可決、ですね。

はあ……彼女とは交渉人ばりの対決を繰り広げにゃならんかも……

私はソファの上でがっくりとうなだれた。

「っはー。やっぱこの作戦、よくなかったのかな。」

麗奈さんのおかげで私は助かったけどなあ…人間の気持ちって、難しいモンだな。

「つか、その作戦自体潰れると思ってたけどね、俺は。」

「…何でさ。」

くるりと斎藤の方を向く。

「だって、可愛くて事情の分かる女の子なんて、そういないから。ナツちゃんが諦めるのがオチかな、と。」

「…オイ、まさかそれで女の口探し、放棄してたんじゃないだろうな。」

ケロツとぬかしやがって。

「…だから、彼女は貴重なんでしょうが。国崎が非道いことするせいで、もう終わっちゃうけどね。あー、なくすの、ホントもつたいたくないなあ。」

「……や、お前も十分酷いぞ。人扱いしてねえわけだし。」

うるさいな。私は、最初からそんな人間だったの。しかも君に意見は求めてないよ、国崎。

ぶう、とぶて腐れたままソファの背もたれに背中を倒す。

すると、ふと、茶をすすっていた水谷が口を開いた。

「そっぴや、聞いてなかったんだけど、麗奈ちゃんとナツちゃんってどっやって知り合ったの?」

何気なく言われたひとこと。だが私はピシッと一瞬動きを止めてしまふ。

……なんつて厄介なこと聞いてくるんだ、コイツ。国崎がこの場に
いる今、言えるワケ、ねーだろ。

「あ、俺も知りたいです。違う学部だし、先輩ですから……接点な
さそつですけど。」

「どつやつて、捕まえたの?」

「答えるよ。」

さらに追い打ちをかけるように詰め寄って来るヤツら。

……うっ、しくった。こないだのファミレスで説明しときゃよかった。

……国崎のいない内に。

「……あー、えつと、その……」

……どうしよう。どう言えばいい?

まさか国崎を売った、なんて言えるわけがない。でも、今更ウソつ
いてもツケが回ってくるだけだし。

脳みそをフル回転させる。背中には油汗でびっしょりだ。

「……なに、言えないワケ?」

私が黙って俯いていると、国崎が眉間にしわを寄せて覗きこんで
きた。

……このくそボケ国崎が。人の気も知らないで。お前さえいなけりゃ

言っても構わん内容なんだよ。

恨めしそうに彼を見上げるが、今、コイツ抜きで話をしたら、国崎のヤツ、今度はキレて何されるか分からない。仲間はずれは、嫌らしいからな。……子供か、この男。

「……ね、国崎。言っても怒らない？」

結局、最終手段、『事前にお願ひ』

……こんなキモい手段取らされるとか、マジで屈辱だ。でもまあ、その後のこと考えるとこれが最良、か……

「……………内容による。」

私のキモイお願いに対し、国崎は仏頂面を作った。

……ちつ。1番困る返答じゃん。なんだかんだで、頭いいからな、コイツ。

「……怒らないって約束してくれたら、話す。」

なら、私はこうだ。もう一方的に怒られるのは勘弁願いたい。

一進一退。じつとお互いを睨みつける私と国崎。

と、

「……なんとなく、話は見えるけどさ、聖悟、ナツちゃんもこう言ってるから、約束してあげなよ。」

見かねたのか、横から斎藤が割り込んだ。

おお！斎藤、ナイス助け舟。私も便乗するようになり、頭を激しくタテに振る。

「……………ちっ、分かったよ。」

ようやく、国崎はヤレヤレって感じで承諾した。そして、私に早く話すよう促す。

… ホントムカつくな、お前。

常にかから言うのは癖か？なんでこんな見下されないといけないんだ？

切れそうになるのを我慢して、私はとりあえず事の顛末を話すことにした。

「……………で、彼女は交換条件として、私を守ってくれることになりました。おしまい。」

数分後、麗奈さんとの出会いから取引内容までを話終えた。一応、すべて真実を。

…………… 4人の反応を見るのが怖い。特に、国崎。

しかし沈黙に耐えきれなくなった私は、4人に問いかけた。

「…え、えっと、どうでしょう？みなさん。」

何でもいいから、リアクションしてくれ。無言は痛い。必死の顔で懇願すると、男たちはボソボソと口を開き始めた。

「えっと、その……」

「なんとというか……」

え、なにその齒切れの悪さ。

男たちの反応を怪訝に思っている。

「……那津……」

「ふああっい!?!」

いきなり隣からひっくい声が発せられた。心臓がどくつと鳴り、方が跳ね上がる。

く、国崎っ? ナニその声! また怒ってんの!?

私は恐る恐る隣の男の様子をうかがった、が、

「……え?」

ヤツの方を向いた途端、思わず、間の抜けた変な声を出してしまった。

彼の表情は……なんとというか、暗、かった。……がっくりとうなだれていて、よくは見えないが。

しかも、めっちゃ凹んでるっばい? 何故?

「……え、ちょ、何でそんな凹んでんの? なんか私、変なこと言った

「？」

予想外の反応に、私はうろたえた。…あの国崎が肩落としてるとか、普通ありえんぞ。

これは、余程ショックなことを言ってしまったんだろう、私が。

……

……んと、どの辺？ゴメン、全然分かんないんだけど。

「……あー、いややっぱ、なんでもねえ。つか、そつとしいてくれ今は。」

「??？」

国崎はそのまま気だるそうにソファに寝転がってしまった。

「……えっと、国崎、本当に大丈夫？」

「あー、ナツちゃん。今は放つといてあげて。聖悟なら大丈夫だから。」

腰を上げて彼の方に近づくと、斎藤に制止された。

……だから、一体なんだってんだ。いや放つといてほしいなら、別ににも言わないけどさ。

…なんか納得いかないな。

まあ、とりあえずヤツは放置しておくことにした。
お茶づけの菓子を食いながら、私たちは4人で話を続ける。

「それでさ、麗奈ちゃんがなくなった後はどうすんのー？」

水谷がポテチをパリパリと口に運びながら、聞いて来た。

「ん、ああ、それなんだけど、君たち大学内では話しかけ
「却下。」

…最後まで言っていないのに。つか、君ら息合いですぎ。

ぶう、とむくれていると、乾が何気なく私の方を向き、提案をして
きた。

「別に、俺たちでナツさんを守ってあげれば済む話じゃないですか
？」

…はー？んなクサイ言葉、素面で言つなよな、乾。
なに、王子様とか、騎士さまとか？……アホらし。

「いや、遠慮します。むしろ近づくな。危険だから。」

私は全力で拒否って、プイと顔をそむけた。

「もう。大人しく守られてりゃいいじゃんか。そのポジションって普通、女の子のアコガレじゃないの?」

私の反応に、水谷も不服そうに口を尖らす。

私は普通じゃないらしいからな。残念ながら。

「…いいんだって。君らは女子の怖さ知らないでしょ。守られる方が苦痛なのよ、こっちとしては。」

そうきつぱりと言い終えると、男子全員に、盛大にため息をつかれた。

「……………はあ、ホント、ナツちゃんって……………」

「頑固。」

「意地っ張り。」

「腹黒。」

うるせえ。

「あー、ハイハイ。何とでも言え。…じゃあ、話はそんだけだから私、帰るね。」

寒い笑顔を貼りつけながら適当にあしらった後、足に力を入れて立ちあがるうたとすると。

「あ、ちょっと待ってよ。夕飯食べていかない?」

斎藤に腕を掴まれた。

……夕飯? もうそんな時間?

「鍋、しようと思ってんだけど。みんなで。」

「材料はもう買ってあるからさ。」

「ビールもありますよ。」

次々に出てくる好条件に、帰るつもりだった私は思わず頷いてしまった。

……今月、ピンチだったからな。食費が浮くのは助かるし。うん。

なんて、誰に対しての言い訳か知らないが自分に言い聞かせ、私は再びストンと席に着いた。

その後、4人（国崎も復活した）と共に、寄せ鍋のようなものを食べた。

久しぶりに鍋を食べ、ビールを飲み、私も機嫌をよくしていた。男衆も美味しそうに杯をかきこみ、笑う。

「……はあ、食べたね。」

斎藤は後片付けの後、ゴロンとソファに寝転がった。他の3人も、その辺でゴロゴロしている。

「しゅちそうさま。」

私も一応、皿洗いなどを手伝い、ゆつたりとしていた。そして、なんかのバラエティ番組を横目で見ながら、壁にかかっている時計をちらっと見る。

10時ちょっと過ぎ。そろそろ、頃合いだろう。

「……じゃ、私今度こそ帰るわ。」

そう言っただち上がると、体がフラツとよろめいた。

…少し、飲みすぎたか。まあ、でも帰れないほどじゃない。電車に乗ってしまえば、何とかなるだろう。

そのまま鞆を引つ掴み、私はヨロヨロと玄関の方に向かう。

「あー、もう、ナツちゃんも泊まればあ？」

危なっかしいなあ、とリビングから水谷の声がした。

「…やめとく。まだ電車あるから大丈夫だし。」

…泊まるて。そんな選択肢は私には無いんだけど。

私はそう答えると、

「じゃーね。」

「うん。」

「またね。」

そんな会話を最後にして、扉を開いた。

外は、もう真っ暗だった。一步踏み出すと、冷たくひんやりとした夜風が私を吹き付け、火照った肌を冷やす。

気持ちいい。

しばらくボーッと突っ立っていると、ギイツと再度ドアが開き、出てきた人に腕を掴まれた。

私の腕をゆるく持ちながら、それでも離すそぶりはない。

無言を貫くソイツに、私は息をひとつつき、後ろを振り返らずにボソッと呟く。

「……どーしたの、国崎。」

そう、相手は、国崎。ヤツも相当酔ってるみたいだ。酒臭い。

「……」

声をかけたが、国崎は無言のまま、動こうとしない。

「ねえ、聞いている?」

「……」

「用がないなら、離せて。」

「……」

「……国崎? 酔ってるの?」

「ちょっと、」

私は返事を返さない男にいい加減しびれを切らして、振りかえってみた。

すると、

「……………」

完全に目が据わった男と目が合った。

「……………く、国崎、くん？」

ちよつと引き気味に尋ねてみる。

……………何、その顔。いや、いつも通りイケメンだけどさ。…ちよつと怖いよ、君。酔うとこんな風になんの？

私がまじまじと国崎の顔を観察していると、彼は目をすつと細めた。そしてひとこと。

「……………眠い。」

え。

国崎は唐突に口を聞いてそう言ったかと思うと、何か言う暇も与えず私の手を引つ張った。

酔ってるとは思えないほどの力、勢いに圧倒され、私はされるがまままだ。

状況理解、不可。誰か説明してくれると助かる。

やがて、ヤツは20歩ほど先にある自分の家の鍵を回し、

「……………え、ちよ、待……………」

いつぞやのように私を中に押し込んだ。

……えっ、はっ？なにっ！？

鍵開けんの早すぎだろ…って、そうじゃなくって！

「っ！？なにすんのさっ！」

パニックの中、私はバツと国崎に食ってかかったが、

「別に、帰らなくていいだろ。泊まってけよ。」

ヤツは恐ろしいことを無表情で言い放った。

なんだと？つか、君の家にか？……無理だろ！

「！や、ヤダッ！帰る！」

国崎を抜け、外に出ようと試みるも、大の男を突破出来るハズもなく、

「うるさい。いいから、大人しく寝とけ。」

男は簡単に私を奥に連れ込み、ベッドの方へ放り投げた。

白いシーツの上に髪がばらっと広がり、スプリングがはみみ、私は布団の中にゆっくりと沈む。

……え、これ、やばくね？

やばい展開じゃないか？てか、何でこんなことになってんの？

ふと過った、この後の最悪の事態を予想して、サッと顔が青ざめる。

.....。

いやいや、私相手にソレはないだろ。コイツも酔ってるだけだし。

..... あれ、酔ってるから、ヤバいんだっけ？

なんて私があればこれ考えている間に、国崎もベッドの中に入って来た。

「...！」

そして長い腕を私の体に巻き付け、正面からギュツと抱き締められる。ヤツの腕の中に私はすっぽりとおさまってしまった。

...って、ちょ、待て。何してんの君？

「っ国崎い！おい、フザけんなっ！電車なくなるだろうが...！」

罵倒しながら、がむしゃらに暴れてみる。

だが全く効果をなさない。さらに国崎の息が私の首筋にかかってゾクゾクと悪寒が走った。

酔っぱらいってこんなに面倒なモンなの！？

エロさ3割増しじゃね？

「は・な・れ・ろおおお...！」

しかし、国崎は迷惑そうな顔をして私の叫びを一蹴する。

「…寝ろっつってんじゃん。暴れるなよ。」

……暴れるわー！何、この意味不明な状況を受け入れるとっ？私、そんな包容力のある人間じゃ、ねーし！！

どけ、アホ、マジで死ぬ、このセクハラ男お！

私は騒ぎ、罵り、手足をバタつかせたが、国崎の腕は弱まるどころか、いつそう強く抱き締めてくるばかり。

オマケに体までくっつけてきやがるから、私の頭は沸騰寸前だ。

…こっのやろっ…無駄に出すフェロモン、しまえ！

なんか恥ずい。めっちゃ恥ずいんですけど、これ。

こんなことする、意図も意味も理由も分からないってば。

とうとう、疲労困憊した私は、

「……はあ…国崎、頼むから、離してくれ……。」

切実に、ヤツにそう頼んだ。

……何でこんなんに体力使わなきゃならないんだ。超ノド渴いた。

「……………」

しかし、返事も返答も、なにも返ってこない。

胸板に顔が押しつけられていて、彼の表情を読むのも不可能だ。

「……おい。」

「……………」

「国崎くん？」

「……………」

へんじがない。ただのしかばねのようだ。

……………って、まさか？

「……………寝、た？」

嘘だろ、オイ。

私は力を入れて、国崎の胸板から顔を上げ、恐る恐る、ほど近い所にある彼の顔を覗く。と、

国崎聖悟は目を完全に閉じていた。

長い睫毛、スツとのびた鼻、そして薄く開いた唇がセクシー。なんちて。

……………要するに、国崎サマは完璧に夢の世界に入られた、と。そういうことですか？

……………。

「っぐ！くそ、離せ！……この状態で、寝るなあああ！！」

オー、ジーザス。

04 (後書き)

あー、長かった(笑)この時点でもう30部か…ラストには何十部
になってることやら。

閑話そのいち

* s p e c i a l v o l . 1 *

* k u n i s a k i s i d e *

ムク。

「……寝た、か。」

夜もだいぶ更けた頃。一寸前まで暴れていた女が、静かになったころを見計らって、男は起き出す。

そして、自分の胸の上で女が、完全に眠りに堕ちたことを確認する。

男は、腕の中にいる彼女を大事そうに抱え、月明かりを頼りにその顔を覗き見た。

「……………」

女は、安らかに眠っていた。何の心配事も無さそうな、平和な寝姿。

すると、彼は彼女の普段とは違う幼い寝顔にふと笑みをこぼし、目を細めて、

無言で顔を近づけ、彼女の額に口唇を落とす。

次に、こめかみ、頬、鼻。

静かに、味わうようにキスの雨を降らせる。

男の表情は、室内が暗いせいで、全く見えない。

「……はっ、情けねえな、俺も。」

男はかすれた声で呟いて、自嘲気味に苦笑を漏らす。

最後に、女の口唇にキスをし、再び夢の中にいる彼女の、細い体を抱き締めた。

「…那津。お前は、どうすれば、手に入る？」

1人の男の、普段は口に出すことのない心の葛藤。

それは誰にも聞かれること無く、暗闇に溶けていった。

〈そのころの3人の男たちの会話〉

「しっかしなあ……アレは酷いでしょ、ナツちゃん。聖悟が可哀想に思えたもん、俺。」

「目に見えて凹んでたねー、あいつ。」

「……というか、俺にはわざと聖悟を怒らせてるようにしか思えないんですけどね。」

「でも本人自覚なしなんですよ？……聖悟、完璧に脈ナシって、20年生きてきて、初じゃない？」

「……ま、1度くらいは痛い目あった方がいいって。あいつはいつもモテてばっかだもんな。」

「僻^{ヒキ}んでるだけでしょう、信二。」

「っ違えよ！俺は聖悟のためを思って、だな……」

「分かった分かった。でも余計なことはしちゃダメだよ？聖悟は自分でなんとかしないと。」

「そうですね。ナツさんは絶対手強いですからそう簡単に才チるわけありませんが……手を貸しちゃ、意味ありませんから。」

「だよ。でもさ、ああやって必死な姿の聖悟も、萌えるよね。」

「……おい、宏樹。もしかして、未だに狙ってんのか？」

「ん〜手は出さないよ〜。あわよくばコツチ来ないかな、とは思ってるけど。」

「……。」

「……。」

データに危険はつきもの

「……………っっ！!?」

…おはようございます。本城那津でございます。

目が覚めたら、何故か見知らぬ部屋で寝ておりました。隣には、…
…なんと国崎もいるわけですよ、至近距離で。目を開けたら、ヤツ
のドアップ。

何事なの、コレ。

まだ、脳内のセーブデータが正常にロードされてない状態だったので、私はベッドの中で、声にならない声で叫んでしまった。

…人間で、本当に驚いたときは声、出ないんだよ？知ってた？

「……………えーと、なんで、こんなことになってんの？」

たっぷり3拍ほど間を空け、私は疑問を口に出した。

…ロードには、まだ時間がかかるらしい。頭はだんだんはつきりしてきたが、まだ、半記憶喪失状態だ。

…オーケイ。じゃ、冷静に考えてみよう。まずは、昨日の記憶から辿ろうか。

…えっとー

斎藤ん家行つてー、麗奈さんの話してー、鍋を5人で食べた。
うん、ここまででは、よし。問題ない。

それで……帰ろうとしたら、国崎も出てきて、無理矢理部屋まで連れてかれて……ベッドに倒されて？

で、国崎の野郎が私を抱いたまま、寝た、と。

……。なんだ。要するに……

100%、この男のせいだ。

私は息を目いっぱい吸い込んだ。

「……おつきろおおお！！このクソボケがああっ！！」

「……あー、なんかまだ耳鳴りがすんだけど。」

「自業自得だから。私のせいじゃないから。」

隣で耳を押さえる男を見ずに私は慥然と言い放つ。

…恨めしそくに睨むんじゃねえ。私を恨むのは、お角違いだ。

シャコシャコと、鏡の前で国崎と並んで歯を磨く。私は、ヤツのス
トックしていた歯ブラシをもらって。

…後で返さないとな。薬局行って買っておこう。

歯を磨きながら、私は室内を見回した。…にしても、綺麗な洗面

所だ。

余計なものが置かれてないからか、やたら広く感じる。

キッチンと掃除もしてあるようで、もしかすると、私の家よりキレイかも……………

…いや、考えるの、止めよ。女としてのプライドが傷つく。

「……………そっぴや、那津。どこ行きたい？」

口をゆすぐ私に、未だに目が眠そうな国崎が尋ねた。

「どこって……………、何の話？」

「もう忘れたのかよ、…デートだよ、デート。」

……………。

…あ！そんな恐ろしい約束、してたっけか。ゴメン、リアルに忘れてたわ。

「あ、やっぱそれ、無しってことには…」「朝一番だけど、キスしてあげよっか。」

げ！

「…すいません。」

「別に、俺はいいけど？歯あ磨いたばっかだし。それとも、こないだのキスマーク、上書きしてあげようか？」

「すいません。もう言いません。許して下さい。」

勢いよくまくしたてる私に、国崎は『そうか、残念だな』と白々し

く呟いた。

…うはー、朝から平謝りとか、疲れる。…コンニャロ、どこまでSなんだよ。うちの兄といい勝負だ。
げんなりと肩を落とす私。ああ、なんか急に老けた気がする。

「で、どこ行く？」

「……………」

まだ言ってるのか。

私は仏頂面で歯ブラシを置いて、国崎の方を振り向く。

「…はあ、どこでもいいってば。つか、どっか遊びに行くんなら他の3人も誘えばいいんじゃないの？」

「……………んなの、デートじゃねえだろ。俺は2人がいいの。」

私がそう聞くと、国崎はちょっとふて腐れたような顔を作った。

…うーん、デートにこだわるなあ、この人。私としては、複数人いた方がいいんだけどな。

しかし、まあデートと言ったのは私だし。

仕方ないか、とまた肩を落とす。

「…分かった。場所は国崎が決めてくれていいよ。」

…まあ、いいや。1回くらいは、付き合っただけでもいいか。

……なんか、君ら4人と絡むようになってから、私、諦念を覚えたような気がするよ。

それがいいのやら、悪いのやら。

それから身支度を済ませた私は、玄関先に立った。

「じゃ、帰るから。おじゃましました。」

「…送ってくつて、言っただけなのに。」

「いらん。たまには電車で帰らせる。ガソリン代とか請求されても敵わないし。」

「そんなケチくせーこと、しないっての。」

国崎は笑いながら、私を入口まで見送る。…別に付いて来なくてもいいのに。

靴を履き、鞆をかついで扉から外に出ようとする。

「あ、ちよつと待て。」

思いだしたかのように、国崎に呼びとめられた。

「…何。」

「日曜、朝9時に、R広場な。」

日時と場所？へえ、もう決めたのか。気の早いこつた。

「…9時？早くない？私、寝坊するかも。」

遊び心でニヤニヤしながら、いちゃもんをつけてみると、

「じゃ、家まで迎えに行こうか？」

国崎もニヤニヤしながら返してきた。

「…………ヤメロ。私が悪かった。」

うぐぐ、撃沈。

…やっぱり国崎には、口では敵わないな。ちくしょう。

なんか悔しくなった私は、最後に来れる限りの笑みを作り、

「じゃあ、楽しみにしてる。」

デートっつーことで彼女特有のセリフを吐いて、そのままドアを開け、外に飛び出した。…ま、俗に言う、言い逃げだ。

…………。

………… やっぱ、ちょっとキモかったかな？気分悪くしたんなら、後で謝るところ。自分の笑顔なんて、絶対ヤバい映像だよなあ………… ごめん、国崎。劇物見せたかもしれない。

私はエレベーターに乗りながら、今しがたの行動を軽く後悔した。

「…！…わざとだって、分かってんのに…………っ」

顔を手で覆い、苛立つ男に、実は違う意味で効果があったなんて、知らずに。

そして。ついに来ちゃいました、日曜日。

……いやー、出来れば、一生来てほしくなかったんだけど。時つてのは残酷だな。飛ぶように過ぎ去って行きましたよ。

時刻は9時ちょっと前。私は近所にある、R広場に向かってゆつくり歩いていた。

天気は、快晴。親子連れや、カップルが楽しそうに遊んでいるのが見える。

…そういや、国崎はどこで遊ぶつもりなのかな？ここか？

確かに金はかからなくていいが……私は、そんなアウトドア派じゃないってば。

ぼんやりと考えながらさらに歩き、中央の噴水のところまでたどり着く、と。

「うわー。やっぱり群れてんなあ……」

目印のごとく、女子の群が集中している箇所が。

おそらく……いや、多分間違いない、国崎はあの中心にいることだろう。

つたく、どこ行っても人騒がせなヤツだ。

……あそこまで行くの、メンドいな。帰っていいかな？

私は舌打ちを打って、心の中でそんなことを思う。

だが、集団に突っ込んでいく勇気などあるはずも無く。

とりあえず傍観を決め込んだ私は、集団から若干離れたベンチに座り、成り行きを見守った。

ふむ。減るところか、だんだん増えていつてるな、人数。スゲーな。

……あ、そつだ。

女子の群に目を落としているとふと名案が浮かぶ。

あん中の1人、もしくは数人が強引に国崎を誘ってどっか行ってくれればいいんじゃないか？

そうすれば今回のデート帳消し？

やったね。今日は1日暇になるじゃん。

国崎には、「君、いなかっただよ。」とでも言っておけばカンペキ

……

「……那津、何やってんだよ。」

ニヤリと笑いながらガッツポーズしていると、背後から黒い影がかぶさった。

ふっと目線を上げると、何か色々頑張ったらしい国崎の、息せき切った姿。

「ちっ、もう出てきやがったか。」

振り切るの早すぎだ、君。

「何だ、その悔しそうな顔。居るなら助けるよ。」
「ヤダ。そんな勇氣は持ち合わせてないから。」

とてもデートで待ち合わせをしていた男女には思えないくらい、険悪な空気を醸し出す私と国崎。

睨みあいながらギスギスした会話を繰り返していると、

「ねえ、おにいさん。」

さっきまでヤツに群れていた女子軍が、背後に。

……うげ、嫌な予感。

「ちよつとー、オニーさん！そんな女放つといて、ウチらと遊ぼうってー！」

「いい店知ってるの。奢ってあげるから、いらっしやいよ。」

「うわー。カッコイイなあ、君。芸能事務所の者だけど、よかったら」

「誰ー？このブス。あなたの知り合い？」

ワイワイ、ギャーギャーと騒ぐ女子たち。もう誰が何を言っているのか、聖徳太子すらお手上げ状態だ。

……わー予想通り過ぎて笑えねー、この状況。しかも女子高生から、推定30代のマダムまで、オールジャンルじゃん。ヤベエな、流石国崎。スペック半端ねえ。

「……逃げるぞ。」

「了解。」

迫りくる乙女と言う名の兵器たちを前に、流石に私たちの意見は合

致した。

くるりと彼女らに背を向けるや否や、一目散に公園の出口を目指して突っ走った。

「はっ、ここまでつ来れば、いいんじゃない？」

「そうだな。だいぶ走ったし。」

公園を抜け、さらに5、6分ほど走った私たち。今はバス停横のベンチに2人、座りこんでいる。

「……お前、息切らしすぎ。」

「は、……うるせっ。」

そう、コイツは私と同じ距離を走っていたにも関わらず、息ひとつ乱していない。対する私は、無様に深呼吸を繰り返す。……体力無いんだって。

しばらく座っていると、ようやく息も整ってきた。家から持ってきた水を口に含みながら、隣の男をチラリと見る。

うん。相変わらず、キレーな顔してやがる。

麗奈さんも絶賛のシャープな顔立ち、ダメージジーンズも履きこなす長い足、案外ついてる筋肉。

第一印象、花マルだもんなー。こりゃ、モテるわけよな。

そう思つて、遠い目をしていると、国崎が私に視線を合わせてきた。

「……どーした？さっきから人の顔をジロジロ見て。」

「……んー、いや、君はモテるなーと思つて。」

世の中は不公平だな。この男はDNAから何か違うんじゃないか？

「……別に、んな大したことはねえよ。」

「はー、あれで大したことないとか言つんだ。スゴイねー。」

「ケンカ売つてんのか。」

苦笑する国崎は、ゆるく私の頭にげんこつを落とした。ひゃ、ゴメン。怒らないでー。

「……でもさ、君の彼女になる子は、大変だよねー。」

私が無気なく言つたひとことに、しばらく笑いながらじゃれていた国崎が、ピタリと動きを止める。

……しかし、彼の少しの変化に、私は気付かない。

「……何で。」

「や、だつてさー。よっぽどの美人じゃなきゃ、釣り合わないですよ、実際。」

例えば麗奈さんとか。一緒に並んで、ビジュアルが堪えられないくらい的美女じゃなきゃねえ。

「女子つて、自分が勝てると思つた相手は徹底的に蹴落としにかかるとからさ。彼女になる女の子、精神的にも強くないとねー。」

他人事みたいに、カラカラと笑う。

あーでも、そう考えたら中々恋人できないよね、国崎。もしくは続かない、とか。

私は並み以下の一般ピーポーで助かったよ、うん。

「……そう、か……」

はあ、とため息をつかれた。

「そんな落ち込むなよ。君ならすぐにキレイな恋人が見つかるって。」

「……いや、そうじゃねえよ。」

そう言つて、もう一回ため息を吐く国崎。

……?なんだあ?

「……あ、それで結局どこ行くことにしたの?」

少し疑問に思ったものの、こんな話ばかりしてても重いので、私はさっさと話題を転換した。

「ああ、水族館。この近くにあるから。」

国崎の方ももう気にしていないのか、何気なく返ってきた返答。

まさかの aquarium。ぶっちゃけ、意外だな。

「……へえ、何年ぶりかな、そんなの。何で行くの?」

「このバス。20分くらいで着くから。」

彼がそう言うと同時に、バスが停留所に停まった。
……タイミング、いいな。最近のバスは空気も読む仕様なのか。
(違)

今日は、日曜日。休日。故にバス内は大変混雑していた。
座れる座席はもちろん無く、私も国崎も立ったままだ。

……これで20分、か。キツイな……

吊革にしがみつき、バスの入り口付近で振動に耐える。

……くう。こういう時、もっと手足が長けりゃなあ……隣で悠々と立
っていられるヤツが、憎らしいぜ。

国崎を恨めしげに下から見上げていると、ふとヤツと目が合った。
そして、くすつと笑われる。

「…立ってるの、きつい？」

「いや、別に……。バスとか久々に乗ったから。」

図星なクセに、なんだか悔しくなった私は、フィと目線をそらした。
するど。

「！？」

ぎゅっと、国崎の腕が、後ろから私の腰にまわされた。背中をヤツの胸に預けているような格好になる。

「……ちよっ、何してんの。」
「ん、別に。こうした方が楽だろ。」

国崎はそう言つて、自然に私の頭に顎をのせてくる。
……や、確かに楽だよ。もたれられるから、楽ではあるけど。…そういう問題じゃ、ねえし。

「…違う。あのねえ、前も言つた気がするけど、こういつのつて軽々しくするもんじゃ…」

「那津、いいにおいする。なにコレ？」

……。相変わらず人の話をきかねえな。国崎は。
ちよっとは聞いてくれてもいいだろ。空しいんだけど……心が。

「………におい？あー、あれかな。香水。」

ダメだこりゃ、と脱力しながらも質問に答える。

「香水？そんなんつけるんだ、お前。」
「失礼な。…ま、私のじゃないけど。」
「…もらいモン？誰から？」
「麗奈さん、……君が振つた。」

そこで、国崎は若干渋い顔をした。

「……ふーん。つか、そんなこといつまでも引っ張るんじゃねえよ。」

「
引っ張るよ。」

「まだ諦めてないっばいからな、彼女。今度はちゃんと相手してあげなよ?」

「……………はあ。」

また、ため息かよ。今日3回目じゃん。…何悩んでんだろ?こいつ。

「……………?ま、いいや。とにかく、腕どけて。」

「あと、15分くらいだろ。このままで、いい。」

…それ、君が決めることじゃ、無いだろ。

だが結局、国崎が私を離すことは無く、水族館に着くまでこの体勢は変わらなかった。

「おーっ。魚おいしそーっ。」

「オイ、水族館でそれは禁句だろ。」

暑苦しいバスから降り、広々とした大きな空間。水族館に足を踏み入れた私たち。

様々な大きさの透明な水槽、薄い水色に統一された館内、うごめく

海の生物。

すべてが、日常とは違う、カンペキな別世界へと客を誘う。

ホント、なんか久しぶりだ。中学…いや、小学生以来か。水族館なんか来るの。

でも、子供のころとは違った視点で見れて面白い。

私は年甲斐もなくハシヤギまわり、次々と展示物や動物を見て回った。

「……………楽しいか？」

ペンギンに目を奪われている時に、隣にいた国崎に話しかけられた。私はくるつと彼の方を向くと、にこりと笑って頷く。

「うん、楽しい。ここに引越してきて1年少し経つけど、こんなトコがあるなんて知らなかったよ。」

「都心から少しはずれてるからな。俺も、来たの2回目。」

へえ。

「1回目は、彼女とのデートだったり？」

「……………さあ？」

……………凶星だな。その絶妙に空いた間が、すべてを物語っている。

…ま、別にどーでもいいけど、知ったからには深く聞いとこうかな？

「……………じゃ、ちょっと複雑な心境じゃない？」
『ここに来ると、アイツを思い出す』とか、ならないワケ？」

「だから別に女と来たとか言っつて、「違うの？」」

「……………」

私が意地悪く問い詰めると、彼は、ちょっと気まずそうな顔を作った。

くく。またいつもとは違う国崎だ。おもしろい。

にまにまと笑う私にたじろぐ国崎。

彼は何やら言い訳を考えているようだったが、やがて諦めたように頭をがしと掻いた。

「〜そうだけど。でも、そいつとはすぐ終わったからな。むしろ、思い出したくもない。」
「へえ。」

お。ついに認めたな。正直なのはいいと思うよ、うん。

しかし、こいつにそこまで言わせるとは、何者だ？その女。余程すごい人格の持ち主なんだろうな？

「で、どんな女の子だったの？」

その人、目指そうかな私。目を輝かせて、わくわくして聞く。
しかし、

「……………お前には関係ナイだろ。次、行こうぜ。」

国崎は本当に触れてほしくないらしく、それから何度話を振っても答えてくれなかった。

……………このケチ男！

イルカショーを見たところでちょうどお昼時になったので、水族館に隣接するハンバーガーショップに行くことにした。

快晴の中、国崎と2人、歩く。

「っはー。なんかめっちゃ水しぶきかかった……。」

ずぶぬれなんですけど。…あのイルカ、やりおる。

私の髪からポタポタと滴がおちて、乾いた地面にしみを作った。

「いいじゃん。動物に好かれてるってことで。」

水もしたたるいい女の私を見下し、ヤツの方は楽しそうに笑っている。……隣に座っていたハズの国崎は、全くの無事だったりする。

何だろ、この差。

「……でも、こんなんじゃ店、入れないよ。」

でっかいタオルでも常備しときゃよかったなー。いくら天気がいいとはいえ、すぐには乾かないだろうし。

ふむ、と困り顔を作る私に対し、国崎さんはニヤリと嫌々な笑顔を見せた。

あ、これやべえ。 と思ったときにはすでに遅し。

「じゃ、俺が拭いてやるよ」
ばぶっつ

素早く私の後ろに回ると、自分のミニタオルを私の頭にかぶせてきやがった。そしてわしゃわしゃと濡れた髪をかき混ぜられる。

……いや、『』ってなに！？君のキャラじゃねえだろっ！

「つぶは、やめろって！自分でやるからあー！」

やーめーれー！ただでさえボサボサの頭がもっと酷いことにい！

「遠慮すんな。」

1ミリもしてない！

私は頑張って逃げたが肩をがちりと掴まれてしまったので、結局、彼にされるがままになってしまった。

………っち。もっと身長高けりゃよかったのに。…あと、手足。学生時代、成長が手え抜いたな。

「……ほら、乾いたぞ。完璧。」

「……どこが。」

国崎が手を離れたとき、やはり髪の毛がもっさもさになっていた。なんつーか、寝ぐせが3くらいレベルアップしたような感じ？……んー、うまく言えないな。

とにかく、かつてないボリュームに驚きだぜ。どうしてくれんだ、
テメエ。

仏頂面で睨むと、不謹慎にも、ヤツは大笑いして下さった。

「ぶっ…ははははっ！！面白えなその髪型！斬新でいいんじゃない？」
黙れボケ。指さして笑うな。斬新すぎて、もはや誰も着いて来れな
いよ？コレ。

「……………うぜえ。国崎、私トイレ行って直して来るから、適当に注文
して席とっとけ。」

私は苛立ったまま店内に入ると、すぐにトイレに向かった。

……………流石の私も、コレは恥ずかしい。とっととクシでとかしてこよ
う。

……ふう。なんとか、少しはマシになった……か？

数分後、ブラシを片手に髪を通常に戻した私は、洗面台の鏡を覗きこみついでに自分の顔を見た。

「……うわ、酷い顔。」

自分の顔にウケるって、どうなんだろう？ 思わず2度見しちゃったじゃないか。

ボサボサ（＋）の髪は相変わらずだが、目つきの悪い人相……に、若干目が黒ずんでないか？

さらに黒縁眼鏡がカゲを落とすせいで余計に暗くみえる。

……度重なる徹夜のせいだよなコレ。今度から回数減らさないとな、……週2くらいに。

……。私は無言で鏡の中の自分をまじまじと見る。そして思わず自嘲の笑みを浮かべてしまった。

……やー、しかし。この顔である4人と一緒にいて、よく生きてこれ

たな、私。

こりゃー女子も怒るわけだ。私だって多分怒ると思うし。誰が見たって、こんな不細工、お断りだろう。

自分の中でそう自己完結した私は、しかし首を傾げる。

「………そんで国崎は、私なんかと遊んで、何が楽しいんだ？」

…最終的には、やっぱりそこに行き着いた。あとで本人に聞いてみるとするか。答えてくれる保証はないけど。

あまり待たせるのも悪いと思ったので、そこで思考を止め、女子トイレから出た。

そしてレジャー施設の隣だからか、やたら広い店内を見渡す。さつと目を通すも、国崎の長身は中々見つからなかった。

あいつは、どこ行った？

あんだけ目立つはずなのになんで見つからないんだ、と私は眉をひそめ、さらに奥へと足を進める。

すると、突然。

「っ那津！来いっ！！」

「…っぎゃっ!?!」

どこからか、探していた国崎本人が現れ、私の手をとるなり風のごとく駆けだした。もう片方の手には、ハンバーガーの袋を持っているようだ。

…あ、ちなみにさっきパチモンの恐竜みたいな奇声あげたの、私ね。変な鳴き声(？)まで上げてしまつて顔を赤くする私。だが国崎は構わず店から私を引つ張りだした。

私をハンバーガーショップから連れ出したヤツは、店の裏口みたいなところに隠れ、辺りの様子をうかがう。

…珍しく、あせつたような表情だ。そして…若干顔に浮かんでいるのは、…恐怖、か？

マジで切羽詰まっている様子だったが、何が起きているのかワケの分からない私は、国崎に尋ねた。

「ちょ、国崎！どういうことだよ、いきなり店飛び出してっ！」

「うるせえ！静かにしないと見つかるだろ！」

は、見つかる？何に。だから状況を説明しろよ。どんな展開？これ。

「…いや、意味分かんないって！見つかるって誰」

「っ、黙れっ！」

そして、一瞬。

揺れる茶髪が視界に入ったかと思うと、すぐさまお互いの唇が重なった。

私は、大きく目を見開く。

整った顔がすぐ近くに………っつか、距離、ゼロ。

柔らかい唇の感触に、どっどん体が熱くなる。

叫びようにも吐息ごと唇で包まれ、音を形作れず、離れようにも、いつの間にか壁に体を押しつけられていて、動けなかった。

またも、国崎の独擅場だ。

目を閉じるヤツの顔が見れなくて、私のまぶたも自然と降りた。

2回目。

そろそろ訴えた方がいいかな？

混乱しているにも関わらず、そんなどうでもいいことを考えながら、私はそのまま口を塞がれたままでいた。

するとしばらくして。近くで、足音が聞こえた。バタバタと忙しそうに走っている足音が。

その音はだんだん遠ざかり、ついに聞こえなくなった。

……。

今のが、国崎が追われてたっぽい人か？いなくなったようだけ
ど。

……あ、じゃあそろそろ私、解放されるんじゃない……

なんて、ほっと一息（つけないけど）ついて安堵していたら、

「……！むっ？んっ！？」

いきなり、なにか柔らかいモノが私の口を割って侵入してきた。

舌、だ。国崎の。

そう気付いた時には、すでに私の舌は彼のに絡め取られていて、いつそうキスを深くされた。舌が自由に動き回り、私の口内を犯していく。

「……ふっ……あ……」

時々漏れる自分のものとは思えない声が、クソ恥ずい。さらに、体温上昇だ。

完全にオーバーヒートした頭はもはや使い物にならず、何も考えられなくなった。

「っ、」

国崎、国崎。頼むから、解放してくれよ。

熱い。

どこもかしこも熱すぎて、多分、体のどっかが溶ける。

すぎるものが欲しくなったのか知らないが、自分でも気付かぬうちに国崎の服をぎゅっと掴んでいた。

何分経つただろう。もう1時間はこうしている気がする。：実際には数分だろうが。

ゆっくりと国崎の唇が離れ、ようやく私は自由になった。

2人とも、息が荒い。肺呼吸を忘れてしまったかのように、なかなか上手く息を吸えない。

しかも、彼が離れた瞬間、支えを失った私は、ずずつと地面にへたりこんでしまった。

「……………はあ、…はっ……………」

私は大きく胸を上下させて、何とか肺に酸素を送り込む。

…いかん。言いたいことが山ほどあるのにしゃべれない。

キスすると、体まで不自由になるのか？厄介な。

「……………行った、な。」

それに対し、早くも息を上手く整えたらしい国崎は、何事もなかったように後方を見つめ、咳いた。

何故にコイツは、こんな平然としているんだ……………！？

「……………っ、くに……………さき……………」

「ゆっくり深呼吸してから、言え。辛いだろ。」

誰のせいだ、誰のーっ！

私は不服そうな表情を作って見せたが、大人しくヤツの言う通り空気を体に取り込むことに専念した。

酸素って、大事だよな、うん。最近、特にそう思うよ。
…主に、このカス男のおかげで。

しばらくして、ようやく息を整えた私は、膝を立てて立ち上がった。

「……ふう、国崎。聞きたいことが、2、3あるんだが……」
「何。」

『何』じゃねえよ。わざとらしいわ。

「何で……その、キス……した？」

言いながら、顔が勝手に赤く染まっていくのが分かる。自分で感じるくらいだから、傍からみたらもっとヒドイだろう。

くっ、なんでヤラレタ側の私がこんなに恥ずかしいんだっ！
いや、国崎に羞恥心がないだけか？…君はもっと『恥』というものを学ぶべきだ、ゼツタイ。

「……何でって。那津が静かにしないから。」

「いやっ！だったら手で口塞ぐとか、他に手段あっただろ！」
「手、塞がってたし？」

言いながら、国崎は両手を上げた。

右は彼の鞆、左は茶色のペーパーバッグ、店のロゴ入り。

「……！」

「俺もあせってたから、咄嗟に顔近付けちゃったんだよな。」

しょうがないな、とわざとらしく顔を傾ける国崎。

だから、君の過失はゼロだって？んなワケ、ないだろ。咄嗟に体より口が先に出るとか、貴様の身体はどういう構造だ？

私はギリッと歯ぎしりしながら、ヤツを見上げた。

「……………」

「……………」

だが、相手には弁解も謝罪も無いらしい。無言のまま私を見てきた。…こんなんじゃ、話が進まないな。あくまで自分は悪くないとか言うつもりかい。ガキが。私は嘆息した。

「……………」もう、いい。1000000歩譲って、それは事故だったでしょう。」

「…事故、じゃねえけど。」

「いいの！そういうことにしとけっ！そこで、2つ目の質問だが…
…舌まで入れる必要が、どこにあった？」

私は聞いたぞ。

君さ、謎の足音が聞こえなくなってから、わざとヤリやがったよな？？

アレ、确实不要だったよな？どうなんだ、オイ！？答える国崎！

ギロつと彼を責めるように睨む私。

するとヤツは、

奇想天外な回答をよこしなされた。

「……んー、せつかくだから？」

何の記念んんーっ！！？そして疑問形ー？

流石にこれには怒った私。国崎に掴みかかり、激しくしゃべった。

「おい！またお得意のなんとなく、か！？」

冗談じゃない。実はチャラ男か？君っ！？

「いや、なんか止まらなくてさ。」

黙れカス。表現が生々しいわ。

「君の欲求不満に、人を付き合わすんじゃないっ！」

続けて、ギヤーギヤーと節制だのマナーだのを言いまくる。が、

数分ほど叫んだ後、国崎はヤレヤレって感じで肩をすくめ、

ガラリと雰囲気を変えて、私を鋭い目で睨んできた。

私も、ただならぬヤツのオーラに身をすくませる。

何だよ。

その激しい眼差しに、騒ぐのをやめ反射的に後ずさった。

「……欲求不満、か。そうかもな。」

そう呟きながら、国崎はじりじりと私との距離を詰めて来る。国崎と、バックに青空が視界に入った。

どっかで見たことあるような、責めるような眼差しを向けて近づいてくる彼に、私はいささか恐怖感を覚える。

あ、やばい。なんか変なスイッチ入ったわ、こいつ。

「……な、なんだ！近づくなって！！」

私が1歩下がったら、ヤツはさらに1歩、前に出る。袋のねずみよろしく、どンドンと後退していく私。

「断る。」

何故、そこ断言するかなっ！

「……いき、君の下半身事情なんか知るかつ！そんなんで、人で遊ぶのもいい加減にしろよ！！」

……うあ、焦ってるからか、なんかももの凄いこと言ってしまった。こ

れもう女のセリフじゃ、ないよね。
反省します。あとで、家で。

国崎は、流石にこれには驚いた様子を見せたが、クスクスと苦笑しながら、さらに数？、距離を縮めた。

「……女が下半身言うなよ。引かれるぞ？」

「っ、いいし！大いに引けっ！そんで戻ってくんない！」

私はしっしつとヤツの顔の前で手を払った。

まずい。まずいって。危険な状況だよ、これ。なんてったって、国崎、すげえ悪い笑みを浮かべているし。

そろりとさらに後退したが、ついに壁に背中がついてしまった。途端、顔が凍りつく。

「……………ね、那津。」

甘く囁かれるのと同時に、とつとつ顔の左右に国崎の手が置かれた。

「っ、な、なにかっ!？」

顔同士の距離は、数？だ。こんだけ近かったら、相手のマツゲの本数数えれそう。

「…那津、」

だから、何。近づくと彼の顔に、意味無く身体が火照ってきた。

……だって、仕方なくね？ああいうコトになった直後だから、おこ

がましくも意識してしまうのは当然なわけで……
それ差し引いても、こんな美しいお顔を間近で見て、気後れするの
は自然だろうし……

……あーっ！何言ってるの私！もうワケわかんないっ！！
とりあえず、色々と限界だってばー！

頭の中でギヤーギヤーと騒ぐ私。だが男は全くそれにかまわず。
国崎はちよつと息を吐いてから口を開いた。

「……俺は」

ぐんぐんぐんぐん……

……その時、盛大に腹の虫が、鳴いた。

私の、お腹から。

「……。」
「……。」

……当然のごとく、空気が止まったよ。今までの艶やかな空間が、一
瞬でブチ壊した。

「……くっ……くっ……」

国崎は3秒ほどあっけにとられていたが、眼鏡の奥で目をそらす私

を見るなり、ノドの奥で笑いだした。
私もなんだか恥ずかしくなって、顔を俯かせる。

……笑うんなら、遠慮なく笑えばいいだろ。しょーがないじゃん！
自然現象なんだからーっ！

「っ、ははっ……何だよその腹。タイミングが漫画みてえ。」
「うるさい。お腹減ったんだよ。もうお昼過ぎなんだし。」

すると国崎は、ボソボソと呟きながらふてくされている私の頭の上
にポンと手をのせ、

「じゃあ、飯にするか。俺も腹減った。」

私から離れて、茶色のペーパーバッグの中から買ったものを取り出
し始めた。

………

一瞬の間のこと、私はハッと我に返った。

……あ、よかった。これ、成功ルートだ。普段の国崎に戻った。私
は脱力し、さっきの出来事から上手く脱したことを悟った。

グッジョブ、私のお腹。とってもナイスなタイミングで鳴って
くれたな。

店の前に設置されてあるベンチに座って、もくもくと昼飯を食べ進める私たち。

…このハンバーガー、コショウとマスタードがきいてて中々美味しい。無心になってハンバーガーにかぶりついていると、横から国崎の声がした。

「腹減ってたんだろ。たくさん食べよ。」

「…や、さすがにこんなには無理。」

「そうか？」

いやいや、ちよつと量見てよ、量を。コイツ、どんだけ買ったんだ？ハンバーガーの他にも、ポテト、ナゲット、シェイク……軽く3、4人分くらいはあるぞ。

私を食べる手を休め、ドリンクを飲んでいると、国崎の手が延ばされる。

「そんだけでいいのか？じゃ、後は俺が頂くけど。」

その提案に、私は目を見張る。国崎はすでにハンバーガー3コ、ポテト1コをたいらげているというのにまだ食べれるのか。

…君の胃袋、どうなってるの？異空間？そんなに食うのに、よく太らないな。

「…ああ、どうぞどうぞ。私はもう食べれないから。」

国崎は『じゃあ』と言ってまたハンバーガーの包みを破る、
…見てるだけでハラいっぱいでーす。けぶ。

昼御飯があらかた（主に国崎の）胃におさまったところで、私はさ
っきの話の続きをし出す。

「…あー、それで君。誰に追われてたの？」

…私にあんな口封じするくらいだ。余程の人物なんだろうな？彼は
私をちらつと盗み見て、ポテトをつまみながらぼそつと答えた。

「ん。…元カノ。」

「へえ、元カノ。……って、ええっ!？」

思いよらない人物に、私は芸人バリのリアクションをとる。

え、元彼女って……さっきの、国崎的に思いたくもない女
っ!？

なんてHOTな話題だよ！タイミングいいな、おい!…や、悪いの
か？この場合。

「……会ったの？」

「ああ、最悪なことに、さっきの店でバッタリ。」

私の問いに、国崎は苦々しげに答えた。…はー、そりゃ、無視でき
ないわなー。残念でした。

しかしその顛末を聞きながら、私は軽く首をひねった。

「……でも、その人、何でわざわざ水族館に？」

フツー、ちよつと遊びに行こうと思ってチヨイスするような場所じや、ないよね？水族館で。

どうにも理解できないその女の奇行に私は首を傾げるばかりだったが、国崎は最後の袋をくしゃっとなつぷし、さらりとその疑問を解消してくれた。

「あーさつき思いだしたんだけど、去年の今日だったんだよな。アイツとのデート。」

……え。

「……それ、先に思いだしとけよ！！」

…それって、向こうは未練タラタラなパターンじゃなかあ！しかも、そんな日に私とデートなんかしてんじゃねえーっ！最低！この男最低ですよ、皆さん！

私は少し国崎から離れ、じとつとした目つきで彼を見た。

「…国崎。君、いつか刺されるよ？」

全く、女泣かせな男だ。こんな無神経男と上手くいった彼女っているのか？

「…ま、気をつけとく。」

……否定は、しないのかい。

私はある種残念なイケメンを仰ぎ見て、やっぱりこいつムカつくなあ、と再認識した。

04 (後書き)

どたばたしてるなあ、今回。デートはまだ続きます。

お気に入り登録、評価ありがとうございます!!

夕暮れの来客

「まったく、いつアイツに出くわすか分からないのに、何でわざわざ水族館に戻るんだよ……」

「いいじゃん。修羅場起こったって、私には関係ない話なんだし。それに、料金分は楽しまなきゃ損でしょ？」

あと3年はここ来なくてもいいように、堪能しなきゃ。

「……なんか、違うね？その価値観。」

と、いうワケで。私と国崎は再び館内に戻った。

そして、

「……次、蟹見よう、カニ。普段めつたに食べれないし。」

「いや、だからどっか視点おかしって、ソレ。」

私は朝のときと同じように彼を引っ張って、次から次へとコーナーを回った。国崎も何も言わずついてきてくれるので、それに大いに甘える。

クラゲ、サメ、熱帯魚、カメ、ヒトデ……

様々な海の仲間たちを見てみると、心が和んだ。日ごろのささくれだった気持ちも癒されるような……

「……すでに腹が真っ黒なお前はどっやっても改善されねえだろ。」

「そのセリフ、そっくりそのまま返すわ、… エスパ―君。」

ジロリ、と引きつった笑みとともに国崎を見返す。

…人がせつかくいい気持ちになってるのに、まあた心を読みやがって。だから私にもコツを教えてよね、コツを。」

それから、約2時間ちよつと経過。

「…大体、回ったな。そろそろ終わりにするか？」

国崎が、若干疲れた様子で呟く。

「…お、おーけー。じゃ、帰ろうか。」

…私の方も、すでに足が限界だ。長い時間歩き回っていたからか、激しく疲労している。

でも、これで、3年どころか5年は水族館来なくていいわ、私。

私たちはゆっくりと、水色のカーペットの上を出口に向かって歩きだした。歩きながら背筋を伸ばし、大きく伸びをする。

「…んー、満喫したなあ、水族館。」

「そりゃ、よかった。最後に土産でも見ていくか？」

「えー、面倒くさ。誰に？」

「アホ、今日の記念だつて。」

国崎に小突かれながらも、せっかくなので最後に少々小さめのお土産コーナーへと、足を運んだ。

中では物色している人がまばらにいた。私もまじまじと1つ1つの商品を見ていく。

海の生物のマスコット、ぬいぐるみ、水族館のロゴ入りクッキー……そんな類のものが棚の中に所狭しと並んでいるのを見渡す。

「スゴイねー、本物はあんなにグロいのに、こんなに可愛く商品化されてるよ。」

「それ、言うなよ。夢ブチ壊しじゃねえか。」

…だって、そう思わない？魚がフツーこんな綺麗な青色してるワケ、無いからね？マンタとかもっとでかくてゴツいし、ツッコミいれたらキリないって。

そのようなことを考えていると、何か見つけたらしい国崎に手招きされた。

「那津、那津。ちょっと、こっち来て。」

「む、何かあった？」

彼に近づくと。

シヤラ

「へ？」

何か、首に冷たい感触がした。……何、コレ？

不思議に思い、首元を見てみると、

「……………ネックレス？」

が、首にかかっていた。

トップは青いトルコ石のついた、シルバーのペンギン。中々品のいいデザインだ。

「あー、やっぱり青が似合うな、お前。」

あっけにとられている私とそのネックレスを見て、国崎は納得したように頷き、

「これください。」

買った。

……………つて、えつつ!!!??

「ちよ、待てーいつ!?!」

財布から金を出そうとするヤツの腕を慌てて掴み、制す。

ちよ、君、なにしてんのさ!?!?

「……………何だよ。」

「それ、コッチのセリフ!何、即決してんの?そして、このペンギンは誰用?!?」

……………まさか、私の、とか言っなよ。

「お前しかいないだろ。付けてるんだし。それは、那津の。」

…言ったよ、この男。

まったく意味の分からない私は、眉を曲げた。

「…は？何で？私、別にいららないんだけど。」

そもそも。オミヤゲって、普通ここに来ていない人に渡すもんだろ？
なのに、何故私に？…謎だ。何がしたいの？君は。

「あー、うるせえ。俺が買ってやるって言うてんだよ。…スイマセ
ン。このまま付けていくんで、袋いらないます。」

…っあーっ！

私が結論出す前にアツサリ会計済ましてるしー！！
愕然とする私を尻目に国崎はさっさと財布をポケットにしまった。

「ほら、買ったから行くぞ。」

いつもと変わらず、涼しげに言う彼を、私はキッと睨みつける。

「っだから！買う意味が分かんないって！！今日、私の誕生日でも、
何かの記念日でも無いし！」

「今日の記念、でいいだろ。」

…毎日が記念日？ みたいなノリか？そんな散財してたら、すぐに
破産するわー！！

「か、返すっ！」

「じゃ、ゴミ箱に直行するだけだけど？せっかく買ったのにソレは
もったいないな。」

「っ、…性格悪い!!」
「何だ、今更気付いたのか？」

勝ち誇ったように綺麗な笑顔を見せるアホ男を見上げ、悔しまぎれに唇をかむ。

そんなん、私がもらっとくしかないじゃん!!…新手のイジメか？オイ。

答えはもう分かってる、といった風にニヤニヤと笑う国崎が心底鬱陶しい。

本当、イイ性格してるよな、君。

こんなに親の顔が見たくなかったヤツは初めてだよ。

「…っち、もらっしかない、か………」

忌々しそくに首元で揺れるペンギンをつまむと、国崎は苦笑を返してきた。

「素直に受け取ればいいだろ。ホント、頑固だな。」

「うるせ、アホ。手の込んだイジメしてきやがって。」

「…せつかく買ってやったのに、イジメって何事だよ。」

ほら、罪悪感を感じるとか、何かたくらんでるんじゃないかとか、そんな感じ。…ま、主に後者の理由だが。

しばらくあまだこうだと言いあっていたが、ふと国崎は会話を切り、自分の腕時計をのぞいた。

「…そろそろ、バスが来るな。外出るか。」

そう言って、体を反転させて出口に向おうとするので、

「っ、ちょっと待って！…いや、外で待ってて！」

私は慌てて踵を返し店内に戻った。

こんなんじゃない、本当にただ貰っただけじゃん。貸し借りはナシにとかないと、後がコワイ！！

数分後。

「はい。」

水族館の外で腕を組みながら待っていた彼に、私は水色の小袋を突き出した。

国崎は一瞬驚いたようだったが、すぐに怪訝そうな顔を作り、私に疑問を投げかける。

「……なに、コレ。」

「お返しだよ。貰いっぱなしだと気分悪いし。」

「…そりゃ、どうも。」

国崎はフツと笑みをこぼしてソレを受け取った。そして無造作に袋を開ける。

中身は

「ストラップ……」

「無難でしょ？」

実用性はあると思うよ？

…もつとも、私は持ち物に装飾はつけない派だが。

私は得意げに彼とそのストラップを覗きこんだが、次の瞬間、彼のひと言に見事にフリーズした。

「……で、おそろい？可愛いところあるな、意外に。」

なんと、

ニヤリと笑う国崎の手で揺れるストラップは、私の首元についてるペンギンと同じデザインであった。

……

しくった！！！！

わー！なに、この痛恨のミス！！なんで私、自分で自分を追い込んでんの！

適当に引っ掛んできたから（酷）どんなのか全然見てなかった！！

…これ、ヤバくない？

一緒に付けてんのみられた日にゃあ……瞬殺？ ……あ、即死？マズイ。激しくマズイぞ。

「……あの、国崎さん。」

「返品、不可。」

…ですよねー。簡潔に反対してくれちゃって。

「…じゃ、私コレ、はずしていい?」

「今日くらいは付けとけよ。」

「……………それなら、国崎、そのストラップは付けないで……」
「何で?せつかくもらったんだから、普通につけるけど?」

……………

「……………もう、いいっす……………」

「そうか?」

くす、と天使のようなほほ笑みを残して、国崎は早々とストラップを付けた携帯電話をポケットに突っ込んでいた。

「…っだー!!ホント、嫌がらせの神だな、君はっ!!」

ちったあこつちの都合も考えてくれよ!

非常に…ひっじょーに、楽しく笑いなさる国崎を見て、私は諦めて肩を落とした。

バス停にたどり着くと、乗客の列ができていた。今から帰る家族連れがほぼ、だろつか。やたら騒がしい。

…どうやら、まだ、バスは来ていないらしい。私たちも最後尾に並び。

「で、この後どうするの？」

隣で眠そうに立っている国崎に聞いてみる。

他に予定はあるのだろうか？ べつに、もう帰ってもいいけどね、私は。疲れたし。

国崎はちよつと考えるようなそぶりをみせた後、口を開いた。

「そつだな…帰すにはまだ早いしな…。どつかで飯でも食つか？」

「…『帰る』じゃなくて『帰す』なんだ？」

「当たり前だろ。…どうせもう帰りたいか思ってただろうけど。

「

ジロリと二つちを見る。

おつと、こ名答。よく分かってるじゃないか。

私は笑って誤魔化しといた。

「それにこういう機会でもなけりゃ、お前は絶対デートなんかしてくれないしな。これで別れるにはもったいない。」

…要するに、まだ弄り足りないってことか？

……っつーか。

「…これ、デートなの？」

私が真剣な顔をしてそう聞くと、国崎は眉をひそめた。

「……今更、何を。そういう名目だろうが。」

「や、でも、私は君の友達なワケだし、デートとは言えないんじゃない？」

普通に遊びに来た、くらいだろ。このノリ。

……アレ、そもそも友達同士でもデートってするのか？経験無さ過ぎて、わかんね。

すると、国崎は何か複雑な顔を作ったかと思えば、

「…じゃ、するか。デートっぽいこと。」

「…は？」

ぎゅっと、手をつないできた。

彼の右手が私の左手に重なり、温かい体温がダイレクトに私の手に伝わる。

…しかも、ノーマルなヤツじゃなく……

「デートっぽいこと、そのいち。恋人つなぎ。」

だった。

「…オイ、何してんのさ。」

ブンブンと手を振り、絡まった指をほどこうとするが、しっかりと握られているようで、全く効果がない。

「那津がデートみたく無いって言うから、それっぽくしようと思つて。」

「あ…もう十分わかったからいいです。離して。」

君って奴は…まあた変なこと考えやがって。そういう意味で言ったんじゃないよ、コッチは。

「ヤダ。お前、全然分かってないし。とりあえず雰囲気だけで味わっとけよ。」

余計なお世話だ、バーロー。確かに誰かと手をつないだのなんて数年ぶりだが、何故、君とする必要が？

「…だからって　「バス、来たぞ。いい加減静かにしないと、もつとレベル上げたことすつぞ?」

………ハイ、一瞬で黙りましたとも。

私はハア、とため息をつき、繋がれた手をそのまま放置した。

うーわ、なーんか、また失言したな私。思ったことすぐ口に出

すのはよくないな、うん。ホント。
つか、そのいち、って全部でいくつあるんだ？

「…で、バスの中でもつないでるの？」

ステップを踏んで、2人バスに乗り込んだ後、私は視線を落として
つながれたままの左手を見つめた。

……つなぐ意味、無いだろ。暑いし。

「ん、別にいんじゃないね。公園に着くまでくらい。」

しかし、国崎はいつもと変わらない調子だ。私の方を見もしないあ
たりが憎らしい。

…だから、『別に』って、ナニさ。

行きといい、帰りといい……バス内って何かのアピールポイントだ
ったりする？もしかして。

どうせ言ってもスルーされるだけなので、私はヤツをそのまま無
視して放置することにした。

………

…いや、放置してソレを考えないようにしようと思っただけ、の方が
正しい。

なんか、なんつーか……ワケも無く顔が熱くなっていくんですけど。こうやって手えつなぎながら電車乗るカップル、よくいるけど、彼らは恥ずかしくないんだろうか？

…私は無理だ。見られるのもそうだが、手と手が絡んでるって事実自体に、すげー緊張する。

しかも、相手がコイツだしなあ……何の罰ゲームかな、コレは。

…つか、私、今日、いくつ罰ゲームした？軽く4、5コはやった気がするけど？

国崎のテンションも、今朝からおかしいし。

むしろ、このデートが罰？

……いやいや、何のだよ。そこまで悪いことやってないよ、私。

あ、もしや厄日、パート2？

「……那津、ナニ考えてんの？眉間にシワ、寄ってるけど。」

じっと1点を見たまま思考にふけていた私に、隣から声がかかる。

「……厄日……デート……？」

「はっ。」

…おっと、ゴメン。考えてたことがそのまま口に。意味分かんない上に不吉なひとりごとだよな、今の。

「…あ、何でもない。気にするな。」

右手を振りながら怪訝そうな顔をする男に詫びを入れると、

「あー！あの人たち、おててつないでるよー！」

「らぶらぶだねーっ。」

前方から元気な声が飛んできた。前の座席に座っていたガキども（計3名）がわざわざ気付けてくれたらしい。

……声、デカイっての。

横にいる母親らしき女性も、にこにこ笑いながら「仲いいですね。」とかホザくし。

こっぴつこの、フツは「こら、ダメでしょ」とか注意するだろ、母親なら。

いらんフォローいれてないで、さっさとそいつらの口を塞げ。

子供相手に舌打ちは大人げないと思ったので、親の方に八つ当たりしといた。……頭の中で。

だが、なにはともあれ、うるさいガキどものおかげで乗客の注目が一気に集まってしまった。

典型的日本人な私は気ままずくなり、国崎の背に隠れる。

「……クツ、照れた？」

私を覗きこむ国崎は、至極楽しそうな笑顔を浮かべていて。

……むかつく。私は小声で怒鳴った。

「……そう思ってたんなら、離せよ、手!」

「ダメ。こっぴつこの時の那津、可愛いから。」

「~~~~!」

コイツは……っ!さらっとリアクションに困るよつなと、言っつな
つての!」

私は赤くなつた顔を隠すように俯き、すべてに耐える姿勢に入る。まだ騒いでるガキ、見守る母親、興味津々にこっちを見てくる野次馬ども……そして、目の前のこの男。

ここに、私の味方はいないな……

敵ばかりの現状に嫌気がさした私は脱力し、早く着いてくれるのを祈るばかりだった。

はあ……

そんで、十数分後。やっと……やっと！！
バスはR広場に到着した。

私はバスを降りると同時に国崎の手を振り払う。

そして。

「I am freeeee!!!」

おおーきく手を振り上げ、ガッツポーズ。

ヤバイ。この爽快感、ヤバイ。両手が空くだけで、こんなに解放された気分になれるとは。

「……………そこまで、嫌がるって……………」

国崎が後ろでボソボソ呟いてるが、もうスルーだ。無視だ。

とにかく、後は飯食って帰るのみっ！今日、これ以上のイベントはもうないだろうっ！ー！うん、断言できる！

私は公園の芝生を踏みしめながら、後ろを振り返った。

「よしっ、国崎！どこに食べに行くーっ!?!」

「……急に元気になったな。」

「もーちよつとで今日が終わるからね!?!」

「お前、今日を何だと思ってるわけ?」

試練だよ?色々と。

国崎はポケットに手を突っ込んだまま、ぶすつとした顔で何やら考えていたが、やがてニヤリと口角を上げた。

……嫌な顔。そして、悪い予感。

「じゃ、俺の家で食うか。」

何だと?

「いやーだーっ!!嫌だっって言ってるじゃんっ!!」

「往生際が悪い。ホラ、ちゃんと歩けよ。」

広場から歩くこと……20分？いや電車も乗ったし、もったか？

…よくわからんが、とにかく、

駄々をこねながら、国崎に引きずられながら、私は彼のウチに強制連行されていた。

ちなみに、私、涙目。そして、度々私の悲痛な叫びが響く。

「っ、なんでわざわざ家！？その辺の居酒屋とかでいいじゃん！」

「食費が安く済む。」

「今更節約とか、男としてどーなのっ。」

「あー悪かったな、ケチくさい男で。」

……くっそ！何言っても軽く流しやがって！いいから手え離せー！
っ

「それに、ほら。デートっばいこと、そのに。彼氏の家に行く。」

「『ほら、じゃないっ！却下！』」

だから君、彼氏じゃねーだろおお！それ、いつまで有効にする気だっ！？

ガンガン言い争っていたら、（主に私が、だが）いつの間にか国崎の住むマンションが、もう目前にあった。ソレが視界に入った途端、冷や汗が身体から噴き出る。

……もう嫌な予感しかしない。

またこの間みたいな展開が起こったら、今度こそ私、死ぬかも？

「っ！もーやだ！帰るっ！」

数日間で何回ココ来るわけ？私っ！？

「だから、帰さないって。」

愉快そうにささやく国崎。

こういう時の国崎の顔は、嫌に輝いて見える。

気のせいか、黒いシッポとツノが生えてるような……

……って、典型的な悪魔って奴？

あははははは………笑えねえ。

エレベーターがチンツと小気味のいい音を立てて5階に到着した時、私はもう、ぐったりとしていた。

なんやかんやで、結局抜け出すことが出来なかったのだ。

この、悪魔サマから。

……あークソ。1回でいいから逃亡成功してみてえなー
今回も敗北かよ。なんで私には『逃げる』コマンドがナイんだろうな？

ここまで来たらもう無理だ、と私は諦めの表情を浮かべ、彼に続いて吹きさらしの廊下を歩いた。

すると。

「…え？」

「は？」

私と国崎は一緒にマヌケな声を出してしまった。

国崎の家の前に、誰かが立っているのが見えたからだ。

ぴったりとドアに背中をつけて、本人が帰ってくるのを待ってるみ

たい。

…夕日に照らされて顔はよく見えないが………国崎の知り合いか？
誰？

「…国崎、誰かと約束してたの？」

「…そんな予定はなかったはずだけど。」

不審がる私たちはさらに歩を進め、その人の姿を確認した。

女、だ。

艶のある長い黒髪に、細い手足、小さい顔。真っ白なワンピースを着ている。

……え、何。マジで何者？

麗奈さんとタイプは違うが、並ぶくらい。清楚で可憐な美少女じゃないか。

私は驚きに目を見開き、首を傾げたが、隣の国崎の渋い表情と、駆けよって来た彼女の第一声で彼女が誰なのかを、ハッキリと理解した。

「…聖悟っ！よかった、また会えて！！さっきは、なんでいきなり逃げ出したりしたの？」

あ、例の国崎の元彼女かこの人。成る程、と。

国崎の元カノさんらしき人は、目を輝かせながらそのまま国崎にしがみつく。

そして、上目使いに彼を見上げた。

「聖悟……会いたかった……」

……いや、会いたかったって、アナタ。

感動の再会シーンを演じてる所悪いけど、家で待ち伏せしときゃ、100パー会えるだろ。アホか？

国崎も同じ気持ちらしく、口元を引きつらせたまま彼女に話しかけた。

「……何で、家まで来たんですか。俺たち、もう別れたはずですよ。ね。」

……！瞬間、背筋にゾクゾクつと悪寒が走った。

……け、敬語っ！！この俺様ドS男がっ！？

驚いて国崎をバツと振り返ると、彼はもうすでに完全にキャラチェンジしていた。

顔の表情まで違う。顔は微笑んでいるのに、どこか冷たい空気。

すげえ、鮮やかな早業だ。しかも違和感ない。

……そうか、コイツ、他の女子にはこうだったけ？付き合ってた彼女にまでコレだったのか。

「……く、くっ、」

理由は分かったが、私からすればコイツがこんな敬語紳士キャラを

演じているなんて、おかしすぎる。つい含み笑いが漏れてしまった。

「……………」

…国崎が無言で私の手をつねってきたので、無理矢理笑みをひっこめたが。

…スイマセンって。もう笑わないよ。地味に痛いから離せや。

私は口を不自然に引きつらせたが、そんなことは眼中にない

……っ！っ！か、私の存在自体が目に入らないらしい女は、話を続けた。

「そんな…だつて、私、あなたのこと諦められないんだもんっ！」

「…でも、もう1年も前の話ですし、今更……………」

「今更じゃない！私は本当に…っ！」

「でも、あのときっぱりと別れたのは事実でしょう？そうですよね。」

「

あくまで紳士（偽）に接する国崎。

だが、やんわりとした拒絶を繰り返す奴にしびれをきらした彼女は、とんでもないことを言い出した。

「で、でもっ聖悟も私のこと、まだ好きなんですよっ！？」

……………

……………

……………は？

この衝撃発言には、国崎も私も完全に固まった。何、言ってるの？この女。え、今の日本語？

「……えっと、それは、どういう？」

国崎も困惑顔だ。当然のごとく。

「ごまかしたって、私には分かってるわ。」

だから、何を？

私の心の声に答えるがごとく、女は自信満々に息をすいこんで、続いて言葉を紡いだ。

…正直、あんま聞く気ないな。なんか、麗奈さんの時と同じ既視感。

「私、1年前にあなたと別れた後、毎日後悔したわ。そしてずっと聖悟のことばかり想ってた…」

今日水族館に行ったのも、あの日の思い出が忘れられないからよ。

そしたら、聖悟に会えるなんて！しかも、今日、この日につ！

それで確信したの、あなたも私のこと、まだ好きなんだって！！！」

………

……あ、ゴメン、ストップ。やっぱり聞かなきゃよかったわ。

てか、またデジャヴかなコレ？話が長い上に、後半意味分かんねえよパート2。

私は超冷めた目で、目の前の女を見返す。

この女、何なんだ？コワイんだけど。
美人のくせに、とんだ勘違いストーカーだよ。そこまで断定できる自信は、どこから生まれるのか。
この人と比べたら、麗奈さんが普通に見えるから不思議。

とにかくこのストーカー女から離れたくなった私は、彼女が（自分に）酔っている間に、私と同じく激しく引いている国崎に小声で話しかけた。

（……ね、国崎。私帰っていい？）

（は？ダメに決まってるんだろ。）

（だって、私が居たらさらにヤバい状況じゃん。あの人、コワイし。）

（……それは、確かにそうだが……）

（頼む。私、まだ死にたくないから。）

手を合わせて必死で頼む。

あ、ヤバい。もうちょいで、あの人がかっち向く。

お願いしますって。国崎さん。

すると、

（……はあ、分かったよ。下手にコイツを刺激してもアレだしな……）

私の必死の説得が通じたのか、国崎も肩を落としながら了承してくれた。

……っしや！なんだ、コイツにしちゃあ、あっさりOK出たな。そ

れだけヤバい相手ってこと？
ま、何にしる、ラッキー……

「……何、内緒話？そういえば聖悟、この人は誰なの？」

ひそかにほくそ笑んでいると、横から美しい顔が私を覗きこんだ。
うわ、き、気付かれたっ！

一瞬固まった私は、笑顔を貼り付けたまま、ギギ、と首を彼女に向ける。

「……ヤー、ハハハ。タダノ国崎クンノ友人デスヨー。今ソコデ会ッ
テー……」

「何で片言なんだよ。」

……だから、怖いんだってば。察せよ、国崎。

「……国崎クンノ、彼女サンデスカ？可愛ラシイ方デスネ。」

「えー、そんなことないですよ。可愛くて美人で性格よくて、聖
悟とお似合いなんて！。」

……そこまで言っつてねえし。勘違いが冴えるなあ、ったく。

何かと言いたいこともあったが、私は別にそんなことを気にする立
場ではない。スマイルを浮かべ、彼女に向かってさっさと手を上げた。

「……デハ、私ハ用ガアルノデコレデ！国崎クントゴユックリ！」

そして、その左手を左右に振りながら駆け足で来た道を戻り出す。
後ろは一度も振り返ること無く、エレベーターまで走っていく。
その顔は、気持ち悪いくらいの笑顔だった。

あばよ、国崎の元彼女とやら。もう二度と会うことはないだろう。

とにかく、幸運にも今から家に帰れるっ。

国崎から逃れることに成功した！その点では君、よくやったよ！

走りながらにやける私に、これからの展開を予想し、ため息をつく国崎。

2人とも、気づくことはなかった。

……長い黒髪の女が、妖しげな笑みを浮かべたことを。

「……はー、つつかれたぁ……。」

黄昏時、というのだろうか。今にも落ちそうな夕日に、薄暗くなつていく空。

そんな幻想的な景色を眺めながら、私は一息ついた。

後方を見ても、国崎のマンションはもう見えない。あの勢いのまま、結構歩いて来てしまったようだ。

…あとは、電車とかを乗り継ぐだけ、か……本当、長い一日だった

な。

ふと足をとめ、首元にぶら下がっているペンギンを見る。光をはじいて輝く銀色、そしてなめらかなトルコ石は、海面のように穏やかできれいな色をしていた。

私は目を閉じ、今日のことを思い返してみる。

…発端から意味不明だった今日のデート。

色々トラブルもあって、酷い目にあつた気もするが。笑いあつて、喋りまくって、ふざけて。

「……なんだかんだで、楽しかった、かな……」

言いながらくすつと、ひそかに笑みをこぼす。

…こんなこと、国崎には絶対言えないな。きっと調子に乗るだけだし。

「っし、帰るかー。」

んーっと伸びをした後、足を突き出し、歩き出した。

てくてくと、薄暗がりの中を歩く。周囲に人気はないが、別に、深夜にバイトをしている私にとっては、いつものことだ。気にせず、ずんずんと歩いて行く。

1歩、2歩、3歩。何ら変わらない、普段の歩幅。

しかし、

ドカッ!!

衝撃。4歩目を歩いたところで、何者かに、背後から殴られた。
…いや、正確にはよく分からないが、後頭部辺りに鋭い痛みが、走
った。

「……………つ、な……………に……………」

視界が、ぼやける。思考がだんだん停止していく。

薄れゆく意識の中、私の背後にいた相手が口角を上げ、呟くのを聞
いた。後ろにいたヤツは 確かに、こう言った。

『消えて』と。

意識はそこで途切れ、すべてが真っ暗になった。

03 (後書き)

突然のシリアス展開。次回に続く。

暗闇（前書き）

注意

この章は多少の残酷な表現・暴力表現を含みます。
閲覧にはご注意ください。

暗闇

目を開けたのに、視界は暗いままだった。見通しは悪く、数メートル先も見えない。ぽっかりとあいた闇が自分を飲みこんでいるみたいで、背筋がうすら寒くなった。

……ここは、どこだ？

瞬きを繰り返し、私は考える。多分、知らない場所だ。…よく見えないけど。頭がやたら痛むし、あまり記憶がはっきりしない…。

頭を抱え、数分くらいボーっとしていると自分が冷たい床の上に倒れていたことに気付く。

自然物を感じさせないコンクリート。つてことは………どっかの廃ビルとかかな、ここ。やたらホコリっぽいし。

そして、

「……………ああ、拉致されたのか、私。」

ぼそつと、どっか他人事みたいに呟き、事実確認。自分でも驚きだが、意外に冷静だ。まだ頭がぼんやりしているからだろうか。

…幸いにも、よくあるドラマみたいに手足は縛られていないようだ。荷物は流石にないけど、とりあえず自由には動ける。私はふらりと立ちあがり、歩き回ることにした。

首を回し、部屋全体を見る。…あまり広くない、灰色の一室だ。用途の分からない木箱や段ボールなどが置かれているから、廃ビルと言っよりは倉庫の類だろうか？何にしろ、近所では見たこと無い。

……..
…アレ、もしかして私、ヤバい？

途端に冷や汗が体を伝う。暗闇の中で私は青ざめた。

…え、ど、ど、どーしようっ！もしや殺されるっ！？
危機感を覚え、（今更）慌てふためきだした私はとりあえず周囲を見渡し、何か武器的なものを探してみるという妙な行動に打って出た。
が、…結果、何もなかったわけで。がつくりと肩を落としてため息をつく。

…ま、私みたいな非戦闘人種が何か武器持ったところで何も変わらないけどさ……
は、分かってるって、んなこと。
自嘲気味に笑い、またあぐらをかいてその場に座った。

こうなれば仕方ない。とりあえず誘拐犯の到着を待つしかないだろう、と腹を括る。

……しっかし、面倒なことになったなあ。
どーしてわざわざ私みたいな貧乏学生狙うかな、誘拐犯サンも。金を請求されても、払えないよ？多分。
今の預金通帳の残高を思い出し、私は再度ため息をついた。

……今、何時だ？どれくらい経った？
暗闇の中だから、時間が全く分からないが結構な時間、この部屋にいる気がする。

つか、誘拐しといて犯人は何してんだ？
……え、まさかの放置？
どんだけ興味ないのさ、私に。だったら帰してくれよと言いたい。

ボタンッ！！！！

そうやって姿の見えない犯人に悪態をついていると、いきなり白い光が暗室に差し込んだ。

真っ白な光がドアの形に切り取られ、室内を照らします。

あ、あれドアだったのか。
歩き回ったのに気付かなかったとか……やっぱり私、生存能力低いな。そんな下らないことを考えながら、あまりの眩しさに目を細める。
強い光ではなかったが、闇に慣れ過ぎた私の目には、毒だったようだ。

しばらく瞬きを繰り返し、やっと目が開けてきたところに、いきなり目の前に人が接近し、両腕をグイッと引つ張られた。座っていた私はそのまま起こされ、部屋の外に連れ出される。

無言のまま手を引かれるが、相手が誰だか分からないので、とりあえず空気を読んで従う。

逆光で顔は分からないけど……手の細さからいって、女？

ガンッ！！！

「っ、ぐー！！」

カビ臭い廊下のような通路を抜け、新たな部屋に入るや否や、手を引いていた人物に突き飛ばされた。

…腰を強打。痛い……後で青アザになってるかも。腰をさすりながら体勢を整えようとすると、

「目は、覚めた？」

ここにきて、初めての声。場所的に、目の前の人物から発せられたようだ。

予想通り、やっぱり女だ。

しかしどこかで聞き覚えがある声だと思い、ゆっくりと顔を正面に

向けた。

そこには。

「……え、」

白いワンピース、長い黒髪の美少女が妖しげな笑みを口元に浮かべて私を見下ろす姿があった。

私は思わず口をぽかん、と開ける。

国崎の、元カノさん……じゃ、ないか。

驚いた。私、この人と全く面識ないのに。

「……えー、と……」

間抜けな声を出しながら、言葉を探す。

…何を話せばいいか、全く分からん。だってほぼ初対面なのに、コシ。

私が困っていると、彼女の方から話しかけて来た。

「……ああ、自己紹介がまだだったわね。私は 篠原 未央（シノハラ ミオ）。

K女子大学の2年生よ。よろしく。」

…や、そんな笑顔で言われましても。

聞いてないし、よろしくしたかないんですけど。てか、この状況でそのセリフ？

「あ、はあ。そうですか。私は本城那津です……」

それで、何で自己紹介してるかな、自分。反射って怖えな。

するとシノハラさんとやらはにっこり笑って、

「知ってるわ。最近、聖悟にやたら付きまっとうてる、害虫女。」

毒を、吐いた。

……いや、毒つつーか、単なる悪口だな。『害虫』とか、久々に聞いたよ？私。

何となく話の分かってきた私は、息をついて、落ち着いた口調で返した。

「……あの、付きまっとうた覚えはまっつたく、無いんですけど。」

「とぼけても無駄よ。聖悟の傍で、いつもうるちよろして。目ざわりなのよ、アナタ。」

……だが、まあ予想通り、全然聞いてくれないシノハラさん。

こういうタイプは何言っても無駄、と。

……だからさー、そりゃ、国崎が勝手に来てるだけだったのに。

……何でこういうツケは全部私に回ってくるのかなー。

文句があるなら、本人に直接言えばいいんじゃない？きつと、笑顔で一刀両断してくれるからさ。

マジで頼むから、こっちに来るな。

「……………」

そこまで愚痴を呟いた後、私は無言で彼女を見上げ、脳をフル回転させる。

…脳内ではバカなことを考えていたが、ここで返答をミスると、ヤバイ。下手すりゃ、火に油だ。

さて、どうしようか……

変な沈黙が流れる。

もちろん、私が思考中だからだ。無音のこの空間は、とっても気まずい。

何も話さない私にいらついたらしい女は、ふいに私の髪の毛を掴みあげた。

「何とか、言えば!？」

怒鳴りながら、結構な力で引っ張られる。

シノハラさんの顔は怒りに歪み、美人なのに、もの凄く怖い。まるで般若のようだ……

…痛い。冗談じゃ無くかなり痛いよこれ。頭皮がギリギリ言ってるし。

相手サンはかなり短気と見た。ここで『何とか』とか言ったら、ボツコボコにされそうだな。マジで。

そんなところで、じつと痛みに耐えながら私は今から演じるキヤラを決めた。

上手く乗り切れるか分からんが……やるしかない、か。

突如、私は体をガバツと起こし、髪を掴むシノハラさんの手ははずして、彼女の目の前に立った。

「な、何よ！」

いきなりの私の行動に動揺するシノハラさん。
私は彼女など目もくれず、

「……………ごめんなさいーっ……！」

ベタつと、勢いよく地面に頭をつけた。

必殺、THE ジャンピング土下座。よい子はマネしちゃ、ダメだからね

「……………え、…は？」

ぽかん……と口を開け、間抜けな顔を作るシノハラさん。

…でも、顔が顔だから可愛いな。君、これくらい愛想あつた方がいい

いよ、うん。
当然の反応、ありがとう。

私は一瞬顔をあげて、相手の反応を確認した後、また地面にべたりと頭をくつつけた。
そんで、

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいーっ！ーっ！ーっ！ーっ！ーっ！ーっ！
すよね、私みたいなやつが国崎君に近づいてんじゃねーよって話で
すよねっ！あの人なんて、マジで雲の上の存在なのに調子乗ってま
したあああ！」

頭をガンガン地面にぶつけながら息継ぎなしで、まくしたてる。
…
つか、「叫ぶ」レベルだな、もはや。

この部屋いっぱい響き渡る私の声は、ある種不気味だ。
周辺住民の皆さん、騒音しつねーい。

「…ちよ、ちよっと何

「…やっぱ身分不相応だよ…国崎君、優しいから私もつい傍にいたい
な、とか思ったりして……。ああ！スイマセン、こんなこと言って
キモイですよねっ！」

「……………いや、だか

「いえ！言わなくても分かってますっ！全部私のせいですから！
…ああ、もう嫌だ………何で私、いつもこうなんだろう………下手に夢ば
っか見てテメーいくつだよマジで死にたくなってきた………」

「……………。」

異様な威圧感と鬱オーラ全開の私に、どう接すればいいのか戸惑う
彼女。

最初の勢いは、もう無い。

私はかなーり引きながら自分を見つめる女に気付かれないように、ニヤリと笑った。

…よかった、どうやら有効だったようだ。

私の、気弱×鬱キャラ。

…ま、意外とハマリ役らしいからな、この性格。ホントの中身とは172。くらい違うけどー。

そう、相手が毒を吐くなら、その前に毒を抜けばいい。

こんな病気みたいな鬱キャラだったら、怒鳴ったりする気力も失せよう。

顔を俯けながら、心の中で「やった!」と呟く、と

「…だ、だからっ顔上げて!とにかく私の話を聞きなさいっ!」

焦ったようなシノハラさんの声が頭上から降ってきた。

私はさらに追い打ちをかけるべく素早くキャラに戻り、至極ゆっくりと頭を上げ、すぐに俯いた。

目の端には涙。口はぎゅっと結んだまま。

「…何ですか……もう私のことなんか、放っとして下さい……!」

プラス、地獄の底を這うような、ドス暗い声。

鬱度、MAXである。

あは、危なすぎて近寄れないよね、こんな女。フツーは。

ハッキリ言って、私でも逃げ出すわ。こんなヤツがいたら。

ギロリと下から睨みあげてやると、彼女はう、と声にならない声をもらす。

「な、何よ、この女……！報告と全然違うじゃないっ！」

そして頭を片手で抱えながら、ボソボソと言葉をこぼした。

……報告？

「……あの、」

「！な、なに!?!」

気になったのでふいに声をかけてみると、思いっきり顔をそらされた。

…そんな警戒しなくても。

キャラとはいえ、そこまで引かれると那津ちゃん傷つくわ。

私は涙（偽）をぬぐい、顔を上げた。背中が木箱にくっつけ、地面に座ったままだ。彼女の綺麗な顔を見上げて口を開く。

「そういえば、何で私のこと知っていたんですか？他校なのに。」

初対面ですらないのに、この状況。おかしいよね、流石に。

「……あ、ああ。そんなの簡単よ。私、S大学にトモダチがたくさんいるもの。」

彼女は、まともな質問に気が緩んだのか、少しほっとした顔をして答えてくれた。

……トモダチ、ねえ。

いつもの、あの女子どもの何人かがこの人のお友達ってことか。成る程な。…なら、さぞ屈折しまくったウワサがこの人の耳に届いてるんだろうな。

私は納得したように頷いて見せた。

「じゃあ、国崎……君、のマンションで会ったときには、もう私のこと知ってたんですね……」

「…そうっ！で、その子たちから、アナタがいつも聖悟にベタベタくっついてるって聞いたのよ！」

途端、パツと顔に生気が戻り、私に詰め寄る彼女。

…ゲ、ちよつと確認してみただけに元氣取り戻してきた。

単純だが、立ち直りも早いのか。この人。

麗奈さんとちよつと似てるかも。…もちろん悪い意味で。

「…う、嘘です！そんな、ベタベタなんておこがましいっ！出来るワケないじゃないですかあ！く、国崎君とは、ただの友達ですよお」

とにかく調子乗られたらまずいので、また反撃、そして反論。

…妙な誤解されるのだけは避けたいからね。

わたわたと手を振りながら顔をゆがめる私に、相手がちよつと怯むのが見えた。しかし、今度は簡単には引いてこない。

「嘘よ！今日だって聖悟と一緒にいたくせに！！」

「だから、ソレもただ偶然会っただけでっ！」

「偶然でマンションの前まで来る？どうせ、アナタが言い寄ったん

でしょう!」

「……………」

「何も言わないってことは凶星? ホント、ムカつく女ね!」

…つく、私が押されてるだと…………?

やはり元から狂ってるヤツに対抗するのは無理があったか?

「だからっ! それは誤解で……………」

「違っっ! アナタは……………」

私も負けじと叫び返すが、シノハラさんはさらにそれを凌駕する勢いで、責め立ててくる。

…うーわ、ヒートアップしちゃってるう……………これ、どうすりゃいいのわ。

こうなったらヤケだ、と私は息を切らしながらもまた相手に向かって食ってかかった。

何分か経ち、この意味のない口論に私も疲れてきた。多分、向こうもナニ言ってるか覚えていないだろう。

だんだんと双方の言葉づかいも荒くなってきた。

「…はあっ、そんなこと、分かってますっ……………」

「…げほっ、だったらアナタは何でまだ傍にくっついて……………」

…ちなみに、議論自体は一步も進んでいない。

…あーっ面倒クセー！！

コイツは人の話を聞いているのか？ことごとく私のセリフを打ち消しやがって。

自己中か？自己中なんだな？

国崎も、よくこんな女と付き合う気になったもんだっ！

会話を重ねるごとにだんだん苛立ってきた私は、

つい、この人に会ってからずっと気になっていたことをしゃべってしまった。

「…貴女は国崎君と、もう別れたんですよね？だったらそんな執着する必要、無いじゃないですかっ！！」

薄暗い部屋の中、私の声が響く。それ故に、その後訪れた静寂が、やたら重く感じた。

言つて、すぐに後悔した。数秒前の自分を抹殺したくなるくらいに。

…私の阿呆っ！こんなこと言ったら、相手をさらに怒らせるだけだろうが！

焦った私はマジで殴られるかと思ひ、身を硬くするが、

予想外なことに、彼女はいきなり口を歪めて笑いだし、やたら甘い声色で答えた。

「だって、欲しいもの。」

「……え？」

私かとぼけた顔を素でしてしまうと、シノハラさんはさらに笑みを深くする。

「…聖悟は最高の男よ。あのルックス、スタイル！まさに完璧な私に釣り合うと思わないっ!？」

「……………」

「今日、水族館で会ってやっぱりどうしても欲しくなった……
聖悟だってカワイイ彼女が欲しいでしょう？もう1度付き合っべきなのよ、私たちは。」

そこで、彼女はまっすぐに私を見て来た。目には、なにか狂気のようなものが宿っている。

「私の、完璧な生活のために、聖悟は必要なの。」

冷たい、声だった。

何、ソレ。そんなんまるで…

「…国崎のこと、好きじゃないの？」

思わず、キャラを忘れて話してしまう。

しかし、興奮してきた彼女には気付かれなかったようだ。笑みを貼り付けたまま答えてきた。

「ええ、もちろん好きよ。決まってるじゃない。彼氏のレベルはいつだって女のステイタスだもの。」

そして狂ったように高笑いする。

…その後も女は、つらつらと自分の自慢話を語っていたが、私はもう、聞いてはいなかった。

腹の底から、ふつつつと怒りが湧いてくる。

こんな、不愉快に思ったのは久々だ。

何といっても、この女が気持ち悪くて仕方ない。吐き気がする。

コイツは、一体、国崎を何だと思ってるんだ。ブランドの鞆？都合のいい道具？

だから、『スキ』？

ホントの『国崎』なんか、1ミリも気にしちやいないじゃないか。怒りが、体中をめぐる。彼女はまだ、雑音を発している。狭い空間がさらに凝縮されたように感じ、眩暈がした。

醜い。醜い。醜い。反吐が出る。

アイツを思いだす

「……………れ」

本当に自然に、口を動かす。

「…は？何？はつきり言いなさいよ！」

彼女も口を動かすのを他人事のように見ていた。

……………

…ああ、もういいや。

何でか知らないけど、酷く気分が悪い。

私は心の中で制止する声を見殺し、低い声で続けた。

「…黙れよ、ブス。」

どうにでも、なれ。

「……………な…っ!?!」

女は目を見開き、顔を歪めた。

反対に私はゆっくりと立ち上がり、凍てつくような冷たい視線を彼女に送ってやる。

「…さつきから、黙って聞いてりゃ勝手なことばかり言いやがって…君、何様のつもり? ブスのくせに何が完璧? 完璧って言葉の意味、分かってるの?」

「……………っ!…ブ、ブスって、アナタの方がよっぽど醜いわよ!」

「誰が顔のハナシしてんだよ。性格がブスだって言ってるの。…何で国崎が君と別れたか、すぐ分かったよ。君、人生で一度でも自分が悪いとか思ったことある? 無いだろ? 性格が破綻してるんじゃ、いくら美人でも付き合いたいワケないもんなー?」

ニヤリと口の端を上げて、女を見下してやる。

止まらない、止めれない。

後先を考えなかったわけではないが、とにかくムカついていたのでつつかえがとれたように言葉が溢れてくる。

そんな私の毒を真正面から受けたシノハラさんは、顔を真っ赤にしながら怒りに震えだした。

「…あ、アナタ……………本城那津! さつきと全く性格が違うじゃないのっ!」

「そりゃ、そうだろ。さつきのは作ったキャラだし。…ま、台無しになったけど。」

「…きゃ、キヤラって。」

「見破れるワケないよね。付き合ってたくせに国崎が性格作ってたことも、気付かないんだもん。」

「!?!? 聖悟も……」

シノハラさんの愕然とした表情を見て、彼女が本当に性格のことを知らされてなかったことを知った。

哀れな女。でも国崎もこんなろくでもない女になんか、素はさらしたくないよな。

分かるよ。

肩をすくめ虚空を仰ぎ見る。そして私はさらにセリフを紡いだ。

「そ、つまりシノハラさんは国崎に騙されてたってことー。でもお互い様じゃない? 君だってアイツを利用してたわけだし。」

「…で、デタラメ言ってる、締めるわよ!」

「デタラメじゃ、ないって。アイツの素はドSな俺様野郎だから。」
「ど…!?!?」

シノハラさんは目を瞬かせ、驚愕の表情を浮かべる。信じられない、といった風に。ザマアミロ。

…そこで、一瞬の間があいた。
と思えば、

今度はシノハラさんは鬼気迫る勢いで私に掴みかかった。

「…ちよつと待って。じゃ、何でアナタがそれを知ってるの!?!?」
「……………」

私を睨みつける彼女を見下すように私も視線を合わせる。

……ま、ごもつともな質問だな。

おそらく誰にも易々とは見せなかった国崎の地の性格を、何故私が知ってるのか？

それは

……

……あれ？何で、だ？

「……さあ？」

「はあ!？」

や、そんなこと言われても、マジで分からない。

だって、最初からああだったぞ？記憶には、毎回私を弄って楽しむ国崎しか浮かばない。

むしろアイツが紳士キャラやってたって方に驚きだったからね、私。

本気で悩む私を余所に、彼女は何か屈曲した感じでその答えを受け止めたらしい。

「……そう、アナタは自分だけが彼の特別だって言いたいワケね。自分だけが聖悟のことを理解してやってるとでも？」

……あ、ヤバい。なんかキレたよこの女。そんな解釈、誤ってるってのに。

「やっぱり、許してはあげないわね……」

そんな彼女の不気味なセリフに何か嫌な予感がした私は、身をひねって掴んでいた腕をもぎはずし、距離をとった。それと同時に、近づいて来る複数の足音が響く。

…いかん、この展開は、まさか

「未央ー、帰ったぜー。」

「コンビニ遠いよな、こっから。」

「あれ、例の女のコ、目覚ましたの？」

「アハハ、何この間抜け面ー」

私の悪い予想は的中し、奥の扉が開いたかと思うと、複数の男女が部屋にどやどやと入って来た。

……ひー、ふー、みー…

……は、8人だと!?

うわ、多い!しかも男女比、男の方に偏ってるし!

しまった、実はモンスターハウスだったか!?

今度は私の表情が凍る。逆にシノハラさんは癪に障る笑みを浮かべながら、呟く。

「……ふふ。遊びは終わりよ、本城サン?さつきはよくも私を侮辱してくれたわね。」

そして、

「さ、あなたたち……やってちょうだい。」

最悪な命令を、下した。

それと同時に近づいて来る、妙にガタイのいい男たち。

「なに、ホントに好きにしていわけ？」

「そうらしいぜー？」

「ちよっと、でもヤルのはやめてよ？女子の前なんだし。」

「ちえー、マジで？」

「まあいいじゃん。じゃ、よろしくね。ナツちゃん、だったか？」

私は、顔を真っ青にして少しずつ後退したが、すぐに背中が壁に突いてしまい、なす術をなくした。

男たちが目の前に迫ってくる。私は観念して、目を閉じた。

これは……死んだかな。私。

やっぱりどこか他人事のように、頭の片隅で思った。

…ドカツ！バシツ！バキイツ！！

灰色の空間に反響する、何とも痛そうなお音。

…もちろん、その中心は私だ。

見知らぬ男たちは、容赦なく私を殴ったり、蹴ったりしている。

どのくらい、殴られたんだろう？

頭、肩、お腹、足……

なんか、もう身体全体が痛い。

私が怒らせたからとはいえ、他人によくここまでできるな！。

意識も朦朧としてきたし、連れてこられた時より断然、気分が悪い。

「……か、はっ！」

ぼーっと天井を眺めていると、今度は正面の男のローキックが鳩尾に決まった。

…わ、最悪、口切った。痛い。

「ハハハハッ！どうした？もう動けねえか？」

「クスクス……無様な姿ね！国崎君に手なんか出すからこんなこと

になるのよっ！」

「なあ、次俺が殴っていい？最近ストレス溜まっててさー」

それとともに、ふりそそぐ耳障りな男女の笑い声。

…ホント、気持ち悪いな。身体的にもそうだが、ここにいる人間の、何とも醜いこと。

ひどすぎ。てか、本当に人間なのか？この人たち。

「…ご気分はいかががしら？本城さん？」

あまりの痛さに、うずくまったままでいると、シノハラさんの甲高い声が耳に届いた。

「……気分？良さそうに…見える…？」

こんなときでも、減らず口を叩いてしまう私は、多分バカなんだろう。でも。この女には屈したくない。

そんな下らないプライドだけが私を支えていた。…さっきとは、えらい心境の変化だ。

「……ふふ、確かに見えないわね。それで、どうかしら？自分のやったこと、きちんと反省した？」

「私が…何を、したって？」

目を閉じたまま細い声で呟くと、女はカッと目を開き、いきなり私の胸あたりを蹴った。

「っぐー！」

一瞬、息が詰まる。

しかし、彼女はそんなことは気にも留めず、激しい感情をそのまま表に出すように、私にぶちまけてきた。

「っだから！聖悟に言い寄ったこと、私を侮辱したこと、その他諸々、すべてよ！！分からないのっ!？」

髪を振り乱し、血走った目で私を睨む彼女に、もはや、美人だった面影は残っていない。

…バケモノ、みたいだ。

これが『嫉妬』ならまだカワイイもんだが、この女は自尊心とプライドだけなんだよな……行動理由が。

クズが。

「…っ、はは。」

思わず乾いた笑いが漏れる。

「…何よ。何が、おかしいの？」

だつてさ。

「…可哀想っ、だから…君という、…人間が……」

「……!？」

シノハラさんは一瞬目を見開くと、また私の胸倉をぐっつつかんだ。

「な、なんですって……?もう一度言ってみなさいっ!」

「…っ!ゲホッ、ゴホッ……!」

…無茶、いうな。思いつきり人の体、蹴っついて。

「私が、可哀想……？何をバカなことを！！」

「……っそこに気付かないのが、可哀想だっただよ！！」

私は最後の抵抗とばかりに、苦しさを押さえながらも思い切り声を張り上げる。

倍返しされようが、これだけは、この女に言っておきたい。

「……そもそも、私を消したところで、易々と国崎が振り向くと思っ
てんの？国崎が君を相手にしないのは、単に君の性格が原因だろ
うが！」

ただならぬ気迫に気圧され、シノハラさんは目を丸くしたが、プラ
イドの高い性格からか、すぐ口を開いた。

「……あ、アナタが聖悟に近付いたからよっ！私が悪いんじゃない！
！」

「は、まだそんな頭悪いこと、言うの？自分のせいだっただけ気付か
ないとか、本気の阿呆だな？気の毒に。」

鼻で笑ってやると、彼女の顔はみるみるうちに赤く染まる。

怒りに。

「……っ！本城……那津……まだ痛い目に遭いたいの……？」

そして血走った目で私を脅してくる。

しかし私は息を大きく吸い、

「……本当の国崎のこともよく知らないくせに、欲しいだの自分にお似合いだの、好き勝手ぬかしやがって……！人の心がそう簡単に手に入ると思うなっ！！」

シノハラさんに一番言っただけでやりたかったことを叫んだ。

静寂が、辺りを支配する。

呆然とした様子のシノハラさんも、さっきまで笑っていた男女も、時が止まったかのように全員動きを止め、言葉を吐いた私を見ていた。

そして、その私は、

ん、我ながらクサイこと言ったな。しかも、かなりの暴言つき。……こりゃ、ホントにもう生きて帰れないかもね！。

なんて考えながら、この後の容易に想像できる未来を思い、自嘲気味に笑って、彼らが動きだすのを静かに待っていた。

いや、実際は、はたして想像通りにはならなかった。

そのあと第一声を発したのは、ここにいる誰でもなかったからだ。

ミシッ、ミシミシ……バコオオオオン！！！！

突如起こる、ものすごい轟音。

そして地響き、砂煙の後、聞こえた声。

「いいこというねー、ナツちゃん。惚れ直しちゃった」

「どーも、こんばんわー。ちょっとお邪魔するよ。」

耳に届いた聞き覚えのある声の持ち主、

水谷信二と、斎藤宏樹が

蹴り破られてボロボロになった扉の前で立っていた。

04 (後書き)

少しダークな内容になりました…。
苦手な方スイマセン。ラブコメと豪語しといてこんな話(泣)

ヒーロー登場？そして…

びつくりした、なんてもんじゃない。

予想だにしなかった登場人物たちに私は驚愕に目を見開き、呆然と彼らを見つめた。

…えっ、なに、幻覚？私、ついに目までイカレたのか？

「……ちよつと、ナツちゃん？せつかく助けに来たんだから、もっと喜んでよー。」

「ま、ここまで来るのに結構時間かかっちゃったけど。遅れてゴメンね。」

しかし、私に近付いてくる2人は、間違いなく水谷・斎藤兩人だった。

軽い口調で話してはいるが、2人とも、表情は全く笑っていない。

「っ、な、なんでここが……っ!？」

いち早く我に返ったシノハラさんがおそらくここにいる誰もが思っているであろうことを、代表で叫ぶ。

私以上に驚いているらしい彼女の顔は真っ青だ。他の人たちも、ざわめき始める。

「……………」

斎藤と水谷は私の前まで歩を進めると立ち止まり、私のヒドイ有様に顔をしかめる。

そして、くるりと声の方を向いた。

「……そんなコト、別にどうでもいいでしょ。」

いつもとは違う、斎藤の刺すような冷たい声。

「それよりさ、俺たちのダチに、何してくれてんの?」

その恐ろしいほどの迫力に、私は震えあがった。

「……っ!」

息をのむ音がやたらハッキリ聞こえた。

私ですら恐怖を感じたくらいだから、シノハラさんが受けたシヨックは半端ないだろう。

彼女にはもはや顔色が無かった。青どころか、白。みたいな。

「で、誰がやったのかなー?これ。女の子に暴力ふるとか、サイテーだぜ?ええ?」

水谷も斎藤の後に続いて、シノハラさんその他を威嚇する。…コイツも普段と全然違って正直、近寄りがたい。

「とつとと出て来たら?それとも、ビビってんの?」

「俺らも暇じゃねえんだけど。」

ポケットに手を突っ込みながら飄々とけなしまくる彼ら。

…ホントに、ヒーロー、か？どっちかっていうと真の悪役登場、ってカンジですけど！
しかも、もう誰ですかレベルだろ、このオーラ！何だ、君らトランスでもしたのかっ！

「……っち！いい気になってんじゃねえぞ！」

私が頭の中で色々と突っ込んでいる間に
彼らのブシツケな態度にいらついたのか、助走をつけながら男Aが
斎藤の方に拳を振り上げた。

！

斎藤に迫る男を見て、私は息をのむ。

…や、やばくないか？

さっきから啖呵切ってるけど、斎藤って強いのか？見た目、虫も殺せないような優男だよ！？

マンガとかなら、こういうタイミングで現れるヒーローって普通は
メッチャ強いって設定だけど、流石に現実ではそれはナイんでね！？

見ていられなくて、ぎゅっと目を閉じる。
すると、

「ゴッ……！」

「……っぐぐ……！」

次の瞬間、鈍い音のあとに、くぐもったような叫び声が出た。

1 発で倒され、地面にひれ伏したのは

「……弱。図体デカいだけだね。」

彼に向かって行った男の方だった。

斎藤は、蹴りを入れた足を引きながらつまらなそうに倒れている男を一瞥する。

「……え、強っ」

彼の鮮やかな動きに、私の口から思わずつぶやきが漏れる。

ウソだ。何このギャップ？スゴすぎて、さっきの男がマジでクズに見える。ごめん。」

「……驚いたー？ナツちゃん。それでも昔はヤンチャしてたんだよ、俺ら。」

呆気にとられている私。

横を向くと、いつの間にか水谷が私の隣に座っていた。

……や、嬉しそうに言うことじゃないって、それ。

「……あ、そうですか。」

「反応薄ー。俺ら、地元じゃ結構有名だったんだぜ？ま、聖悟に比べりゃ大したこと無いけどな、俺も宏樹も。」

「へえ、国崎もケンカするんだ。」

「ああ。今日ここにいるヤツらはまだ幸せだよ。聖悟相手だったら骨折じゃあ済まないからな。」

…わー、こわーい。それで、何が紳士なんだろうね？

「…あ、てなワケで女の子たちは下がっててね。キミたちと違って女を殴る趣味は無いから。」

そう言われて、遠巻きに斎藤と水谷を見ていた女子たちはビクツと体を震わせ、コクコク頷いた。

「信二、こいつら雑魚だから俺ひとりで大丈夫みたい。」

「あ、そー。じゃ見学しとくわ。」

斎藤はぐるりと室内を見渡し、敵の方を観察すると、そのように言った。

対して水谷は何事もなく私の隣であぐらをかいたまま。

…おい、何だよその『ちょっと買い物行ってくるわー』並みの会話。…引くよ。女子たちみんな顔真っ青じゃん。

「…っこの！なめるなアホがああー！」

「ブツ殺してやる！！」

そして案の定、ブチ切れるゴツイ男ども。

男Aが倒されたことで動揺していたようだったが、彼の完全にこちら側をなめ腐ったような言いように、男のプライドらしきものが発動したみたい。残り全員で斎藤に突っ込んで行く。

「ホント、馬鹿だよね。」

斎藤の口が、ニヤリと歪んだように見えた。

「……終わり、かな？」

斎藤はパンパンと手を払った。その体にはキズひとつ見当たらない。足元には呻きながらゴロゴロと転がっている、複数の男たち。

「いやはや、やっぱスゲエわ。圧倒的って感じ。宣言通り、彼にとって男たちは雑魚だったらしい。

全員ほぼ一発で沈め、容赦なくダウンさせていった。

「オニーサンたち、ケンカする相手は選ばないとダメだよー。ケガするから。」

水谷は水谷で不気味に笑ってるし。

私、とんでもねえ人たちと付き合ってるんだなあ。

改めて違う世界の方々だと実感していると、斎藤がこっちに走って来た。

「お待たせ。…ナツちゃん、無事？」

「……無事、じゃないけど、まあ助かった。ありがとう。」

「後で手当てするからな。今、圭が車回してる所だし。」

2人は私を起こし、立たせた。途端、激痛がいたる所で起こる。

…う、痛い。おそらく骨まではイッてないと思うが、打ち身とかがヒドイのかな？

顔を一瞬歪めるも、何とか無表情を保ち、私たちはへたり込んでいるシノハラさんの前に立った。

「…さて、始末は済んだし、本題はいろいろか？」

斎藤の台詞がやたら大きく響いた。

斎藤は静かにそう言ったが、彼女は俯いたまま動かない。

「…あ、えーっと、篠原未央さん、だよな？聖悟の……何代目彼女だっけな……」

言いつつ、両手の指を折って数える水谷。

…数えられないのかい。アイツ、もしかや歴代彼女が3桁いつてるんじゃないやねえだろうな？

「…信二、それは置いといて。

ね、質問に答えてくれる？何でナツちゃんにこんなコトしたの？」

「………。」

「…言えないの？」

「………。」

「話してくれないと分かんないんだけど。」

「………。」

じっと沈黙を守る彼女に、だんだんと斎藤の目つきが厳しくなる。一触即発な雰囲気を感じ、私は慌てて彼にストップをかけた。

「ちよ、斎藤。もういいから。」

「……いいワケ、ないでしょ。そんな目に遭っておいで。」

「……ん、まあキズは痛いけど、その人に何言っても通じないし。」

「それは……そうかもしれないけど。」

「男どもは、もう斎藤が倒してくれたじゃん。それで十分だよ。」

言いながら私はシノハラさんを見下すと、しゃがんで彼女と目線を合わせる。

明らかに顔を逸らす女にため息を一つつき、その後ニコリと口元を緩ませた。

「……ねえ、篠原さん。私、君キライだわ。」

「………な!?!」

途端に、黒髪を揺らし勢いよくこちらを振り向く篠原さん。
私は意地悪く、笑った。

「へえ、口、聞けるじゃん？」

「……っ」

しまった、というように彼女は顔を紅潮させる。

「まー、嫌いなのはホントだけど？君は自分のことしか考えないから。いわば、自己中だねー。」

彼女を眺め、にこにこしながら全く穏やかでないことを吐く私。

……あー、言いたいことは言ったはずなのにまたモノ申したくなってきた。

ゴメン、小さい女ですから？ワタクシ。

息を吸い込み、笑顔を作ったまま話し出す。

「…大体さあ篠原さん、人を人とも思っていないもん。そりゃ国崎だつて逃げ出したくなるよ。君みたいなストーリーカー女、恐ろしすぎるから。」

しかも関係ない人を誘拐してボコるって、手が古すぎ。コレ、何年前のドラマ？マジないわー！。

あとさ、今、何時だと思ってるの？一日にこんなイベント盛り沢山じゃ、疲れるって。こっちの都合も考えてよ。それにさー……」

ベラベラベラベラ。

マシンガンのごとく口が動き、言葉が出てくる。…体は超疲れてるのに、口だけこんな動くって不思議だな。

「……………」

篠原さんはポカんと口を開けたまま、私のセリフを聞いている。

「…ナツちゃん……………」

「スゲエ…やっぱ怒ってたんだ。笑ってるけどなんか笑顔が黒い……！」

斎藤の呆れた声&水谷の感心したような声が聞こえたが、口が忙しい私は何もツツコまない。

ザ・スルーだ。

ただただ、今までのストレスをぶちまけた。

「……………な、ナツちゃん。そろそろストップしたら……………」

「多分、もう20分ほど経ってるよ……………」

「…だって！だから……ん？アレ、もうそんなに経った？まだまだ話せるのにー。」

完全に日が落ち、夜も更けてきたころ。

誰が点けたか知らないが、電灯が煌々と灯り、薄暗い室内を照らす。

そこには、ぐったりとする斎藤、水谷、そして篠原さん。

対照的に、蘭々と目を光らせ、さらに言葉を紡ごうとする私。

が、映し出されていた。

えー？何で皆そんなに疲れてんのー？

「……………はあ。いいわ、いい。…もう、分かったから。」

最終的に、篠原さんまでそう言いだした。さらに「コイツヤバいわ」みたいな目で見てくれる。

よせやい。そんな目で見られると、照れるぜー（黙れ）

「あ、ホント？言いたいこと分かってくれたー？」

「…ああ、ええ、うん。ハイ。もうなんかボロボロよ……………」

心身ともにホントに疲れてるような様子を見せる彼女に、私は一応満足した。ふっと笑顔がこぼれ出る。

「ん、じゃーいいかな。…斎藤、水谷。そろそろ帰るよ。」

そう後方の彼らに言いながら、踵を返そうとすると、

「ああ、……………つてええ！？いいの！？これで！」

斎藤の、驚愕に満ちた声が追ってきた。

「えー。いいも何も……私は満足したし？」

ここまでやるつもりは、無かったけどね？

「っ、だって！そんなに痛い目に遭ったのに？」

「あーいいの、いいの。こんなん、どうせすぐ治るし。疲れたからもう帰りたいわ。」

「……………」

どこか渋い表情を作ってじっと私を見る斎藤。しかしやがて諦めたように肩をすくめた。

「……………ま、ナツちゃんがそう言うなら俺らは何も言わないけど……………」

彼は嘆息しながら静かに私の肩に手を回すと、

「……………次、こんなことが起こったら、どうするか分かんないからね？」

鋭い眼差しを、篠原さんに向けて放った。

「……………！！！」

疲れ切ってる中、一瞬で体感温度零度を体験した彼女は、ブルツと体を震わせ、

「……………そ、そんな気持ち悪い女、頼まれたって、もう近付かないわよ

っ!!」

捨てゼリフを吐くと、また俯いた。

流石、斎藤。しつかり釘刺したね。

私は斎藤にフツと笑いかけると、再度篠原さんの方を向いた。

「…じゃ、私はそろそろ行くけど……」

そして、彼女の瞳を覗きこむ。

「…な、なに？」

「……そうやって可愛げのある未央ちゃんの方が、私は好きだよ？」

鮮やかな、笑みを残して言ってやった。

「っ!!!？」

突如顔に血が上り、真っ赤になった彼女。

こういうトコ、可愛いんだけどな、と思いながら私はまた口を開き、

「ちゃんと改心して、人のこともっと考えられるようになりなよ？
そしたら国崎レベルの男なんて、一発で落とせるからさ。じゃーね。」

ヒラヒラと手を振りながら、斎藤とドアを目指して足を踏み出した。

よろよると、コンクリートを踏みしめる。

…うっ、カッコつけてあんなこと言ったけど、やっぱりまだ痛いや……
「大丈夫？」と声をかけながら支えてくれる斎藤に相づちを打つ。

と私はふと、聞いたかったことを思いだした。

斎藤の方をちらりと見る。

「……あ、そうだ。斎藤。さっきの質問答えてよ。」

「…さっき？」

「うん。あの、何でこの場所が分かったかってヤツ。よく探せたよね？」

「ああ、それは」

「…な、何なのよ、あの女……！」

「まだ顔赤いよー、未央ちゃん？」

「う、うるさい、水谷信二っ！気安く呼ばないで……！」

「ハイハイ。……あのさあ、聖悟はもう諦めた方がいいぜー？
ナツちゃん相手じゃ勝ち目無いって。」

「っ何で!？」

「だって」

「麗奈さんが見つけてくれたんだよ。」

「聖悟とナツちゃん、もうチューまでしたらいいから。」

「なつうううううう……!!」

斎藤のトンデモセリフと、

案外近くで聞こえた、水谷の何言ってるんだコノヤロウセリフと、私の名前を呼び衝撃音と共に彼女が現れたのは、全く、同時だった。

「……………」

全員の動きが止まり、何度目かの静寂が辺りを包む。

通常の間人なら一時停止するのが普通だろう。

もうどうリアクションすればいいか、分かんないような状態だ。

「……………っ、え……………う、はっ!？」

一番に発声したのは私だったが、

視線をあちこちに飛ばしながら、言うべきことを見失ってしまった。

……

…あ、いや、ちょっと待とうか。これ、どこからとっかかればいい系？

斎藤に理由説明させる？水谷のセリフの弁解？それとも、彼女の対処？

…おいおい勘弁してくれよジョニー…
突っ込みどこ、多すぎるぜ？俺に全部拾えと？

しかし、展開は待つてはくれない。

混乱する私を余所に、入ってきた人物は突然抱きついてきた。

「那津う！！大丈夫！！？」

…もちろん、相手は例の、高宮麗奈お嬢様だ。

見てるだけで男はイチコロであろう上目使い＋涙目で私の腰あたりにひつついてくる。

…色気の無駄遣い禁止令。誰を悩殺する気だ？君は。

私はどうしたのかとため息をつき、一応返事を返した

「……………うん、大丈夫……………」

だから、とつとと離れる。

押しつけられてる腰とかアバラが痛いから。

「ああ、よかった無事で！居場所はすぐ分かったんだけど、うちのSPに連絡を取ってたら手間取って来るのが遅れてしまったの、ごめんなさいね……………。あ、でも那津、貴女ヒドイ怪我してるわ！すぐに手当てをしなきゃ……………」

私の心の声は聞こえないらしい、基本KYの麗奈さん。

私にしがみついたまま落ち着きなく話し続けた。

って……………は？居場所はすぐ分かった？SP？なんのこつちや。

「……麗奈さん、君どうやって私の場所を……」

「……ああ、那津の携帯のGPS機能を使って場所を特定したのよ。ウチの社員は優秀だから。……って、そんなことはどうでもいいわ！何されたの？警察は呼んだ？あと……」

……以下、略。なんか同じような事繰り返していた気がするが聞いていない。

や、どうしてもよくないっすよ？高宮さん。

胸はって言われても、それ普通にやっちゃいけないことだろ！
てか、そんなことしたのか！？怖えよっ！！

改めて高宮麗奈という人に恐怖を感じているとひとしきり言いたいことは話したらしい麗奈さんは私に回した手を解き、今度はへたり込んでいる女に目を向けた。

「……あら、篠原未央さん、ではなくて？」

「高宮、さん……」

「……どんな人が那津にこんな酷いことをしたかと思えば、貴女だったの。そんなことだから貴女は品がないのよ。」

「っ、少し美人で金持ちだからって、調子のらないで!!」

あまりよろしくない雰囲気の中、見つめ合う2人。間には火花が飛び散っている……気がする。

なんとなんとまさかの、知り合いのようだ。

どういう関係なんだろ、世界狭いな、………帰りたいな

2人が交わす、女特有のギスギスしたトークを聞きながらぼんやり思った。

「……ナツ、ちゃん。」

「……?」

しばらくして、放置していた男子たちに背後から耳打ちされる。

「……さっさと抜け出さない?この人たちに関わったらまた厄介なこ

とになるよ?」

「俺も女の修羅場はゴメンだし、圭も待たせてんだよ。な、行こうぜナツちゃん?」

……うん、激しく同意だ。君らもたまにはいいこと言っな。私も彼らに向き返って、頷いた。

「…そうだね。じゃ、こっそり退散」

そのまま出口の方へ1歩2歩と足を出す。だが、

「…あら、どこに行くつもり? 那津。」

次の瞬間、がちりと両肩を掴まれた。片方は、篠原さん。もう片方は麗奈さん。

…あは、そう簡単に、逃がしてくれるわけ、無いか……
…ですよね!。

2人は私の心中を知ってか知らずか、肩に手をのせたまま話しかけてくる。

「まだ行くには早いわ。私が篠原さんと決着をつけるまで待ってて。」

待ちたくねえよ、麗奈さん。何時間かかるんだそのドラマは。

「待ちなさいよ、まだアナタには聞きたいことがあるのよ!」

もう黙ってくれよ、篠原さん。私には話すことはナイから。

すると、

「……あら、何かしら。那津に聞きたいことって。」

恐ろしいことに麗奈さんが篠原さんの話題に乗ってしまった。

……は？

何でそこで私の話になるんだよおおっ！誰が君らの舞台に参加表明したか！？

女たちの会話に、露骨に嫌な顔をしたまま静止する私。

しかし、本当に顔に色がなくなったのは、この後だった。

「そうよ、大事なこと。……本城さん。さっき水谷信二が言ったことは本当？」

「？」

……さっき……？

私が黙って首を傾げると、彼女は焦れたように叫んだ。

「アナタ、ホントに聖悟とキスしたのっ！！？」

爆弾投下。

彼女のセリフを聞いた途端、本当に息が出来なくなって困った。

……！！！！

な、に言ってくれてんだ、このアマああ！！！！

……いや、水谷いい！！

麗奈さんの登場でどさくさに紛れて忘れてたが……あんの野郎、わざわざ刺激するようなセリフ言いやがって！！

……つか、何で知ってるか、ソレを！！！！

「……………な、っ?」

すぐ近くで発せられた低い声にビクツと体を魚のように跳ねさせる。心臓がこれでもかかってくらい、速い速度で脈打つ。

…後ろ?振り向けずに決まってるだろ。石化するぞ?

聞いたこともないような麗奈さんの声に、ビクビクするばかりの私。

頭が真っ白だ。これから何が起こるか、全く分からない。予測不能。なんてことだ、私はまた未知に挑まねばならないのか…!

「……………那津?聞こえ、ないの?」

「っひゃ、はひー!」

ヤバい、これは酷い。呂律が回りません、隊長!!

スリル満点のジェットコースターに強制乗車させられている気分の私は、恐る恐る前を向いた(向かされた)。

「那津、それはどういうこと?」

案の定、麗奈さんがキラキラとした笑顔で、私を問い質してくる。

「……あ、えつと嘘です。全くのデタラメです、ハイ。」
「じゃあ、何で水谷君がそんなことを言うの？」
「それは、その場のノリでヤツが適当言っただけで……」
「適当でそんな言葉はでないわよ？普通。」
「……………」

……ちつ、ダメだ、信頼性の低い言い訳しかできない……！
麗奈さんも、いつもは騙されてくれるのに今日はやたら突っ込みやがる……

どうするよ？私。本当のことなんか、言えるワケないし。
かといって、真実を隠し通す技術も、私は持っていないし……

それきり黙って悩みだす私に、だが麗奈さんの呆れたような声が降ってきた。

「はぁ……………分かった。貴女も疲れているものね。問い詰めるのも可哀想よね……」

それを聞いた途端に、道が開けたように気分が浮上する。

…お、これは、諦めてくれたのか！？ラッキー！女神だ、貴女様は……！！

「そ、そうだね。今日はもう遅いし……」

顔をパツと上げて便乗する私に、麗奈さんはニコリとほほ笑んだ。

「……………そう。だから、後は私の家でゆっくり聞かせてもらおうね。」

.....。

私は、意識を一瞬飛ばした。そして、再度聞いてみる。

「.....え、今、何て？」

思わず聞き返してしまうくらい、衝撃の発言が聞こえたような、聞こえてないような.....？
いや、聞き間違いだね！最近幻聴が酷くてまいったなあ.....

しかし、彼女はいとまたやすく私の夢を打ち砕いてくれる。

「だから、今日は私の家に泊まって、ゆっくり話しましょうって。」

っ、やっぱり幻聴じゃなかったー！！！！

てか、なにそのホラー企画！？私にひと晩で何回死ねというんだ！！

「.....そうそう、篠原さんもいらっしやい。決着は今夜、家でつけましょう？」

「...ええ、いいわ。望むところよ。」

ええええええ！何で君までー！！！！

しかもこの2人なんか結託してないっ！！？いつの間に！？

「...や、私お邪魔みたいなんで今日は遠慮「さ、行きましょ、那津！表に車が来ているから。」

「あの、私は行きたくな「逃がさないわよ？本城那津。今夜のお礼

は、たつぷりしてあげるから。」

ああ、もう駄目だ。日本語通じねえや、この女ども。

啞然とする私の腕をぎゅっと握り、麗奈さんは歩き出す。篠原さんはその跡をついて来る。

本気でヤバいと感じ始めた私は顔をひねって味方と思える彼らに向かって、叫んだ。

「斎藤、水谷！何とかしてくれ！」

しかし。

「……うーん、俺にはどうしようもできない、かな？」

斎藤、テツメエ！首かしげても可愛くねえから！

「……水谷！」

「だって、事実じゃん？しょうがなくね？」

諸悪の根源が何をいうかああああ！！

「……ちよ、待て！君らは君らで話してていいから、私は置いてけ！！もういい加減にしるおおおお！！！」

私の悲しげな悲鳴は廃屋の中に響き渡り、そのまま消え失せた。

高級車の、エンジン音とともに。

「…あーあ、行っちゃったかー。」

「信二のせいでしょ。何であんなこと言ったわけ？」

「だってさ、そろそろハッキリさせた方がいいだろ。あの人たちも… ナツちゃんも。」

「はあ、ま、分からなくはないけどさ。そんなこと言ってる時点でまあ聖悟に殴られるよ？」

「うげ、それだけは勘弁！」

カチャ、

ピ、ピ、ピ…… P L L L L ……

……ガチャ

「……もしもし聖悟ー？ん、あー居たには居たけど……。違う。あ、待て切るなって！実は」

03 (後書き)

展開がもの凄いことになってる…(汗) 那津さん、災難続きですねえ。

黄金の檻（前書き）

前回までのあらすじ、パート2）

日曜日、国崎と成り行きでデートすることになった本城那津。

那津は国崎にセクハラされながらも、水族館でそれなりに楽しむが、彼の家へ向かったとき、国崎の元カノである篠原未央が現れた！！

それを口実に帰ろうとした那津は、何者かに背後から殴られ、拉致されてしまう！

目が覚めたら廃屋の中におり、那津は、実は篠原未央が国崎関係の問題で、自分を拉致したことに気付く。

そして未央の言うコトにあまりにも腹が立った那津は、一度はキラで自分を守ろうとしたものの、あっさり素を見せ、未央に説教をかました。

怒り狂った未央は『トモダチ』の男たちに那津を襲わせる。

ボロボロになった那津だったが、斎藤・水谷が助けに来てくれ、事なきを得た。

しかし、

その後さらに高宮麗奈が現れ、今度は彼女の家に拉致されることになった那津だった……

「…ねえ、いい加減にしるよ、作者。今日一日でどんだけ話進めるつもり？」

いけるところまでです。

次ページから本編だよ

黄金の檻

「……………」

なんで、こんなことになったのかしら。

「さ、那津。手当てもしたし、もう安心よね？ たっぷり話してもらおうかしら。」

どこが、安心だ？

ホコリっぽい廃屋からゴージャスな黄金の檻に変わっただけじゃないか？

「さて、サクサク白状してもらおうじゃない。」

そして、君はなんで当然のような顔でここにいるのか？

麗奈さんとバトる予定はどうした？

目の前でほほ笑む、2人の美女。でも私には、閻魔サマにしか見えません。ハイ。

……もう、ヤダ。私、今日が命日かもよ？マジで。

廃屋から連れ出され、車で運ばれた先は、見たこともないような大豪邸だった。門から玄関までが異様に長く、家の端から端も見えないわ、庭に噴水はあるわ……………

まったく、スゲエの一言に尽きる。

内装もタダゴトじゃない。ゴージャスなシャンデリア、贅をこらした調度品、やたらたくさんいるメイドに執事……………

…マンガか。もう着いていけない世界だ。

そして、私は着くなり麗奈さんかかりつけだという医者 of 往診を受け、即座に手当てされた。

体中に包帯が巻かれ、薬を塗られる。幸い骨は折れていなかったが、やはり打ち身、ねんざ、擦り傷がひどく、全治1週間…とか。…案内、かかるな。

看護婦やメイドが手当てを手伝ってくれ、なんだか気恥ずかしかったが、

まあ治療費はいららないらしいので、よしとしようか。

……………ここまでは。

「……………では、那津様。浴場に参りましょう。」

「……………は？いえ、いいですよ。そんな……………」

ひく、と引きつった笑いでメイド服の女性を見上げる。
…まさか、風呂までついて来る気か？このメイド。

「しかし、麗奈お嬢様の言い付けでございます。怪我をしている身では入浴も難しいだろうから、と……」

おいしい！麗奈さああん！！だから、いらねー気回すなって！

じりじり迫るメイドさんに、後ずさりする私。

「……や、いいですっ！お風呂貸していただけるだけで十分です！だから……っつわああああ！！？」

……その後のことは、ご想像におまかせしよう。

うつ、もうお嫁にいけない……ぐすん。

お風呂から出た私を待ちつけていたのは、入浴済みらしい麗奈さんと篠原さんの姿。

湯あみ後の彼女らは女神さながらに美しい、が。

「那津。こちらにいらっしやい。」

「ほら、早く。」

……眼差しは悪魔を凌駕するくらいだ。
私は恐怖に怯えつつ近付き、これまた豪華な丸テーブルに3人、顔を合わせて座った。

そして、冒頭に至る。

2人は笑顔、私は冷や汗まみれ。

うう、何から話せば……何話しても怒られそうなんだけど……

「……あ、麗奈さん。ありがとうございます。手当てとか、お風呂とか……」

とりあえず無難にお礼から述べる。

「礼には及ばないわ。その服も、似合ってるし。」

「……ホントに？」

嘘つけ。

先程、悪夢の入浴が終わり、用意されたものに着替えたはいいが……私はちらりと自分の着ているものを見た。

レースがふんだんにあしらってある、フリフリのネグリジェ。
しかも、白。

……麗奈さんの私服だろうが……ぜったいたい、似合うワケないだろ。私に。しかも、髪も緩く巻かれているし。

……この服装も私のテンションを下げる要因のひとつなんだが。

私は、がくりと項垂れた。

そして、

「……………」

「…何よ、その目。」

ジトリ、と目の前の黒髪の美女を見る。何でこの人はここにいるんだろうか。

私をボコしといて、この余裕。反撃とか復讐されるとか、考えてないのか？

……………や、しないけどね。面倒だし。

でも、空気悪い上に気まずいな。ったく……………

素知らぬ顔で紅茶をすする篠原さんを見て、またため息が出た。

「……………さて、そろそろハッキリさせましょう？」

篠原さんに気を取られていると、麗奈さんが本題、とばかりに冷静な声で話しかけてきた。

その声色に甘さは一切含まれておらず。とびきり濃いコーヒーマイルク抜き砂糖抜きのような、厳しい感情がひしひしと伝わってくる。

ビクリと私は体を震わせた。こ、これがこの人の真の姿……………？

「は、はっきりとは…なんですか？」

「いい？那津。ホントのことだけを、答えてね。」

む、無視……！ヤバい、本気だこの人……！
視線が冷たすぎる……っ

「ち、ちなみに嘘ついたら？」

「……そう、ね。大学退学、とか？不可能なハナシではないし……」

……！！！！顔が恐怖でビシリと固まる。

戦慄だ！たかが嘘つくだけで何その報復……！！？
鬼畜すぎるぞ！この女あ！

……いや、しかしこの人ならやりかねん。

なんてつたつて、国崎のためならどこまででも暴走していくような
女だ。ためらいなく、やるだろう。それくらい。

……。

考えに考えた挙句、仕方なく、私は覚悟を決めた。

「……………わか、った。」

すっと表情を消し、彼女らを見据える。

この時点で、私の選択肢は一つしか残っていない。
すなわち、

真実を話して、死ぬこと。

……死ぬこと前提ってあたりが私だなー。ま、ほぼ確実な未来だし？

とりあえず大学退学だけは、絶対ヤダからね。

「…ふふ、那津は頭がいいものね。そう言ってくれると思ったわ。」

「お褒めにあずかり、光栄です。」

「こんなときも余裕なのが、貴女らしいわね。」

別に余裕なわけじゃないけどね。ただの強がりですよ、お嬢様。

私はふう、と息をついた。一瞬体の力を抜き、また表情を引き締める。

…っはー、話す内容が内容だし、やっぱり緊張する。

しかし、もう腹をくくったことだ。

2人の視線が集中する中、私はすつつと息を吸い込み、話しだした。

「……私は。確かに奴、国崎聖悟と、キスという名の皮膚接触をいたしました。」

…宣誓かよ。

…いやしかし、白状させられる凶悪犯の気持ちってこんななのかな
ー……仕方ないことなのに、言ってから後悔するような。

「…！やっぱり本当なのねっ！」

「皮膚接触って……」

各々リアクションをとりつつ責めるような目つきで見てくる2人。

私は気迫に飲まれ、後ずさった。

や、やっぱり予想通りのリアクションを取ってくれますね、君ら！

「…や、でも事故だからね！なんかその…あれ、恋愛的なヤツじやなくてっ」

「どこをどーなってキスなんて事故が起こるのよっ！」

「もつと詳細に事態を説明して！！さあっ！」

「…ううゝ怖いよ君たち…何その目…今から誰か殺しにでも行くのか？…あ、私？」

結局、私は涙目で、この顛末を全て語ることになったのだった。

「…い、以上です、ケド…」

「……………」

「……………」

話し終え、怖々、彼女たちの様子をうかがうと2人とも仏頂面で何か考え込んでいた。

「…な、何か反応してもらわないと、こちらも動きようがないんですけど。」

「やっぱり、怒ってる？」

「…どうしよ、いきなり刺されたりしたら。」

明日の新聞に記事でるかな？『刺殺死体発見』とか？

い、いやだあああ！こんな形で新聞載りたくないいいいい！！

「……………那津。」

「え、は、はい！」

私が最悪の事態を考えていると、横から麗奈さんが話しかけて来た。な、なんだ！どんな言葉が出てくるんだっ！ちよ、待って、まだ心の準備が……………！

「……………それで……………貴女は聖悟君のこと、どう思っているの？」

「……………は？」

が、思っていたのとはそれも違う返答。

え。罵倒が来ると思ったのに、まさかの質問？思わず聞き返しちゃうたよ。しかも……………

「どう、思ってるって？」

「まったく、鈍いわね！聖悟のこと好きかどうかってことよ！」

イライラしたような口調で篠原さんも口をはさむ。

……………ああ、さいですか。すいませんね、馬鹿なもので。

私はとりあえず息をつき、テーブルに置いてあった高級コーヒーを一口飲んだ。

「……………そんなこと言われても、国崎はただの友達だよ？」

何度も言ってるのに、何で誰も信じてくれないんだろう？

「嘘でしょ、絶対。」

ほら。

「いやいや、ホントだって。彼を……その、レンアイ対象として見たことないから。」

「…じゃ、好きじゃない？」

「あー好きじゃない、好きじゃない。だから、国崎のコトを狙いたいんならどうぞぞご勝手に。私は関係ないですから。」

…投げやりっぽくて、悪いな国崎。だが私のためだ。辛抱してくれ。

私がそうきつぱりと言い切ると、麗奈さんと篠原さんは露骨にため息をついた。

「……はあ、国崎君も可哀想に。」

「なーんにも、伝わってないわけね。」

「へ？」

だから、何が？

…アレ、なんか斎藤たちにもそんな感じのこと前に言われたような？

何でだろう、と首をひねっていると、篠原さんはニコリと笑って私と目線を合わせた。

「…ま、いいわ。気付いてないなら好都合だし、ね。」

何に、気付いてないって？

あーもう意味分かんないんですけど。ここまで理解不能な会話が繰り広げられるとなんか腹立つな。

私が仏頂面を作って唸っていると、彼女はコホン、と咳払いをして改まった。

「そこで、アナタに1つお願いがあるんだけど。」

「…？何。」

お願い、つか命令だろ、どうせ。注文の多い人だな。何だよ？

「聖悟には近付かないでくれる？」

「…は？」

話、聞いてなかった？私は単なる友達だと言ってんのに。篠原さんの謎な言動に、私の頭の中は疑問符でいっぱいだ。

「……何で？」

「何でも、よ。たかが女友達でも目障りなもの。」

め、目障りって。酷い言われようだな。

「いいでしょ？本城さん、聖悟のことを何とも思ってないんだし。」

「………」

「アナタ面倒なことが嫌いなんでしょ？」

「……うん……」

私は言いながら頭を回転させる。

うん、そうだな。

その通りといえば、その通りだよ。

元はと言えば、ヤツと一緒にいたからこんな騒動が起きたワケだし。

…そろそろ国崎の方も私に飽きるころだろうし？

もう、振り回されるのはこりこりなんだろ？ 那津。なら別にいいじゃないか。

国崎とは、もう会わない方がいい。

「…そしたら、君は私にはもう関わらない？ 変な誤解はしない？」

「ええ、いいわよ。約束する。」

「…なら」

私は口を開いた。

「……分かった。国崎には、もう近付かないから。」

ズキン、

「……………？」

言った瞬間、何故か胸が痛んだ。

チクつと、刺すような痛み。心の、内側から。

…何だろ。なんか病気が、もしかして？

原因不明の痛みを胸を押さえる私を一瞥し、
篠原さんは「そう、」とだけ答えてまたニコリと笑った。

「……ねえ那津、本当にいいの？」
「ん？何が？」

部屋からこれまた煌びやかな廊下に出たとき、麗奈さんに呼びとめられた。篠原さんは先に行ったから、ここにはいない。
私と麗奈さんが広い廊下の中央で向き合う。

先程から終始無言だった彼女の様子は……なんか変、だ。怒っているわけでもなく、悲しんでいるわけでもない。
そう、私を心配している……ような。

……何故に？

「…なにがって、国崎君とのことよ。もう彼とは会わないって、本気？」

「？うん、そのつもりだけど？…麗奈さんもその方がいいんじゃないの？」

なにを、そんなに心配してるの？

恋にお邪魔なヤツが消えるだけじゃん。好都合でしょ。君にとっては、むしろ。

私は首を傾げたが、麗奈さんは俯いてしまい、顔が見れなかった。無言でそのままの体勢を保っていた彼女はしばらくすると、ギョツとこぶしを握りしめ、決心したように私に視線を向けた。

「……ううん、私、聖悟君のことは諦めることにしたから。」

「……へ？」

何だって？

その衝撃の一言に、私はポカンと口を開けたまま固まってしまった。

「……なんで？」

……さっきから疑問符ばかりだな、私。

……でも、本当にワケ分かんない。あんなに泣いて苦しんでいたのに、君。しかも国崎と私のことを問い詰めて来たじゃないか、たった今。

怪訝そうな顔を作る私を見つめ、麗奈さんは静かに微笑みながら続ける。

「……私ね、那津の話聞きながらいろいろ考えたんだけど、彼が幸せならそれでいいって、最終的に思うようになったのよ。」

「……しあ、わせ？」

「……そう。だから国崎君を応援したい。」

「……」

国崎の応援って……何だ？何が、国崎の幸せ？

全然分らない。けど、

「……それで、君は本当にいいの？」

麗奈さんが自己犠牲を払おうとしてるのは分かった。

彼女の穏やかな目に、不安げに瞳を揺らす自分の姿が映る。だが、それでも麗奈さんは、綺麗にほほ笑んだ。

「いいのよ。那津の話で決心がついたわ。…それにね。私、那津になら負けてもいいって思えるもの。」

「え？」

「消えるのは私の方にするわ。聖悟君にもそう言われたんでしょ？」
「…え、ああ……そうだけど……」

何で、知って…？

「だから、貴女は聖悟君の傍にいなさい。」

呆気にとられる私を余所に、麗奈さんはキラキラした笑顔でそうしめた。
その顔は本当に晴れ晴れとした様子で、なんか色々とふっ切れたみたいだ。

…対照的に、私は頭の中がパンク寸前で。もう彼女が何言ってるのかすら理解できない。

「……っ、麗奈さんそれどういう

……むぐあっ！？」

疑問を晴らそうと、私はさらに問いかけるセリフを言おうとしたのだが、途中でいきなり目の前が真っ暗になり、何か大きなもので包まれた。

そのまま腰辺りに手を回され、キック抱き締められる。

……え！？また真っ暗じゃん！なに、何コレ、誰？

あまりのことに体が硬直する。またもや混乱に陥った私の耳に、麗奈さんの落ち着いた声が聞こえてきた。

「あら、こんばんわ。……遅かったのね。」

「……………どうも。」

「！」

麗奈さんに言葉を返した人物は、私のすぐ傍で聞こえた、馴染みのある低い声の人は、会話のネタであった、国崎聖悟本人だった。

身体を抱いている人物が特定されるや否や、私は腕をぐつとつき出して暴れだす。じたばたと、それはもう、勢いよく。

てか、ナンデ君ガココニイルンダ！？

そして来てすぐこの状態って何事っ！？頭、狂ってんじゃないか？
こいつ。

…篠原さんがこの場にいらなくてマジで良かった。約束ソッコーで破
ってるし。

「く、国崎！？なんでここが…」「うつせーな、黙ってる。」

…うあ、いつもより口調荒っ！なに、コイツも怒ってるの？
ちょ、涙目なんですけど私。本気で怖いんですけど。

しかし、あまりにも彼のオーラが黒いので、私はしぶしぶその
場で縮こまってるしかなかった。

その間、麗奈さんと国崎の会話が続行される。

「…じゃあ、那津を連れて帰ります。色々ありがとうございます
た。」

…保護者が君は。コイツが親父だったら私泣くな、きつと。

「そう、見送りはいらないうつね？」

「……はい。」

…わ、麗奈さん、なんて穏やかな笑顔。私もそんな顔がしてみたい
もんだ。無理だけど。…最近は特に。

ニコニコほほ笑む麗奈さんと、顔が見えない国崎。

何だかピリピリした微妙な空気の中、じっと息をひそめて、私は彼
らの会話を聞くことに徹した。

つーか、それしかできないんだけどさ、この状況では。

口をはさめる雰囲気でも無いし。

「…ねえ、聖悟君。」

「……何か。」

「ふふ、そう身構えなくてもいいわよ。…これで、最後だから。」

最後、だって？

私は驚いて顔をあげようとしたが、またもやたくましい胸板に頭をおしこまれる。

まるで お前は、何もするな、とでも言いたげに。

……横暴な。

しばらくの間。

があいて、すうつと息を吸い込んだ麗奈さんが静かな声で続けた。

「…あのね、貴方にとって私は鬱陶しい女だったかもしれないけど、私、聖悟君のこと、本当に好きだったわ。」

「……………」

国崎の体の隙間から覗き見た麗奈さんの表情や声は真剣そのもので、私は思わず変な顔を作った。

…ええ？何を言い出すんですか、麗奈さん。

1年越しの告白を何故今言うんだ？しかも、コレ私、超邪魔じゃないか。

激しく立ち去りたい……彼女の声を聞くのが、なんか怖いし。

……しかしソレすら許してくれないのが国崎という男で。

私はもはや、腕すら動かせなくなった。拘束力、半端ない。

「…貴方は覚えてないわよね、入学式するとき、私を助けてくれたな

んてこと……でも、その時から私、聖悟君に片思いしていたの。」
「……そう、ですか……」

国崎が今何を考えてるのかは全然分からないが、回された手が少し強くなつたように感じた。

「……まあ、返事なんかいらさないわ。もう分かり切つたことだし、ただ聞いてもらいたかつただけだから。それに、貴方にはもう好きな人がいるみたいだし？」

「……すみません。」

麗奈さんはふつと息を吐くと、笑いながら軽い口調で言葉を紡ぐ。

「……つふふ、別に謝ることなんてないわよ。私と貴方の好きな人が違つただけ。そうでしょ？好きな子がいる男を追いかけることほど難しいことは無いから……」

彼女は言いながら、腕の間からひよっこりと顔を出す私に笑いかける。

そして、

「だから、私はもう、退散するわね。」

高宮麗奈は、キレイに、あまりにも鮮やかに笑つた。

でも、何処か胸が切なくなるような笑みに、私の心の奥はズキ、と痛んだ。

彼女の心と繋がっているかのように、私の胸がきゅっと、締めつけられるように痛む。

麗奈さんの気持ち、じかに伝わるように。

「……っ、」

その苦しさに、息が詰まったようにかける言葉を亡くした。そして、実感する。

この人はホントに国崎のことを諦めたんだ、と。

冗談かと思っただ、彼女の言葉ひとつひとつに本気を感じた。これは、真面なハナシだ。笑えないジョークには出来ない。

そう思うと、自分が失恋したわけでもないのに、すごく胸が苦しくなった。

別に、何の責任も感じてるわけじゃない。

ただ、苦しい。

「……高宮さん。」

ふいに、国崎が発言する。

表情は相変わらず見えないが、麗奈さんと同じく真面目な口調。

だが、

「…何？」

「アンタは、いい女だな。」

「……………へ？」

真剣な声から一変。明らかに口調の変わったヤツに、私と麗奈さんのマヌケな声が重なった。

彼女の方は無意識に声を出したんだろうが私も結構驚いてしまった。

アレ、素じゃね？この国崎。

しかし、私たちの反応などお構いなしに国崎はまた話します。

「美人だし、潔いし、俺には勿体なさ過ぎて、付き合うなんて出来ない。もっといい男がお似合いだよ。」

国崎の腕が緩み、私が解放される。今度は肩に手を置かれ、彼の隣に並んだ。

私がヤツを見上げるとヤツとも一瞬だけ目を合う。
だが、すぐに彼は前方を向き、

「ゴメン、ありがとな。」

国崎聖悟は、最後にそう締めくくって、ニヤツと、笑って見せた。

「……………」

瞬間、麗奈さんは無言のまま、そのまま石化したように動かなくなっていた。

「れ、麗奈、さん？」

顔の前で手をふってみるも、反応ナシ。

え、大丈夫か？この人。てか、何でいきなりフリーズ？

そんな彼女を背に、国崎は恐る恐る麗奈さんの顔を覗きこむ私の腕を、引っ張った。

「じゃ、行くぞ。那津。」

「…って、ええ？ちよ、この人このまま放つとくの！？しかもナニ綺麗に終わろうとしてるわけ！？全然分からん！」

「いいんだよ。終わったんだから。」

いいわけねーだろっ！

麗奈さんはあんだだけ君一筋だったんだぞ！？それで、ここにきて『ハイ、もう終わり』！？

人の気持ちがそうコロコロ変わってたまるかつ何か相当なコトがあったからだろうが！

…あーもう分かんね。誰か、ぷりーず説明！！

「だーっ、ハナセ国崎！麗奈さんに聞っ……「必要ねえ」

「でもっ……」

「那津。」

自分の名前を呼ばれ、声も動きも止まる。顔を上げた瞬間、ぶつかった視線が妙にアツかった。

「いいから来い。さっさとしねえと、俺、本気で何するか分かんねえぞ？」

！！

今度は私の顔がフリーズする。

あ、……あぁ……またでたよこの男のブラックサイド……！
ここ最近、何回やってんのそれえ……
また体感温度下がって来たんですけどっ！？

そんなの、

「…あ、う、はい。行きます。」

こう言う他ないじゃない。ヘタレな私は。

結局、ヤツに引きずられながら、私はこの豪勢なお屋敷を後にしたのだった。

広い廊下に、高宮麗奈ひとりを、残して。

02 (後書き)

麗奈さんフェードアウトの巻。女キャラって動かさじぶらないなあ……

閑話その二

* r e i n a s i d e *

ボタン、と玄関の方から扉のしまった音がする。

聖悟君と那津が出て行った方向を見やると、途端に涙が溢れ出した。

我慢、してただけど、あの2人には気づかれたかしら

…いや、どうせ気付いていたんだろう。

くすりと自嘲気味に笑い、力を抜くと重力に従ってその場に崩れ落ちた。

涙がとめどなく溢れてきて、止まらない。嗚咽も漏れる。

那津には平気そうな振りを見せてたけど、やっぱり失恋は堪える。

…それも、大好きな人には。

結果なんか分かっていたコト。

聖悟君に好きな人がいるのも知っていたコト。

しかし、1年も膨らみ続けた想いを捨て去るには、時間がかかりそうだ。

でも

「……はじめて……本当の貴方を見せてくれた……！聖悟君……」
呟きながら、また新たな筋を流す。胸がいつぱいになって息苦しさを感ずる。

本当の彼は。

私がイメージしていた聖悟君と全然違くて、那津の言った通り、偽りの性格を作っていたのだと知った。
でも、それでも、最後に見せた笑顔は、おそらく本物の笑顔。
失恋を悲しく思う反面、最後に本当の彼が見れて、すごくうれしく感じる自分がある。

……それでね、

2人一緒に並んでいるのを見て、やっぱり私じゃダメだって、思ったのよ？那津。

さつき、聖悟君がどんな顔をしていたか、分かる？

那津と一緒にいるときの彼と、私といるときの彼。

全く違う顔をしてるんだから。

私がどんなに頑張っても、聖悟君は絶対振りむいてはくれない。
彼には、貴女だけなのよ。多分。

だから ……

「……聖悟君を振ったりなんかしたら、許さないんだから……」

那津、貴女になら負けてもいい。この言葉に嘘はないわ。

…でも、貴女以外が彼の隣に並ぶのは嫌だから。

絶対、上手くやるのよ。

私はぐつと涙をぬぐうと、長い長い回廊を戻った。

* m i o s i d e *

「…………ふう、疲れたわね…………」

高宮麗奈に言い渡された部屋に入り、ふかふかのベッドに横たわる。遅いから泊まっていけ、と彼女のご厚意らしい。

…全く、金持ちは得よね。『人間みな平等』なんて戯言、誰がホザいたのかしら。

ぼす、とふかふかした布団を叩くと、弾力のある羽毛が手を跳ね返してきた。

…………まあ、高宮麗奈は後でゆっくり排除するとして、目下の敵は、

あの地味女よね。

本城那津。

あの平凡そうな女に何の魅力があるワケ？

ホント、冗談だと思いたいわ。聖悟がまさか、あんな子を追ってるなんて。

でも、話を聞いている限りではそうなのよね……………

本城那津の話が嘘っぱちって可能性もあるけど、こんなので嘘を言う理由もないし。

ってことは、マジ、なのね。

「はぁ……………」

思わずため息をつく。

昔は私みたいな美人やカワイイ子を付き合ってたのに、どこをどー

やってこんな趣味悪くなったのよ、聖悟。

…やっぱりあの女が妙なことをしたに違いないわよね。聖悟は騙されてるわ、絶対。

斎藤宏樹も、水谷信二も味方にするなんて侮れない女。

邪魔以外の、ナニモノでもない。

私は寝転がりながら、ぐっと手を握り締める。

「ふふ……………待ってて、聖悟。目を覚まさせてあげるから。」

本城那津は聖悟の気持ちなんか微塵も気付いてないみたいだし、釘もさしておいたし、攻めるなら今よね？

前より格段にカッコよくなった聖悟。

貴方はやっぱり私の彼氏になるべき存在、よ。

必ず、私があの子から救い出してあげる。

フクザツ感情

バタ、ン！

見慣れた黒い日本車のドアが多少荒々しく閉まる、と同時に、正面からまた思い切り抱き締められた。

……言わずもがな、国崎に、だ。

ヤツは私の腰に腕を回し、肩に顔をうずめている。

「……………」

そして、この無言。

…どうしてくれようか、この男。いや、どうしたいんだろ、この男。

「…オイ。国崎、離せ。」

「……………」

だから無言は困るっての。どうしてさっきからずっと顔見せないのさ？

しかも 体、超痛え。

「……………っは、苦しい、てか痛いから！離して！..！」

私のアバラ、その他の骨が悲鳴を上げていることを訴えると、よう

やく少し力を弱めてくれる。

しかし、体勢を変えるつもりは無いのか、全く動いてくれない。

……だから、何がしたいんだってば。もう……

「…何を、された？」

しばらくして、やっと国崎の低い声が耳元で聞こえた。

「……何を、って？どういう意味？」

「…未央に、何をされたかって聞いてんだよ。」

言いながら国崎は体を少し離すと、私の頬を右手でなぞる。

それが何だか恥ずかしいんだか、くすぐったいんだかで、私はフィと顔をそらした。

「……や、別に何も…」嘘つけ。」

私のおどけた口調は、彼の鋭い声で即座に遮られた。

「何も無いわけ、無いだろ。こんな……怪我、して。」

さらに悲しげな声を発すヤツの視線の先は、服の隙間からわずかにのぞく、白い包帯だ。

なんだよ、その声。まったく君らしくもない。

心配なんて、いらぬのに。

私は観念したように軽く肩をすくめると、ヤツと視線を合わせた。

「……ああ、そうだよ。彼女になんか廃墟っぽいところに連れてかれて、そこにいた男どもに殴られた。」
「……………っ！」

無言で見つめてくる国崎に、私はあくまでも軽い口調で話す。

「……あー、でもまあほんの数発もらっただけだから、大したことナイナイ。」

実際は数十発だろうけど。あえて言う必要はないだろう。

「……………。」
「……えっと、その、性的なことはされてないし？精神的ショックはない。」

今思えばラッキーな話だな。……ま、こんな私の体だからな。

「……………。」

また無言を貫く国崎の様子を、私は恐る恐るうかがう。

「……あの、だから心配には及ばないってこと。全然大丈夫」
「大丈夫なんて、言うなっ……！」

突然の大声に、ビックリして固まる私。国崎は苦しそうに顔を歪め、また私を包んだ。

今度は壊れ物を包むように、優しく。

「……………ごめん、ごめん那津っ……俺のせいだ……………」

耳元でボソボソと謝罪を繰り返す国崎。彼のささやきを、私は黙って聞いていた。

その声は本当に苦しそうで、聞いているこっちが切なくなる。もういいから、と言いたくなる。

しかし、

そんな彼に、目をスツと細めた私は

「……そうだね、君のせいだよ。」

容赦ない一撃を与えた。

国崎は驚いたようにバツと身を離し、私の方を見る。私は恐らく無表情。ただ静かに彼を見ているだけ。

「っ、……………なっ」

「だって、本当にそうだろ？君と一緒にいなけりゃそのミオさんにも目をつけられずに済んだ。こんな目に遭うこともなかった。」

国崎の手を振り払って助手席に座り直し正面を向く。

凍てつくような視線を送りながら、有無を言わさない口調で続ける私。彼にはどう見えているのだろうか。

「…もう、たくさんなんだよ。私の生活をことごとく乱しやがって。君と出会ってから、ホントにロクなことがない。」

そして、彼を真っ直ぐ見て、決定打を打つ。

「国崎。頼むから、私にはもう関わらないでくれるか？」

「！」

しん……………と静寂があたりを包む。

私は国崎の目を見たまま動かなかった。彼の方も、一瞬息をのんだかと思えば、目を見開いたまま動かなくなった。

今言った言葉は、半分嘘で半分ホントだ。

本当は。

本当は怒ってなんか、ない。

しかも、篠原さんに襲われたのは間違いなく彼女のせいであり、国崎の方に過失などありはしない。

でも、本気で謝る国崎を見て、性格の悪い私はそれを口実に使い、関係を断ち切ろうとしたのだ。

そこまで言うなら、もう会わなきゃいいじゃないかと。

…ついでに篠原さんとの約束も果たせるしな。一石二鳥てなもの。

それに、後半は本当の気持ちと言ったままで。

もうそろそろ潮時だろ。

私たちは会うべきではない。

そんなの、最初から分かっていたこと。

いずれ崩れるモノを、それでもズルズルと引き摺るように続けてきてしまった関係を、失くす。

ただ、それだけのことなんだから。

「それで、どう？ 国崎。」

「……………」

「君も、そろそろ私に飽きただろ。目え覚ませよ、いい加減。」

いや、マジで。

「……………」

国崎はしばらく何事か考え込んでいたようだったが、ふと口を開き話し始めた。肩を落としたように俯き、顔は見えない。

「……………そうだな。こんなことが起こったし、そうでなくても俺と一緒にいると目立つわけだしな…お前の言い分も、分かる。」

…おお。なんだ、なかなか物分かりがいいではないか。

私は首を上下に振って同意した。

「そうだね。だから……………」でも、それは無理だ。」

……………。

は？ ええー？

ちよ、待とうか一回。CM入ろう、とりあえず。

何だ、それ。そのままかの返答。この流れは完璧『yes』ルートだったでしょうが。普通は。

相変わらず意味不明すぎて、意図が全く読めん。

私は頭に？を飛ばしながらそのまま疑問を口にした。

「…何、無理って。」

「那津を離れるとか、俺が無理。」

「……はあ？」

ナニ言ってるのよ、こいつは。マジで、本当に。

まだ肩を落としたままの国崎の表情はうかがえないが、多分真面目に言ってる感じだ。

……このセリフでか？

「…はあ、あのね、国崎。いくらトモダチでもこれは干渉すぎ。最初に言ったでしょ？その辺を理解しろって。」

「……友達、ならな。」

????

「…え？君、なに言ってるの？私は君の友達なんだろう？」

少なくとも私は、その代名詞を背負ってきたと信じてるんだが。

……友達じゃなかったら、一体何。

「………。」

「…友達、じゃないの？じゃ、何よ？」

知り合いとか？あ、これは格下げ？

「………。」

ちっ、まただんまりかい。いきなり会話ブチ切られるこっちの身にもなってほしい。

ため息をひとつついて、また話しかける。

「……国崎、だから何が言いたいん」「友達じゃ、嫌だ。」

へ？

「……え、んっ」

突如、何の脈絡もなく重なった唇。

いつの間に距離を詰められていたのだろうと、考える暇も無く、ぐつと顔を掴まれヤツの口を押しつけられる。数秒遅れてやつと意識が戻り、私は顔を赤く染めた。

っ……なんだ、一体。こいつは何がしたい？
そしてこのキスはどういう意味だ。

またもや徐々に破壊されつつある脳内の計算機。
しかしまだストックされていた理性を働かせ、抵抗しようと手をバタつかせたら、意外にもすぐに解放された。
……と言っても、国崎は口同士がくっつきそうなくらいの近距離で顔を止める。しかも、極上の笑顔つきだ。

顔がアツい、のに視線がそらせない。まるで魔法にかかったように全く体が動かないんだ。

「……まだ、分かんない？」

「……っ、何が……」

「……つたく、ホント鈍いな。鈍すぎ。フツー気付くだろ、ここまでさ
れたら。それとも、言葉にしなきゃ分かんないわけ？」

「……………」

ゼロに近い距離で見る国崎の顔はやっぱり綺麗で、思わず見とれてしまう。

そして、目を細めたヤツの口が弧を描き、ゆっくりと言葉を發した。

「好きだ、那津。どうしてもお前が好き。…もう友達じゃ嫌なんだ。」

私にとっては、衝撃の言葉を。

一瞬、ヤツが何を言ったのか全く理解できなかった。なんとか頭にその言葉が入ってきてても、やはり意味はさっぱり分からない。

「……………罰ゲーム？」

ようやく、目を見開きながら口から出たのはそんなセリフで。

「……………あ？」

国崎は怪訝そうな顔を作った。

「……や、アレでしょ。よくある告白罰ゲーム。4人で何か賭けてもした？それで私が君にオチるかどうかとか？」

「……………オイ、せっかくの人の告白を罰ゲーム扱いすんな。」

「いやいや、それしかないでしょ。ああなんだ、友達として好きとかか？」

「俺、今ソレ否定したばっかだろ。」

「…………………………」

私は首を傾げた。心からの疑問だ。

「……うーん、他になんかある？君が私にそんなこと言う理由。」

思いつかないんだけど。

「…頼むから、普通に考えるフツーに。何でそんな考えが屈折してんだよ那津は。傷つくぞ、流石に。」

国崎が脱力したようにそう言うから、私もまた考えてみる。

フツー？普通って、何さ？言葉そのままって意味？
そのまま…『スキ』？

ってことは……………

！

バツと顔を上げ、真剣な表情を作って国崎の方を向く。

「……………国崎、君、」

まさか。

「…私のことが好き、なの？」
「だから、そう言っただろ。」
「…それは、恋愛的な意味で？」
「そうだけど？」
「マジで、告白してる？」
「マジで。」

……………

ポクポクポク。チーン。

「嘘だーーーー！！！！！！！！！！」

突如、トマトのように顔を赤くした私は叫びながら国崎から飛びのいた。

「え、え、え、嘘だ、絶っつ対嘘だろっ！？」

「…たっぷり考えた末にそれか？ホントだって。何で人の告白、力いっぱい否定すんだよ。」

呆れたようにフツと笑みをこぼす国崎。

「…いやいやいやいや！待て、嘘だろ普通に！！」

何故、君が私に本気告白っ！！？

天変地異どころか、宇宙がそっくりそのままひっくり返るくらいありえねえって！！

「く、国崎。待て、早まるなお、落ち着け！」

「那津の方が落ち着けよ。」

落ち着けるかああああ！！そんでまた徐々に近づいてくるんじゃ、ねえー！！

じりじりと後ろに下がろうとするが、いかんせん、狭い車内である。すぐにドアに背がついた。

しかし、ヤツは進行を止めず、ますます焦る私。

「いやいや、マジで嘘だろ！てか、嘘にしとけっ！あと近付いて来んなー！！」

「なに、しとけて。そんな無理に決まってるんだろ。」
「っ！君、フザけてんだろ！私をからかってんだろっ！？」
「からかってなんか、ない。」

腕を掴まれた。それと同時に視線が絡まり、また私は動けなくなる。

「お前が、本気で好きなんだ。」

また国崎の熱い視線が絡まり、私を動けなくさせる。彼の言葉のひとつひとつが心に突き刺さり、反響する。目の前の男の瞳のなかの自分が、口を開けたままブサイクな顔をしているのが見えた。

なんだ、コイツ。本気か？本気で

「…頭、おかしいんじゃないの。」

「……………」

一瞬の静寂が流れ、

「……………はあ、」

国崎は呆れたように息をつき、私を暗に責めたてる。

「…でも、だってそうとしか思えないじゃんか。…国崎が私のことを好き、とか。ありえない。」

あ、もしかして君、どっかで頭打ったか？

「…俺は正気だ。何でそう信じねえんだよ。お前、人の気持ちを読

むのが得意なんだろう？」

「……そんな、君じゃあるまいし。全然分かんないって。」

「大体、分かんない方がおかしい。逆に何でそうビックリするんだよ？別に隠してきたわけでもねえのに。」

「や、最初つつからそんな可能性、排除してたから。ホントに予想外というかなんというか！」

わーわーと、自分でもワケ分からんセリフをぶつぶつ言っていたら。

「…那津。」

近くで自分の名をささやかかれて、ぴく！と体が反応する。

て、低音ボイスとか卑怯だろ、この場面で！自分の名前なのに、まるで自分の名前じゃないみたいだ。

耳がゲシュタルト崩壊おこした。

「なあ、那津。まだ信じられない？」

「……っ！あ、当たり前だろ！そんなイキナリ言われてもっ……」

だから接近するんじゃないって！さっきから心臓がうるさすぎる。

「イキナリじゃないし。……俺が誰にでもこんなことするとでも思ってたの？」

「こ、こんなことって……？」

「こんなコト。」

そして、また重なる唇。

「~~~~!」
「な?」

数秒後に唇を離すと、国崎は満足そうに笑いながら目を合わせてくる。

……『な』じゃないよ、『な』じゃ。もうヤバい。恥死量超えてる。
……コイツ、絶対顔だけで人殺せると思うんだが。私よりか、断然色気がある。

私は真つ赤な顔を左右に振って、なんとかこの男の魔力から脱し、冷静さを保とうとする。
そして口をとがらせ、反撃に乗り出した。

「……君、絶対おかしい。何で、私なんだ。」
「は?」

「君ぐらいの男なら、もっとレベルの高い女をいくらでも落とせるだろ。なのに、何血迷ったこと言ってるワケ?」

女なんかよりどりみどりで〜なんだろう?
何で敢えて私みたいな女を選ぶかな、国崎君は。

「……血迷うって……」
「大方、普通の女子は飽きたから一風変わったヤツと付き合ってみたい、とか思ってたんだろ。だったら私は止めとけ。即行で別れたいから。」

そうだ。罰ゲームではないにしろ、『私と付き合いたい』なんて言う理由は、結局はそういうことだろう? だったら、止めておいた方がいい。

自分の性格は分かってるし、何の取り柄も無いし。

…激しく即返品をオススメするけど？こんな欠陥女。

「……んなの、付き合ってみなきゃ分かんねえだろ。」

「わ・か・る！だから私は……」「那津。」

冷たい国崎の手が頬に触れ、本日、2度めのフリーズ。
狭い車内でさらに彼は身を乗り出して密着してきた。

「何も、分かってねえのな。」

「……ああ？」

わ、脳内パニくりすぎて思わずチンピラみたいな声が……っ

…笑ってんじゃねえぞ国崎、こっちにとっちゃ、由々しき事態なんだからっ！

「……くく、お前みたいな奴、他にいるかよ。俺は他の誰でもなく、那津がいい。」

そして何度目かのヤツの温もりと、

「マジで好き、だから。俺と付き合ってよ。」

懇願するような甘い声に、私の心臓が大きく鼓動した。

ドクドクドクドク

…ちょ、待てまで。テンポ速いって。ナニコレ。なんでまたこんな

に活発に動くんだ私の心臓お！！
早鐘のように鳴る心臓は……もうドキドキというか、バクバクって
感じ？すごい苦しい。

止まれ、いや止まったら困るもう少し落ち着けと、バグだらけの脳
内に意味不明な指令を送りながら、私はたまらず目を閉じた。

……

……国崎が、私を好き？

アリエナイ。はあー？だろ。誰がどう聞いても。

なんだ巨大エイプリルフルか今日は。ドッキリカメラでも出てく
るの？そっちの方がまだ納得なんだけど。もしくは夢オチ？

本当に、嘘としか思えない。

まさか、私を好きな人間が現れるなんて。

自分の中に僅かにある、オトメゴコロらしき物がきゅっと反応して、
また顔が紅くなる。

……何だ、キモイぞ私。こんなの、私じゃないでしょ。

今鏡見たら、絶対自分を殺したくなるわ。

とは思っもの、

今まで感じたことのない不思議な感情に戸惑い、国崎の方はどんな
顔をしているのか気になった私。

羞恥心を抑えそっと薄目を開けて彼の顔を確認しようとした、

瞬間。

バツといろんな映像が胸の中に過ぎ去った。　というより、瞼の裏に映し出された。

私は目を見開く。

篠原さんの勝ち誇ったような顔と、麗奈さんの泣き出しそうな笑顔。そして

「……アンタには、分からないわね。一生。」

昔々の、記憶の隅に閉じ込めていたはずの、あの女のカオ。

「……!!」

私は瞬時に国崎から飛びのいた。

「那津……?」

国崎はいきなり動きだした私を怪訝そうな顔で覗きこんだ。

それはそうだろう。愛の告白をした相手が、いきなり無言で距離をとってきたのだから。

しかし私はそれどころではない。いつきに正気に戻された、気がした。

久々に見た、悪いユメで。

今度は違う意味で心臓がドキドキする。すごい量の汗をかいている。顔色も悪くなってるのではないだろうか。

「……那津、本当に大丈夫か?」

…そんな声で話しかけんな、阿呆。勘違いな私の心拍数が、また上がるだろ。

そうだ、勘違い。これは勘違いなんだ。昔みたいなミス犯したら痛いぞ、自分。

……一体、何を浮かれてたんだろう私は。

愛とか、そんな虚像。

ずっと昔に信じるのは止めたはずなのに。

「……………国崎。」

私は彼を制止し、至極ゆつくりとした動作で向き直った。相変わらず超絶カッコイイ国崎の呆けたような顔が月夜に照らされる。

全く、バカじゃね？この私に、告白してくるとか。客観的にも釣り合うワケ、ないし。

一瞬忘れてたけど篠原さんとの約束もあるわけだし。

…それに、思い出したよ。

私には、スキとかいららないから。

だから、容赦なく

「……………私は、君が嫌いだ。君なんか大っ嫌い。さっきも言っただろうが。もう関わんな！」

「……………!!」

振りきってしまえ。

高鳴る鼓動を全無視し、冷静な声のトーンまでもっていく。次第に顔の赤色も引き、無表情になった。

「っ……なん…で、」

国崎は私の雰囲気の変化に驚きを隠せない様子だ。でも、私は淡々と先を続ける。

「……元々、私と君は『友達』のはずだろ。だから一緒に遊んだりとか、行動したわけだ。でもそれ以上となると、『恋人』となると話は別。彼女なんて、誰がなるか。」

けつと悪態をつき、国崎を睨みつける。

「そんな面倒事はゴメンだ。愛とか恋とか私に求める方が間違ってる。」

「……っ、な…」

珍しく、感情むき出しな彼は絶句した。それを見てクスクスと揶揄するように笑う私。

「……何、そんな驚くこと？自分が振られるワケないとも思ってたの？君。これだから自意識過剰の俺様くんは困るなあ。」

もちろん安い挑発だが、流石の国崎も、この状況下では冷静さを失っていたらしい。

カッと顔を赤くして、喰ってかかってきた。

「何だと…っもう一遍言ってみろ！」

私の両腕を掴み、強い口調で問い詰める。怒りまかせに見えるが、相当動揺しているようだ。

…瞳が、揺らいでいるから。

「…何度でも言っておけるけど？私は、君が嫌い。要するに告白失敗ってわけ。分かった？」
「っ」

驚愕を全面に出す、いつもの彼らしからぬ表情を見るのは辛いものもあつたが、私は冷静に徹し、すらすらと鋭利な言葉を並びたてる。

「…ああ、そつだ国崎。それとさ、『友達』じゃないんならもういいよね？」

「……………は」

彼の顔が、また歪んだ。

「もう、解放されてもいいよな？君らとのトモダチごっこも、ついでにこれで終わりでもいいじゃん？」

「っ！おい、那津！」

国崎の声を無視し、私は唐突に会話を切って助手席のドアを開け外に転がり出る。

「…じゃ、サヨナラ、国崎聖悟くん？これに懲りたなら、とつとつ新しい彼女でも作れば？ 私には、関係ない話だけど。」

そう捨てゼリフを吐き捨て、手を振る。

そのまま私は、振り向くこと無く走り去った。彼の呼びとめる声も聞かず、ただひたすらに。

耳にはまだあの悪夢の声が反響していた。

ガチャッ！ドタ、バタン！！！！

「……………はっ、……………はぁ……………」

息が切れる。自室の扉を勢いよく開け中に入ると、私は玄関にへたりこんだ。

「……………くっ、は……………っ、……………気分、悪……………っ」

吐きそうになるくらい精神的に弱ってる。うずくまったまま動けなくなってしまうくらいに。

……………久々に、本当に久しぶりに、アイツの顔が出てきた。でも昔よりはるかに鮮明に思い出した。…それだけで、こんな心が不安定になるなんて。

…まだ引き摺ってるのか、私は。ハッ、全くアホらしい。もう何年も前のことなのに。

でも、彼女の夢を見る度に、私は思い知らされるんだ。自分の小ささ、取るに足らなさ、そして

「……………愛、なんて所詮嘘だろ。」

『愛情』への憎悪。

ぼそりと呟くと、ズキッと、刺すように胸が痛んだ。

…は。何傷ついてんの、自分。悲劇の主人公にでもなったつもりなのか？自分に酔ってんのかよ、バカか。調子のもつてんじゃないよ。本城那津の分際で。

自嘲気味に自分を詰ナジつているとだんだんと鬱な気分になる。

本当、最悪な気分だ。どこまで私という人間は最低なんだろう。

酷いことを言って、また人を傷つけた。遠ざけた。

悲しそうに私を見つめて来た国崎のカオが、また頭をよぎる。彼の口トを考えると、また心が痛んだ。

…でも、これでいい。よかったんだ。

つまらない女にひっかからなくてよかったな、国崎。そろそろ君も正気に戻ってくれることを祈るよ。

こんな女。誰も好きになんかなるはずないんだから

だから私は、独りで、いいんだ。

愛されなくても別に構わない。

最初から、そう言ってるじゃないか。何で放つといってくれないんだ。

どうでもいいじゃないか。私なんか。

膝を抱えたまま目を閉じる。
だが、しばらくそうしたまま鬱鬱とした気分になり落ち込んでいたら、ふと疑問が浮かび上がってきた。

でも。

…もしも、あの時。あの人が私の内に現れなかったら、どうしていたのだろうか？

あのまま国崎の腕に抱かれて、私は何を言ったのだろうか？

心の中に、またさっきの出来事がよみがえる。国崎の顔を思い出す。

……

……

ドク、ン。

突然。心臓が大きく脈を打ち始めた。

「……………あ、れ…?」

ドキドキドキドキドクドクドクドク。

心臓がさっきより、…いや、かつてない程活発に脈を打つ。

そしてその間、脳内スクリーンにはあいつばかりが映し出される。笑ってる顔、ニヤリと嫌なことをたくらんでいる顔、マジギレしたときの顔、デートしたときの優しい顔、…最後、一瞬だけ見えた、切なげに歪んだ顔

さらには、走馬灯のようにいままでの出来事がフラッシュバックした。

え、何コレ。脳内バグ？

私、死ぬの？室内で？いきなり？死ぬとしたら何死にあたる？

……近いところで、心臓病？こんなに心臓がうるさく鳴ることなんて、今までなかったから。

や、待て。違う。

顔に手をあて、思考の渦に身を投じる。頬は、自分でも驚く程熱を持っていた。

コレは知ってるぞ。昔、なんかの漫画で見たことある気がする。まさか、もしかして、

私はうるさい胸をぎゅっと握り、自分でも信じられないくらい、すんなりとそのコトバを口にする。

これは、この、感情は

「……………惚れ、た？」

.....。

「.....いや、待て。違う、おおおち、落ち着くんだ。」

その一秒後、

私はブンブンと首を振り、即座に自分の言葉を打ち消した。

こ、これはアレだ。また国崎の毒牙にかかったただけだ。

前もあつたじゃないか。国崎マジックにヤラせて混乱したことが。アイツに近づきすぎるとどんな女も思考がこんな風になるんだっ。今回もそんな感じに違いない！

しばらく。そう、しばらく待ってたらこの動悸もおさまるはず.....

.....。

しかし。

待てども待てども、一向に顔の朱色は引かず、脈も速くなっていくばかり。鼓動が胸全体で響き、息切れもしてきた。

…本気で病気ではないかと思う。思わず、病院の開始時刻を確認してしまった。

「.....っ、何なんだよ……」

私はフローリングの上に寝そべると大きなため息を漏らした。

今夜の私はおかしい。疲れからなのか何なのか知らんが、異常すぎ

る。

……なにがって？

ずっと、ずっとあいつが 国崎聖悟が、頭から離れないんだよ。どうやっても。

ダルい体を起こして鏡を覗くと、耳まで真っ赤な自分が見返してきた。

何あれ。赤過ぎでしょ。酔っ払ってんじゃないかと見紛う程だ。

もう、意味分からん。こんな女、私じゃない。絶対、どうかしてる。

…告白、原因はアノ告白だ。

男から告白なんて、初めてされたから動揺してるだけだ！それだけだよ、それだけ。別に深い意味は無い！

誰に言い聞かしてんだか、私は自分でうんうんと納得した。

「 P L L L L …… P L L L L ……」

「 ……! ……」

すると突然。携帯の電子音が鳴りだす。

…私のだ、モチロン。いつも聞き慣れてるはずなのに、思わずビクッと体を震わせてしまった。

マジで寿命縮んだ。空気読んでよね、この小型電子機器が。

やり場のない怒りを携帯に向け、その辺に放り出していた鞆を乱暴

にひつつかんだ。
そして未だに存在を主張し続ける携帯電話を取り出し
動きを止めた。

『着信 国崎聖悟』

携帯電話の液晶に、確かにそう表示されているのを見たから。

「……………」

まだ携帯は鳴り続ける。しかし私は取れない。取ることが出来ない。

だって、何を話すんだよ？あんだけ叫びまくって、罵って。

気まずいにも程がある。

…いや、会話を無理矢理切って帰って来たワケだから、ヤツが電話
してくるのも納得はできるが。

…何より驚いたのは、私の心臓が再び活発に鳴り始めたこと。

『国崎』と名前を見ただけで。

これ、出たら今度こそ心臓壊れるかも

そついう、わけの分からない恐怖もあつて、なかなか電話が取れな
い。

「LLLL…………… PLLLL…………… PLLLL……………」

コールが続く。

……諦めないな、奴も。早朝にムリヤリ取らせたこともあつたしな。
忍耐力があるんだか、何なんだか。とりあえず、何が何でも私を電

話に出させたいらしい。

……電源、切ろうかな……

鳴りやまぬ電子音は無視し、電源ボタンにそろそろと手をかける……と、

「……………あれ」

突然、プツッと電話は切れた。コールが途中で途切れたので、おそらく向こうから電話を切ったんだろう。携帯画面も通常に戻る。

……………なんだ、諦めたのか。

ホッと安心するとともに、何故か、あつけにとられたような、不服な気分になった。

…なんて、意味わかんねえな私。電話取らなかつたくせにね。フツと自嘲気味に笑みをこぼしてみる。

ま、なにはともあれ、用無しになった携帯を机に置こうと手を伸ばし

「〜」

「っわ、ああああ!？」

そのまま、放り投げた。

な、何、今度はナニ!？この携帯、呪われてんの!？

さっき以上にビックリした私はバクバク鳴る心臓を押さえ、放物線

を描いてガシャンと床に落ちた、哀れな携帯電話をみた。

この音は、メールだが……………

不審に思い、チラと液晶部分を覗くと、また『国崎聖悟』の文字。思わず、ため息がでた。

「……………今度は、メールかよ……………」

まあ、本人が電話を受け取らないんだ。自然な流れではあるけど……………私は立ちあがり、若干キズのついたブルーの携帯を取り上げる。そして数分悩んだ後、ランプの光る携帯を開いて、彼のメールを読むことにした。

メール読むくらいなら、いいか。返信しなきゃいい話だし。…別に特に支障は無い。うん。

自分への言い訳もそこに、若干緊張しながら受信ボックスを開く。

「……………」

開いた瞬間、絶句してしまった。

恐る恐る開けた国崎からのメールは、たったの4文字しか書かれていなかった。

『会いたい』

ただ、それだけ。

ただ、それだけだったのに。

詳細の全く書いてない、ただの文字の羅列に私はまた心を揺らした。

「……うわぁ……………」

携帯を持ったまま、仰向けにゆっくり倒れる。白い天井がやけにぼんやりとかすんで見えた。

自分のカオは確認してないが、どうせ、朱に染まってるんだろう。フローリングのひんやりとした冷たさが、火照った肌にしみる。

「……………マジ、か……………」

もう、流石に認めざるを經ない。

名前、電話、メール。それだけでこんなに乱される。

そんな怪奇現象の理由は、ひとつしかない。

私は、国崎が好きだ。

ここにきて、ようやく私は自分の感情というものを理解した。

しかし、

「……は、アホらし。」

私はすぐに冷めた表情を作った。

理解したからといって、何が変わる？確かに、私は国崎がスキらしい。

でも、あいつに気持ちを伝えたところで、面倒なコトになるだけじゃないか。

迫り来る過激派女子とか、陰口、根も葉もないウワサ。そういうのも死ぬ程嫌だが、

なにより、この感情が、面倒くさい。

国崎限定ではないけど、誰かを好きになるとか、愛すとか、理解できない。

『好き』とか『愛してる』なんて幻想、抱きたくない。

これじゃ、あの女と何も変わらないし、私はそんなの、絶対嫌だから。

だから。

こんな感情、消してしまえ。

私は芽生えた気持ちをひねり潰すように、国崎のメールを削除した。

04 (後書き)

これからだんだんとダークな内容に……
あれ、恋愛は？

オイカケッコ

それから、あの日から5日。
私は、今日も元気に。

……ズズ、ズー

「あー、美味し。」

コーヒーをすすする。

相変わらずガラガラなマスターの喫茶店は私が好む、平和で、静かな空間だ。

聞こえる音と言えば、私がコーヒーを飲む音と、小説のページをめくる音だけ。

…ああ、癒されるなあ。

「マスター、おかわりー。」

「…ナツちゃん、それもうら杯目なんだけど。てか、暇だね。」
「うっさい、いいから入れて。」

マスターはカウンターから呆れたように私を見た。

失敬な。好きで暇してるわけじゃないって。

私が目線で促すと、呆れながらもマスターはコーヒーを注いでくれ、目の前に新たな1杯が出される。
私は嬉々としてそれを受け取った。

「ナツちゃん、ここ最近よく来てくれるけど、どーしたの？」

「……んー、別に。ちょっと家に帰り辛いというか。」

「……は？」

怪訝そうな顔でこちらを向くマスター。私はため息をつき、新たにページをめくった。

……てか、帰れないんだって。

そう、色んなことが起こった例の日の翌日から、私は時間を見計らないと家に帰れないのだ。

理由は簡単。国崎が、待ち伏せしてやがるから。

よくウチの前にヤツの車が停まっていて、うかつに玄関に入れない。

……全く、迷惑千万な話だ。自分の家なのに入れないとか。

いつから篠原さんみたいなストーリーカーに成り下がったんだか、あいつも。

おかげで私は彼が帰るまでこの喫茶店か、大学、バイト先に身を潜めているしかない。

……どここの逃亡者だ？

暗い気分で頼杖について、入れたてコーヒーをひとくち飲んだ。

……まあ大学内でも、私の全スキルを駆使して避けまくってるものだから、ヤツも最終手段に出たと思うんだが……

絶対に、今は会えない。

何故なら。

「……あ、そういえば国崎君だっけ？ ナツちゃんの彼氏。何で一緒に来ないの？」

「……！」

がしゃーん。

瞬間、持っていたコーヒーカップが手から離れ、重力に従って床に落ちた。

カップは細かい破片となり、茶色いシミが床に広がる。

「……！ ちよ、ナツちゃん何やってんのっ！」

慌てて私の方へ駆け寄ってくるマスター。怪我はない？ とかなんとか問われる。

しかし、私は顔を俯かせたまま、動かない。

「……… ナツちゃん？」

「……マスター、頼むからヤツの名前は出すな。あと、彼氏じゃないから。」

マスターからは見えなかったと思うが、下を向いた顔は真っ赤だっ

た。

名前を聞いただけでこうなるから、会うのは無理だったの。対面して、普通の顔は絶対できない自信がある。

……はあ、相当の重症だな、私も。

とにかく、この、顔面赤面症および不整脈が治らない限りは、絶対国崎と接触できねえ！

せめて、対国崎用の仮面とキャラが完成するまでは待ってくれ。

今会ってしまったら、この気持ちに気付かれてしまう。100%。そしたら、私は終わりだ。気付かれては、駄目。今までの自分が壊れてしまう気がする。

だから。押し殺せ、この感情を。

「……………」

マスターは何か言いたげに私を見ながら、割れたカップを片づけ始めた。

今日、店に入ってすでに2時間が経過。

「……………ナツちゃん、いつまでここにいるのかなー？」

流石に長居しすぎている私に、マスターのボヤキが聞こえて来た。

「…んー、ごめん。もうちょい。」

ごめんマスター、バイトの時間まで待ってくれ。それに、今日はなんか嫌な予感がするから動きたくない。

ぼんやりと思考しつつ、何杯めかのコーヒーを傾けていると、

突然、

ドタドタとやかましい足音が聞こえた。

途端、ぎくりと動きが止まる。

なっ！？まさか……………

「マスター！那津、来てないかつ！」

そして一瞬後に、乱暴にドアを開け、男が入って来た。カランカランとつるさくベルが鳴る。

息せききった様子のその男は、言つまでも無い。

国崎、だ。

最近姿すら見なかったが、間違っわけがない。

…しかも第一声、それかよ。

そして、そのお尋ね者の私は、

「……………あー、ナツちゃん、ね……………」

マスターがちらと視線を下にやる。

間一髪でマスターの居るカウンターの下に身を潜めていた。

……ホント、危なかった。

無様な格好でへたり込んでいる私はマスターに全力で『NO!』を伝えると、気配を消すように身を縮めた。

「……今日は来てないかな。」

「そう、か……」

マスターの返事を聞くと、国崎はドカツとカウンター席に腰を下ろした。

……え、いやいや座ってんじゃないよ。ここに居ないつってんだから、余所行けや。

声に出さずにツッコむが、出るつもりはないのか、国崎は勝手に話し始める。

「っだー、くそ。アイツ、どこにいるんだよ……」

何処となく苛立った口調だ。

……こりゃ、見つかったら本気でヤバいな。

「何、ナツちゃん探してるの?」

「そ。那津、大学でも全然捕まらないんだよ。携帯も着信拒否にしてるみたいだし……」

うわ、バレたか。

直後の『今度会ったらどうしてくれようか……』っていう呟きは聞かなかったことにしよう、……うん。

「へえ…だから、ね。」

しかし、部外者であるマスターはすごく楽しそうだ。
…こっちにちらちら視線送るの、やめる。気付かれるだろうが。

「…何が？」

「ん、いや、こっちのハナシ。てか国崎君、ナツちゃんに何したの？そんな避けられるって。」

「……………」

マスターの放ったひと言で、しばし沈黙が流れる。

気まずい。

…そういう質問は、本人がいないときにしろよマスター。
なんか私まで緊張するだろ。

そんなこと思いつつ、私も彼の返答を待った。

国崎は『あー』だの『うー』だの言っていたが、やがて小さな声で
呟く。

「……………告白、した。」

ぼつり、と漏らした国崎の声に私の心臓がドクンと跳ねる。何とも
切ない声に、また顔に熱が集まっていく。

うあ、何コレ恥ずかしいっ！

言った本人より言われた方が恥ずかって！！

「へえ！そんなんだ？」

一方、マスターはすごく嬉しそうな様子。

…このおっさん、完全面白がってるな。年甲斐も無く声、弾ませやがって。

「んで、どうだったの？返事は？」

「……マスター、分かってて言うてるだろ。嫌みか？」

「はは、ゴメンゴメン。いやーしかし、国崎君もナツちゃん相手じゃ苦労するね〜。」

「全く、だ。」

すぐ近くで身悶える私のことなど知りもしない彼は、自嘲気味に笑った。

私はふと動きを止め、三角座りをしながら国崎の声を黙って聞く。また、何やら話しだしそうな雰囲気だ。

いや、でもソレ、このまま私が聞いてていいのか？この先を聞くのが怖い。ドキドキする。

マスター相手にする国崎の話は、紛れも無く、本音だから

……と言っても、もともと動けない私にはどうしようもないってハナシだが。

黙って彼らの会話が進行していくのを聞いているしかなかった。

「……俺、今までマジで恋愛してこなかったんだと思う。」

国崎は少し間をおいた後、よく通る低い声で話始めた。張り詰めたような声は、彼が真剣な証拠だ。

「……えー？国崎君は恋愛経験豊富そうだけど？」

マスターは少し驚いたような顔を作り、聞き返すが、

「……は、『経験』だけならな。でもそれだけだ。誰かを好きになつたりとか、無かったかもしれない。」

国崎はあくまで真剣な口調を崩さない。

「……………そう。」

彼もまた静かな声で答えた。

異様な雰囲気が出た店を包む、と共に、彼らの話はそのまま進行していった。

まあ、それがダイレクトに聞こえるんですけどね。位置的に。

……何でいきなりシリアスになってんの、この2人。しかも話している内容、めっちゃくちゃ嫌なんですけど。

……………居辛い。ハッキリ言って、強烈な居心地の悪さを感じる。自分が話題なわけだし。

しかもタチ悪いことに胸の鼓動がおさまらないのよ。

……………もう、何なの、コレ。

「意地っ張りだし、そのくせ本音隠すのが上手いんだか、下手なんだか……」

「あー分かる分かる。最初からそんな感じだよ、ナツちゃん。」

「しかも、人の気持ち、全く考えねえし。」

「それも、同感。」

その後も延々と続く国崎とマスターの話し合い……
つてか、私の愚痴。

私は眉をヒクつかせながら、その拷問に耐えていた。

…おい、真剣なハナシはどうしたんだ？後半、私の悪口しか言っていないじゃん。

黙れや、クソ男どもが。そろそろブチ切れんぞ、コラア。

かなり頭にキテいた私は、脳内で国崎を半殺しにするが、

「…だからさ、ホントに分かんない。アイツの心はどうすれば手に入るのか。」

それ故に、彼の唐突な告白に対処出来なかった。

セリフに気持ちに着いていけずに、いきなり心臓が跳ね上がる。思わず顔を上げた。

つな、なにをまたコイツは…！

「アイツの行動に振りまわされて、一喜一憂、気分が落ち込んだり浮いたり。…マジで、らしくねえしダサイよな、俺。」

…え？これ、本当に国崎？

淡々と言葉を吐き出す彼に、私は驚いた。

弱々しい、掠れたような声は、平生の彼からは想像もつかない。

顔はもちろん見えないわけだが、多分疲れた感じだ。声の調子からして。

「おーおー、初々しいねえ。」

…そして、それをわざわざちやかすマスターは、かなりのツワモノだ。

国崎も口を尖らせた。

「…るっさいな。仕方ねえだろ、こんなん初めてなんだから。」

「そこが、カワイイんだって。…んで、どーにも我慢できなくなつた国崎くんはナツちゃんに告白したんだ？」

「…言い方ムカつくな。…ああ、そうだよ。告って、見事玉砕。簡単にオチる女じゃねえって分かってたんだけど…流石に、面と向かって『嫌い』は効いた…」

ハアと大きなため息を吐き、がくりと国崎が頂垂れた気配がした。

.....

…国崎、これが君の本音か？

何でこんな弱ってんのさ、たかが私に振られたくらいで。

気にするなよ。もう忘れろよ私のことなんて。君は最強俺様イケメン君だろう？

こんな姿、全然君らしくないじゃないの。

…胸が、痛い。ズクズクと膿んでいくみたいだ。

麗奈さんの時に感じた痛みは、彼女の同情或いは罪悪感だった。

なら、これはどんな種類の痛みなんだろう？

「……でも、」

国崎はまだ続ける。

…もう、話すなって。分かったから。てか心臓が痛いから。ホントに。

「…どうしても、那津が欲しいんだ。断られたって諦められねえ。」
「っ……!!」

ポツ！！と音をたてて顔が朱に染まる。

爆弾投下。

顔面温度は最高温度41まで達しました。

どうすんの、これ。めちゃくちゃ顔が熱い。火傷しそう。つか、する。

…なんつー恥ずかしいことを、コイツはさらっと言えるんだ!! 自重! 少しは自重しろっ色気の!!

理不尽な怒りを国崎に向けて、心の中で罵倒する。

その間も、心臓がありえない程速いペースをキープしつつ、鳴っていた。

…まだ正体不明の胸の痛みも、消えてないのに。

「へえ〜諦められない、ね。」

さらにその直後に、マスターのニヤけた顔が容易に想像できるようなセリフ。彼はくっくっくっ喉を鳴らして笑った。

…もう君ら、皆死ね。特にマスター、地獄に堕ちろ。何この羞恥プレイ。私を殺すつもり?

私は胸をぎゅっと押さえながら、2人に気付かれないようにそっとため息をついた。

……

…やっぱり、ダメだな……………これは、本当によろしくない。捨て置いたはずの感情がまた戻ってきてそうだ。

全然ふっ切れてないじゃん、私

マスターはまた下に、というか私に視線を送りながら国崎に言った。

「……………そっか、ホントに本気なんだね。」

「ああ、」

まさに当然のごとくさらりと返す国崎。

……だからそういうコト言うの止め

「……しかもアイツ、最後、様子がおかしかった。」

！瞬間、びくつと体が反応する。

赤くなった頬が一瞬で白く変わった気がする。

……な、に？

「……様子？」

「俺のことが嫌いだって言う前、何かに怯えるような……そんな仕草をしたんだ、那津は。」

ドクン、ドクン。心臓が鳴る。やたら大きい音で。

「……あの怯え方は異常だ。絶対何かあった。」

ドクン、ドクン。

「……そうだな、何か嫌な記憶でも思い出したりしたのかもしれない。友人関係、学校問題、あとは……」

ドク、ドク。

「家庭の事情、とか。」

ドク、ン。

その言葉を聞いた瞬間、本気で息が止まった。そして、眩暈がした。またフラッシュバックが脳内で起こる。

「　　つ、」

あまりの衝撃に私は頭を抱え、声にならない声を漏らした。嫌悪と憎悪と苦しさで胸が痛む。視界が歪み、吐きそうなくらい気持ちが悪い。

ちっ、

荒々しくなりそうな息を整え、忌々しげに、小さく舌を打った。

やっぱり、国崎に会うわけにはいかない。

君は鋭すぎるんだよ。エスパーも大概にしとけよ？

何で、そうやすやすと人の事情まで見抜いてしまうんだ。

…会ったら、すべて暴かれてしまう。

私の気持ちも、誰にも言いたくない過去も

君は、危険だ。

私は鋭い棘を刺されたように痛む胸を押さえ、改めてそう思った。

そこまで言った国崎は、ふつと軽く笑い、

「…ま、あくまでも想像だけだな。とにかくあいつは何か隠してる。そこをまた聞きださねえと。」

ガタ、と椅子が動く音がした。

それを聞いて、ああ、ようやく去ってくれるのか、と安堵する。心はかき乱れ、動悸も激しいままだが、ホッと息をついた。

とつとと帰れ。これは、この胸の痛みは、修復に時間がかかりそうだから。

「じゃ、マスター。そういうことだから、那津が来たら連絡して

「国崎君。」

え？

席を立ちかけていた国崎にマスターが声をかける。彼だけでなく、私も怪訝に思った。

…何、何の用なのよマスター？

きよとん、と目を丸くする私にマスターは苦笑いをして、

「……ごめん、ナツちゃん。ここは国崎君を応援したいわ、俺。」

そう、呟いた。

h a ?

え、え、ちよつと、待て。まさか……

「国崎君、実はナツちゃん今ここに居るんだ。」
「はっ！！？」

……嫌な予感、的中。

マスターが『ここ』と指差した場所は、もちろん私の居るカウンターの裏だった。

ガツシャーーン！！！！

それとほぼ同時に響く破裂音。

私はカウンターの裏を思いっきり蹴った。テーブルの上の食器や花瓶が音を立てて下に落ちる。

国崎側に。

「っああ！なにしてんのナツちゃん！！この皿高いのにつ……るっさいマスター、死ねハゲっ！！」

破片が飛び散り、マスターの悲痛な叫び声が聞こえる。

急いで身を引く国崎とは目を合わせず、立ちあがった私は、マスターに悪態をつきながら裏口まで走った。

扉を勢いよく開け、裏路地を抜ける。外は風が強く、私の黒髪を揺らした。

っだああ！あんのクソ馬鹿三十路男！！

何、バラしてんだああああ！！！！

国崎に、見つかってしまったじゃねえか！しかも、最悪なタイミングで！！

マジで殺す！！後で、マスターン家に火いつけたらああああ！！

狭い裏路地を抜けると、いつか国崎と2人で歩いた大通りに出る。今は平日の午後。幸い、道にはたくさんの人がいた。

とりあえず、S大まで行こう。あそこなら隠れ場所がいっぱいある。

そう思い立った私は、出来るだけ体をかがめ、人ごみに紛れながら走る。

なに、私は逃げ足は速いんだ。アイツに見つからなきゃ確実に逃げ切れる

「那津っ！待て！」

……見つからなきゃ、ね。

動きがピタリと止まった。国崎が私の行く道に、横からイキナリ現れたのだ。

……てか、追いつくの早っ！！

当然、急いでUターンし、駆けだす。国崎も私を追いかける。

リアル鬼ごっこ、スタートだ。恐怖すぎる。

走りながら私は大声をあげた。

「っだー！何でそんなとこにいるんだよっ！！」
「お前の行動パターンなんか見え見えだっの！どうせ大学に行くつもりだったんだろっ！」

……ええ、凶星ですけどっ！？

ギリ、と唇を噛んでさらに走るスピードを上げる。後方で舌打ちが聞こえた。

「おい、待てっの！話があるっ」

「私は無いわー！とにかく消えるポケエー！」

地面を蹴り、走りまわる若い男女。傍から見るとアホらしい追いかけてこだが、両者とも必死だ。

……特に、私。

絶対、捕まってたまるかああああ！……！！

「はっ…はっ………」

走り始めて、どのくらい経ったか分からない。

だが、着実に2人の距離は縮まっていた。単純に体格と体力差だ。

私はもう、息も絶え絶えだった。対するヤツは、多少息を切らす程度。

っ、水族館の時の思ったが、コイツ、体力ありすぎだろ！

いや、私はかなりナイ方だがっ！

私はついに商店街の表側……かなり大きな道路に出た所で、足を止めてしまった。

「……もう、追いかけてこは終わりか？」

国崎の声が、静かに響く。

私は、国崎から見てほんの数メートル前にいる。もう獲物は目前、とでも言うように、彼は嘲笑った。

……ちょ、何その悪役のセリフ。

嫌みのようにゆっくりと近付く男を私は睨みつけた。

「……っは、う、る……さい！」

ぐいっと額の汗を拭う。後から後から流れ出る汗を忌々しく思った。

「……相当辛そうじゃねえか。もう諦めろって。」

「……私、は！捕まら……ないっ！！！」

「まだそんなこと言うのか？」

「……………」

近づく国崎。もうヤツの顔がすっかり確認できるほど距離が近い。だが。

……まだ、だと？

はっ、私がこんな所で止まった理由が分からないのか？

最終手段だ。私は息を大きく吸いこんだ。

「…イケメン好きの女子のみなさーん！！噂のS大の王子様、国崎聖悟君がデートのお相手を探してるそうですよーっ！予約は速いモン勝ち！！さあ寄ってらっしゃい、見てらっしゃい！！」

ありったけの音が、辺りに木霊した。

「っ、おい！？」

動揺する国崎の言葉は、

きゃああああああ！！！！ という、もんの凄い歓声でかき消された。

…というか、最早悲鳴に近い気もするが。

そして、ぞわっと、女子たちがどこからともなく現れた！

流石、S大学の近くということもあって、彼を知る女子大生が集まる。だが、何も知らない一般の女性も、イケメンを一目見ようと群がった。

そうして、国崎はあっという間に女子軍で囲まれてしまった。

『国崎君！私っ私とデートしよっ！！』

『いや、私と！！』

『うっさいブス！生まれ変わってから言えよ！』

『聖悟くんが決めてっ！どんな子がタイプ？』

『オニーサン、マジかっこいいね！若い子に飽きたらアタシでもっ！』

『ババアはスツこんでろ！顔の皺何とかしなっ！！』

ギャーギャーと罵詈雑言が飛び交う中、私はこっそりその集団から抜け出し、ニヤリと笑みを見せた。

「っ 那津！ 待てよっ！！」

中心にいる国崎の声が聞こえた気がするが、私はそれを空耳と信じ、ゆったりと歩きだす。

やはりこんな時頼りになるのは、恐るべき女子パワーだな。これほど有効な兵器もなかなか無いよ？ ホント、助かったわー。

優雅に歩を進め、国崎と女子軍が少しずつ遠のいていく。

つんざくような女子の叫び声も段々と小さくなり、やがて消失する。

私はまた、口を歪めて笑った。

私を甘く見るなよ？ 国崎。君から逃げるためだったら、何だっ
てしてやるわ。

「……………さて、と。どこに行こうかな……………」

女子の波から遠ざかるように上手いことすり抜けた私は、あてもなくふらふらと彷徨う。

国崎の登場のせいで、残念ながら大学とは反対の方向にしか行けな

い。

…故にその近くにある自宅にも帰れないわけで……
行き場を無くした私は、こうしてただ移動しているしかないのだ。
…立ち止まってるって、追いつかれるかもしれないしね。

チラリと腕時計を覗くと午後5時を回ったところだった。
まだ、バイトまでも時間がある。

「ハア……………」

どうにもツイてないな、私。
ため息をひとつついて、とりあえず道路に沿ってぐねぐねと曲がった道をたどって行った。

しばらく道なりに歩き、足を止めたのはバスの停留所の前だった。
そろそろ体力的にも限界で、体が休息を要求していたので、私はベンチに座って休むことにした。

…裏道を通ってきたから、そう簡単には見つからないはず。
しばらく休んだら、どっかの店に入って隠れよう
そう思って、背もたれにもたれながら、リラックスする。

空を仰ぐと、古ぼけた屋根の隙間から夕暮れの景色が覗いた。涼しい風が吹き、体を癒してくれる。
私はフツと口を緩め、そのまま、視線を正面に戻した。

座っている私の目の前を、幾人もの人が通り過ぎる。

学校帰りの子供、散歩中のお年寄り、慌ただしいサラリーマン……

みんな、歩幅も違えば表情も、雰囲気も違う。みんな、違う。

……ああ、いつか考えてたっけ。こんな大勢の人が皆他人なのは、なんだか不思議だっけ……

でも、別に何も不思議じゃないよね。人は、知り合いより他人の方がよっぽど多いから。

そして私も、その一部だ。

人の波に流れて、ほぼすべての人の『他人』として、生きていく。道行く人々のように、何の関わりも接点もなく。

でも

『好きだ、那津。』

『……欲しくて、たまらねえんだ。』

国崎の力才が、また音も無く浮かんでくる。

こっちが恥ずかしくなるような、ストレートなセリフと共に。

……何で、君は、他人のまま終わらせてくれなかったんだ。

こんなに人がいるんだ。日本だけでも人口は1億3千万ちょっと。

男も女も、もういらないうてくらい、いる。

なのに、どうして、君は、私を見つけてしまったんだ。

明らかにスルー推奨女なのにね。

私は、君に

… 出会ってよかったんだろうか？

「… あー、くそっ」

私はぐしゃぐしゃと頭を掻き、バツと勢いよく立ちあがった。

ダメだ。立ち止まってる余計なこと考えるっ！

… しかも、もーコレ何回思い出してんの、私。

そしてその度に赤面するなよ、本城那津の分際で！この阿呆っ！

しっかりしろ！と、自分で自分を叱り飛ばしながら頬を叩き、私は大股で歩き出す。

… 挙動不審？分かってるって、そんなこと。今更でしょ。

できれば見ないで下さい。ええ、目に毒ですから。

よし、遠くに行こう。できるだけ遠くへ行って、頭を冷やさねば

そう思っただけしばらくずんずんと歩いていると、

キキッ

軽快なブレーキ音が、した。

灰色がかった白い車が私の目の前にキレイに停まる。

「え？」

驚いて目をパチクリしていると、運転席側のウィンドウが開き、運転者と目を合わせる。

中の人物は、ニコリと笑った。

03 (後書き)

那津、謎の運転手に会う。続きます。

焦る不器用と笑う腹黒

静かに、車は走り出す。見慣れた景色の1部と、溶け込んでいく。

私は窓に寄りかかって頬杖をつきながら、徐に運転手に話しかけた。

「　　なんで、君がここにしているわけ?……乾。」

ちらつと視線をそちらに向けると、乾　圭太郎は優雅に微笑みでみせる。

「　単なる偶然ですよ?」

「　嘘つけ。家、逆方向だろうが。」

「　はは、いやだなあ。ホントですって。買い物がてら、ドライブしてたんですよ。そしたらナツさんを見かけたので。」

……絶対、嘘だ。ナニその胡散臭い笑み。怪しすぎる。

……やっぱ、車が停まった時点でダッシュで逃げればよかったかも……。いや、乾のヤツ、送るつつって無言のプレッシャー与えてきたからな……。あの状況じゃ無理だ。相手、車だし。

「　!」

そこで、私はハッと気付いた。相手が引くくらいスピードで振り向く。

「っ、まさか国崎が君を？」

ヤツの差し金か…っ？

ヤベエ、だとしたら逃げ場、ねええええ！もう乗っちゃったしいい！何このハニートラップ！手え込みすぎだろ！

私が顔面蒼白のまま固まっていると、

「…聖悟が、どうかしたんですか？」

乾のほうはきょとん、とした顔で首を傾げた。

「……………え？」

お先真つ暗な予想をしていた私は思わず問いかけてしまう。しかし乾の方も『え？』みたいな顔をして私を覗く。気まずい空気が車内に広がった。

何、もしかしてホントに知らない？国崎と私のこと。…国崎の性格上、絶対協力者使うと思ってただけ。

まあ、最近ドタバタしてたから、まだ言っていないのかな？

「ナツさん？どうしたんですか？聖悟が、何なんですか？」

気がついたら、私の前でヒラヒラと手を振る彼の姿が見えた。

「……………あ、いや、何でも無い。勘違いだったみたい。」

まあ、知らないなら知らないでいい。問題ない。この顔は多分

嘘じゃないだろう。

こいつが来たのは本当に偶然で、純粹に好意で家に送ってくれというなら、それはそれで楽し。私はホッと一安心して、視線を前に戻す。

前の車が停止し、ちょうど赤信号になる所だった。

信号待ちの間、私がボーッと暮れゆく街並みを眺めていると、ふいに乾から声をかけられる。

「…………… ナツさん、聞いてもいいですか。」

「ん？何。」

私も何気なく聞き返す。乾はハンドルを切りながら、普通の調子で私に尋ねた。

「聖悟から、告白されましたか？」

… 心臓、口から出ると思った。

「…………… えっ、だ…………… はあっ!!?」

一瞬…………… いや、多分三瞬くらい意識なかったと思う。失っていたソレが戻ってきたと同時に、私は勢いよく飛び起き、

「ゴッッ……！」

「……………あだっ!!」

…強かに、頭を天井にぶつけた。勢いをつけた分だけ痛みが大きい。頭がグワーンと鳴り、視界が歪んだ。…やべえ、超痛え。頭割れる。

「……………えっと、大丈夫ですか？」

乾は頭頂部を強打し、悶絶する私に話しかける。…驚きと呆れが6：4つてどこか。反応としては間違ってるが、なんかムカつく。

「っ問題ない!!」

焦る私は、半ば反射で答える。もはやヤケだ。ヤケクソだ。

「え、スゴい音、しましたけど？」

対する乾は苦笑しながらも冷静にツッコミを入れてくる。

「脳細胞が少し死滅したくらいだ！損傷は無い！」

「…いや、それ結構な重症ですよ？」

「うるさいっ！どうせもう脳みそなんか使わないんだからいいの！」

「……………大学生を侮辱してるんですか？」

……………ああっもう！君、いちいち細かく返さなくていいからっ！動揺しすぎて自分でも何言ってるか分かんねえから!!

ていうか、乾。何故君はそれを知ってるんだ？

乾はクスクスと笑いながら前を向き、再び車を発進させた。

「…まあ、大丈夫ならいいんですけど。分かりやすい反応ありがと

うございます。ふふ、そうですか、やっぱり……」

やっぱりって、何だ。何ニヤニヤしてんのボケが。

「……何、何が言いたいの。」

「いえ、聖悟も頑張ったなあと思ひまして。」

そして、彼はニコリと綺麗に笑顔を作る。

「……………」

私は眉根を寄せ、彼の方を向いた。乾の言葉が不可解だった。
…何だろ。こいつの、まるで母親が見守るような温かい眼差し。

まるで

アイツが私のことをずっと好きだった、みたいな。んで、やっと告白できてよかったな、みたいな。

「ええ、そうですけど？」

「！？」

さらりと、いきなり返ってきた返事に思わず絶句。…え、私口に出してなかったのにつ！？

「ナツさん、顔に書いてありますよ、顔に。」

「……あ、そうですか。」

「はい。」

乾は軽い口調でそう言い放ち、私を黙らせる。

くっ、表情から思考を読まれるなんて、未熟！つか、乾が鋭すぎるんじゃない？

もう少し心を落ち着けなければ……やっぱり、ちよいと修行が必要かなー。

「……って、違うでしょう。問題から目を逸らさない。」

うわ、またバレタ。別に少しくらい現実逃避の時間くれたっていいじゃんか。

ぴしゃりと思考を遮断され、私は唇を尖らせた。自然と猫背になり、シートの下に視線をもっていく。しばしの無言の末、私はボソボソと呟いた。

「……だって、そんなわけ、ないじゃないか。」

口から滑り出た言葉は、自分でも驚くほど本音だった。

「…何が、そんなわけないんですか？」

「だから……国崎が、私のこと……」

もごもごと言い淀み、俯いてしまう私。

うが、言えねえ。恥ずかしい。しかも身の程知らず過ぎる、こんなセリフ。

「 聖悟がナツさんを好きって、ことですか？」

…サラっと言ってくれたけどね。この男は。

乾は、はあ、と大げさ気にため息をつく。理解しがたい、とばかりに。

「…何でそんなに否定するんです？誰が見たって明らかじゃないですか。彼は、貴女のが好きです。」

続けて『ていうか、気付いてなかったのナツさん本人くらいですよ。』とボヤかれる。

「っ、だーかーらっ！違うんだって！ヤツは私のこと面白がってるのー！」

それに対し、露骨な表現を吐かれた私は、とにかく叫ぶ。誰が見ても、聞いても『照れ隠し』に間違いなかるうに。

「真剣に、告白されたのに？」

じと、と今度は目力で睨んでくるのでうぐ、と一瞬言葉に詰まる。が、

それは、違うって、乾。

ふ、と自嘲なのか呆れなのか分からない、曖昧なため息をもらすと、私は乾 圭太郎に向かって、ハッキリと言ってやった。

「……全部、何かの間違いなんだって。私のことなんか、好きはずがない。国崎、気でも狂ったんじゃない？」

「……………」

「とにかく、私は認めない。それで、国崎の遊びにもいちいち付き合ってもらえない。」

自分のセリフにどんどん心と体が冷めていく。確認するかのような、自分に言い聞かせているような、そんな言葉に。

あーあ、うざいうざい。もう放っとけて、私のことは。どうせ全部勘違いのマヤカシばっかなんだから。

じわじわと私を侵食する黒い感情のまま、私は乾を睨みつけ、叫んだ。

「…アイツなんか、もう知らないし。乾からもなにか言っちゃってよ。私なんか　っ」

だが、そこで、私の言葉は途切れる。なぜなら、隣から発生する異様な雰囲気気圧されたから。

あ、れ？なにこの空気。

「……い、ぬい？」

いきなり無言になった彼に私は不審に思い、運転席に顔を向けた。すると。

「…そんなこと、言いますか、ナツさん。」

口角を上げ、不気味なくらいキレイな笑みを浮かべた乾と目が合った。瞬間、体にゾクツと悪寒が走る。

え、なにその黒い笑顔。

恐怖に戦く私。ニコニコと笑みを絶やさないう彼。…どう考えても、異質な空間だった。

車内に気まずいくらいしん…とした空気が広がり、私はしばらく引きつった顔のまま動けないでいる。

しかし、その微妙な空気を打開する策を講じる必要はなく。……いや、なくなった、と言うべきか。

とにかくそんなことを考えてる暇は皆無となった。

ギュルルルルルッ！！キイイイイイ！！

…突如、ド派手な音を立てて、車は止まったから。

車輪は横に滑り、車体は大きく傾く。まるで映画のワンシーンみたいな、通常ではありえないアクションだ。車の中のものが重力に従って散乱してしまう程度に、激しかった。

…なので、もちろん。

「…っだあああ！！？」

中の人間も、大きく姿勢を崩すハメとなる。私はゴツと嫌な音をたて、左の窓にしたたか頭を打ってしまった。…また。

…シートベルトしてたから良かったものの、かなり危ないってコレ！！

「っ、おい乾！ちょっと、」

非難しようとする隣の男を下から睨み付けるが、

「…っうあああ！！？」

今度は、反転。車はハンドルによって素直に進路を変え、ぐるりとその体を回した。

…当然、中の人間も、以下略。遠心力に逆らえるハズもなく、今度は反対側、乾の方へ体ごと倒れこんだ。……ちょ、もう勘弁しろって。

凄まじいカーテックニックにより強制的に体が揺れ動かされ、脳がグワングワンと揺れる。……気持ち悪い。

しかし、運転手はどこ吹く風で。華麗なUターンを決めた後、悠々と愛車を走らせていた。

「ちょっ、乾！何すんのっ！そして何処行くんだよ！！」

そして、怒り心頭のワタクシ。当然だ。彼の動向も目的も何も掴めないんだから。

激しい感情のまま、眼鏡の男に向かって食ってかかった。すると、彼は。

「…え、何処って……………」

ニッコリ。

「聖悟の所ですけど？」

乾は、前を向いたまま、『それが、何か？』的口調で言ってきた。

!!!

もちろん私の反応は、絶句。そして顔面蒼白。息が詰まり、また頭がグワンと鳴った。

……おい、待て待て。何言ってるの、君は。意味分からん、ってか、意味を理解したくない。

「……あの、何処にいるかなんてわからな

「聖悟から逃げて来たんでしょう？なら、今と反対方面を道なりに行くだけです。」

「……そもそも何で追われてるなんて

「貴女の言動、その他諸々からです。言っちゃなんですが、今日のナツさん、分かりやす過ぎですよ？」

私の疑問をスラスラと答えて下さる乾サマ。……なんか、泣きたいんですけど、もう。

どうも、……いや、確実に、私は運に見放されてるらしい。

……しかも、段々スピードが上がってる気がするんですけど。おい。それで、何事もなかったような、余裕そうな横顔もまたムカつく。

「……この野郎、国崎の手先じゃないくせにっ！」

体勢を整え、ようやく口から出たのはそんな悔し紛れの言い訳。自分でもどうかと思つた発言だ。手先で。シヨッカーか。案の定、彼は楽しげに返事を返してくれた。

「ふふ、…ま、確かに聖悟からは何も言われませんでした。俺は最初からアイツの味方ですよ。」

…「うち、あーあー、そりゃ、そうだろうよ。知ってるよ。そっちは高校以来の友人らしいし。私みたいな不審な女、突き出して当然だろ。」

「そして、ナツさんの味方でもありません。」

つて、……………は？

その後の乾の言葉に、思わずキョトンとする。

「……………今、何てつた？」

「貴女の味方です、と。」

セリフと行動が矛盾しまくってる件。

「……………私の、味方？」

それならさっさと車を止める。おうちに帰らせてよ。ねえ。だが、私の意に反して彼は。

「ええ。だから、聖悟とサシで話し合つて、決着付けた方がいいでしょう？」

そう言いなさつて、それが貴女のためにもなります、と付け加え、

乾はまた爽やかにほほ笑んだ。

「……………」

私は眉間に皺を寄せ、黙って難しい顔を作って見せる。

「……………弱った。完全善意らしいよ？この行動。こいつにとって。…いらぬ世話だったのに。」

「……………まあ、そりゃあ、ね？腹割って話し合って、それで結果がどうあれ、丸く収まったら最高だろうよ。」

私も自分が当事者じゃなきゃ、その手を使うと思うよ？いちばん、平和的な解決法だし。余計な誤解もないし。

でもさ、それ、無理なんだよ。

君の好意故の行動も

「……………余計なこと、しないで。」

私を苛立たせる要因となるだけ。

「……………」

努めて無表情に徹したつもりだったが、精神状態のボロボロな私。彼には何か苦しげに見えたのだろうか。乾は整った眉をひそめて声を低くした。

「貴女は……………何を、恐れてるんですか。」

言葉と共に、眼鏡の奥の瞳が鋭く私を射抜く。…砂を噛んだような、嫌な感覚が体に広がった。

ホラまた、嫌な、予感。

「……何を、つて？」

「……無理に聖悟を避けるのは何故かと聞いてるんです。」

「……。」

「もし彼のことが本当に嫌い、もしくは興味がなければ、逃げる必要はないでしょう。その場であしらえばいいのですから。」

「……なにが、言いたいのか、君。」

示唆するような物言いに若干苛立つ。乾は一瞬目を伏せた後、こちらに視線を流した。

「ナツさんも　　聖悟のことが、好きでしょうに。」

「~~~~~」

気がつけば、胸を押さえていた。ぎゅっと服を握る。まるで弾丸に撃ち抜かれたように。胸を、貫かれたように。彼の言葉が私を貫き、熱いナニカだけが残る。痛い。痛い。ドクンドクンと、心臓が脈打ち続ける。

「……ね、やっぱり。」

ささやくような男の声に、私はもう泣きそうだった。

ああ、崩れる。表情が、顔が、気持ちが。

ほら、やっぱり全然作れてなかった。平気なフリの仮面なんて。…

…国崎が嫌いな自分なんて。

どうしても、隠すことも消すこともできないんだ。この、厄介な感情は。

「…ま、よかったですね。両思いじゃないですか。」

私の心情など知る由もない乾は、気楽そうにそう言う。

…何が、いいものか。

「…国崎なんか好きじゃないっての。何度言ったら分かんのか。」

私はおそらく赤くなってるであろう顔を逸らしながら、呟く。

もうヤダ。何もかもが嫌だ。何、この気持ち。もう自分でも意

味不明過ぎる。

国崎が好きで。やっぱり好きみたいで、どうしようもないなんて

…死にたくなるわ。

そして、そんな挙動不審女を受けて、彼は、

「…はあ、ホント、面倒くさいですねーナツさんは。」

「…はあ!？」

至極面倒そうに頭を振った。

……ちよ、人が傷ついているときに塩刷り込むなって!

乾はため息をつくど、体ごと私に振りかえる。彼の美しいお顔は。

明らかに、苛立ってらっしゃる。

え、笑顔も怖かったけど……これもなかなかの迫力ですって！

「え、あのいぬ」あの、いくら俺でもそろそろ怒りますよ？」

彼は頭を掻きながら、もう付き合いきれないですよ、と言葉を続ける。

「好きなものは、好き、でいいじゃないですか。何故隠そうとするんです。聖悟がどれだけ悩んでるか、貴女は知ってるんですかっ？」

「……や、知らないけど。なんで君が不安定になってんのさ。」

てか、こつちがびつくりなんだけど。ナニその勢いの良さ。

「……彼がうじうじとしてるのを観察するのは、最初の内は楽しかったんですが段々とウザくなってきまして。図体でかいくせに何気持ち悪いこと言ってるんですかって感じですよ、全く。」

テメエの都合か。ここでブラック出されても対応に困るんだが。

「……あれ、国崎って君の友達だったよね？悪口にしても酷過ぎやしない？」

と、毒を吐き出してどこかスッキリしたような乾はコホン、と古典的な咳払いをした。

「……まあ、冗談はさておき。」

「……はあ。」

……冗談とか。こんなときに入れるなよ。

「俺は、本気で貴女と聖悟が上手くいってほしいと思ってます。嘘なんかつかずに、素直になってくださいよ、ナツさん。聖悟の気持ちも、考えてやって下さい。」

聖悟の為にも、と乾は愛想の良い顔とは裏腹に、真剣な目で私を見た。

「……………」

「ね、ナツさん。」

黙って下を向く私に、諭すような声が降りかかる。車の外から聞こえてくる街の喧騒がやたら遠くなった。

……………うん。分かっている。そんなこと言われなくても分かっている。

好きだよ。私は、国崎のことが。この間から何回この葛藤を体験してると思っているの。

んなこと、嫌ってくらい知ってるってば。思い知らされてるんだから。

でもね、行き着く結論はいつだって同じ。ハッピーエンドなんてないの。望んで、ないの。

ごめんね私、フツーじゃないから。異常、だから。

ぜんぶ否定、するよ。それが私の為だし、君らの為でもあるんだから。

「…乾、私はね。」

すつ、と息を吸う。すると風が海の表面を凧ぐような、穏やかな気分になった。少しほほ笑んでみる。

「確かに嘘つきだし、ひねくれモンだよ。」

そう、不敵な笑みを作ってみせて。

「でもね、今回は嘘、ついてないよ。」

冷静な、声を響かせる。

「っ?」

目の前の眼鏡の男が、息をのんだ気配がした。どんな顔をしてるんだろうな、私は。とにかく、とんでもなく不気味な顔をしているに違いない。

ほら、いつもの『本城那津』。できあがり。

「国崎のことなんか、何とも思っていないし、興味無い。むしろ嫌いなんだよ。」

スラスラと口からスムーズに言葉を引き出す。心なんか微塵もこもっていない、冷めた声で。

どうにも笑いが止まらない、という風に口元には笑みを貼り付けたままだった。

「君は、国崎の気持ちを考えろって言ったけど……私のことは?私

にだって、気持ちはあるんだけど？」

「……ナツ、さん」

乾は慎重に私の様子をつかがっている。

それを鼻で笑ってやると、彼の表情は、さらに強張った。

「私は、あいつにも、君らにも興味ない。 キライだ。」

国崎にもそう言ったんだけどなあ、とクスクス笑って見せた。

笑う、笑う。あまりにも暗く、黒く。

まるで上界から覗く深淵のごとく。深い、深い闇。

思わず、乾は身震いした。

「っ、ナツさん！」

先程から戦慄してやまない。何だろう、この子の雰囲気は。

「……何さ。」

表情が無い。

「だから、言ってるでしょ。私のことは国崎に関係ないし、国崎のことも私に関連は無い。」

しかし。

「 そして、私はそれを望んでいる 」

一瞬だけ寂し気に見える表情は、はたして、偽物か、ホンモノか？
眼鏡の奥底に見える瞳は、何を訴えている？

キツと、ブレーキを踏むと、彼女はカクンと体を揺らした後、また
彼を見つめた。

もう、その瞳には何も映っていないかった。

「つなに、言ってるんですか！聖悟は、貴女のこと为本気で
「好きじゃないよ。」

女はちら、と前方を向き、微かに瞳を細めた。

だいぶ暗くなった街角。

しかし開けた道の真ん中に立つその人影はよく見えたのだ。

男の方もつられて彼女の目線に合わせて顔を動かすと、目を見開き
絶句、した。

「…乾、私を愛す人間なんて」

皮肉交じりの口調で、至極愉快そうに、…いや、聞くようによって
は悲しげに

「いるわけ、ない。」

本城那津は呟いた。それは何も感じさせない、全く普段通りの顔で
あった。

フロントガラスの向こう側に、2人の人間の姿が見える。両者とも彼女たちの知っている人間、そしてソレらは重なり合っていた。

すなわち、抱き合っている国崎聖悟と、黒髪を揺らす篠原未央の姿が。

02 (後書き)

そして、物語はクライマックスへ。あと五話くらいで終了予定です。

焦る不器用と笑う腹黒 - k u n i s a k i s i d e - (前書き)

本編の前に、前章の国崎聖悟サイドです。

「……………っ、くそっ！」

俺は苛立ち交りにそこらにある空き缶を蹴っ飛ばした。カントと小気味のいい音をたて缶は空中を舞うが、気分はちっとも晴れない。ため息をついた。

なんとか襲いかかる女どもを振り切ったのはいいものの、次にその場所に戻って辺りを探しても、追っていた女の姿はもうなかった。

まんまと那津に逃げられてしまった。その事実にもた腹が立つ。マスターの店に潜んでいた那津を見たときは、今度こそ捕まえた、と思ったのに。追いかけてこも、楽勝だと思ってたのに、

… 那津は体力なくせに悪知恵が人一倍働くような女だからな。まさか、周囲の女どもを盾に使うとは俺も思っていなかった。

いらいらした気持ちを隠す余裕もない俺は大通りから少し離れ、暗い路地裏のようなところで壁に背をあずけた。

「…………… 那津、」

ぼそ、とその名を呟いてみる。呼ぶとさらに会いたくなかった。

マスターの店に隠れていたってことは、あの会話も聞かれたってことか。なんか口クなことを言っただけでなかったような気がするが、俺の気持ちもこれで少しは分かってくれたんだろっか。

というか、なんでここまで逃げる。

告られて気まずいってのは分かるが、こんなに毎日逃げ回る必要があるのか？……そんなに俺が、嫌いってことか？
また、先日の『大つきらい』が胸を締め付けた。

「……ちっ、」

思わず舌打ちしてしまう。

……まあ、いい。考えをめぐらした所で、答えは変わらない。行き着くところはひとつしかない。

那津を捕まえて、全部吐かせる。
それだけだ。

「……うし、」

自分自身に気合いを入れ、とりあえず大通りに出ようと路地を抜ける。辺りは黄昏時で、急ぎ足で帰路に着く人も多かった。
俺は彼女を追って、その中を縫うように歩きだした。

「…聖悟！」
「ん？」

数十分後、ショッピング街に目を通しながら歩いていると、いきなり自分の名前を呼ばれた。
振り向いてみる、と、

「…！おま、え」
「奇遇だねっ！聖悟も買い物？」

笑みを浮かべる篠原未央がいた。買い物中だったのが、よく見ると両腕に買い物袋がぶら下がっている。

女と目を合わせた途端、沸点まで体温が急上昇したような気分になった。弱々しく笑う那津のボロボロな姿が、また瞼の裏に浮かぶ。

こいつに、やられたんだ。那津は。

瞳に怒りが、満ちた。

「……未央。」
「なあに？」

可愛いつもりなのかなんなのか、女は小首をかしげるような動作をしてくる。
だが

「…ちょっと来い。」

火に油、だぞ。今の俺には。

ギロリと睨みつけながら、脅すようになるべく低い声を出してやると、未央はビクツと体を震わせた。

そして、無言でこくと頷くと俺に促されるまま着いて来た。

「……………ねえ、なに？聖悟。」

「……………」

足をピタリと止める。未央を連れて来た先は、そこからあまり遠くない少し開けた空き地の前だ。

それなりに見通しはいいが人通りは少なく、ひっそりとしている。

俺は、振り向くと同時に口を開いた。

「……………お前、この間俺と別れた後、那津に会ったんだろ？」

もう、質問というよりは確認に近いニュアンス。びくり、と体を震わせる女が視界の隅に映る。

「な、なに、いきなり。」

「別に。ただ聞いてるだけ。…どうなんだ？」

「っ、そんなわけないじゃない。面識ないし。」

「嘘付くな。」

ただならぬ空気を感じてか、未央の瞳が大きく揺れた。

…ああ、イライラしすぎて気持ちが悪い。女でなければ、もう数発殴ってる所だ。

このウソツキオンナが。

「那津に、何したんだよ。」

「だ、だから私は何も……」

「話せよっ！！」

ダンツとそこらの壁に拳を叩きつける。そして、唸るように怒鳴った。那津が捕まらない苛立ちも乗じて、さらに怒りが増す。すると、俺が相当怖いのか、未央の目に涙が溢れ出した。透明な粒が頬を伝っていく。

「っせ、聖悟……」

呆然とした顔で、ボロボロと泣く女。

しかし、俺の心は少しも動かない。冷徹な表情のまま、さらに問いたです。

「…泣いたって許さねえ。答えろよ、未央。」

「っなんで、そんな…！…あんな女、聖悟に関係ないでしょ！？」

「…あんな女？」

「っ、」

しまった、といった風に口を塞ぐ未央。

…ほら、すぐにボロが出た。昔から感情的なヤツだったな、そういえば。

那津もこれくらい扱いやすかったらいいのに、と心の中で思った。

「なにを、したんだ？」

もう一回。じり、と追い詰めるような声色で問いただす。
未央は真っ青な顔で後ずさった。

「……………どうして、そんな気にするの？」

「ああ？」

……………しぶとい。泣きながらも、まだ言い逃れようとする未央にまた怒りがふつふつと湧く。

だから、キツパリ言っっちゃった。

「……………好きな女のこと気にして、何が悪いんだ？」

途端に、目を開いたまま呆気にとられたような顔をする女を見下す。
別に、単なる事実だから。……………本人には、全く伝わらないんだけど
な、コレが。

しばしの沈黙の後、未央はぽつりと呟いた。

「……………すき、って、あの子を？」

「そうだけど。」

「…本当に？」

「しつこいな。そうだったってんだろ。」

なにか問題でも？という意味も含ませ女を見下す。未央は愕然と目

を開いたまま体を震わせていた、
かと思えば、

「嘘よっ！！！！」

「っ！？」

突然俺に掴みかかってきた。両手で俺の服を掴み、押し倒されそうな勢い。

予想もつかなかった行動に驚いたが、すんでのところで彼女の体を支え、踏みとどまった。

すると女は、今度は俺の腰に腕を回して抱きつく。

自分のものでない体温による温もりがじんわりと体にしみこんで……
っつて、なにしてんだ、こいつ。

「おまつ、いい加減に……」「いい加減にするのは聖悟の方でしょ！」

抗議は、すぐさまものすごい剣幕で消された。流石の俺も少々ビビってしまい、絶句。

そして未央は構わず、わめき散らす。

「……あの女が好き？冗談も大概にして！聖悟は騙されてるのよ、本城那津に！」

「……んだと？」

「だって、そうでしょ！？なら、なんであんなブスを選ぶのよ！聖悟はいつももつと可愛い子とか綺麗な子とかと付き合ってたじゃない！」

「……………」

「……あんなム力つく女、聖悟には不釣り合いだわ。だから、分かせてあげた。それだけよ。」

「……」

『分かせた』

その言葉が表す意味を正確に理解し、また、カツと頭に血が上った。だが、俺まで冷静でなくなったらもう事態を止めようがない。抱きつかれている体勢はそのままに、感情を押し込め、できるだけ静かな声で尋ねた。

「……そうか。で、那津をリンチしたのか？」

「そうよ。友達にも声掛けて、ね。」

平然と、悪びれなく言うそいつに、怒りより恐怖を感じた。

知り合ったこともない女に、なんでそこまでできるんだ。

そうまでして手に入れたいのか、俺を。

目の前のヤツの欲望の深さにぞっとする。

しかし……

ぐっと、拳を握りしめる。

どんな理由であれ、その欲望に那津を巻き込んだことは許せない。俺も、もう血管が切れそうなくらい頭にきている。こいつが男だつたらすでに病院送りだろう。

…女を殴る趣味は無いが、どうしてくれようか……

「……そう。しかもあの女……」

だが、顔が見えないせいか、俺のそんな物騒な考えは未央には届かなかつたらしい。

まだおしゃべりを続ける。

「生意気な口を聞いただけじゃなく、えらそうに私に説教までして何様なのかしらね。」

……………ん？説教、だと？

「説教つて、何だ。」

つい口から出る素直な疑問。……………一体、何したんだよ、那津。すると、未央は忌々しげに顔を歪め、吐き捨てるように言った。

「…苦し紛れの言い訳よ。『聖悟のこと何も分かってない』とか、『人の心がそう簡単に手に入ると思うな』とか。本当、意味分かんないわよね？」

「……………っ、」

フンと鼻を鳴らす未央。対照的に俺の心はズキンと痛みを訴えた。

だって、それは俺がいつも考えていたコト、だったから。

上辺だけで見るな。俺はお前らが思ってるような男じゃない。俺の作った性格すら見抜けなくて、何を知った気ているんだ？

昔から女に不自由したことがない俺は、そんなスレた気持ちを抱いていたから。

そして、

だったら、俺も騙してやろう。俺の心は誰にも見えなくていい。誰も俺を見ないなら、俺も適当に遊んでやるよ。

…そう、思ってた。ただ、那津は。

「…………ふっ、」

「？せ、聖悟？」

「…………っ、はははっ！」

本城那津は、違ったんだ。俺を、『国崎聖悟』を見る。

俺も、アイツの前だといつの間にか素に戻る。ってか、素に戻らざるを得ないというか。

平気で、地じゃないと気持ち悪いとか作った性格は合わないとか言う女だし。

……まあ、そうだな。
どうしたって、どう言い訳をつけたって俺はあいつの傍が一番居心地いい。
それは、間違いのない事実だった。

「……………未央。」

「…え？」

苦笑しながら、未央の体を離す。未央は俺の変化に目を白黒させ、見つめて来た。

さっきの怒りはどこへやら。今の那津の話ですっかり消え去ってしまった。

……というか、こいつを相手にするよりも、

はやく那津に会いたい、と思った。

「…あのさ。」

未だ呆けている未央の顔を見下し、口を開く。

「…俺、今まで恋愛舐めてた。別に、女なんて顔が良けりゃ誰でもいいと思ってたんだ。……………お前みたいに、な。」
「……！」

俺の言葉に、真っ赤になりあからさまに目線を逸らす未央。…俺が、お前の思惑に気付いてないでも思ってたのか。なわけ、ねえだろ。バーカ。

ちらりと、視線を道路に戻し先を覗く。

何台かの車が行き来しているのが見えた。喧騒の中、口を再度開く。

「…でもな、今は違う。俺は、」

今の、聞いて分かった。分かったんだよ。
俺はな。

「…那津じゃなきゃ、ダメみたいだ。」

誰よりも、何に変えても、…那津が好きなんだって。

思考と同時に那津の顔が浮かび、俺はフツと笑った。
途端にボツと赤く染まる未央の顔を一瞥し、俺は背を向ける。

「…やっぱ、いいや。那津が許したんなら、お前がしたことをもう
咎めたりしない。…そんな暇もないしな。」
「なっ！！！」

突然、突き放されたように言われた未央は、顔を赤くしたまま反論
しようとしたが、

「…だが、二度目があると思うなよ。」

直後聞こえて来た、低く容赦のない声に顔面が蒼白になり、二の句
を告げなくなった。

「これ以後、那津に何かしたら、……消すからな。」
「！！！」

それはそれは、人間とは思えぬほど、冷たい黒い声で。
彼女は初めて、以前付き合っていた男を『コワイ』と思った。

「……じゃあ、そういうことで。」

そう言つて、俺は色を失くしたまま立ち尽くす未央を置いて、その場を後にした。一度も振り向かずに。

……まあ、これだけビビらせておけば変なこととはできないと思うし。
それに、最早、彼女に用はない。頭是那津を探し出すことしか考えていなかった。

未央と別れて数分後、俺は、今度は那津の自宅に向かおうとしていた。
見失つてからだいぶ時間が経っているし、那津もそろそろ下宿に戻っているだろうと踏んだからだ。

……うわ、なんか本格的にストーカーだな、俺……
いや今回だけだ、と自分に言い訳をしながら歩を進めていると、

「……ん？」

前方、見覚えのある車に目がとまる。
それはゆっくりと俺の傍に停車し、ウィンドウを下げた。

「……聖悟……」

グレーの自動車に乗り、俺を呼んだ男。それは、予想した通り

「圭太郎……」

だった。

快調に道路を走る自動車。しかし、中の人間の空気は、その調子とは程遠かった。

「……なんだよ、圭。」

「……」

…圭は、『話がある』と言って俺を乗せ、そのまま車を発進させた。
しかし、その後は一切口を開かない。

目的地も言わず、ただ黙々と運転に集中している様子だ。

もともとこいつは口数が多い方じゃないが……これは何か、異常
だと思った。

「おい、圭。」

「……………」
「…用がないなら、降ろせ。俺はすることがある。」
「……………」

何も言わない圭に、多少イラつく。

まったく、こんなことしてる場合じゃないってのに。

「おい、圭」

焦る気持ちのまま声を荒げた時。男は初めて俺の方を向いた。冷徹な、それでいて怒ってるような眼差しに少し怯む。圭は、静かに口を開いた。

「…ナツさんを、探してるんでしょう。」

俺は目を、見開く。

「…!!なっ、」

んで知ってるんだ、と続く疑問はさらりと答えられた。

「ついさっき、ナツさんに会いましたから。」

「…!!」

驚いたのと運転手の肩を思い切り引っ掴んだのは、同時だった。過ぎるほどに興奮してしまう。

「…っいつ!何処で会った!?!」

「落ち着きなさい。」

「いいから教える!那津は何処行っただ!?!今家なのか?」

「…だから、五月蠅いですって。」

切羽詰まった俺の声に、圭は迷惑そうに目を細める。

でも、それどころではない。俺はとにかく追っている女の情報を欲しがった。

「てかなんでお前、那津と会……」「黙らないと交通事故起こしますよ。」

「……………」

結果、いつもの彼とは想像もつかないほどドスの利いた声で黙らされた。

「……………」

カチャ、と高そうなティーカップが目の前に置かれる。香ってくるのは圭の好きな銘柄の紅茶のにおい。

彼自身も俺の隣に座り、カップを傾けた。

「で、こんなところまで連れてきて、何だよ。」

現在、俺は乾圭太朗宅にいる。

車が到着したのは、俺らのマンションの地下駐車場だった。そして無言で彼の部屋まで連れてこられたのだ。

俺は軽く息をつき、隣の男に目を向けた。否、睨んだ。
しかし圭は全く動じず、ゆっくりとした動作でカップを置いた。

「……まったく、せっかちですね。少しは落ち着いてもらおうと思
って、連れて来たんですが。」

「生憎、そんな気分じゃなくてね。とつとと話せよ。」

「……はあ。分かりました。」

これ見よがしにため息をつきながら、圭は順を追って説明し出した。

「……ってことは、那津は今、家にいるんだな!？」

「はずれです。話聞いてました?彼女、今夜はバイトですって。」

だから今行っても無駄ですよ、と圭は言った。

「……ちつ、深夜バイトかよ。ところで那津って、バイトなにしてん
だ?」

「さあ?答えてくれませんでしたけど。」

……本当に、何してんだ?答えられないようなバイトなのか?

「いえ。単に、俺らにバイト先にまで顔をだされたくないんでしょ
う。」

「……鋭いな。」

まあ、俺もそんな気がする。てか、考えてることがよく分かったな。

「今日の聖悟、分かりやすいですよ。ナツさんと同じくらい。」

その言葉に、少しカチンときて眉をつり上げる。

「…んだと？那津と同レベルかよ……」

「2人とも、ある話題になるとっても分かりやすいですよ。」

ニツコリと笑って言う圭。

それを聞いて、ドクンと、一瞬鼓動が大きく鳴った。

「……なあ、圭。」

少し不安な気分のまま、聞いてみる。眼鏡の奥の、男にしては大きな瞳が俺を覗いた。

「…俺、脈あると思うか？」

……まったく、こんなこと聞くなんて女々しい男に成り下がったものだ、俺も。

しかし、圭は基本正論しか口にしないのでアテにはなる。ドキドキしながら返事を待った。

すると彼は、嫌みなほど綺麗な笑みを浮かべて。

「…ホント馬鹿ですね、聖悟も。」

ハツと、鼻で笑われた。

つて、……………は？

「な……………」聖悟らしくもない。何をグズグズしてるんですか。」

笑みを崩さないまま、わざとらしく俺のセリフを遮って、

「言わなくても分かりきってることでしょう。ナツさんは、聖悟のことが好きです。」

眼鏡の男は何気なく言った。

… ホント、何気なく。途中で優雅にまた紅茶とか飲んで。

「…っ、……マジで？」

俺はもう、余裕なんて全くなくて。結構ヤバい心理状況だったりするの、

「ええ。あれは完全に意識されてますよ。逃げ回ってたのもそのせいです。」

圭がケロリと言いきるから、

途端、むくむくと何だかよく分からない感情が、湧き起こってきた。

……うわ、やばい。嬉しいかもしれない。

…そうだったら、いい。

都合のいい想像かもしれないかもしれないけど、圭から言われると本当にそうであるような気がして。

純粹に、嬉しかった。

俺は恐らく赤くなってるだろう顔を両手で押さえた。

「…ふーん、やっぱり本気みたいですね。そんな顔初めて見ました。」

「……最初っから、そう言ってたんだろ。もう俺、マジ無理だから。」

「それはそれは。」

うるせえ。…面白そうに笑いやがって。こんな感情、知らなかったんだよ。俺は。

こんなに、一人の女のことを考えるだけで、こんなに胸がいつぱいになることなんて。

我ながら臭いな、とふて腐れたように顔を逸らすと隣から苦笑が返ってきた。

「…まあ、頑張ってください。ナツさんはかなり特殊タイプですけど。」

「…はあ、そうなんだよな。何が弱点だと思う？」

「虫タイプで攻めてみたらどうですか？」

「いや、ポケ ンじゃねえから。」

……たしかにエスパーには虫が有効だけどな。

「ふ、冗談ですよ。」

眼鏡をかけた男はクスリと笑った。しかし、ふと視線をはずし口だけで言葉を発した。

タイプの問題だけなら良かったんですけど、ね。

「ん？なんか、言ったか？」

「いいえ。別に。…ただ、……彼女、どうにも……」

俺は、ピクリと眉を動かした。次に見たのは言いにくそうに言葉を濁す男の姿で。

先ほどとは打って変わって真剣な雰囲気だ。

「…なにか、あつたのか？」

「那津さんの様子が…おかしかったんです。俺から見ても、あれはとも普通とは思えませんでした。」

「…どんな風に？」

「…そう、ですね。」

どうも、言いにくそうだ。こいつがこんなにハッキリしない態度をとるのは珍しい。

…どんな状況だったというのか。

「…よく分かりませんが、何の感情も『無かった』んです。貴方と件の篠原さんとやらを見……………」

そこで、ぴたりと、圭の口、その他の動作が止まった。

……………は？なんだ？

「なん ……ああ、すいません。俺としたことが、忘れてました。」

さっとソファから腰を上げ、圭は俺の前に立った、と思えば、腕を振り上げて

ゴンツッ！！

「…いってええ！！」

思いっきり、拳を頭にたたきつけて来た。

「…っ何すんだ！」

バツと顔を上げると、俺をジロリと見下す……………あれ、なにこい

っ。魔王？

怒ってるくせに笑顔ってのが、圭らしくはあるが、恐怖は倍増だ。
…黒い。圧倒的に、黒い。

「それはこっちのセリフです。何してんですか、貴方は。」
「はあ!？」

何してる、だ!?!意味が分から……

「…とぼけるようなら教えますけど、俺とナツさんは見たんですよ?
聖悟と女性が抱き合っているところを。」

!?!?!!

俺は一瞬にして口をつぐんだ。何をまさか、と思ったが、心当たり
は、…あった。

鮮明にその情景を思い出すとともに、青ざめる俺。

「っ、おま、よりによってあんな……」

いや、時間にしてアレは数分だったはずだ。なのに、なんてタイム
ングの悪い…っ!

「…俺らを責めないで下さいよ、偶然なんですから。それより悪い
のはそちらでしょう。」

「…いや、あれはあいつが勝手に……っ」
「でも、事実は事実ですよ。見たことは取り消せませんし。」

さらりと言いながら見下したような視線を向ける圭。
ずいぶん他人事だな、オイ！いや、実際そうだけど！

うんうんと唸っている俺に圭はふう、と息をつくと、顔を合わせてきた。

「…まあ、何かの間違いだってのはすぐ分かりましたけど。」

「っじゃあ、那津にそう言ってくれりゃよかったじゃねえか！！」

「何を言えって言っんですか。『聖悟を信じて。彼はそんなことする人じゃないです』？」

俺は、そこまで聖悟のこと知ってるわけでもなければ、信用もしてないんですけど。」

ぐさぐさ。

…い、痛い。圭の言葉の棘と冷ややかな視線がつき刺さる。
あれ、俺、こいつの友達だったよな？何この圧迫感。

そうして少し気分がオチかけていると、
圭はコホンと咳払いをし、とにかく、と言葉を始めた。

「…弁解する相手は俺じゃないでしょう。」

「…ん、ああ、うん。そうだな。また言うことが増えた。」

むしろ言いたいこと、聞きたいことがあり過ぎて、果たしてまとめ切れるのか、疑問だ。

…でも、とにかく。会って話さないと始まらない。静かに腰を上げた俺に、圭は微笑みを返した。

「ま、頑張ってください。あちらも案外気にしていないかもしれな
いですし、ね。」

……や、それはそれで、傷つくが。

「……ありがとな、圭。」

彼の最後のセリフに苦笑を洩らしながら俺は部屋を後にした。

エレベータに乗って階を上がり、俺は自宅の扉を開ける。見なれた
部屋の中心を陣取ると、深く息をついた。

「はあ
」

なんかもつ、結局標的は見つからなかったり、それどころか余計な
誤解を生んでたりと散々だ。

しかし、未央や圭によって収穫はあった。

目撃情報もあったし、不透明だった彼女の思いも少し見えて来た。

……やはり、会って話す必要がある、とも。

「……まあ、悩んでも仕方ないか。」

基本は行動派な俺。考えるのは後回しにしてやる。

決意も新たに、とりあえず目を覚まそうと洗面所に行った。

蛇口を回し、勢いよく顔を水に浸す。バシャツと音をたて、水が跳ねた。髪にまで滴る冷たい雫が心地よい。いい具合に俺の頭を冷やしてくれた。

…アイツのバイト、いつまでだろう。何時くらいだろうか、帰ってくるのは。

まあ、那津の家に押し掛けてやるのは決定している。(え)

もう、いい。

どんな話が来ようが、ここまで来たら今日、一気に全部問い質してやる。

「絶対、逃がさねえ……………」

顔を上げると、ギラギラとした瞳の男が鏡に映った。

END

03 (後書き)

ここから次の章へ続きます。国崎、頑張れ(笑)

君の存在

心を無にするには、どうすればいいだろう。

無機質で無味無臭だったあの生活に戻るには、どうすればいい？

本城那津は、何をどうすれば復活するんだ。

旅行？修行？気晴らしにどこか遠くへ行けばいいのかな……あ、駄目だ金ねえや。

それかいつそ引きこもってやろうか。なに、大学だったら1、2カ月休んでも、どうってことないさ。

外界と接点を完全に絶ったら何かしら感情にも変化が現れるだろうし……

ま、やりようによってはいろいろあるよ、うん。そう悩むことでもないさ。

はははは……

はは……

……

「……………はあ。」

本気で、困りましたね。それが、今の私の心情であります。

彼らを見たあと終始無言を貫いた乾に、しっかり家まで送ってもらったはいいもの。

帰宅したがっていた私自身は、どーにも重りが胸に乗ったような、いやーな気分のまま。

体調不良とか言って、今日のバイトまで休んじまったし。……何やってんだか、全く。

目を閉じ、座イスに座ったまま、膝を抱えた。

瞼の裏に浮かぶのは、つい先ほどの光景だ。抱き合う国崎、と篠原さん。

まるで物語みたいな、美しい場面だった。登場人物もまた、美男美女ときているし、さながら王子様とお姫様のよう。

……うん。よかったな、ヨリが戻って。お似合いだよ、本当に。どうぞお幸せに。

……とか。いつもは何の感情なしに言える言葉も、心を鋭く打つ。

……何で、他人事にできないんだか。

「……は、……はははははっ」

何か無性におかしくなって、笑い出してみる。しかし、自嘲する声も力なく、ついにはかき消えてしまった。

ため息。自嘲。皮肉めいた笑み。

どれも効果ない。この胸のいたみは、どうにもイイワケできない。むしろ吐き気まで催すほど、悪化した。

ああ、痛いなあ、胸。傷ついてるなあ、私。

……馬鹿じゃないの、この、馬鹿。自分から離れたくせに、それを望んだくせに、

何で、忘れられないの。

「つうあ、あ、ああ……」

やるせなさに、奇声を発してしまった……と思えば、本気で気持ち悪くなつてきて、慌てて洗面所に駆け寄る。ゲホゲホツと、咳がでて、中の胃液を吐きだした。

……あれ、…胃液、だけ？

吐き出されたものが液体だけだったことを疑問に思うも、すぐに思い当たった。

ああ、そっか。…また食べるの忘れたからか。

そっぴや、最後に食べ物食べたのいつだったっけかな。思い出せない。

ハハッ、とまた笑ってくる。

グイッと口をぬぐって鏡を覗きこんだ自分の力才は、それはそれは醜かった。

この調子じゃ私、死ぬんじゃないの。フツ…に。

ま、それでもいつか。

……どうせ私は独りなんだから。独りでしか、生きられないんだから。

私はいささかブルーな気分のままふう、と息をつく。

ああ、まだ胃が痛い。いつそのこと今日はもう寝てしまおうか、なんて考えていた。

すると、突然。

…ホントに、突然だ。少しは空気を読めってなもんだが、誰に文句
言えばいいのか分からない。
まあ、とにかく、

PLL L L L …… PLL L L L ……

電話が、鳴った。無機質なコール音が部屋の中を反響する。

「……………っ！！？」

もちろん、私がビックリ仰天（古）したのは言うまでもない。……
危うくまたリバーズするかと思ったし。ひどいムカつきを覚えなが
ら、しぶしぶ腕を伸ばす。

何だ、誰だよこんな時間に、このタイミングで。

いい加減にしろよ、この携帯。普段全く鳴らないくせに。

私は苛立ちを露わにしながら、乱暴に携帯を取り出し相手を確認し
た。が、

「……………は、…えええ？」

今度は携帯電話のディスプレイにビックリする。
完全に2度見だ。当然だろ。

『着信 篠原未央』

なんて、ありえない名前が書いてあるもんだから。

数分後。未だ、携帯電話は鳴り続けていた。

これは何かの罠に違いないと確信したワタクシは、ソイツをそのまま放置したが……

…国崎とは違うわけだし多分諦めてくれるはず、と、甘く考えていた私がバカだったのか、切れる様子は、ない。ずっと掛け直しているみたいだ。

…なかなかしぶとい、てか、ホンット、しつこい。
覚えずチツと舌打ちを打った。

……なんつーか、変人だよなこの人も。普通は日を改めるとかどーにかすんだろ。いい加減諦めろよ、アホが。

……つたく、変わり者多くない？私の周り。あ、今更？

P L L L L …… P L L L L ……

何十回目かのコール音が懲りずに鳴る。私はウザッたそうに携帯を眺め、ため息をついた。

……これ、取らないと夜中まで続くかも。という、悪夢のようなことを想像したからだ。

多分……いや、确实この人ならやる。嫌がらせ的な意味で。

……

「…うち、……分かったよ」

しばらく迷い、とうとう、私は降参した。

安眠妨害はぜひとも避けたいところだから、仕方ない。震える携帯電話を手に取り、深呼吸してから電話に出た。

「……もしも……ちょっと！何でさっさと取らないのよ、この愚図……！」

……やっぱり取らなきゃよかった、と一瞬で後悔した。

そもそも、こんな時間に電話してくるのが悪い。出てやったのに何で罵倒されないといけないのだ。てか、空気読めアホ女。

という、愚痴が出かかったものの、何とか口の中に押し戻し。

「……何の用ですか。」

落ち着いて、用件を聞いた。

……いや、言われなくても内容なら、少しは予想がついている。

多分『国崎とヨリを戻せたのよ』とか言う自慢、或いは嫌みだろう。もしや感想を聞きたがっているのかもしれない。

……どっちにしろ、嫌な女だ。

しかし、

『……………。』

返ってきたのは、何と無言。……こっちも困惑してしまっ。

「え、あの……どーしたんですか？」

『……………。』

やはり、無言。

え、何これ怖い。さっきの勢いが嘘かのように、静かになったし。

「あの、」

『…本城那津……………』

「え？」

ああ、ようやく反応が返ってきた、と思えば。すつつという大げさなブレスが電話口から聞こえ、

『アンタ……………何様のつもりよ————っ！！！！—』

キーーーーンと、耳鳴りがするほど叫ばれた。

…こっちが聞きてえよ。君が、何様だ。

「…何、どういう意味です？」

まだ耳鳴りがする右耳を、安全のため少し受話器から離して問う私。…マジ、何だよ。少なくとも夜10時台にしている会話では、ない。

『うるさいっ！ホント、何なのよアンタ！』

「…それ、こっちのセリフ。何があったわけ？」

ああ、もう敬語めんどい。素でいいわこんな女。

『っ、何で、聖悟は……………っ』

「…」

しかしいきなり例のヤツの名前が出て、ドクン、と思いがけず心臓が鳴る。…って、鳴るんじゃないかねえ。この阿呆。

『ちよつと、聞いているのっ!』

瞬時に浮かんだ妄想を頭から叩きだしていると、どなり声がまた響いた。

…おつと、意識トンでた。危ない危ない。私は気を引き締め直し、携帯を握りしめる。

「ああ、聞いているさ。…国崎が、どうしたって?」

本題だ。

…正直避けたい話題だが、こいつに触れりゃ、通話がすぐ終わるだろう。

とつとと話せよ。自慢でも、嫌みでもいいからさ。

私は嘲るように口だけで笑った。が。

『……そういえば、アンタ今どこにいるのよ。』

「は?」

まさに予想外、でこわす。流石の私もその返答パターンは選択肢の中に入れてなかった。

……この女、何者さ。本気で。意味深なことを振っておいて、いきなり話を変えてくる。

それが篠原クオリティ、なのか…?…嘘だろ。

「ねえ。…文脈って、ご存知ですか?」

まさか真性のアホかと思い、恐る恐る尋ねてみると。

『うるっさいわね！分かってるわよそんなこと！いいから早く答え
て！』

「はあ？」

『緊急事態なのっ！！』

まくしたてるような大声が私の耳を揺らしてきた。
なんだかマジで焦ってる……………？

「……………普通に家だけだ。」

突っ込みどころは色々あるものの、彼女の必死さに押されて素直に答えた。すると、篠原さんはさらに苛立ったように舌打ちを打つてくる。

『ちつ、何で家なんて居場所の割れやすい所につ……………』

「…え、いや何そのセリフ。」

…前回も言ったけど、私逃亡者じゃないよ？つか、夜中に家に居ない方がおかしくね？深夜徘徊してんのかと思われるじゃないか。

「何でそんな…つとにかく、早くそっから出て！」

「んなっ!?!」

私はあまりにも突飛な彼女の言い分に思わず奇声を上げた。

…おいこら。また無茶ぶりに程があるだろ。風呂も入ったのに、何故外に？

『入り口……………じゃマズいわ。窓から出て！いいから早く！』

「ああ？うち3階なんだけど！」

『屋根づたいに降りゃいいでしょ!』

「無茶言うなあああ!」

忍者かつ！だから、何の脱出ゲームだそれは！！
ハアハア、と息を荒げる私。…いい加減、そろそろ突っ込み疲れてきたので、いったん收拾を付けることにした。

「待て、篠原さん。いったん落ち着け。」

冷静な声でそう言うと、彼女の方も黙った。私はふう、と息をつく。

話が見えなさすぎる。ここらで整理が必要だ。

いや、本当は、それをしたくなくてここまで意味不明な会話を繰り広げたのかもしれないが。

でもそろそろ、現実を見なきゃ。なあ、本城那津。

「まず、何で私に電話してきた？報告か？君は」

…聞くのは怖いが……

認める、私。認めたらスッキリするから。

「……国崎と、付き合っただらどう？」

言ったのは確かに私なのに、誰か別の人の声みたいに聞こえた。

「……………」

……よし、心の準備、OK。平然とした対応の用意、OK。スルー体勢、万全。…回り道をしたが、コレ聞いたら即通話を切ってやる。なんでも来いや、ボケ女。

私はむしろ堂々とした態度で篠原さんの返答を待つ。

だが。予想は全くアテにならないものだ。…特に、彼女に対しては。

『……………アンタ、何言ってるの?』

という、見当違いの言葉が返ってきた。

「へ?」

『それは私に対する嫌味っ!? 本気でムカつく女ね!』

「…え、ええ?」

明らかに不機嫌を全面に出す受話器の向こうの相手の反応に、またも戸惑う私。…何故、怒ってるのこの人。

「ちょ、え? 君、自慢話しようと思って掛けたんじゃないの?」

『自慢っ!? 何の自慢よ! そうだとしても私はアンタに掛けるほど暇じゃないわよ!』

じゃあ何で掛けてるんだ、いま。

首をひねるが、この人がこんな時間に、しかも私に電話を掛ける理由は見当たらない。

サッパリいみ、ふめい。

しかし、そろそろ私も苛立ってきた。この、不毛な会話に。ふつつつとこみ上げる怒りも露わに、乱暴に携帯を握る。

「だあ、もう! じゃあさっさと用件を言えよ!」

『何切れてんのよ！うるさいわね！』

「君に言われたくない！何なの、君。さっきから逃げろって言った
り、いきなり怒りだしたり！私が、何に狙われてるって言うんだっ
！」

私はめつたに出さない素（自称）を出しまくり、喚く。すると、彼
女はスツと息を一瞬引き、思い切り私に向かってソレを暴露した。

『……………聖悟に、よ！！』

「……………つ！？」

あまりの驚きに、息が詰まった。それどころか、数秒、声まで出な
くなった。

……………え、えっ！？ 何で今ソイツの名前を吐く？

不明不明不明。脳内処理、不可。サラナル情報ヲ求メマス。

「つ、何だと？」

機能停止手前の脳では、そう問うのが精いっぱい。耳に彼女の声
がキンキン響いた。

『だから、聖悟がアンタの所に来るのよ！！さっさとどっかに消え
なさい！』

「違う、そうじゃない！何で国崎がウチなんかに来るんだよ！！」

…だって、君は あいつは

「……君、国崎と付き合っただらろう？ヨリを、戻したんだよな！？」

焦燥感に駆られ、早口になる。私は必死に決定打を聞きたがった。お願いだからそうだと、言えよ。

自信満々に君らしく、『そうよ？当たり前じゃない。』って。頼むから。

だが、彼女は私の言葉に憤慨したらしい。さらに声を荒げた。

『……だ・か・らっ何でアンタはそう鈍いのよ！！言わなくても分かるでしょ、言わせるんじゃないわよこんな屈辱！！』

「…え？」

彼女の言葉に、瞬時に頭の中にある可能性が過ぎる。

…まさか

嘘だ。嫌、嫌だ！聞きたくない。それ以上言うな !

『……………付き合っ、ない。断られたのよ、馬鹿！！！！』

ピン、ポーン。

彼女の衝撃的なセリフと共に、タイミングよく鳴り響いたインターホン。
2つの刺激に脱力し、全く動くことができない私。冷や汗が後から後から流れ出る。

『…ちよつと！もしもしっ』

篠原さんの非難するような声も、聞こえない。私は、ただドアを見ながら立ち尽くすばかりで。

今度こそ完全に脳は停止した。

ピンポン。

催促するように、またも鳴らされるインターホン。聞き慣れているはずのソレに、私はびくびくと震える。……先ほどから体をピクリとも動かせないんだが。どうしたことか、これは。

『本城那津！！返事しなさいってばっ！』

すぐ近くで聞こえたその声に、私はハツとし、手に持ったままだった携帯電話を見る。そうか、まだ通話中だったか。

『何よ！切るつもり！？』

いつもは常時スルーしたいくらい厄介な女なのに、今は随分と頼も

しく思えた。…たぶん、今だけ。

「っ、篠原さん……」

私は声を潜めて受話器を持つ。…壁、薄いからな。聞こえたらやばい。

ドクドク鳴る心臓を抑え、必死に状況を伝えた。

「…もしかしたら、国崎、今うちの前にいるかも。」

すると、

『……………はあっ！！！？』

一瞬あとに、素晴らしく大音量の疑問符が飛んできた。

あー、騒ぐな、やかましいっ！！しかも、こっちのリアクションだ、それは！

『…な、そんなわけないでしょ！アンタの被害妄想じゃないの！？』

篠原さんの方もだいぶ驚いたらしい。十分に狼狽しながら私にそう答えた。

…テメエにだけは言われたくないセリフだな。それ。

「…知らない。でもさっきからインターホン鳴ってる…。」

ああ、頭痛え。もう眠っていいかな、私。眠ったまま永遠に目覚めたくない程、現実逃避したいのだが。今。

『と、とにかく確認しなさいよ！勘違いかもしれないでしょ！』

耳につく篠原さんの声。

確かに、そうかもしれない。確認もしていないのに、外の人物が国崎とは分らない。

でも、行きたくないんだよ。…怖い。まず、なによりも恐怖が先んじる。

『っ何してんのよ！早く行きなさいって！！』

しばらく無言通話が続くと、しびれを切らしたように容赦なく私を叱咤する彼女。

…やっぱり大物だ。こっちの気持ちを考えないという点で。

「…ちょ、待ってよ。心の準備が……っ」

『そんなの、してもしなくても、一緒でしょ！いいからとっとと』

だがしかし。そこで彼女の声は、いきなり聞こえなくなる。

「……………那津。」

今一番聞きたくなかった声が、圧倒的な存在感を誇る、彼特有の声
が、扉の向こうから聞こえて来たから。

薄い板一枚では、彼のを防ぐなんてできるはずもなく。ダイレク

トに、私の耳に届いた。

「……………！」

ピッ！

思わず、手が滑って通話を切ってしまうほどの衝撃。…ホントに無意識に。

「っ、あ……………」

事後、私は当然、超後悔した。

き、切っちゃった……………あんな人でも今は頼りにしてたのに…！
わたわたと慌てていると、またも男の音がドアを隔てて聞こえて来る。

「……………那津、居るんだろ。」

途端、ビクつく体。耳がビリビリと麻痺したように痺れ、赤く染まる。動悸が、激しい。

それは、最も聞きたくなかった声だった。

でも、ああ国崎だ。と、頭のどこかで安堵するように思う。
なんて、矛盾しているんだろうな、私の脳内は。

ようやく私は国崎聖悟の存在を、ドアの向こうに認めた。

もうこうなったら、居留守、とかどうかな。

最初に浮かんだのは、そんなズルイ考えだった。

…いや、ヤツも私がここにいるって確信を持って訪ねてきてるわけだし、さっきも思ったけど、こんな時間に自宅にいない方が怪しいだろ。さらに言うと、今、明りが点けっぱなしだ。

終わったフラグ。

「那津、」

そうこうしているうちに、姿の見えない男が私の名前を再度呼ぶ。

…勘弁しろってば、もう。

「那津？聞こえてるんだろ。」

「……………」

「返事しろ。逃げ場はもうないぞ。」

「……………」

…立てこもり犯か、私は。追い詰めてるのは君だろうに。

白く光る蛍光灯が明るく照らす部屋の中、聞こえてくる声を無視し、それでもだんまりを決め込む私。

何を言われても絶対口を開くもんか

「……何も言わないつもり？じゃあ、」

国崎も疲れた様子で、脱力しつつもまだ呼び掛ける。

「明日、その辺の女子大生にお前のイカガワシイ噂を流そうか
「います！本城那津、います！」」

……あ。

数秒前の決意が一瞬で破綻した。

……返事、しちゃったよ。

……でも仕方ないじゃんっコイツが言つと、どんなでっちあげでも、^{スベカ}須らく本物に変わるんだから！

……てか、イカガワシイって、何。何言つ気よ、君。

自分で自分に言い聞かせるように必死に言い訳をし、脳内会談を開いていたところ、

しばらくして、国崎の喉の奥で噛み殺しているような笑い声が聞こえた。

「……つく、何その声。いるなら返事くらいしろって。」

「……」

……ええ、いますとも。居留守使いたかったけど失敗しましたよ。それが何か？

至極楽しそうな国崎の声に、ワケもなくイラつく。

……容易に顔まで想像出来るな。またいつものようにニヤリと笑ってるんだろ。……死ぬ。このポケナスが。

ひとしきり笑い終えたらしい国崎は、図々しくも新たに要求してきた。

「……那津、こっち来てよ。」

「……やだ。」

「声が遠いんだよ。俺の声、聞こえる？聞こえなさそうだったら、大声出そうか？」

「……………」

……ちつ。コイツは……いつも強引に選択肢を消しやがって……！仕方なしに私はふらつと立ち上がると、玄関まで歩く。

1歩、2歩………ほんの数歩だったのに、足を上げるのがやたら困難だった。どんどんと緊張も、増す。

ついに、薄いドア1枚挟んで、私は国崎と対面した。

……と言っても、私は下足場まで降りてはないし、彼もドアの向こう側にいるので姿は見えない。

トウゼンだ。国崎に会うつもりなど、毛頭ないんだから。

私はフツと力を抜くと、顔を引き締め、扉に……彼に、向かって話しかけた。

「……来たよ。で、何か用？」

極めて冷たい声を出すよう、努力する。『とつと帰れ』オーラを放ちながら。

つーか、リアルに帰れ。何でここまで来ちゃったかな、君は。

イライラを全面に出し　それを国崎も感じているはずなのに

対する彼の返答は、あまりにシンプルだった。

「入れて。」

「却下。」

…何を言うか、アホ、と即座に切り捨ててやると、国崎は不機嫌を明らかに、声にのせる。

「…何で駄目なんだよ。」

「逆に何で入れなきゃいけないんだよ、赤の他人を。」

「他人じゃねえだろ。」

「私にとっては、もう他人だ。」

「はるばる来てやったのに。」

「頼んでないし。なら、帰れよ。」

「……話があるんだったの。」

「私には、ないから。」

2人の言葉が、間をおかずにどんとどんと繋がる。淡々と、平坦に。

もう、何度も繰り返し返した会話なものな、これも。…諦めろって、君、そろそろ。ここまで来ると、私も呆れ顔になった。

しかし、国崎は今度は声のトーンを落としていかにも真剣そうな声色を作る。

「……ずるいな、那津は。」

「は？」

彼の、思いがけない言葉や雰囲気、少し戸惑った。そして、それを利用するように、国崎はさらに発言を続けた。

「話くらい、聞けよ。自分の言いたいことだけ言って俺の言い分は聞かない、なんて不公平だろ。礼儀がなってないんじゃないか。」
え、何そのいきなり長文。

「れ、礼儀とか知らないし。大体…
「俺もな、このままじゃ全然納得できないんだよ。圭にも言われたんだろ？話しあった方がお互いスッキリするって。」

国崎は狼狽える私をあくまでも諭すように、じりじりと追いつめる。
私は二の句も告げることができず、黙ったまま。

……ぐ、乾め！しかも会ったんか、君ら！

私はなにか台詞を返そうかと画策するが、何も浮かんでこず。ふう、と国崎は、ゆっくり息を吐きだした。そして言う。

「開けるよ、那津。」

「……………」

「開ける。」

すでに遠慮などは微塵も感じられない、強い口調で。も、もうすでに命令口調なんですけど、この俺様っ！
久々に聞いた、いかにも彼らしい言葉に、私は顔を強張らせた。

また言い含められたら終わりだぞ、私！気をしっかり持て！！
そう気持ちを奮起させるも、彼の言っていることはあくまでも正論だった。…いや、むしろ私の言い分の方が意味不明だし、横暴である。

私は深く、ため息をつきたい気分になる。

ああ、……やっぱ、このまま逃げ切るのは無理あったか……
厄介な男だったから、会わずにかわしたかったが、そうもいかないらしい。

なら。

私は息を吸い込み、彼に答える。

「分かった。…でも、家に入れるのはムリ。」

「ああ？」

なら、私はこうだ。

「話なら、聞く。だからそこで話してくれる？」

「…立ち話を続けるのか？それこそ近所迷惑だろ。」

しかも俺がツライ、と国崎はボヤク。

んなこと、知るか。

「家の隣は空き家だし、小さな声で話せば多分そこまで迷惑には、ならないと思う。…それが嫌なら帰れば。」

言い終わると、相手が、ぐ、と喉を詰まらせた。

…即興で思いついたにしては、中々攻撃力のあるいい返しだったな。
よかった。

家に入れるなんて、冗談じゃない。

今だからこそほぼ普段通りの私で居られるってのに、顔なんか合わせたらどうなるか……

ぜったい、無理。

しばらくの静寂が静かな住宅地を包む。

夏とはいえ、夜中ともなれば少しは肌寒い。外にいる国崎は寒さに身を震わせているのだろうか。

とか思っても、家には入れられないが。

ええ、もちろんですとも。寒いんだったら、帰れ。

私がそんな非情なことを考えていると、国崎が呼びかけて来た。結論がまとまったようだ。私も、聞く体勢に入る。

「……で、どーするの？」

「…ん、いい、分かった。」

ほう、飲んだか。

「じゃあ「でも、それなら」

とつとつ、話せ、と言いかけたら何やら遮られた。

うわ、まだなんか言うつつもり、コイツ。条件多いんだよ、君。

「……何。」

私は覚えず眉間に皺を刻む。それを知ってか知らずか、彼はことかなげに言っただけだ。

「顔、見せて。」

な
ん
だ
と

「はあああ!？」

瞬間、私は大量の息と共に感情を吐きだす。それは紛れもなく、驚愕。

「あ?そんな驚くことか？」

彼は頭に?を浮かべているような声で疑問を投げかける。

驚くわー!!

何故君を中に入れられないと思って!?!顔なんか、見せられるはずないんだって!

私は扉のむこうに、慌てて否定の言葉を聞かせた。

「…無理、やだ。」

「何で。別に、顔くらい見せられるだろ。なんかドア越しって、俺、ヤダな。」

君の好みは知らねえって。

「とにかく、駄目。…もー、帰れよ…国崎。」
「それは俺が駄目。」

…いと、うざし。またも堂々巡りじゃないか。
しかも君、妥協という言葉を知らないのか？こっちがどれだけ穩便に、穩便に済まそうとしているか！

「…知ってるって。だからここでいいって言ってるだろ。」

…しかもまた、心を読むし。コイツは。

「…だったらとつと話して。ワガママ言ってるないでさ。」

「那津の、顔が見たい。那津の顔を見て話したい。…その何処がワガママなんだ？」

「…っ、」

…ほら、こついうセリフも、さらっと言っちゃうんだよ国崎は。

カツと顔を赤くした私は、それきり黙った。

これ以上こんなことやったら、私にダメージが与えられるばかりだ。またも熱くなる自分の身体に、翻弄されてしまう。私は額に手をあて、壁にもたれかかり考えることにした。

どうすればいい。

…いや、落ちて着け本城那津。ここの選択は、重要だ。

私はとりあえず深呼吸し、また脳の計算機を動かした。

ヤツの要求は、私とカオを合わせて話をする事だ。

私はちらりと自分の家のドアを見る。頑丈そうな、短い鎖が視界に入った。

…チエーンロックをしとけば、カオは少ししか見えないし、私の方

も国崎を見ずに済む。その間だけなんとか仮面を作りつつ会話すれば、上手くいくんじゃないか？

そして、そうすれば、このツライ状況を乗り越えられる。…むしろ、これほど楽勝な道は他にないだろう。

……

しばらく、ヤツも私も何も言葉を発しなかった。

私が脳内会談を繰り返している間彼が何を思っているのかはわからないが、とにかく夜にふさわしい静寂が、狭い部屋の内側と外側を支配した。

…そして、たつぷり無言で悩んだ後、私は覚悟を決める。

「…わかった。開けてあげる。」

若干上から発言なのは気にしない。私はドアに近づき、そっとドアノブに手をかけた。

もちろん、チェーンロックがかかっているのをしっかりと確認して、鍵を開け、静かにドアを開く。

ギイ……

ボロい扉が耳障りな音を上げながらゆっくりと外の風景を見せる。同時に、鼓動がどんどん速くなった。

程なくして国崎の体が見えた。伏せ目がちにしているので腕と、胴体が半分ほど。

思ったより近い距離にいた彼に驚いたが、自身の心臓が活発に動き

始めるより早く、

ガチャン、

と音を立てて鎖が進行を阻む。私はほっと、一息をついた。

しかし、国崎を見るのも久しぶりだ。逃げ回っていたときは、極力見ないようにしてたから。

顔を見るとやっぱりすごく緊張するが、幸い、私からは彼は少ししか見えない。国崎のほうからも私は見にくいだろう。

…これなら、いけそうだ。少し余裕の出してきた私はふっと笑みを浮かべると、国崎のほうを見上げた。

「……で、話って」

刹那。

私が言い終えるのも待たず、国崎は、動く。

ガチャンッ！！！！ガ、ギギギッギギ、

「っ、え、」

啞然。あまりのことに反応ができない。

ドアとチェーンのわずかな隙間から肌色が見えたと思ったら、チェーンがミシミシと音をたてている。

今にも、壊れそう。　　って、まさか……!?

「っちょよ、国崎!?!何して　　」

私の言葉は、

ギギギギギ……ガキイイインッ!!!!!!

という、あたりに響き渡る金属音にかき消された。

いともたやすくロックは壊れ、金具がはじけ飛び、ナットとネジが空气中に投げ出される。そして数センチほどしか開いていなかったドアが、全開に。月明かりが部屋に漏れた。

ほんの数十秒の、早業だった。

真近で起こったその光景を見、目を見開いたまま私は固まった。口も無様に半開きになっている。

…いや、何コレ。チエーンロックが、壊れた、だと?

嘘。チエーン自力で壊すとか、嘘だろ!?!可能?可能なのか!?!人間が!?!

混乱の中でふと、私は水谷の言葉を思い出した。

『まあ、聖悟には敵わないけどな。』

『聖悟相手だったら、骨折じゃあ済まないから。』

…それは、腕力が凄まじい、ということか……っ!!!??

呆然としていると、目の前の人外が中に踏み込んで来る気配を感じる。

あ、と思ったときにはもう遅く、彼の手が体の左右に伸び、

「っ!!!」

次の瞬間には、勢いよく抱きしめられていた。

04 (後書き)

フツの人はチエーンちぎれません(笑)あくまでフィクションなので、真似しないように。

迷走、過去・前（前書き）

注意

この章は多少の残酷な表現・暴力表現を含みます。
閲覧にはご注意ください。

迷走、過去・前

ロツクが粉々に粉碎された後、飛びついて来た国崎。だが、勢いが良すぎた。

「……………う、わっ」

ただでさえ凶体がでかく、体格差もある男に全体重をあずけられ、私は後方へとバランスを崩す。そして、

「…っぎゃん！」

狭い廊下に2人、仲良く倒れた。フローリングに背を打ちつけ、ひやりとした感触と鈍痛が体に走る。

…せ、背中、打った……………痛い。

「……………。」

「……………。」

背中に感じた衝撃の後、さっきまでの荒技が嘘のように私の部屋は静まり返った。

ただし、体勢は変わらないまま。近い、どころじゃない。正面から抱き締められているから、表情も見えない。

冷静になってみるととんでもない格好だ、いま。

私の腰辺りに絡みつく逞しい両腕。密着している身体。かかるお互いの吐息。そして…火照りだす顔。

ドキドキドキ。鼓動が聞こえる。あつい。何コレ意味不明。何も、考えられない。

私の計算機はグルグルと逡巡を繰り返す。もはや完璧に、壊れた。

「……那津、」

先に口を開いたのは国崎の方だった。

ぼそっと、私の耳元でささやく。吐息が耳にかかって、思わずビクンと体が跳ねた。

「っ那津、那津……」

彼はさらにぎゅうっと、抱き締める力を強める。離さない、と言わんばかりに。

そして、私のすぐそばでひとりごとのように呟いた。

「那津……やっと、触れた。」

ほっと、安心したような声だった。いかにも嬉しそうな声色。それと同時に、ドクンドクンと、私の心臓も悲鳴を上げる。

…何。何その声。…なんでそんな大事そうに言うんだ。

「っ、くにさき……」

しばらくして、ようやく声は発することができたものの、なんとも小さく、頼りない。

上にのしかかる男は「何？」と問いかけて来た。

とりあえずこの状況をどうにかしよう。話はそれからだ。

「……重い、退いて。」

「ヤダ。」

…何がヤダ、だ。駄々っ子。重くて邪魔くさいのは事実なのに、すっぱり拒否するとか。…分かってて言ってるだろ、絶対。

「っ背中、痛いから！あと扉も閉めないと！」

拳をにぎり、だんだん、とヤツの胸を叩く。

もうこっちはヤバいんだって。無意味に温かいコイツの胸、どうにかして。

「……しょうがないな、」

はあ、とため息をつく国崎。…なにが仕方ない、だ。畜生。

言葉通り徐々に離れる国崎。間から入るひんやりとした空気にほっとしている。

「ひゃっ！」

突然 足を抱えあげられ、ふわっと、体が浮いた。

天井が一気に近くなり、視線が上に。驚いて腕が国崎の肩に回り、しがみつく形になってしまった。

「…軽い。ちゃんと食ってんのか？那津。」

自分の行動に大した意味はない、といった風に全く気にする様子のない国崎は、無神経にも問いかけてくる。顔を至近距離から覗きこまれ、なんか、もう、何も言えない。

多分、私の顔はすばらしく赤くなっているだろう。目の前の男は、口角を上げ、にやりと笑って見せた。

…頼むから、なんかアクション起こす前にワンクッション入れろ、君は！！心臓、止まる！

国崎は片手で器用にドアを閉め、私を抱えながら奥に進む。その足取りに、迷いは一切無かった。

人ん家なのに、この図々しさ。流石だね、国崎。ある意味スゴイよ。…てか、ツッコミ忘れたけど、私を持ち上げる必要、あんの？これ。邪魔じゃん、単なる。…：…本当に何しに、来たの。

とか思っても、何も言えない。

私にはもう、国崎の行動を読むことは不可能。諦めて、されるがままとなっていた。

「…さて、」

彼は私がさつきまで座っていた座イスに腰を下ろすと、口を開く。もちろん、私も彼に抱えられたままだ。あぐらをかいた国崎の膝の上に、足を横にして座らされた。

お姫様だっこ、膝の上バージョン

って、何だこれ。…恥ずかしくて、下を向いたまま縮こまっていた。

「まず、よくも逃げてくれたな、と言つべきか？」

「……………」

「那津？」

…呼ぶな。しかも、こんな近い距離で。

話しかけられるものの、俯いたままじっと固まっている私。

…何も、言えない。顔も見せられない。どうやっても、ボロが出る。ちっ、あとせめて1日、時間をくれたら

恨みがましく心の中で舌を打ち、私は下を向く顔をさらに俯かせた。

しかし、せつかちな国崎サマは、待つてはくれないのだ。

「！」

いきなり、クイツと顎を持ち上げられる。驚いて目を開いてしまい、国崎の綺麗な顔を、完全に視界にとらえてしまった。

「……………」

瞬間、誰でも気付くくらい、分かりやすい反応を見せてしまった。そして、クスリと笑みを零す、国崎。

「顔、真っ赤。」

ああ、もう、駄目かも。私。

「…那津。」

言いながら近付いて来る彼の顔。ただでさえ近い距離が、ぐんぐん縮まる。それと共に、心臓は限界までスピードを上げた。

目が、逸らせない。国崎の黒い瞳に吸い込まれそう

と、ちょうど、顔同士がくっつくかくっつかないかくらいの距離で、彼は止まった。

「……俺に、話すことがあるよな？」

にこりと、また笑う。乾バリの胡散臭い笑顔だ。熱気に包まれてるはずなのに、何故か、寒気がした。

「……っ、話すことなんて、ないって言うてるだろ！退け！」

叫びながら、どうにかヤツの胸を押し戻そうと手で突っ張ってみたが、びくともしない。

それどころか、その腕さえも掴まれ、

「嫌だ。」

なんて、飄々と言つてのける国崎。…ムカつく。

私は、精いっぱい抵抗に、体をひねっておもいつきり顔を逸らす。フローリングに自分の髪が散らばってるのが見えた。

「……………」

しばらくの、間。互いに向かい合った状況のまま、動かない。

しかし、もう一度口を軽く開きだした国崎にゾクリと危機感を感じた私は、
彼が何か言う前に、再度彼を睨みつけた。

「……っ、だ、大体、君！篠原さんはどうしたんだよ！」

「……はあ？」

「とぼけんな！二人、抱き合ってたたる！」

「……ああ。それが。」

イキナリ話を振られて国崎は目を丸くしたが、すぐになにか納得した風に頷く。

「……ふっ、」

すると国崎は、ニヤリとなにか企んでいるような顔つきをした。そして、次の彼の言葉で私は絶句する。

「嫉妬、か？」

「………は？」

その言葉がセイカクに脳に入るまで何秒か、かかった。

しっ、と？ s h i t ? ……嫉妬？

~~~~~！

「……！な、なんでそうなる！」

やっと意味が理解できた私は、真っ赤な顔をして飛びのいた。それを見て、国崎はさらに深くほほ笑む。

「だって気になるんだろ？俺と、未央のカンケイ。」

「ち、違う！ただ確認しただけだ！嫉妬なんて……」「じゃあ、なんて言っただけだったんだ？」

「……っ！」

頬を真っ赤にしてぎり、と奥歯をかみしめる私。

完全に、遊ばれている。

気まずい質問で追い詰めるつもりが、いつの間にか私の方が追い詰められていたのだ。

実際。

私は『国崎と篠原さんは付き合っていない』という事実を知っている。

だから例え国崎が嘘をついたって、容易に分かるはずなのだ。

……でも、嘘でも、冗談でも、

国崎に『篠原さんと付き合った』……とは言ってほしくないと思った。

……ホントどうしようもないな、私。

「……冗談。」

しばらくして、なにも言えず黙っている私に声がかかる。

顔を上げると彼は笑って、未央とはどうにもなっていない、と話した。そして、静かに呟く。

「………那津、俺のこと、好きだろ？」

こいつは、いつだってそう。

最も聞いてほしくない質問を、最も聞いてほしくないタイミングで、聞いてくるんだ。

「ちっがう!!」

突如、バツと跳ね上がるように彼の腕から逃れる。国崎はうお、とか言葉を発して、思わず手を離れた。上手く脱出に成功した私は、ヤツから出来るだけ離れるように壁際に走り、ビタンツと背をくつつける。

「そんなわけ、無い、だろうがっ！阿呆！」

とりあえず、開口一番、否定だ。

息を切らしてわめき、そんなことを言っただって、全く説得力は無いが。

それを国崎も分かっているのか、今度は呆れたように肩をすくめる。ジトリとした視線を送ってきた。

「何が、違うんだよ。…そんな顔して。」

…そんな顔って、どんな顔だよ。

言いながら彼は立ち上がり、ゆらりとまた近付いて来ようとするので、私は「ひっ」と悲鳴をあげそうになった。

「…いい加減言えよ。俺が好きなんだろ？」

「…るっさい！んなワケあるか阿呆！」

ちょよ、来るなって！今度は目が怖いんだけど、君！

「……そろそろ怒るよ？俺も。」

「っ知るか！意味分かんないこと言ってるんじゃない、馬鹿！」

「……………」

とにかく、色々と限界だ。もはや、私は反射で答えているようなモノだった。

計算も何も、あったものじゃない。まるっきりの素を国崎にさらしていることに、気付く余裕すら無かったのだ。……ただ、子供のようにギヤーギヤーとわめくことしか出来なかった。

「…那津、じゃ、質問変えようか？」

しばらく不毛な言い合いをしていると、国崎が新たな提案をしてきた。

「……………っ、何。」

私も、ピタリと動きを止めて彼の方を見る。

コレから逃れられるなら、この際、何でもいい。……………何だ。

いや、何でもよくは無かった。むしろ、サイアクだ。

国崎の、ゆっくりとした口調で話された言葉によって、私はさらに自分を追い詰める。

「…何で、そんなに認めようとしらないんだ？」

ドキ、と心臓がいつかい鳴った。

「…認める、って、」

「俺の気持ちも、……お前の気持ちも。」

音もなく国崎は私の目の前まで来る。彼のキレイな瞳が私をとらえた。

「マスターの店で聞いただろ？俺が那津をどんだけ好きか。…あんな情けない男が、俺だよ。」

「、、」

私は覚えずスツと息をのむ。声を出せない。金縛りにあつたみたい  
に、目も、逸らせないんだ。

ドキ、ドキと鳴る心臓は、マスターの店にいたときとまったく同じ  
で。

やめろ、それ以上、言うな。

「那津が好きで、どうしようもない。どうにかなりそうなんだ。

……だから、お前のためならなんだってしたいと思う。」

ヤツは強くそう言いトン、と私の横に腕がおかれた。いつになく熱  
っぽい視線を送ってくる。

「…何か苦しんでるんだろ？教えるよ。何が、今お前を苦しめてる  
？」

あまりにも、優しく、真つ直ぐに発された国崎の言葉。ただ、当の私は奈落の底に落とされた気分であった。

また、頭痛。

フラッシュバック。

嫌な記憶。

私のキャパオーバー！

やめろ、やめろ。もう、やめてよ

プツツと、私の中の何かが切れた。

「…黙れ。」

「え？」

ボソリと呟いた言葉は低く。国崎が眉をひそめる。

闇が、私の心を染める。

「黙れっ黙れ黙れ黙れ黙れ！！もう、しゃべるなっ！」

力任せに腕を振り上げ、国崎を突き飛ばす。

逆らうことなく後方に倒れたヤツを見下すと、彼は驚いた顔をしていた。

「な、」「しゃべるなって言ってるだろ！何も聞きたくないっ！」

彼の言葉をも遮りハアツと息を吐きだす。もう感情やら何やらが溢れて止まらない。止まら、ない。

セツカク、トジコメテイタノニ。

「……キライ。キライだつて言ってるだろ！！私は君なんかどうでもいい！なのに、何でそんなこと言っただ！君も私なんか放っておけばいいだろ！！」

感情の、決壊。

そう呼ぶにふさわしいほどの乱れっぷりだった。

これだけ喚き散らすのは何年ぶりか。いや、確か篠原さんにもこんな風に説教したっけか。

全く忌々しい。いつだってあの女を思い出したときにキレてしまふ。

乱れて、しまふ。

やっぱり、私は過去に囚われたまま動いていないんだ。1歩も。

すうつと国崎を見据える。私はうつすらと笑みを浮かべた。

「…君が、もし万が一にも君が私のことを好きだと言っなら、…そんなもの捨ててしまえ。」

私が発した恐ろしく無感情なセリフに、男はビクツと肩を震わせた。

「私は君の好意なんて求めていない。…もうこれ以上、私の心に近付くな。」



消える。入ってくるな。

君は。そこまでして知ろうと言うのか、私を。

バカらしい。

誰にも見せるものか。　こんな、醜い女の、醜態なんか。

「……………」

しばらく、私たちは膠着状態にあった。お互い、何も言わない。

私は。もう、何も言いたくないし、何も聞きたくなかった。

強い視線で国崎を見下ろすばかり。

ただ、想うことは、

出てけ。振りかえること無く、去れ。

それだけだった。

長い、沈黙。私もそろそろ疲れて来た。精神的にも、肉体的にも。

だが、ふっと私が瞳を逸らした瞬間、

「！」

ぐんつと体が前に倒れる。…いや、腕を引かれて倒された、が正しいか。とにかく。私はまたもやヤツの腕の中に収まった。

驚きにカッと顔を赤くしながら男を見上げるが、私はその強い瞳に一瞬、言葉をなくす。

どことなく怒気が混ざっているような気がして、怖くなった。

「、くにきっ」

「……うるさい。」

視線が私を貫き、動けなくさせる。痺れるような感覚。

「黙るのは、お前の方だ。」

そう、不機嫌そうな低音が私に伝わったと思ったら、

「っ、ん!!」

唇が重ねられた。

国崎は押さえつけるように無理矢理唇を合わせると、硬直した私の口をいとも容易く開き、舌を侵入させる。ソレは、私を蹂躪するよう口内で暴れまわった。…まるで、吐息ごと吸い取るかのように。

まだまだ何が起こってるのか把握できない私。

が、

「っ、……………む、!？」

次の瞬間、目を見開き慌てて国崎を押し返す。

さらにヤツは口の中で縮まってる私の舌を引きだし、絡ませてきたのだ。トロトロに溶ける口の中、舌同士が絡み合う。

って、こんなん、たまったもんじゃないって！

「……………んーっ！」

私は腕を目茶苦茶に動かし、抵抗する。

だが、国崎は乱暴に私の両腕を引っ掴み抑え込むと、それ自分の背中に回らせた。

空を掴む指。

同時に国崎は私の腰あたりを抱きよせ、さらに深く口付ける。

今まででいちばん荒々しく、激しいキス。しかし、故に国崎の気持がそのまま伝わってきた。

苛立ち、あと不可解な怒り。

何だか知らないけど、ヤツは怒ってる……すごく。

どうして、とか。離せボケ、とか。

ごちゃごちゃした頭でも色々と思うことはあるんだけど、私に止める術など無い。

結局、国崎にされるがままだ、……いつも通り。

だが、心臓の音が、互いに共有するように速くなっていったのは気のせいではないだろう。

「……………っ、あ、……………う」

……もーやだ。死にたい。キス最中って、何でこんなキモイ声しか出ないのさ。

てか、……………長い。すっげえ長いんだけど、何コレ。

はじめと変わらず、激しいキスの嵐。しかも、全然終わる気配がない。

勢いが強すぎて時々歯がぶつかったりするが、そんなことはお構いなしで。顔の角度を変えて、鼻をこすり合わせ、獣のように求める口づけ。

……それが、5分以上続いた日にゃあ。

脳、溶けて来たと思う。頭もぼーっとするし。

……ゴメン国崎。土下座して謝るから、も、やめてくれよそろそろ。

ざっと数秒後、ようやく口が離れ、どちらかのものか分からない透明な唾液がドロツと流れ落ちる。

「~~~~っふ、はあ！はっ……」

同時に、息を思いつきり吐き出して吸って、深呼吸。

……何回やつてもコレにはゼンゼン慣れない私は、上手く空気を吸えないのだ。国崎の方も息を上気させながら呼吸をする。

まるで水族館のときの再現のよう、だが、1つだけ違う。

私たちは視線を絡めたまま、目を逸らせずにいた。

「……は、那津……。」

「っ、~~~~!!」

ごく近い距離で見つめあっていると、いきなり顎を伝う液体をペロリと舐められた。途端、ビリツと電流が走ったかのように体が強張る。

「っ、なに、する」

「……那津、その顔エロいな。」

……ああ、やばい。この男、日本語すらゼンゼン通じなくなったよ。

いい加減にしろ、と若干潤む瞳を国崎の方に向け、睨みつける。

「っそんなことは、どうでもっ、良いから！離れ……」

「いやだっつつてんだろ。……もっかいしようか？」

……っ断る！！

一瞬凍りついた表情を隠すように、私はまたも声を張り上げる。

「く、くに、さき！何怒ってんの、いきなり！」

「…お前が、全然分かってねえから。」

？

「私、が何を分かってないって……」

「……全部だ、全部。俺の言いたいこと、何一つ理解できてない。」

首を傾げる私に、ジロリ、と若干上の目線から鋭い眼差しが降ってきた。

ひくつと、顔がひきつる。彼の雰囲気は圧倒され、思わず逃げ腰になった。

「…お前が俺をどう思おうが俺はお前が好きなんだよ、間違いない。なのに、何で他人に俺の気持ちを変えられなきゃならないんだ。」

「……………」

「それに、お前の言い分、ムカつく。」

「…はあ？」

…ムカつくて。雰囲気は怒ってんのか？

「…何も聞かされないのに、ただ突き放されるの、ムカつく。理由を話せて言ってるんだよ。」

「……、んなこと、言われても……っ」

国崎の責めるような声に、口ごもる私。

触れるなっつってんだろ。それこそ君の知るところじゃないじゃんか。

私は顔を下に向け、体を縮めた。

「…いやだ。そんなこと話して、どうなる。」

忘れたいのに。思い出すのも嫌なのに。誰にも話したことないのに。

どうして君は知ろうとする？

「…人には、誰しも秘密があるんだよ。知らなくてもいいことが。」

小さく、しかしハッキリとした声で否定の意思を伝えるとヤツは眉をひそめた。

「なあ、那津、」

ずっと顔をまた覗き込まれる。黒と黒の双眸がぶつかり合う。

「……俺はな。今日、全部にケリをつけようと思って来たんだ。…

また逃げることなんて、許さない。」

真摯な彼の瞳は、やはりとても綺麗で、しかし私を鋭く突き放し追い詰める色でもあった。

「言えよ。」

「……………」

「お前が好きだから、知りたいんだ。……………頼む。話してよ、那津。」

「

……………」

どこかで聞いたようなセリフ。

いつそ場違いなくらい優しい声でそう囁く国崎は、まさしく男、つて顔をしていて。キラキラしてて。ヒーローみたいで。

どうにも、反吐が、出る。

「……………『好き』って、何。」

「……………え？」

女の言葉が響く。しかし、外の雑踏に掻き消えるくらい、小さな声。それを聞きとることができたのは、ゼロに近い距離で接している男くらいだった。

「……………何でそんなに簡単に言うの？そんなに楽に与えられるものなの？」



救いの手は、

「私は、国崎とは違う。愛し愛されて、それが当たり前としてきた君とは。…君のように生きるとは、私には許されないんだ。」

私に差し伸べられることは、とうとう無かった。

「私にはなにもないから。」

私は  
いつだって絶望に墮ちる、  
偽善者。

「…な、つ?」

頬を熱い液体が伝う。ひとつ、ふたつ。  
伝い、流れ、落ちる。  
驚愕に見開く彼の瞳が、滑稽に思えた。

「……いいよ、そこまで言うなら話してあげる。私の、下らない過去を。」

私は溢れだす汁はそのままに、ぎこちなく笑みを浮かべた。

何でこんなことを言ったのか、分からない。

諦めか、苦しみからの解放か、もう、自分でも分からなかった。  
どうでもいいと思った。

…ヤンデモ。

記憶の海に体が沈んでいく。

ああ、思い出したくなかったのに。

不思議なことに、時を遡るほど映像は鮮明に映し出されるんだ。

\*\*\*\*\*

どうにも、私は、生まれてはいけなかったらしい

ということは、幼いころから分かっていた。

何故なら、母親が直接そう言ってたから。

「アンタなんか産まなきゃよかった。」

母親の口癖だ。とにかく思い知らされていた気がする。

彼女は私を産みたくて産んだわけじゃないってこと。

- \* -

物心がついた頃から、放置されていた記憶しかない。朝も、昼も、夜も。

後から知ったことだけど、あの人は毎日男を求めては酒に浸っていたらしい。だから、私に気を回すなんて親切な心は当然、持ち合わせてなかったんだ。

あの人は私をいないものとして振る舞っていた。全く、見えてないように。

ほんの時々、与えられる眼差しは温かさとはかけ離れていて。そう、まるで汚いものを見るようだった。

夜は、家に居ないことの方が多かった。私は暗く広いマンションに独り、取り残される。

無論、1歳とか2歳の子供が耐えられる闇ではない。泣いた。

毎日泣き叫んで、あの人呼んだ。

あの扉の向こうから、お母さんが迎えに来てくれるんじゃないかって。願って、すがって。

でも、誰も来ない。

どれだけ泣いても、『お母さん』と呼んでも。

来るはずのない母を呼び続け、泣き疲れて寝ることが続くとある日母親に「近所迷惑だ」と殴られた。痛かった。

そして彼女は、また何事もないように自分の、自分だけの生活を樂しむ。私を残して、夜の街へ。

いつしか私は夜中に泣かなくなった。

彼女は所謂、育児放棄をしていたのだろう。よくある話だ。ただ、あの女は賢かった。

とりあえず食事は毎回用意してくれた。コンビニ弁当とか、そんな

ものだったが、とりあえず『与えられ』ていた。  
また、同じ服ばかりだと怪しまれるので、何パターンか洋服も支給された。

極めつけは、外にいるときの態度だ。完璧な母親を演じ、他のママさん連中と良好な関係を急速に作り上げた。

彼女は、演技はとても上手かった。私を愛しているフリが。本当は、自分は愛されてるのではないかと、錯覚するほど。

そんなわけ、ないのに。

\*

どこにも連れて行ってくれない。遊び道具もない。あまつさえ、話しかけても返事は返ってこない。まるで透明人間になったような毎日。

彼女は私に興味はなかった。…そんなこと、分かっていた。  
でも、それでも私は彼女を求め続けた。…私には彼女しかいなかったから。

ひたすら『愛』を、『愛されること』を。ただ、名前だけでも呼んでほしい、と。

よんで。わたしのなまえ。

わたしのなまえ、あなたがつけてくれたんでしょう？かんがえて、くれたんでしょう？

よんでよ。わたしはここにいるんだから。

「なつ」って

思い続けて数日、ふと、あの人が振り向いた。眉間には皺が刻まれていた。

「アンタ、」

ビクッと、体が跳ねる。

「ウザイから近付かないで。あと、話しかけてこないで。こっちはアンタのせいで苦労してんのよ。」

心底迷惑がっている顔だった。

それから彼女は、私のことを決して名前で呼ぼうとしなかった。

あの人の心から、私は消えてしまったんだろうか。

これが、初めての絶望。

どれだけ願っても、喚いても、抗議しても、相変わらずの毎日が続く。しかも体が成長していくにつれ、悪化していく。あの人はもはや目も合わせてくれなくなった。

お世辞にも、親子とは呼べない関係。同居人がせいぜいだったなど、今になって思う。

そしていつだったか私は、あの人から愛情を受けるのを諦めた。構ってもらいたくて何かしても、殴られるか蔑まれるだけだし、自

分も痛い。

どうせあの人は私になにも求めちゃいない。

強いて言うなら、あの人の望みは、

「私にただ生きてもらう」

それだけ。

なら、そうしよう。お望み通り。ひっそりと息を殺して生きてればいい。

私は、幼いながら自我が芽生えるのが早かった。

そして、『諦め』を知っている珍しい子供だったと思う。

\*

だが、ただそれだけの願いを叶えるのが、思ったよりも難しかった。

小学生に上がると、関わるべきヒトの人数が格段に増えた。

しかし極端に人と関わらない私は、自然と1人でいるのを好むようになったわけだが、子供という生き物は異端を嫌うらしく、

『ブース、死ね!』

『学校来んなっ!』

私はいじめられた。

机に落書き、上履きや教科書の紛失、水をかけられたり、ゴミを投げられたり……

ガキ特有の、ガキっぽいイジメ。

彼らにとって、いじめはストレス発散、もしくはブームだったのだろ。毎日飽きもせずに行けられた。

…別にどうってことはなかった。私にとっては。

幼いころからもっとレベルの高いイジメを受けていた私には、そんなのたいした問題でも無い。

平然と、無視していた。

だが、いじめが学校側にバレて、

あの人が呼びだされた時は、本当に心臓が止まるかと思った。

学校側の謝罪、いじめっ子の泣き声、そしてあの人の取り繕ったような声。

校長室の中、色んな音、会話が目の前で展開していくが、私はただ俯いて震えていることしかできなかった。いや、静かに泣いていた。

役立たずな教師共がどう思っていたかは知らないが、それは、決していじめが辛かったからじゃない。

こんな面倒事を起こして、後でどうなるか、分かっていたから。

案の定、予想通りになった。

「…全く、本当に忌々しい子ね！アタシの足ばっか引っ張って！！」

バキッ、ドゴッ

広いマンションの一室。何かを殴るような音がとめどなく響く。



冷たい目で私を見下しながら暴力をふるう女はまさに、鬼だった。私は何も言わずに耐えるしかない。

「いじめ、だって？確かに陰気なアンタみたいな子をいじめたがるガキの気持ちも分かるけど、こんな大事にまでするんじゃないわよ。アンタのために、わざわざ学校まで行かなきゃならないなんて！」

はあ、とオオゲサ気のため息をつく彼女。

理不尽な。こんなとき親だったら普通、心配とかするもんじゃないの？

心の中に至極当然な疑問が浮かぶものの、私には発言権などないのだ。

…黙っているのが、利口。私は力なく地に伏せていた。

ああ、思えばこの頃から、脳内で計算する癖がついていたのかもしれない。

しばらくすると彼女も疲れたのか、どっかりとソファに腰掛けた。

「…いい？今度またこんなことが起こったら、どうなるか分かってんでしょうね？」

そして、我が子に向かって脅迫だ。

### サイテイな母親

そう思いながら私は黙って頷いた。



あの事件をきっかけに、『人間関係を作ること』が、私の中の最重  
要課題になった。

具体的に言えば、友達を作ること。とにかく、本当に仲が良くな  
くても仲良さ気に見えれば、それでいい。

そうすりゃいじめられないし、あの女も学校には関与しない。  
私の平和が守られる。

でも、どうやって？

全くと言っていいほど人と付き合わない私には、人との接し方が分  
からない。むしろ家では透明人間だったわけだし。

それに、いくら平気だったとはいえ、私をいじめた奴らと仲良くし  
よう、なんて気は微塵も起こらない。

……駄目だ、これではいけない。どうやって人と仲良くなればいい  
んだろう。どうすれば好かれるのか。あの人が言うには、私が地味  
で暗い性格だからいけないらしいが

どうしたものか、と頭を抱えたそのとき、突然クラス内がわっと盛  
り上がった。

びっくりして顔を上げると、クラスーのお調子者が、大きな声で何

\*

か話していた。

おそらく彼だろう、原因は。周りの人も楽しそうだ。

およそ私とは正反対の彼は、皆の中心でイキイキとしゃべり、周囲を笑わせていた。

その光景を離れた場所で見つめていると、ふっと名案が浮かんだ。

そうだ。私も彼のような性格なら、と。

それから、私のキャラ作りは始まった。

クラスーの人気者である彼を観察し、癖、話し方、笑顔などを十分に研究した。

別に、すべてを真似する必要は無い。

あまりにも同じような性格だったら、それはそれで怪しまれるし、彼にとつてもいい気分で無いだろう。

自分の出来る範囲で笑顔を練習し、声のトーンを上げる。

ハキハキしたしゃべり方にする。

話のネタを仕入れる。

少し服装を変えてみる。

それだけで、だいぶ違う。

とにかく、私は『私』でない性格を作り上げた。

幸いにも、私は洞察力には長けていたし、あの女の血か、演技力もあつたのだ。

それでもやはり、かなり努力した。  
鏡の前でニヤニヤと笑顔の練習をしたり、テレビにへばりつく私は  
さぞ滑稽だったろう。

しかし、それを咎める者は誰もおらず、私の方も真剣だった。

これで、私は変わる。

そう、狂信にも似た思いがあったから。

\*

ある程度性格がまとまってきたところで、実験的に試してみること  
にした。ちょうど夏休みが終わり、2学期が始まる頃で、タイミン  
グもばっちり。

私はドキドキしながら、教室の扉をくぐった。

私が入ると、ざわっとクラスがどよめいた気がした。  
当然だ。1学期までの私とは、違うんだから。  
そして、第一声。

「おはようっ！」

とりあえず近くの女の子に話しかけてみた。

「っえ、ナツちゃん……?」

戸惑う女の子。

え、誰この子。夏休み前まではあんな暗かったのに……と、いった所か?ふ、予想通り。

「うん!ナツだけど。どしたの?そんな顔してー。」

「…い、いや、なんか雰囲気変わったね?」

「ああ、イメチェンしたからかな?ま、でもこれが『素』だからっ!改めてよろしく!」

そう宣言し、私はニツコリと笑った。

大きな声で明るく快活に話す少女。

それが私が最初に作ったキャラだ。…いや、なりたかった自分というべきか。

とにかく、『コレ』は、今までの自分とはまったく違うので、彼、彼女らの反応がすごく怖かった。

だが、所詮は小学生と言ったところ。

最初は戸惑っていたものの、人懐っこい私の性格が思ったよりもすんなりと浸透し、

『なんだ、ナツちゃんって、こんな子だったのか。』

『話してみると面白いじゃん。物知りだよな。』

そんな言葉を度々耳にした。

それは『私』が受け入れられ始めた証拠。完璧にキャラクターを作れているってことだ。

よかった。

これで私の平和が守られる。あとは、普通に生活していればいいんだ。私は心の底から安堵した。

\*

そして、私の作った性格は誰にも見破られはしなかった。皆、自然にそれを私として受け入れてくれ、友達もたくさんできた。

仮面をかぶり、性格を演じ、円滑な人間関係を築く。

年を重ねることに演じることができ性格も増え、私は相手によってそれを使い分けた。

そして、何の問題も起こらない、穏やかで平和なときが流れる。

完璧だ。私は、もう、自由なんだ。

私はそう信じていた。何の疑いもなく。

## 05 (後書き)

かなりダークな内容になってきます。最早コメディー色ゼロです。  
苦手な方すいません・・・



## 迷走、過去・後（前書き）

### 注意

この章は多少の残酷な表現・暴力表現を含みます。  
閲覧にはご注意ください。

## 迷走、過去 - 後

中学に上がる頃にはだいたい性格分けも板についてきて、滞りなく人間関係が築けるようになった。

\*

あの人には、この性格。この人にはこの言葉。くるくると表情を変え、たくさんの『私』を作る。

都合のいい自分をどんどんと生み出していった。

誰もが私に騙された。もちろん、あの人も、だ。

「…アンタ、変わったわね？」

ある日彼女に、何ヶ月かぶりに、こつ声をかけられた。

「…そう？中学に入ったからかな。」

その言葉を聞いたとき、顔には出さなかったが、内心すごく嬉しかった。

今まで、彼女から話しかけられることなんて数えるくらいしかなかったから。しかも、それが私にとっては最高の褒め言葉だ。嬉しくないはずは無い。

少し機嫌をよくしながら皿を洗っていると、あの方はまた続けた。

「…ふーん。ま、どうでもいいわ。それより、明日は帰ってこないでね。」

「……はいはい。」

カチャッと音を立てて食器がシンクの中へと吸い込まれていく。それと共に私はそっとため息をついた。

いくらか浮いた気分が、また限りなく底へ底へと沈んでいく。

また、『帰るな』か。

私がある程度自分で自己管理ができる年齢になると、あの人は家に男の人を連れてくるようになった。

それも、私が覚えている限り、毎回違う人。

男の人と一緒にいる時のあの人は、何が楽しいのか、ずっと笑顔だった。

『じゃあ、この部屋にいなさい。』

しばらくすると、あの人は毎回笑顔でそう言って、私を遠ざけるように部屋から閉め出す。私は黙ってそれに従っていた。

朝方になるまで扉は開かない。なので、部屋の隅に行き、独りで膝を抱えて朝を待った。

気配を殺し、意識をずっとずっと遠くに飛ばしながら。

怖かった。

昔から独りの空間は、余計なことを考える。

あの人が私を置いて、あの男の人とどこかへ行ってしまつてしまつのではないかと、私はやっぱり居ない方がいいんじゃないかと、息をすることすら、恐ろしくて

だがその孤独も、いつしか飼ひ慣らされる。

小学校4年生の頃。私は彼らの情事を誤って見てしまった。

ベッドの上にいた男女。そこに居たのは、少なくとも母親ではなかった。只のオンナだった。

自分の親の見たこともないような姿や声に、私はただ呆然と立ち尽くし、がくがくと震えた。

醜かった。

汚いと思った。

吐き気がした。

そのまま私は踵を返し、家から飛び出した。

ろくでもない女だったのは昔からだ、せめて私の前くらいは母親ヅラして欲しかった

そう思うのは私のワガママだろうか？

公園の隅で縮こまりながら、泣いた夜を、私は今でも覚えている。

その時から、私は『その日』は家には帰らなくなった。

むしろ逃げるようにそこから隠れた。

失望とともに、心はどんどん離れていった。

最早、私は家庭には何の希望を持たなかった。ただの生活スペース、プラス同居人。それだけ。

家事は全て私がやっていたし、あの人も特に干渉はして来なかったから、何も考えずに楽にやれていた。

はず、だった。

ある、寒い夜のことだった。あの人は珍しく男の人を家に呼ばず、かといって外泊もせず普通に家に帰ってきた。

ただし、かなり酔って。

「たあらいまあ〜帰ったわよ、ナツう。」

玄関先で、呂律の回っていない彼女が呼ぶ。

「!?!?!」

本当に、ビックリした。図書館で借りて来た本を取り落としたほどだ。

あの人私の名前を呼ぶとか、初めてじゃないか？

これは相当酔ってる、と思いつながら玄関まで行くと、案の定、酒のニオイをぶんぶんさせながら横たわっている彼女がいた。

「……はあ、こんなところで寝ないでよ……」  
「んー……」

私の言葉など聞こえていないかのように、真っ赤な顔でうなる女はおやすみ3秒前だ。

仕方なく彼女を抱き起こし、リビングまで引き摺ってソファに横たえた。

……酒臭い。私は嘆息した。

「……まったく、どんだけ飲んだの。早く帰って来たと思えば。」

「……………」

「今、お水を持ってくるから」

「那津。」

あ、また名前呼んだ。

と思えば、酔っ払いとは思えない力で腕を引かれ、体ごと引きずり込まれる。

そして気付いた時にはソファに押し倒されていて。彼女が真剣な瞳で私を見下していた。

「……………な、に？」

彼女の目があまりにも鋭く私を射抜くので、思わず委縮する。

というか、こんなに近くでこの人の顔を見るのは初めてで、どうすればいいか分からない。

電灯に照らされて映し出された顔は、化粧は濃いものの、整った顔立ちだった。

「……………」

しばらく無言のまま私を見続ける。

目が、逸らされない。じっと私を見たまま彼女は動かない。

いつもなら私のことなど、視界にも入れないくせに。

「なつ……………」

ずっと彼女の手が私の方へと伸ばされる。そして、その双眸がかなり細くなつたのを認めると、

「ぐっ!?!」

突然、私の首を、絞めてきた。

これまた、ものすごい力だ。女の細長い指が私の首にミシミシとくい込み、気管を圧迫する。

「……………つぐあ…!」

たまらず小さく悲鳴をもらすが、力は変わらず、それどころかもっと力を込めて私を締めあげる。

酸素を取り込むことが困難になり、意識が朦朧としてきた。

そして女の方は、口元に笑みなんか浮かべ始める。

本気で、ヤバいと思った。

「ふふ、ふふふふ…なつう……」

気味の悪い笑みを浮かべながら、私に馬乗りになった彼女が笑う。私はぼやけていく視界の中、それを見ていた。ひとしきり笑った後、今度は憎しみをこめた眼差しで私を睨みつけてくる。

「あんたはあ……どこまでアタシの邪魔あ、するき……？」

呟くように言い、ジロリと見下してくる。

私は顔をしかめた。…苦しかったのもあるけど、あまりにもその言が、不可解で。

何を言ってるんだ、この人は。

コツチは今までそうならないように努力してきたのに。

…何が、貴女の癪に障ったんだ。

「今日ね、…あと少しだったのよお。」

彼女はまだ続ける。

「あと少しで、結婚までいけそうだったのに。…あの男、子供がいるって言った瞬間、手のひらを返したように……」

だんだんと語気を強める。それに比例して、絞める力も強くなった。ギリギリギリと、音がするかのごとく強く、強く。



息が、できない。

「…邪魔ねえ、アンタ。アンタさえいなけりゃよかったのに……。私と彼女の目が合った。

…焦点が合っていない。正気で無いのかもしれない。それでも私は黙って、その後には続くはずの言葉を待った。

「アンタなんか、産まなきゃよかった。」

ほらまた、決まり文句だ。

ズキン、と痛みが胸の奥に沈む。何回も何回も言われてきた言葉なのに、今でも心を鋭く抉る。すぎるもののない私にとって、母親は絶対であり、全て。その人に存在を否定されるって、どんな気持ちか、この人は知っているのかな？

私が平気だとも思ってるのかな？

きつと、知らない。

血を流し、化膿して…それでも放っておくしかなかった傷口なんか、全く知らないだろうね。

「……………ったら、…っ」

喉がコクリと動き、口からシュー、と頼りない息が出る。なかなか声を生み出せずにいるが、頑張つて音を発す。

いつもはこんなセリフ、黙つてシカトするのに、意識がぼんやりしているせいか、頭に血が上っていたのか、私は無謀にも言葉を返してしまった。

「……………っだ、ったら、産まなきゃよかった……………た……………」

ずつと言いたかった言葉を。

「……………」

思いがけず言葉を返してきた私に驚いたのか、あの人はパツと手を離れた。途端、せき込みだす私。

死ぬ、かと思つた……………

しかし、何にせよ解放されてよかった、と内心思う。

無様に床に這いつくばったままゲホゲホと息を吐きだし、また吸い込んでいると、あの人がふらりと立ち上がるのが見えた。

「産まなきゃ、よかった、ですってえ……?」

「げほっ、ぐ、げほ……」

「よく言うわ。…アタシだって好きで産んだわけじゃないのに。」

「…っ、は?」

唐突な言葉に目を丸くする私。女はまた繰り返した。

「だからあ、アンタなんか好き好んで産んだわけじゃないって言うてんの。」

酔っているからか、いつになく饒舌に話し笑う彼女。私はその言葉がどうにも引つかかって、

「どう、いう…意味だ……っ」

思わず素を出してしまった。

あ、しまった、と一瞬思ったが、どうせ酔っ払いだ。明日になったら忘れるだろう。

彼女も私の表情の機微など気にせず、続けた。

「…アタシは、アンタを育てる気なんかさらさらなかった。」

静かな声が部屋を満たす。私も、真剣な顔でそれを聞いた。

「…ただあの人の心を繋ぎ留めたかっただけよ。」

「……あの人って？」

「アンタの父親。」

「…っえ、」

『父親』。その単語を聞いた刹那、私は目を瞬かせる。

私にもいたのが、そんな人が。

当たり前のことだが、やはり少なからず驚いた。

彼女はすらすらと私の生い立ちについて話した。

なんでも、私の父親とこの人は結婚したわけではなかったらしい。関係を持った時、その男にはもうすでに妻がいたという。…そう、正妻が。

つまり、父とこの女は不倫関係にあった、ということだ。

初めから先の無い、無謀な恋

それでも女は男を愛し続け、どうしても彼の心をつかみたがった。

その執念が、ついに子を宿したのだ。

……それが、私である

言い終わると、彼女は顔を崩してへら、と笑った。

「あの時は…嬉しかったわ……やっとあの人が、振り向いてくれるんじゃないかって…でも…」

ふいに顔に影をおとし、声のトーンも下がった。私の方も、緊張する。

一度も聞いたことのない父親のハナシをされているのに、不思議なくらい心は動かされなかった。  
…むしろ、嫌な予感しかしない。聞きたくない、と思った。

「あの人はね、」

それでも構わず言葉を紡ぎだしていく赤い唇。それがぐにやりと歪んだのを見た。

「子供は生まれなかったことにしろと、言ったの。」

「！」

グサリ、と心に棘が突き刺さったような気がした。血が吹き出て、ダラダラと赤が流れる。

痛い、痛い。何これ。抜けない。

「…もちろん、アタシは猛反対したわ。せつかく作ったチャンスだもの。すがりついて必死に説得したんだけど、」

ザク、ザクと何本も何本も突き刺されるような痛み。

やめろ、もう言うな。

「……無理だった。結局、アタシはアンタを嫌々引き取ることに  
ったのよ。」

心臓が、凍りついた。

動揺しすぎて目の焦点が合わない。足はガクガクと震え、私は思わ  
ず床に倒れ込む。

ひんやりとした床の感触だけが、やたらリアルだった。

女はそんな私を見て狂ったように笑いだした。

「……あは、あはははっ！あははははははっ！！！」

女の下品な笑い声が響く。耳にまわりつき、反響し、離れなくな  
る。まるで、呪いだ。

「どお？分かった？アンタは誰からも望まれなかった！いらない子  
なのよ！」

「……っ、」

ああ、頭が痛い。もう意味が分からない。

……五月蠅い、喚くな。どうして貴女は、私を痛めつけるのがそんな  
にうまいんだろう？

「……っつえ、え」

呼吸ができなかったせい、強烈な吐き気がこみ上げ、その場で胃  
の中のを吐いた。

それと同時に大粒の涙がボロボロと零れ落ちた。

「あら、泣いているの？可哀想に。」

くすくすと笑いながら、母親と呼ばれる女は泣き崩れる私に近付き、しゃがみこんだ。

「……………っ、」

ぐいっと髪を掴まれ、顔を上げさせられる。

歪んだ顔をした女と、目が合った。…その瞳には、確かに狂気が宿っていた。

「ねえ、那津……………アタシは不幸な女だったわ。」

彼女は、ふっと口を緩めた。

「…男の愛情を求めて振りまわされて、傷ついて。拳句には酒びたりよ。ホント、自分でもサイアクな人生だと思っわ。」

ぺらぺらと、自嘲するような口調で記憶を吐き出していく。

「……………。」

私はただただ呆然とそれを聞いていた。すでに情報量は私のキャパを大幅に超えている。

…それも、認めたくない事実。

この女が何を言いたいのか、理解しようとすることすら放棄していた。

また涙が溢れ、零れ落ちた。

「……それでも、アンタよりはましよね。」

赤い口紅が私を嘲笑う。

だって。

「アンタは誰からも愛されないのだから。」

だって、与えてないもの。そんなもの。

…… 1度たりとも。

アイサレナイ。

涙で視界が滲み、目の前は良く見えないが、聴覚は研ぎ澄まされたように音を拾いコトバを胸に刻みつける。

頭がどうかかなりそうだった。

「ふっ、ふふふふふ、そう、そうよ！愛されない！アンタは愛情を受けることも与えることもできないの！」

眼をキラキラさせながら、女の口はよく動く。

女は、狂っていた。

言ってるコトは支離滅裂だし、甲高い声をあげ、喚いているだけに



聞こえる。

だが、その言葉で死ぬほど心を痛めつけられる私も。

「愛？そんなの、アンタには分からないわね、一生。」

相当、狂ってる。

彼女はそのセリフを吐き捨てた後、部屋に戻り死んだように眠った。私はただ床の冷たさに身を浸す。もう何が何だか分からなくて、頭の中がゴチャゴチャして、感情を吐き出すように、ただ、小さな子のように泣き続けた。

「っ……ふ、う……」

止まらない嗚咽。流れ出る透明な汁。これだけ水分を出しても涙は枯れることは無く、次々と流れ出て私の頬を濡らした。

別に。話自体はよくあるハナシ。

男が浮気して、愛人に孕ませ、その子供は認知されなかった。それだけだ。

…だが、想像以上にショックだった。

私が、父にも母にも『いらぬ』と思われて、うまれてきたなんて。

結局、私に価値など無くて。

ただの厄介もので。

誰にも必要とされなくて。

…そんな私に、生まれた意味がどこにあるというのか。

…嫌われてる、なんてものじゃなかった。

私は彼女に、親の敵みたいに恨まれていたのだ。生まれながら。役に立たない道具に過ぎない私に、どれほど失望したのだろう、あの人は。

「…つづつ、…く、」

そう思うと情けなくて、苦しくて、悲しくて……胸が潰れそうになった。

……いや、もう、それならばいっそ。

捨ててしまえばよかったのに。

そんなに憎いのなら。

愛せないというなら。

いらないというなら。

いっそ、失くしてしまえばよかったんだ。

捨てるのが駄目なら、施設に預けたり、方法はいくらでもあったはずだ。

……そうすれば私も、まだ幸せだったろうに。

こんな思いをせずに済んだのに

…私だって、好きで生まれてきたわけではないのに。

『愛情』

私のがどから手が出るほど欲しかったもの。

同級生が家族で仲良さ気に歩いているのを見て、うらやましいと思わなかった日は無い。

いつだって、純粹に憧れた。

あるわけないけど、私だって、いつか……って、妄想した。

でも、やはりすべて、ただの夢想到過ぎなかった。

そのくらいの幸せすら、私には許されなかったんだ。

まるで真つ暗闇のなか一人で取り残されたように、意識はただ虚空を彷徨っばかり。

私は、完全に自分を見失った。

荒んでしまった私の心。それが元に戻ることは決してなく。

…でも、表には出さなかった。

押し込んで、しまいこんで、平気なフリをした。

\*

それでもまだ、私は愛されたいと願ったから。  
家庭が駄目だから、学校と言う狭い社会空間で。

そう、私は誰かに好かれていてと自覚したくて、今まで以上に友達に関わるようにしたのだ。

友達は好きだ。好きになった。好意を好意として受け取ってくれ、簡単に返してくれる。

軽い言葉や、挨拶。何の代償もなしに気軽に話かけてくれる。一緒に遊んでくれる。

温かい気持ちの側で、素直に笑える『自分』がそこにいた。それはとても幸せで、楽しくて、嬉しいこと。彼ら、彼女らと一緒に居るだけで温かく満たされた感情が湧きおこった。

この感情に報いたい。どうすればこの喜びを返すことが出来る

のだろう

そう考えた私は、出来るだけ相手に呼吸を合わせ、相手が一番欲し  
てると思われる答えを言うようにした。

楽しんでくれるよう、時には道化も演じる。重い相談にだって乗っ  
てあげる。

たくさんの『私』を使って。

それしか、私にできることはなかったから。

友達は喜んでくれるし、私も相手を救ってあげられたという、満た  
された気分になる。

…それでいいじゃないか。彼らもそれを望んでいるわけだし。

誰も、傷つかないんだから。

これで、いいの。

そうやって、無意味な偽善を何のためらいもなく繰り返してい  
た日々。

…いや、私は壮大な偽善を行っていたことに、気付いてすらいなか  
った。

それは単に、家庭で求められない「情」の代償を、彼らに求めてい  
たに過ぎなかったのに。

だから、なのだろう。

逃げて逃げて、現実から目を逸らし続けた私に与えられたのは、  
…耐えがたい罰、だった。

きつと、天罰に違いなかった。

\*

それは突然起こった。

前夜に母親から再婚を宣言されたせいかもしれない。もしくは、もう精神が限界だったからかもしれない。

とにかく私は、大きな失敗をしてしまった。取り返しのつかない、ミスを。

ある友達に真剣な顔で『相談したいことがある』と言われたのは、放課後のことだ。

誰もいなくなつた教室に2人だけが机をはさんで向かい合わせで座つた。

沈黙の中、橙色の夕日が室内に差し込む。すると、友達は重い口を開いて話し始めた。

どうやら彼女の両親が離婚するらしい。

それはもはや決定事項で、変えることはできないようだ。

また、彼女には弟が1人いて、今ではどちらがどちらを引き取るかをもめているらしい。

崩壊寸前の、家庭。冷めきつた冷戦状態が続いている。

「…勝手、だよな。大人って。」

私が悪いわけじゃないのに。何で家族をバラバラにされなきゃならないの。

ホント、酷すぎる。

彼女はそうポツリと呟いて、泣いた。透き通った粒が、床の木目に弾けて消えた。

私には、彼女の気持ちが痛いほど分かった。

苦しいのに、悲しいのに。自分ではどうすることもできない。

…結局、社会の不条理に流されて従うしかないのだ、私たちは。

そんなどうしようもない状況下、誰かに助けを求めたい、と思うのは当然のことのように思えた。

「……ねえ、那津。私、どうすればいいのかな？」

「……………」

予想通り、すぐるように私を見る女の子。私も黙って彼女を見つめ返した。

新たな沈黙が部屋を支配した。

暗転。

暗闇の中、冷めた瞳で私は『私』を見下す。

…この場面を思い出す度に思う。

ここで何を言えば彼女は救われたんだろうか。

…何を言えば、壊れずに済んだんだろうか。

答えのない問いが永遠に続く。

そして、私が何かを言う前に、物語は進行していく。

似合わない制服姿の私と彼女は、長い間黙っていた。

…彼女は待っているのだ、私の答えを。

しかし無言の訴えが、また私を焦らせた。

脳はフル回転で答えを探す、が、何を言えばいいか見当もつかない。何を言ったら正解なのか。どうすれば一番いいのか。

それが、全く出てこない。

『エラーが発生しました』と、頭の中の私が悲鳴を上げる。

だって、私にはこんなとき何もなかった。

誰も何も言ってくれなかったし、聞いてくれなかったから。

どうすればいいかなんて、分かるわけがない

そのうちに、つい先日の出来事が頭をかすめる。いつの間にか、冷や汗が背中を伝っていた。

やめろ、入ってくるな。

頭で否定しても、黒い感情がじわじわと私を攻める。侵食する。

いつも学校には家庭のコトは持ち込まなかったのに。全てを忘れて、



友達と笑い合っていたのに。

……ナンデ。

「……っあ、」

ついに私は頭を抱えた。…酷い頭痛。心臓がドクドクと脈を打つ。彼女の大きな瞳は、急に苦しみ出す私の方を、訝しげに見ていた。

……嫌だ。考えたくない、のに。…友達の前なのに。

その瞳が、ムカつく。とか、思ってしまう。

両親を罵りながら言葉を吐き捨て、苦しんでいる彼女は、まるで鏡映しの私。

あまりにも自分に似すぎていて、

「……な、っ? ……大丈夫? どうしたの?」

似すぎて、いて。

憎い。嫌い。いらない。

こんな自分、死んじゃえ。

私はふつと顔を上げた。

そして

「……知らない。勝手に、すれば。」

出て来た言葉は、あまりにも冷たく残酷だった。

女の子は、今度は驚愕に目を見開く。

「……………っ、え……………」

友達は、何を言われたのか理解できない、と言った風に瞬きを繰り返していた。

いつの間にか涙は止まっている。

しかし、私の言葉は止まらなかった。

もはや私は、彼女ではなく、自分自身を相手に言っているような気さえしていた。

これは、自分に送る戒めの言葉、だと。

まさに自問自答。終わることのないクリカエシ。

ただ、感情を爆発させていた。

「…私には、どうもできないし、何も言えないよ。そもそもこんな問題、他人に相談することが間違っている。」

だから。

「一人で、何とかしなよ。」

そう、独りで。  
私は、ずっとそうやってきたんだから

「なに、それ……」

言い終わると、少しスッキリとした気分になったが、私は彼女の言葉にハッと我に返った。  
気付けば友達は俯いていて、声も体も震えていた。途端、サッと顔に色を失くす。

今、私、何て言った……？

「……、違っ……、こんなこと言っつもりじゃ……!!」

事態の深刻さによろやく気付いたように、慌てて弁明に走る私。

ホント、何でこんなことを言ってしまったんだろう。  
まるで洗脳されていたかのように、頭がガンガン痛んだ。

……しかし、言った言葉を取り消すことなど、できるはずもなく。  
ちらっと顔を上げたときに見た彼女は、とても激しい表情をしていた。

ビクッと体が震える。私がひゅっと息をのむのと同時に、

「……何で、そんなこと言っのよっ!!」

「！」

衝撃音。そしてじんわりと背中に痛みが広がった。

「どうやら彼女に突き飛ばされたらしい、と、頭が状況について行くまで数秒を要し。」

「いや、その前に、彼女の瞳に意識が飛んだ。」

女の子の両の目からは、大粒の涙が、あとからあとから流れ出ている。

睨みつけられているのは、間違いなく私だった。

「わたしはっ……本気で悩んでるのにつ！何でそんな突き放すようなこと、言うのっ！那津はいつも優しいのに……」

目の前の女の子は真っ赤な目で私を見つめる。  
そして

「……どうして、いつもみたいに私の欲しい言葉をくれないのっ!？」

叫んだ。

「！」

その言葉に、どうしようもなく動揺した私がいた。

思考がストップする。何も、考えられない。

友達からこんなことを言われるなんて、全く思ってもみなかった。

だが、私のことなど気にも留めない、いや、気にしている余裕のな

い友達は、はあ、と息を零した。  
そしてさらなる追い打ちをかける。

「肝心なときに何もしてくれないんだね、那津は。それとも、皆に平等に優しいのは嘘だったの？」

「……違」

「私は那津になら、と思って相談したのに。」

酷いね、と吐き捨てる女の子は、私の知っている友達ではなかった。  
表情、声色。

何もかもが、歪んでいた。

こんな顔をさせたのは、私。誰のせいでもなく、私だった。

静かに、私の頬にも熱い液体が伝う。

「…何、その顔。ムカツク。傷ついているのはアンタじゃなくて私なの。」

「……つごめ、」

歪んだ顔、突き刺すようなセリフにさらに涙が溢れる。

間違えた。間違えた間違えた間違えた。

ごめんなさい。傷つけてごめん。

君が傷ついたのは、私のせい。

…なんか、言わなきゃ。

待って、待って。

君が望む言葉を、紡ぎ出すから。

今、考えるから

焦りと共にキズはどんどんと広がった。  
でも、何も言えない私に、大きくキズをつけたのは次の、最後のセリフだった。

「……何も分かってくれない中途半端な優しさなんて、いらない。  
…アンタはただの、偽善者だよ。」

そう言い残すと、友達は走って教室を去った。  
後には私が一人、取り残された。

夕闇が教室にもぐりこみ、だんだんと室内をその色に染める。  
私は立ち上がることにせず、ただ泣いた。泣く権利などなかった。でも泣いた。

彼女を傷つけたのは紛れもなく私自身で。意図しようがしまいが、心無い言葉を吐いてしまったのは事実だ。全部、私が悪い。

…だから、そのことを思うと心がズキンと痛んだ。  
でも

血が逆流したようにぐらりと体が傾く。気持ち悪い。いっそ気絶してしまいたいくらいの気分。

それ以上に彼女のセリフが痛かった。

『…どうして、いつもみたいに私の欲しい言葉をくれないのっ!？』

初めて知った。思い知らされた。

彼女は私を見ていたんじゃない。…私の『性格』を見ていたんだ。

そりゃ、皆の望む言葉を意識して言うようにしていたけど、彼女は、それだけを私に期待していた。

いつだって、都合良く立ち回る私が好きだったに過ぎなかった。

…使い勝手の良い、道具だったんだね。他のみんなも、多分そうなんだろうね。

つまり、そう。

『私』に対しての愛情すら、本物ではなかった。

私が、勝手にそう思い込んでいただけ。

皆に愛されていると勘違いしていただけ。

脳が冴えわたる。心はぐちゃぐちゃなのに、何故か事実はずんなりと受け入れられた。

…やっぱり、私は。誰にも愛されてなどいなかった。

…ホントはね、分かってたんだよ。認めたくなかったけど、あの人の言うとおりだ。

どれだけ自分を偽っても、隠しても、ヒトを傷つけてばかりの私。



喜びも悲しみも、あらゆる感情を諦め、虚無の中ただよっていた私に、情など芽生えるはずもない。

心を持たない私に、誰かの心を理解することなんか、出来やしない。

それでも皆と同じになりたくて、

そのことから目を逸らして、社会に溶け込もうとしたんだけど、頑張っては見たけれど、

結局ダメだった。無理だった。

根本から異端である私にはもう、限界だったんだ。

偽善者。彼女はそうも言った。

…そう、私は偽善者だよ。

汚い自分は見せないで、人の表面ばかりを見て、でも、『人を傷つけない』とか思ってる。

…馬鹿じゃないの。私自身が相手を傷つけるのに。

…愛されない人間は、人を愛することなど、出来るわけがないのにな。

「……………はあ。」

大きなため息が口から出た。そして、ふらりと立ち上がる。

外はすでに真っ暗になっていて、ぼんやりと街灯が遠くの方に見えた。

しかし、私の瞳は、もう何も映していなかった。濁った灰色だけがぼんやりと両眼を支配する。

私はぶっ壊れた心をそのままに、ふっと笑って見せた。

「……もう、いいや。」

それは、全てを捨てた瞬間。

もう、二度と救いなんて求めるものか。  
どれだけやってもダメなもんはダメなんだよ。私は存在自体が毒らしいからな。

だったら、もういい。愛されないなら、別にそのまま構わな  
い。  
追い求めるのも、疲れた。

愛のない人生？ 上等。汚い私にはおあつらえ向きだよ。  
…なら私は、独りで生きていこうじゃないか。

皆のお好きなキャラを使って、表面上だけ交流をもっておけば、世  
間を渡り歩く上で支障は無い。  
地位や名誉・お金。なんて、欲を出すつもりもないし。

ただ静かに、独りで過ごせばいい。

孤独に生きて、死にたい。

それこそが、私の望み。たったひとつだけ残った、最後の望み。そして、自由だ。

だから、

誰も、私の邪魔はしないで。

触れないで。見つけたり、しないで。

…ただ、放っておいて。

「……もう、なにもいらないから。」

そうボヤいて瞳を閉じると闇が、満ちた。

## 04 (後書き)

闇は彼女を襲い、浸食し、包み込む。全てを失くした彼女には何も残っていないかった。

## 温かい手

長い長い話が、終わった。

外はすでに真つ暗で、一点の光も見えない曇天。…いつの間にか深夜になつていた。

「……………」  
「……………」

話し終えた途端に、広がる静寂。私はぼんやりと少し薄汚れた天井を見上げた。

…ああ、話してしまった。話しちゃったよ。あーあ。どうしようかなー？  
なんて。

ただの事実確認のように、心の中で呟く。

先立つものは、後悔でも空しさでもなく、ただただ、『無』。

私は、まさしく空っぽだった。

まるでつまらない映画を1本見たように、過去の自分を透かし見る  
ことができた。

こうして見ると、自分と言う人間はこんな下らないモンだったんだ  
な、とも思えた。

私はいつも通り、冷静だった。

「……………ねー、国崎。」

イタイ沈黙の中、最初に口を開いたのは私。国崎の方は見ずに、そのまま顔を上に向けていた。

「…呆れるくらい、下らない話だったろ？こんなんが、君の聞きたがった『私』だよ。」

汚くて、卑しくて、失敗ばかりの、欠陥女。

…いや、中身が決定的に欠けているので、人間ですらないのかもしれない。

ふっと、口を歪めて笑って見せる。涙はとくに乾き、無表情を貼り付けていた。

さてさて、国崎くん。

君は、このお話をどう思いましたかな？感想などがあれば、今、受け付けますよ。それが無いようでしたら、ご退場願えますかな。…そして、2度と入りませぬように。

頭の中の私は幕を引き、観客の男を嘲笑う。

すると国崎は、顔を逸らす私をぐっと掴み、彼の方を向かせた。否応なしにバツチリと視線が絡むが、彼はさほど表情を変えずに私を見続ける。

いつも通りの、真っ直ぐな瞳で。

……………何だよ。

や、っーか今地味に首、痛かった。ゴギって音がしたけど、大丈夫

か？

首逸らしてた私も悪いけど、相変わらず強引な。

「…那津……………」

そんな阿呆なこと考えていたら、国崎がボソリと呟いた。ピリツとした空気を感じ、私も身構える。

そして、ヤツは眉間にしわを寄せ、複雑そうな顔をして、

「……………バツツカじゃねえか。」

暴言を吐いた。

……………つて、は？

あれ？

え?????

なんだそれ？？

「…え、……………は？」

いやいやいや待てや、オイ。ちょ、予想外にも程があるよ？君。

こっつんだけ重い話聞かされて、『バカ』はないだろ。

…うん、ない。

しかも、ちつちやい『ツ』2つもつけやがって。

そんなバカなこと言った覚えもねえよ、こっちは。

…とりあえずリアクションとして正しくはないって、絶対。

那津さん、対応に困るんだけど。…あ、逆に君の頭がバカになった

の？

「……………あの、国崎……………」

私は本気で彼の脳を心配し、恐る恐る話しかけてみたが、

「……………うぶえっ!?!」

同時に、両頬に痛みが走った。

「……………ったく、お前は……………」

「ひた、ひたたたたた!?!?!」

……………痛みの原因は、国崎の、顔のすぐ横に置かれた両手。

眉間にしわを寄せたまま、私の両頬をつねり、ぐにーっと伸ばしてきた。

……………本気で、容赦がない。痛い。

むにーっと、私の頬は面白いくらい横に伸びた。

あ~~~~っ! ヤメロ、ヤメロって!!

ほっぺ伸びる!! 何だ、この生産性のない意味不明な行動はあああ  
!!

フラストレーションが限界まで溜まったかと思うくらいイラついた  
私は、キッと国崎を睨んだ。

「……………きゅに、ひゃきい! はなへえ!?!」

「なに、きゅにひゃき、て。誰?」

「……………っ!?!」

ふっと鼻で笑ってコッチを見てくる鬼。……………全く取り合おうとする様



子はない。

……この野郎。

てか、さっきから君、仏頂面のままなんだけど。……怒ってんの？

「……っこのお……」

ワケもヤツの意図も分からないが、抗議しようと思った開きかけた口は、

「……んな、下らねえことで傷ついてんじゃねえよ。」

半開きのまま、止まった。同時に目も、見開かれる。

……え？

「……な、……」

怒りに、ピクリと眉が動く。眉間にも皺が寄る。

今、なんつった、君。…「下らないこと」、「だって？

……フザケンナ。

「……ひがうつー!」

「ー!」

私は突如ガバツと顔を上げ、ヤツに掴みかかった。

すると、いきなりの行動に驚いたのか、国崎も手を離す。その勢いのままのしかかり、ヤツの胸倉をガシツと掴んでやった。

痛む頬なんて、二の次。それよりも、ヤツを睨みつけるので、私は

忙しい。

「……なにが、下らない、だ！君に何が分かるっ！」

「ああ？」

ギロリ、と彼も私を睨んだ。

……ガラの悪い兄ちゃんみたいな声出しやがって。……ちょっとビビってしまった自分を殺したい。

「……っだから！君にそんなこと言われる筋合いはないんだって！私の記憶にまで口を出すなっ！」

それでも負けじと大声を張り上げる私。ここは、どうしても譲れなかった。

過去は、私を形成してきたもの全て。

例えそれがキズしかなくとも。幸せな記憶など、断片すらなくとも。それがあから、今の私がある。……それを否定する権利が、君の何処にあるのか。

今まで支えてきたもの全て、君に崩される理由は無

私のセリフの後、急に訪れた、静寂。肩で息をする私を、国崎は服を掴まれながらも、静かに見ていた。

……いつそ、灯りなど無ければよかったのに。

近付いては見たものの、ヤツの顔など見れるわけがない私は、やっぱり俯いた。

「……那津は、間違ってる。」

静かな空間の中、国崎は再度口を開く。  
驚いて顔を上げると国崎の眼差しが私を射抜いた。全く緩むことのない鋭い視線に、また体が跳ねる。

「お前は、何も悪くない。」

「！」

急速に冷えるからだだが、危険を予感させる。  
私は、息をのんだ。

「……つなに、言つて……？」

「……那津は、誰も傷つけてなんかない。そう、勝手に自分で思いこんでるだけだ。」

「……っ、」

国崎は再び手のひらで私の頬を包む。すぐに私の顔はその大きな手ですっぽり隠れてしまった。  
ドクンと、心臓が動いた気がした。

動揺する。瞳が揺らぐ。

……no, but, not.

……いや、違う。そんなの、断じて違うから。

「……嘘、だ。私はいつも皆を傷つけるんだ。私は何も持ってないし、何も分からないから。」

確信をもった意味を含ませ、私は呟く。

「いつだって、私が悪いんだ。いない方がいいんだ。」

そして、それならいっそと、消えることを選んだ私は間違っていない。それだけが、真実。……そうだろう？

「なら聞くけど……」

国崎はふう、と息をついた。

「……お前が、誰を傷つけたっていうんだ？」

「……………」

「お前の母親も、友達だっていった奴も、全部お前のせいにして、押しつけて、逃げただけだろう。……何でそれを那津が背負う必要があるんだ。」

「……………」

言い聞かせるように、胸に沈みこませるように国崎は言葉を選んだ。その一つ一つが重く響く。

手が震えているのがバレてしまわないよう彼の服から手を離れたが、国崎はそれを片手で抑え込んだ。

「お前は、何も悪くない。」

もう一度、国崎は繰り返した。それは今まで聞いた中で、誰よりも優しい声で。

じんわりと温かい手の体温をも、今更になんて感じた。

「　っ、」

いつの間にか、私は泣いていた。

じんわりと国崎のシャツが円形に滲んでいく。

…またしても、キャパオーバーだ。感情があふれ出して止まらない。ドキドキと心臓が鳴るが、決して緊張、とかではなくて。

どうにも、胸が痛くて、困る。

…ウソみたいに、満たされてる感じがしてしまう。

「　…もう、全部自分のせいにするのは止める。お前は、」

ヤツの囁くような声にもゾクゾクしてしまう私は、もしかして変態か？

何でそんなに優しいんだ、君の声は。何の魔法だ。…この、アホ国崎。

また、新たな涙が伝ってしまふ。ぽつぽつと服にシミを作る。

……もう、最後までやられっぱなしだ、この私が。

「　お前は、もっと人を頼ってもいいんだ。だから、とっとと俺にすがれよ。」

言いつと同時に、ぎゅっつと、国崎に抱きしめられた。

たくましい腕に、私はなすすべもなしにそのまま包みこまれる。

ああ、もう末期かもしれない。

最後の俺様発言にすら、救われたような気がしてしまうんだから。

\* k u n i s a k i   s i d e \*

抱き締める腕に力がこもる。

俺の腕に収まる小さな体は、いつも以上に弱くはかなげに見えた。  
… 捕まえていないと、消えてしまいかもしれないと思うほど。

しばらくして、那津が震えていることに気付いた。それと共に、俺の服をジワリ、と濡らす熱い液体も感じる。

泣いている、と気付かせないほど小さい動作。これほど静かに泣ける女を俺は見たことがない。

… いや、泣けなかったのか。

俺は彼女の肩をさらに引き寄せ、自分の温もりを分け与えた。

… いつから、こいつは泣く場所を失ったんだろう。

こんな、吐息を押し殺すようにしか、泣けなくなっただろう。

俺は目を細め、彼女を見下した。

相変わらず顔は見えないが、ずっとそいつの柔らかい髪をすいてや

ると、甘えるように俺の肩に頭をもたげてくる。

…こうして見ると、ただの、普通の女なのに。

この細い小さい体を懸命に伸ばして、虚勢を張って、どれだけ苦しんだんだろう。

那津は何でも計算して考え込む癖があるし、一人の方が楽だっ  
て言っていたから、何もかもを拒絶しているのだと思っていた。

…でも、違った。

彼女は、俺が思っていたよりもずっと深い闇に囚われて  
いた。

どうして、誰も叱ってやらなかったのか。『もういい、そんなこ  
とはしなくていい』と。

どうして、誰も褒めてやらなかったのか。『大丈夫、お前はよく頑  
張った』と。

抱き締めてやる腕も、頭を撫でてやる手も、こいつには無かったの  
か。温もりのない寒い夜を、幾度過ごしたんだろう、那津は。

…誰も何も教えてやらないから、彼女は臆病になった。だから普通  
は素通りするような他人の機微すら、いちいち気にかけてしまっ  
た。

そして、どうすればいいか悩んで、考えて、計算する。……いつだ  
って、独りで。

ふう、と息を吐く。



むしゃくしゃする。…胸がかきむしられる思いだ。  
あいつの子供時代は、俺なんかじゃ想像もつかないほど過酷な日々  
だったんだろう。

寂しさすら飼いなすなんて、どんな状態だ？

目には見えなくても、確実に痛みは溜まっていくのに。ソレを見ないふりして笑うなんて、疲れるだけだろうに。

「……………」

……何で。

俺はギリ、と奥歯をかみしめる。

何で、誰もこいつを見つけてやらなかったんだ。

いつだって那津は助けを求めていたのに。誰もがこの優しい女に救われたはずなのに。

……どうして、少しの優しさもこいつに返してやれなかったんだ。

「なにもいらない」なんて、

全てを諦めなければならなくなるまで傷ついて、

それでも他人のせいになんてせずに、

キズすらも無視して、

独りで生きるなんて、

そんなの。

「……………悲しすぎるだろうが」

俺がボソリと呟いた言葉に、那津はビクツと体を震わした。

それが、その腕の中の温もりが、たまらなく愛しいと思った。

ほら、お前はこんなに弱い。

自分を隠すのが上手いから、弱いところが分かりにくいだけで、他の奴らと何ら変わらない。

そして、

そうだからこそ、那津は  
心がない人間なんかでは、決してないんだ。

…むしろ、誰よりも『心』を理解しているヒトだと、俺は思う。

ヒトのいたみを敏感に感じとって、寄り添うように相手の傍に居てやる。

……大事な時に、いつも傍に居てやるんだ。誰にでも出来ることじゃない。

なのに、お前は、

『自分には何も無い』とか言っつて、無理にキャラクターを作ってる。

でもな、作った性格だつて何だつて、結局は『お前』なんだぞ？

那津の言葉。那津の表情。

どれもこれも全部、『那津』。那津以外の何者でもない。

…そんなことも知らないで、「本当の自分」はどうしたらこうたら言ってるし。

本当も何も、お前はお前だつてのに。アホらし。

… ホント、那津は変なところで馬鹿だ。

他人のことばかり見て、自分のことを何一つ知らない…なんて。  
…ある種笑えるけどな。

ああ、それとな。

偽物のお前の行動だって、決して偽善なんかじゃないから。  
そりゃ完全なる善意とは言い難いが、確実に那津が考えて、那津が  
動いたことだろう？

そのの、何が偽善なものか。

…… 例え誰かがそう呼ぼうが、俺はそう思わない。

少なくとも俺は、お前に救われたから。

音もなく俺の心に入り込んだお前に、いつの間にか安らぎを求めて  
いた。

那津といることで、居場所を見つけれられたのは、俺の方。

お前がいて、俺は『俺』を見つけることが出来た。

…… だから、俺は那津に惚れたわけだし。

不器用で、

愛想ナシで、

たまに卑屈だけど、

優しくくて、

傷つきやすくて、

誰よりも『人間』らしいお前が、

好きだ。

……「なにもいらぬ」なんて言うなよ。このアホが。  
だったら、俺はどうなるんだよ。俺はこんなにお前を求めているの  
に。

……本当、ムカつく女。

俺が、『好き』だって言ってるのに。お前も俺が、好きなハズなの  
に。  
過去を引きずって、勝手に下らないことで傷ついて、…拳銃、自己  
嫌悪？  
何を、ぐずぐずしてるんだか。

まあ、いい。

だったら、今度は俺がお前を救ってやる。お前の言うところの『偽  
善』を働いてやるよ。  
んで、今までのぶんも、これからのぶんも含めて、死ぬほど愛して  
やるから。

覚悟しろよ？ 那津。



\* b a c k t o n a t s u s i d e \*

大体、私ってヤツは。

ぐだぐだと屁理屈を正論くさく並べ立てては、自分の都合のいい方にもっていき、結局何もかも否定し、ヒトを遠ざける嫌な女なのである。

だから、他の人も面倒になって、私と付き合うことなんか投げ出してしまう。

んで、私はひとりになる。いつもそのパターン。

……今回も、そうだと思っていたのになあ。

順調に大学生生活を過ごしていた私の前に、突如現れた、イケメンの4人の男子。

あ、私には縁ないわ、一生。

一目見てそう思ったんだけど、彼らはとにかく変わっていて。

……私と友達になりたい、なんて言い出す、物好きなヤツらだった。

「冗談じゃない。もうオトモダチサービスはとっくに終わったんだ、と、幾度も逃亡を試みたけど、

とある男を筆頭に、しつこく追いかけてくる彼らについてに観念し、すぐ離れると期待して、友達ごっこに付き合ってみた。

…そう、すぐに、離れると思ってたんだ。

なのに、ね。

いつの間にか、4人と一緒にいるのが当たり前になって、彼らといると居心地がいいとか、感じ始めてしまった。

ヤツらは私の心すら気付けぬくらい自然に、私の生活を侵食していつて。

いつも懲りずに持ち出してくるトラブルですら楽しくなった。彼らと一緒になら。

そしてあるうことが、私はその中の一人に恋をしてしまった。

『国崎聖悟』

その人の名前だ。…いま、目の前に居る男のこと。

いつも不敵な笑みを崩さない、食えない男。

最初は正直、苦手だった。…中身が全然見えないから。心の内を見せようとしないから。

でも、確かに私と同じような雰囲気を感じた。

まるで『同類』みたいで、少し面白くなって、あっちこっちに振りまわされながらも、彼との掛け合いを楽しんでいる自分がいた。

…時折、つい、醜い素の私を出してしまう時もあった。  
しまった、と後悔したんだけど、彼は咎めたりしないし、むしろそ  
つちを認めて笑ってくれる。  
彼のそばでは、私も楽に呼吸ができて、泣きたくなくなるくらい優しい  
時間が過ごせた。

全部国崎のおかげだった、と今になって思い出す。

それが、私の初めての『好き』だった。

だが、…彼を好きだと気づいて、  
国崎の方もなんの手違いか私を好きだ、と言って、

急に、怖くなった。その『スキ』が。そして、思い出してしまった。  
関係なんか、すぐに白紙に戻る。  
変わらないものなんか存在しない。

過去から学んだそれだけのことが、私の胸を圧迫し重くのしかかっ  
た。

……ああ、ダメだ。馬鹿か私は。ホントに何も成長してない。

愛情なんて無くていいとか、何もいらなとかホザいたくせに、  
ふわふわとしたアイツの優しさにただ甘えていつの間にか、こんな  
に彼を求めてしまった。

…愛されたいと、願ってしまった。



もう十分だろう、お前には？

それともなんだ。まだ求めるのか？また過ちを繰り返すのか？

……また、傷つきたいのか？

と、頭の中の私が嘲笑う。

冷たい切っ先を突き付けられたように、一気に頭が冴えた。

……そう、

『人を傷つけない』なんて、ただの詭弁で。

私は、ホントは、自分が傷つきたくないだけなんだ。

他人に陥れられて、もう無意味な涙を流すのは嫌だ。どうせすぐ消える幻想に踊らされたくない。

そうやって諦めることで私は救われるから。

これ以上ヤツの傍に居るとハマツて、抜け出せなくなるくらい依存してしまいそうで、

その時になって国崎に裏切られるのが怖くて。

そして、また逃げた。

でも、そいつは逃げるな、と言って追いかけて手を掴んできた。

…逃げた何が悪い？別にいいじゃないか。

私がないことで、誰に迷惑をかけるわけでもないんだし。

もう、私を追いかけるのは止めてよ

…苦しいんだ。君がいることで私はバランスを崩し、人間であるこ

とすら嫌気がさしてきそう。

キラキラと少年のように笑う君に対し、私は汚れ過ぎていて。私の持っていないものを全部持つてるくせに、私なんかを追ってくるし。

……私は、君がすぎで、でもきらいだ。

だから、逃げて逃げまくって、徹底的に抵抗してやろうと覚悟を決めていた。

そして終には忘れてしまえばいい、と。

でも、さ。

何で、今の今になって

『お前は、何も悪くない。』

『だから、とつとと俺にすがれよ。』

なんて、

「…そんな言葉、言うんだよ…っ！」

「…！」

私は手を突き出し、突き放すように彼との体の間に少し隙間を空けた。

すると急に肌寒い気がしてきて無意識に温かい体温を欲しがるが、頭の中でそれを否定し、ヤツに向き直る。涙の跡をグイッと拭いた。

「……っし、信用なんか、できるわけないじゃん。馬鹿じゃないの。」

「

「……、」

強気な言葉で相手を威嚇してみるも、どうにも視界がぼやけて困る。瞳と同様に、心もゆらゆら、動いている。

ああ、また、私が揺らぐ。

私の抱えて来た過去なんて、犯してきた罪なんて、何でも無いことのように君は語るから、

もう、さ、…許されてもいいとか、騙されてもいいとか、思っちゃうじゃん。

…嘘みたいだね。ねえ、国崎。君の台詞がこんなに強いと思わなかったよ。

…君のせいで私はこんなに、動揺してるよ。

「……おい、那津。」

静かな国崎の声が聞こえる。

「へ？」

そして、がっつと、肩を掴まれたと思えば、

「…まったく、面倒くせえ…これじゃ堂々巡りだ。い・い・か・ら、俺の話を引きけえっ！」

「あだっ！」

……デコピンされた。

し、真剣な場面で暴力とは、君も大概だよ、全く……  
ぶちぶちと脳内で文句を垂れ、額をさすっていると苛立った声調で  
国崎は続けた。

「何、一人でネガティブになってんだよ。俺はお前といることで傷  
ついたりなんかしねえし、離れたりする予定もない！被害妄想もい  
い加減にしろ、このアホが。お前の言い訳も、もう飽きた！」  
「っ、」

…ちよ、ソレは……

言いすぎだろ？

その暴言には、流石にカチンときた私。慌てて口を開こうとするが、

「だ、国……」「うるせえ、黙れ」

…わ、発言すらままならない！ずっと国崎のターン、だと!?

なんだかこの急展開に驚いて、涙なんかひっこんでしまった。

でも、彼の表情は相変わらず限りなく喜怒哀楽の『怒』寄り。有無を言わせない眼差しに自然と口元が引きつる。

だ、大魔王だ……っ

「…那津っ！」

「はははい!？」

イキナリの大声に、背筋がビシッと伸びる。

…てか、国崎もなんか投げやりじゃね?何、これ何の時間?

??と、疑問符がいくつも浮かぶ私。

しかし次の瞬間、意味不明な国崎は、さらに理解不能な発言をした。

「…もう、いい。なら俺様がお前を救ってやる。」

「……………は?」

思わず、ポカン、とした。

……すくう、だ？え、掬う、じゃないよね？saveの方で合ってるよね？

てか、オレサマで。ついに自分で言っちゃったよ。コイツ。

……何それ？

取り残される私を余所に、国崎はふん、と鼻を鳴らしてまだ続ける。

「……いいか、1度しか言わないから、よく聞け。」

……おつかない。誘拐犯のセリフじゃん、完全に。

普段の私なら嘔き出すセリフだが、当の本人は真剣そのもので。私も目を細めた。

「……お前が愛情を知らない、って言うなら、」  
「……！」

びく、と体が反応する。完全に油断していた私は、弱点が見事にガラ空き。そのまま、胸に染みいる。

「自分には何も無い、とか言ってるのなら、」

国崎の真っ黒な瞳がキラリと光った気がした。

「……俺が教えてやるよ。喜びも悲しみも、…愛も。お前に欠けているという感情すべて、俺が埋めてやる。」

「！！」

その言葉に、私は目を見開いた。そして体も固めたまま、動かなかった。

しばらく虚空を見つめたままじっとしている私に国崎が声をかけてくるのにも、気付かない。

なにかが自分の中で音をたてて割れた気がした。

私なんか放つとけばいいのにもう何だよせつかく諦めたんだってのに何度も何度も追いかけてきやがってそんな情熱があるんなら他にそれを回せよここまで意味不明な男も初めてだってあんな無意味な話聞いて引かないのも疑問だけどてか君には1mmも関係ない話なのになんでそこまでするわけ入ってくるなっつてんに土足でしかも駆け足で私に侵入しやがって無礼にも程があるだろもう……だから君は……

……関わるなって……

……

……

…

頭の中の私が喚く。だがそれは、段々フェードアウトしていき、やがて、消えた。

最後に見た彼女は、少しさみしそうな、泣き笑いのような顔をしていた。

暗転、世界が変わる。

「…………おい、那津？」

私の前で手を左右に振る国崎。呆けたような表情を心配しているよ  
うだ。

…………眉を下げて覗きこむ顔が、妙に子犬っぽい。  
俺様強情子犬。…新しいな。

「…………つく…」

唐突に、雲が晴れたような気分になる。ゆる、と口元が緩んでしま  
う。

なんだかすごく可笑しくなって。全部、全部が馬鹿馬鹿しくなって、

「…？な、」

「…くくっ、あはははははっ！！！！」

大声をあげて、笑った。ぽかんと、こちらを覗く国崎のマネケ顔に、  
また嘔き出してしまう。

「はは、あははははっ！！」



止まらない。爆笑。

全く、コイツったら、なんて大馬鹿野郎なんだろう。こんな面倒でワケ分からん女相手に、何、その痛いセリフ。マジで必死になってやんの。馬鹿みたい。

「……………くくっ、も、君っ、おかし……………っ」

私は笑いすぎて話すことすらままなくなりました。

目元には涙をうつすらと滲ませ、ついには腹を抱えて笑い転げました。

あー……………もう、いい。分かった。

私の、負けだ。

何を言われても冷徹でいられた私が、こんなヤツにやられちゃうとはね。情けない。

…ま、でも仕方ないか。

『俺様が救ってやる』なんて馬鹿らしいセリフで、空っぽだったはずの脳髓まで満たされちゃったんだから。

ホント、おかしすぎる。

「おい、那津……………」

しばらく私を傍観していた国崎も、不審者を見るような目つきで睨みつけてきた。

「……………はは、…はーあ。」

息を整え、大きく息を吐く。  
何故か抱えていた大きな荷物が半分になったような、清々しいような気分。

「…もう、こんなに笑ったの、久々だよ。流石、国崎。」

「…そら、良かったな。」

「褒めてるのに。」

そんなぶすつとした顔すんなって。やっぱりあのクサイセリフ、堪えてんのかな。ははは。

クスクスとまた零れる笑いをひっこめ、じっと端正な横顔を見る。

思えば大変な奴に惚れたものだな。…私も、こいつも。

「ね、国崎。」

ぼそ、とささやくように呟くと、彼は首を傾けてコツチを見た。

「なんだ？」

「…うん。いや、試してみても、いいよ。」

「…は？」

ぴたり、と彼が一切の動きを止めて私を凝視する。それを見て、口元に三日月を描いて見せた。

「…だから、君の挑戦。私の喜びも悲しみも、…愛も。

私に欠けているという感情すべて、君が、埋めてくれるんでしょ？」

一字一句間違わず言ってやり、いたずらっ子のように笑う私。するとヤツは一瞬、驚いたように身をすくませる。

「っ、それって……」「国崎。」

勢いよく体ごと向き直る国崎の唇に人差し指を立て、彼の言葉を遮る。焦ったような国崎の表情が、段々と弛緩していったのが分かった。

ま、最終的に私が負けたわけだしね。

もう何もかも忘れて、いい意味で、楽になってしまおうと思う。

…彼の、望むままに。

もちろん、まだまだ不安は募るばかりだ。

…信じて、いいのだろうか。本当に、いいのだろうか。

こんな私が、君に触れてもいいんだろうか？

ふと気を抜くと、すぐドヨドヨとした暗い感情が私を埋め尽くそうとするけど、

でも私は、温かく包み込んでくれるこの温もりを、信じてみたいと思っただから。

…例え、騙されていても。『今だけ』のものだとしても。

ちよっとくらいは試してみてもいいかな。最後の賭けでもしてみようか。

「…私を救ってくれる？」

私は国崎と目を合わせてそう言い、そつと手を差し出した。

すぐさま私の右手が彼の左手に重なるのを確認すると、再び温い腕の中へと体が飛び込んでいった。

04 (後書き)

次回、最終話です。

## 覚めても醒めないユメ

「……あーあ、ほんと、見事にぶっ壊れてるねえ。」

ぼんやりと、私は呟いた。

玄関前。現在、吹っ飛んだキーチェーンを国崎に片づけさせている最中である。

ん、鎖自体は千切れてないものの、部品が……なんつーか粉々じゃないの。

…これ、引きちぎったんかい。ほんと、恐ろしいヤツ……

「…那津がさつさと入れないのが悪いんだよ。」

「お黙り、犯人。早く片付けてよ。」

「はいはい……」

ぶつぶつと減らず口をたたく国崎を一喝し、腰に手を当てる。

言っとくけど、私、過失ないから。

てか、どうしてくれんのさ。それ、我が家の唯一の防犯システムなんだけど？

ガチャ、とチリトリの中で金属同士が触れ合って音を立てる。

こんなもんだな、部品は、と呟いて国崎は腰を上げた。こつちを振り向く。







はい、言わされちゃったね。

……恥ずかしい。

『彼氏』を変えたのがせめてもの抵抗だったが、恥ずかしさは変わらず。真っ赤っ赤な私の顔は目も当てられない。言っただまま開いてる口の中まで熱い。

『コイビト』なんて吐くことになるとは、数年前までは思いもよらなかった。

絶対、私のキャラじゃあ、ないし……すっごい、くすぐったいけど……

なんか、実感する。

こいつ、私の彼氏になったんだなって。

「正解。」

にっこりと笑ってまた抱き締めてくる国崎が、肌で感じられる。

……人肌って、あったかいんだなあ。とか、思ったり。

優しい時間。ほっとする空間。……好きなひと。

……あー、全く。私ってばこの短い時間で、どんだけこいつにハマってるんだか。

……なんか、悔しい。

不思議な敗北感を感じ、恥ずかしいやら悔しいやらで私はむっと顔をしかめると、

するりと国崎の腕から抜け出た。パツと彼の方を向き、

「……国崎い、」

「ん？」

彼に呼びかける。振り向いた彼の何気ない顔を見つめ、にたりと笑った。

仕返しだ。受け取れよ？

「…君が好きだよ。」

それは、唐突に。

ビックリするくらい簡単に、口から出した、一生言つ予定のなかった愛の言葉。

ただ、国崎に伝えたかった本心。

そして、それは

諦めと言つのか、打ち解けと言つのか。

とにかく…私の、最後の心の扉が開け放たれた瞬間だった。

「っな……」

振り放された手もそのままに、言葉を失い絶句する国崎。

彼を玄関に残して、私は逃げるように部屋の中に駆けこんだ。

「っちょ、待て那津っ！」

まあ、狭い私の部屋じゃ、逃げるにも限界があつて。キッチンに入る所で、すぐに国崎に手を掴まれてしまった。

「…何？」

振り向くこと無く、敢えてそっけなく答えるが、ヤツの方はそんな私の態度を気にも留めず。

「…なにして、…今の、本当、か？」

「……………」

いつになく、真面目な表情の彼。そして歯切れが悪い。

…なんだよ、君もとっくに知ってるはずだろ。私の気持ちなんて…聞き返してくるんじゃないよ。気まずいな。

「……………那津？」

「…っ、」

それでも追いつめるように言葉をかぶせてくる国崎。痛い。視線が痛すぎるって。何このプレッシャー。顔も掴まれてる腕も、痛いくらい熱い。

「……………ほ、本当、だし」

と、やっとのことで言った口は、次の瞬間には空気と一緒に呑み込まれた。

閉じられているキレイな瞼が眼前に見える。

「……………ん、むう」

押しつけられている唇の下、不満を言うようにくぐもったノイズが漏れた。

何度も何度も求められる。が、温もりをくれる優しいキス。

苦しいし、どうも好きになれない、コイビト同士の行為。

…でも、嫌じゃない。

……………と、思えてきたのは、やっぱり、私、国崎が好きだからだろうな。

そんな風に、ぼんやりと彼のキスを受け止めていた私だった

「……………長すぎ。」

「それ、文句言うところか？」

触れ合っていた唇が離れた後も、私と国崎は顔を突き合わせ、笑う。今度はリビングの床に腰をおろし、二人、寄り添っていた。

「……………これで、那津は俺のもの。やっと、手に入った。」

むぎゅつと私を抱きしめながら、おもちゃを手に入れた子供のよう  
に満面の笑みを浮かべる国崎に、  
私は吹き出した。…かわいいんだけど、こいつ。

「…やつと？なに、いつから好いてくれてたわけ？」

「知らね。そんなの誰にも分からないんじゃないか？…俺だって気  
付いたらもう好きになってたわけだし。」

「違うないね。私も。」  
「だろ？」

いつも通り、軽い口調の私と国崎。  
ただその距離は以前よりずっと近く、その表情はずっと穏やかだっ  
た。

「……ねえ、国崎。」

「ん？」

しばらくして、私はまた口を開く。国崎は私の髪に顔を埋めながら、  
ぼんやり相槌を打った。

「……なんか夢みたいだね。」

「ユメ？なに、夢見るくらい俺が好きだって？」

「や、そーじゃなくてさ、」

「……じゃ、何。」

そこは肯定しとけよ、とでも言いたげに国崎は不満そうな声を上げ  
る。

予想通りの反応に苦笑をこぼし、私は続けた。



「『こんな状況ありえない』、なんて考える自分がまだ居てさ。……コレは夢で、明日になったら醒めちゃうんじゃないかって、思うんだ。」

「……………」

「私も君も、明日になったら何もなかったかのように普段通りに戻るの。そうだったら」

「那津。」

遮られる言葉と共に、ぐるん、と視界が回った。漆黒の瞳に、国崎の顔が映し出される。

「断る。俺は夢なんかじゃない。」

キツパリ、スツパリと、開口一番の否定。

国崎は口をぎゅっと結んだまま、不機嫌そうな顔を作った。

「……………ただの、冗談だよ？」

「…俺、笑えない冗談は嫌いなんだけど。」

「え、笑えないかな、これ。」

「当たり前だろ。なんだ、付き合っただけに別れ話って。マジで心臓凍るかと思った。」

未だかつて見たことがない宇宙人を垣間見たような顔をする国崎。

…え、そんなに？マジで？そんな奇天烈なこと、言ってる、私？  
…別れ話なんかじゃないのにい。

ポリポリとバツが悪そうに私は頭を掻いた。

「…ごめん。ふと、そう思ったただだよ。」

「……これが夢、だって？」

「ん、そう。夢。」

一晩経つたら消えてしまう幻。柔らかな羽毛布団にくるまっている間だけ見れる、極上の妄想。

それと、君との時間に既視感を覚えたから。

「……………」

そう言うと、国崎は考え込むように黙った。

しばし静寂の闇がまた私を不安にさせるが、思ったよりすぐに返答が来る。

「……もしこれが夢だったら、」

「うん。」

「…覚めても、また見ればいいんじゃないか？」

「へ？」

何でも無いように飄々と言つてのける彼を、私は凝視した。  
国崎はふうと息を吐き、先を続ける。

「自分の都合のいい世界だろうが妄想だろうが、寝れば必ず見れる



んだ。夢って、そんなもんだろ？…だったら、ずっと見ていければいい。」

何度でも何回でも、コレが夢だとしても、一晩で消えてしまっても、起きたらすぐにまた眠ればいい。ユメの続きをまた、見ていければいい。

そうしたら気持ちは褪<sup>ア</sup>せない。ずっとずっと続く。そうだろ？

「…まあ、俺は、覚ますつもりはないけどな。」

そう自慢げに言って肩をすくめた国崎に、

「……ふ、あははは！」

私は、思わず声をあげて笑ってしまった。

…相変わらず、無茶な理論を振りかざすヤツだ。でも面白い。いい。やっぱり、こいつ、最高。

「…すごい考え方。君も、大概変人だね。」

「自覚はある。つか、それくらいじゃないと那津についていけないしな。」

「分かってんじゃない。…でも君には負けるよ。私の計算をことごとく狂わせてくれて。」

「お前の計算が穴だらけなだけだろ？途中から、全く機能してなかったし。」

……んなっ？

むかつときた私は不服そうな目で男を睨みあげる。すると、国崎は軽く笑いながら頭を撫でて来た。

「は、悪い悪い。気に障ったか？」

「当たり前だ！馬鹿！」

言うなり、ふんつとそっぽを向いた私。

我が家唯一の家財道具であるテーブルが、白く光って視界に入ってきた。

「那津。」

呼ぶ声も、無視。つーんとあらぬ方向を向く。

……全く、こいつは。ことの重大さがゼンゼン分かつちやいない。

君が考えているよりショックは大きいのだよ。計算は何より、私の武器だったんだから。

……君にだけ、見破られてしまったけれど。

「……那津ー、分かったからコツチ向けて。」

意地でも振り向こうとしない私に国崎の声が降りかかる。

それでも無視を続行、と 思えば

「はあ、つたく………いいか？那津。」

その呆れたような声が届いた瞬間、くるり、と体が反転した。手が背後に回され、目の前に国崎の顔が楽しげに歪んで見える。

ん？

……あれ、私、押し倒された？

途端、私の顔からさつと血の気が引く。彼の整った顔が近い。動物としての防衛本能が私に危険を知らせてきた。

「……つちよ、」

…マズいマズい。てか、近い！これは、よろしくない展開なのでは？？

「…何焦ってるの、今更。」

「いや、今だから、だって！」

焦る私をシカトし、どこまでも気楽そうな国崎。うつすら笑みすら浮かべている。

…いや、真面目な話ならなんでこの体勢なの！？

「…お、落ち着け国崎。」

「お前がな。」

「…っ何考えてんの！」

「逆に聞きたいんだけど、那津はナニ考えてんの？」

「…っ！！」

那津エロい、とか呟くドアホを何とかして、頼む。誰か、通訳。この雰囲気にもまれてしまった私には、刺激が強すぎて鼻血でそう。思わず眩暈を起こしそうな私を見て、国崎は笑った。

「……ま、今日は何もしねえけどな。」

「ほ、ほんとっ！？」

「ほんど。」

……よ、よかった。とりあえず安堵し息をつく。

国崎が『そこで安心されるのもなんか複雑だけど……』とかなんとか  
呟いていたのは、余談である。

「……那津。」

ふと俯いていた私の顔が、国崎の手によって上を向く。視線が、絡む。

真剣な瞳が、私の体ごと貫きそつ。

さっきのチャラけた様子など微塵も感じさせない国崎に、私は茫然と見つめるばかりだった。

ゴホン、とひとつ咳払いをして国崎は言葉を紡いだ。

「……俺が言いたいの、だな。」

那津は、何でも考えて計算して今までやってきたようだけど、世の中、そう上手くはいかないってことだ。……特に、恋愛なんて。」

「……………」

『レンアイ』を強調する国崎。……確かに、私にとっては未開拓ジャンルだ。私は無言で頷いた。

「恋愛はな、計算なんかしない方がよっぽど面白い。むしろ何も考

えずに飛び込んでしまった方が、色々なことを発見できる。…それを、俺がたっぷりと教えてやるから。」

飛び込んで、くればいい。考えずに、気持ちのまま。

俺は、『那津』が好きだ。+も-もない、ゼロのお前が。

お前の他は、何もいらぬ。那津は一生、俺のもの。

手放す気どころか、逃がすつもりすら、ないから。

怖がるな。

お前はただ、何も考えず、俺に愛されていればいいんだ。

…: So , Are you ready ?

そんなキザなセリフの後、国崎がニヤリと笑う。

目を瞬かせた私は数瞬考えたフリをしていたが、やがて同様に、ニヤリと不敵に微笑んで見せた。

…ああ、分かってるよ。

というか、答えなんか最初から決まってる。

私はずっと頼りにしてきた脳内計算。

それを使えなくしてしまうのは怖いし、ものすごく不安だけど。

君を好きになったその瞬間から、私は、君のものだから。  
信じてみるって、決めたから。

…試してみようか？『私』を。

「……面白い。やれるもんなら、やってみなよ。

……聖悟。」

私たちは顔を見合わせる。

くに、……いや、聖悟、の手のひらが私の頬に乗る。

すると今度も何の迷いもなく、寸分の愛情を疑う余地なく。  
恋人は、噛みつくようなキスをしてきた。

醒めないユメの、はじまり、はじまり。

- - DELETE - -

ホンジョウナツ：  
ゲンザイノスベテノメモリーヲシヨウキョシマシタ  
リロードフカノウ  
ヨウリョウ：0%

∴ start again?

END

## 02 (後書き)

これにて、『脳内計算』完結です。

最後まで読んで頂けて光栄です。ありがとうございました！！



おわりに。

閲覧ありがとうございます。著者のALISAと申します。

無事に『脳内計算』完結いたしました。

最後までお付き合い頂き、感謝の気持ちでいっぱいです。

ここまで来るのに非常に長い道のりでしたが、どうにかこぎつけることが出来ました（笑）  
よかったです。

ホントはもっとライトで読みやすい、ギャグ＋恋愛小説にしようと思っていたんですが、やはり自分の書きたいように書こうと思い、度々ダークな内容に……。すいませんでした。

特に、主人公の過去話。あれは書いていて私も鬱になりました…。

那津が孤独となった原因でもある母親。

彼女は生きる意味を失い、愛される欲望に取りつかれた亡者のような人物設定です。

男に捨てられたという憤りやむなしさを消したくて、那津に何もかもをぶつけて。

そうやって自分よりさらに不幸な者を作り出して「ああ、自分はまだ幸福だ」と実感したかったのです。

そして、そんな狂った大人たちの複雑な心や、巻き込まれてがんじがらめとなった主人公の孤独。  
それがこの小説の伝えたい部分でした。

人は、精神を病んで傷つけられてどうしようもなくなった時、心を閉ざして他のモノを拒みます。

苦しくて誰にも助けてもらえなくて、でも状況は一向に変わらなくて。

そんな時、どうすれば自分を守れるのでしょうか？

私は、もう何かも諦めてしまおうと思うのです。

この作品は全てを諦め、『無』となった主人公が『愛』を知るお話でした。

しかし、なにぶん素人ですから、矛盾点、ご都合主義、話的に繋がらない部分など多々あったと思います。下らないエセラブコメじゃないか、なんて思う方もいるかも……

初作品ということで、どうかご容赦くださいませ（<―>）

この小説でなにかしら同調し、感じてくれるものがあれば幸いです。私はこれからも『自分の書きたい小説』を書いていきたいと思いません。

閲覧者の方々、本当にありがとうございました。

お気に入り登録やユニークはとても執筆の励みになりました。ではこの辺で。

p . s .

お待たせしました。

『脳内計算』のその後を短編形式で綴る『脳内短編集』の内容をこの後掲載いたします！

本編とは違ってかなりフリーダムに書いておりますが、…まあ、低クオリティでもいいよ！って方はこのままお読みくださいませ。

## 那津 - 眼鏡 II ? (前書き)

お待たせです。短編始めました。

完全ノープラン、gdgd書きですがよければ読んでみて下さい。

那津 - 眼鏡 II ?

「要するにさ、その眼鏡、はずしてみればいいんだよ!」  
「……………は?」

なにか、要するに?

某月某日、いつかの日曜日。  
天気、快晴。

私はいつもの4人の男前と一緒に近所の公園にいた。  
と、いうのも、今日は一日中寝る日と心に決めていたのに、デリ  
カシーの欠如したヤツらに無理矢理起こされたからだ。

…おかげで只今、絶賛不機嫌中。

……休日なのに、外に出るとか面倒くせえ。

なんで特に用もないのに遊びたがるんだ、こいつらは。

ナチュラルに舌打ちをかますと、突然、私を見つめていた水谷が、冒頭の寝言を言ってきた。

「…ちよ、寝言じゃないつて。真剣、真剣。」

「…地の文にまでつつこんでくん。大体、サブキャラの君の発言で物語が進行するとか、認めないからね。私。」

「ひっど！一応レギュラーなのに！」

ギャーギャーと大げさに叫ぶ水谷に耳を塞ぐ私。

…あー、うぜえ。声でけえ。日曜日のコイツのテンション、酷い。

ついてけないし。…ついて行く気もないが。

チツと、新たに舌打ちをすると、他の人たちも、横から話に入ってきた。

「……でも、作者もこんな人数増やすんじゃないかと言ってきたよ。」

「えっ！？ま、ナニその裏情報！何で知ってんの？」

「さあ？何ででしょう？」

「ま、でも計画性のない作者だからね。仕方ないよ。」

「え。」

「事業仕分けされるとしたら、間違いなく信二から、だよな。」

「え、え。」

「いままで、おつかね。」

最後に3人が口を揃えて言う。

「……！か、勝手に消すなあああ！！」

水谷の悲痛な叫びは、青空に吸い込まれ、消えていった。

「……ま、それはともかくとして。」

斎藤は廃人と化した水谷を放置し、爽やかに会話を続けた。

「……って、いいのか？後ろのアレ、放置しても。」

「なんかもう人間じゃないよ？黒いカゲみたい、だよ？」

「……。」

「ま、いいか。どうせ水谷がいてもいなくても、変わらないし」

（酷）

「そう早々と結論をつけた私は何？と斎藤に先を促した。」

「……ナツちゃん、信二の言うとおり、メガネとってみれば？」

「……おい、斎藤。お前まで、何言い出すんだよ。」

「……何で。」

「ほら、コンタクトで可愛くなるって、王道パターンじゃない？暗さも取れると思うよ？若干。」

いや、どこ情報だよ、ソレ。何の根拠があってその統計？

「カワイクなれば、ちょっとは女子からの攻撃が減るんじゃないですか？」

と、乾も言っ。

……そんなこと言われても。私、一般の少女マンガヒロインとは175。くらいズレてるからなあ……。  
そんなミラクル、ナイでしょ。普通に。

「…別に、興味ない。眼鏡のままでも十分。」

コンタクトなんて、と必要をアピールし呆れたように肩を落とすてやる。

すると、さっきまで黙っていた国崎も会話に入ってきた。

「散々女どもにバッシングされてて、よく言うな。印象も変わるし一遍やってみりゃいいじゃん。」

は？君までもノリ気？何故？

「……っーか、俺が見たいし。」

…それが、理由は。てか、絶対楽しんでるだろ、君。顔が半笑いなんだけど。

「…だからー、いらないうて。コンタクトなんて、絶対ヤダ。」



しかし激しいオファーに、私は断固拒否する。  
……いや、今回だけは拒否せねば！

「何で？」

「着脱が面倒。」

「付けたこと、ないクセに？」

「……高いし。」

「あ、4人で買いますよ、それくらい。」

ねえ、と乾が言うと男たちはニヤニヤしながら頷いた。

……そこまでするか？フツ！

「いいじゃないの、お試しなんだし。上手くいったら、メリットあるでしょ？」

「買いにいきましょうよ。近くに店もありますから。」

「……………」

嬉々として色々と提案してくる男たちに、私は無言で後ろに後ずさった。

……ヤバい。激しくヤバい。

いつもそうだけど、結局コイツらに流されるパターンだね、これ。でも、今回だけは……っ！マジ勘弁！

私はじりじりと後退をし、男たちと距離をとった。

しかし。

「おっと逃げない、逃げない。」

「……！」

後ろに下がっていると、斎藤の広い胸にぶつかつた。肩に手が置かれ、動けない。

……っ、くそ。邪魔すんなこのアホがっ！

私が後ろの斎藤を見て、目だけで悪態をついていると、

「……ったく、那津って都合悪くなるとすぐ逃げるよな。」

今度はベンチに座っていた国崎が、私を抱き上げ自分のヒザの上に乗せた。

……あー、あれだ。あぐらかいた父親の間に座る息子みたいな感じ。

とにかく、腰辺りでヤツの腕が巻きつき、逃げ場は完全に無くなつた。

「……だーっもう！いいから離せってえ！」

私は顔面蒼白になりながらも、子供のように足をジタバタさせた。

「ダメ。……っか、何でそんなに嫌がるんだよ。」

国崎は、精一杯の抵抗を全く気にせず、至近距離で私を覗き込む。

「…………。」

「もしかして、怖い、とか？」

「…………。」

「まさか、ナツちゃんに限ってそんなことあるワケないよな？」

ニヤリと笑みを浮かべ、やつすい挑発してきやがる国崎。  
私はしばらく無言の圧力をかけていたが、何か言えよ、と国崎にせ  
つつかれ、

「……ったら……か……」

ぼそりと、呟く。

「は？」

……あーもうダメだ。

私はせめてもの抵抗に、キッと国崎を睨んだ。

「怖かったら……っ悪いか！」

…恥。恥だ……っ！！！！

「っだ……っはっはっはっはっ！！マージで……っ？」

…案の定、全員に大笑いされた。

いつの間にか、水谷まで復活してるし。うげ。

私は顔を赤く染め、国崎の膝の上で縮こまるように俯いた。

……あー、赤っ恥。だから言いたくなかったんだってば。クソ野郎

どもが。

「ナツちゃん、かーわいー。いまだきコンタクト入れるの怖がる大学生って。」

「う、うるさいっ！あんな半透明の異物、目の中になんか入れられるかー!!」

「うわ。人類の進歩を異物言ったよ、この人。」

「…そういや、圭はコンタクト作ったよな？どんな感じだったか教えてやれよ。」

「そうですね。でも初めて入れた時は慣れなくて…

目がえぐれるかと思いましたよ。」

!!

途端、戦慄が走り私は顔をこわばらせる。

…え、えぐれるって!!

頭の中を、グロテスクな想像が駆け巡った。

「…!!いやーだーっ！やっぱ帰るうー!!」

「冗談だって。落ちつけよ。」

爆笑しながら、4人は暴れる私をたしなめた。

…こいつらどこまでSなんだよー!!怖えよ。もうなんか、色々怖えよー!!

「……じゃ、ナツちゃん。ここで待ってるからサクサク作ってきな」  
「……………」

場面は変わり、今、私はコンタクト屋……というか眼科と眼鏡屋がくつついたような店の前にいる。

…ま、抵抗空しくムリヤリ引き摺られてきたわけだ。予想通りにね。はあ……………やっぱり、結局こうなったか。

「……………ホントに入るの？」

最後の確認のように私は背後の4人を振り返る。  
すると

「何を今更。」

「行ってらー。お金は後で払ってあげるから。」

「別に、そう大したことないですよ。」

「頑張ってね。」

彼らはそれぞれ適当な激励を送ってくれた。

本当に、相当手を抜いたカンジの。

……………はは。あはははは。

もう、君ら死んでくれないかな。

何、そのニヤけた顔。

こっちはガクブルだったの。嫌な汗が止まんないのっ！悪いかつ、畜生！

彼らを睨みつけながら、店の一步手前で止まったままの私。

… 入るしかないんだけど、勇気が出ないというか、決心がつかない  
というか……………

「つか、私は承諾してないんだけど、何で自分の為でもないのにこ  
んな高価な買い物しないといけない…

「さつさと入れよ。邪魔。」

「だ、わあああつ!?!」

ウィーン。

ついに地の文まで遮ってくれた国崎の容赦ないヒトコト、そして背  
中を押されたことによって店内に（強制的に）入った。

「いらつしゃいませー」

途端に聞こえる、店員の美声。

…………… おねーさん？

もう、貴女の笑顔すら悪意あるように見えちゃうよ。

私、結構な重症じゃない？このボロボロのハートは修復不可能かも。

…………… ああ、もういいよ…………… さつさと逝ってくるか……………

私は足取りも重く、ふらつきながら店内奥まで案内された。

那津を待つ間、4人は近くのコンビニの前で待機中だ。それぞれ思い思いのことをしていたら、ふいに水谷はコーラをグビグビ飲みながら隣の男に話しかけた。

「…なあ、聖悟。どんなになると思う？」

「あ？何が？」

「眼鏡とったナツちゃんに決まってんじゃない。そういえば見たことねえし。」

「ひよつとしたら大变身とかあるかもしれないよ？」

「ナツちゃん、黒縁だからね。あんま目え付近は隠れて見えな  
いし。」

乾、斎藤と次々と彼の考えに便乗するが、

「……無いだろ、そんな漫画みたいなこと。大体、眼鏡がないくらいでそこまで変わらねえよ。」

国崎は苦笑して答えた。

「えーそうかあ？じゃ、何でノったの、このハナシ。」

「え、だって」

国崎は振りむいた。

「楽しいだろ？見てて。取り乱す那津見るの、興奮するんだよな。」

ニッコリ。

「……………」

「(ドS……)」

「(ドSだ……!)」

3人の心がひとつになった。

「ん?どした?」

「…や、何でも無いっす。ハイ。」

乾いた笑いの3人を不思議そうに見る悪魔。

『えー分かんないか?』と続けようとする国崎に、斎藤が慌てて口を開いた。

とりあえず收拾つけとこう。

「…………ま、まあそうかもね。そんなこと簡単に起こるわけないよね、実際。」

「…………私もそう思うけど?」



女性の声が、ふいに聞こえた。  
4人は声のした方に同時に振り向き、

「え、」

「は？」

「な、」

「……………」

全員、呆けた顔を作った。

……………彼らの目線の先には、本城那津が普段通りの表情で立っていた。  
普段の、覇気のない彼女らしい顔。

ただ、眼鏡をかけていないという点以外は。

「……………な、なにさ、一体。」

当の本人はいきなりフリーズした彼らに、ビクツと肩を震わせる。

え、何そのアホらしい顔。どうした。イケメンが台無しなんだ  
けど、君ら。

…んー、そんなに変かなー、裸眼の私。

「……………いや、何っていうか……………」

「…すごい、変わっただね？ナツちゃん。」

しばらくして、ようやく水谷と斎藤がぼそぼそと話した。しかし、  
何故か私と視線を合わそうとしない。

…なんか、よそよそしくね？まあいいけど。

彼らのリアクションが掴めないまま、私は腕を組んでショーウィンドウ越しの自分の才を覗き見た。

「えー、そうかあ？あんま変わってないと思うんだけど。…あ、てか乾！コンタクト全然痛くなかったよっ！」

そういえば店内でちょっとした恥をかけたことを思い出して、騙しやがったな、とばかりに噛みつくど、

「……ん？信じてたんですか？あの話。」

あー、スミマセン。と、彼は事も無げに言っただけだった。

……おい。なんぞそれ。

あまりにも自然に言われたんで開いた口が塞がらねえよ。どうしようお頭。

うなだれる私。そして、

「…君、今回酷くない？」

…そう眩くので精一杯だった。

……ああ、信じてましたよっ！

悪い！？網膜に入れた瞬間ビクツとなりましたけど、何か！？（自棄）



そして、

「……………」

先程の私の登場から何も話さない男が、ひとり。私を凝視したまま動かない。

「…何、なんか文句あんの国崎。」

自分の力才をジロジロ見られるのはあまり気分のいいことではない。私は眉をひそめて嫌な顔を作った。

「……………」

「…国崎君？」

「……………」

だが、

何を話しかけても無言の彼。

ちよ、話せなくなったんじゃないの、コイツ。何で固まってんの。不審に思っただけで近寄り、国崎を下から見上げる。と、

なんか知らんがスゴい勢いで遠ざかった。ザザッと、それは豪快に。

？なんだ、変なの。…いつもか？表情が見えないから何とも言えないけど……

全く奇妙な動きをする男に首を傾げたが、まああんまり深く考えないでおこうと自己完結した私。  
くるりと首をまわし、他の3人の方を向いた。

「あー、ところでさあ、どう？感想は。」

可愛さがどーのとか、暗さが何チャラとか言ってたよね？君ら。  
私が見る限りじゃ、そんな変わってなさそうだが。目とかは若干デカくなったと思うけどさー！

「…え、感想って……」

言いつつ、水谷は明後日の方へ視線を向ける。

だから、何よ。人の視線逸らすなんて、失礼な。

少しの間があいて、彼はまた口を開き、

「…別にフツーに、かわ……」

ダアアン！！！

続く言葉を言おうとしたらしいが、次の瞬間、何者かからの襲撃により、吹っ飛ばされた。

べしゃつと、無様に地面に倒れる。

ちらつと襲撃者の方を見ると、長い足を引く国崎の姿。  
てことは、…また水谷を蹴ったみたいだ。

大丈夫かな。顔面イツたよ？あれ。  
心の中で同情していると、国崎は吹っ飛ばした水谷の方へつかつかと歩みより、ぐいっとその胸倉を掴みあげた。

「っ、何すんだよ聖悟っ！」

「るせえ。それ以上言ったら、コロす。」

「っ、っ、」

私はそんな2人をぼーっと眺めていた。

あれ、何話してんだろ。会話は聞こえないけど、水谷の方、顔面蒼白じゃんか。

彼らを指差しながら、斎藤と乾の方を振り向く。

「何、話してるんだろっね？」

「さあ？でも多分、ナツちゃんには分かんないと思うよ。」

「んー、じゃ、いつか。」

「もう少しツッコんであげましょうよ……」

息をつきながら言う乾。

えー、ツッコむって、何を？…あ、アレかな？

私は怪訝に思いながらも乾に従い、視線を戻して水谷に問いかけた。

「みずたにい〜！さっきの続きって、何ー？何て言いかけたのー？」

「！〜！」

若干遠目にいるので少し声のボリュームを上げてみたのだが、水谷はさらに力才を強張らせた。口元は引きつっている。

ん？反応おかしいな？

「わ、鬼だ、ナツちゃん。」

「そつきましたか…追い詰めましたねー。」

斎藤と乾は口ぐちに憐れみの言葉を送っている。  
え、私のせいなの？…何が？

「えー……と、」

私が疑問符を飛ばしていると、水谷は口を開いたが、何故か不自然にどもる。国崎はそれを冷めた目で見ていた。

水谷は数秒間何やら考え、ぶつぶつ呟いていたが、やがてそんな国崎の視線に耐えきれなくなった風に、

「か、可愛いつてよりはカッコイイよなっ!!」

叫んだ。

「……はああ？」

全員で、『何言っただこいつ』的な眼差しを送る。私も、ぼかんと口をあける。

しかし、水谷はもはやいっぱいっぱいの様子で。

「…だ、だって目とか切れ長だし、逆に男の子っばい!な?宏樹、圭!」

すがるような目で斎藤・乾を見て、同意を促した。

「(何言っただの、信二。)…まあ、着てる服も男性向けだしね。」

「（言い訳ならもつとマシなやつにしてくださいよ。）カツコイ  
…と言えなくもありません。」

2人はいきなり振られて明らかに嫌そうな顔をしつつも、哀れな水  
谷を思つてか切れ悪く同意する。

しーん、となんととも気まずい間があいた。

その様子を眺め、

（…ちよつと脅しすぎたか。）

バツが悪そうに首をかく国崎。少し反省したのか、訂正のために口  
を開いた。

「…お前、そんなわけな」

しかし お忘れ頂いては困る。本編の主人公、本城那津は。一般  
のヒロインとは大きく異なる、とんでもない変わり者なのだ。

「……マジでー!?!」

国崎の言葉を遮るように、那津はキラキラと瞳を輝かせながらそう  
言った。

『え、』と、今度は、男4人が固まる。

「ホント!? 男っばい? これなら、男子校潜入してもバレないレベ  
ル!?!」

「…は? 何ですかその基準。」



「てか、テンションいきなり高いね？ナツちゃん。」

私は興奮しながらニコっと笑った。

「だって、一遍、男ってヤツになって見たかったんだよっ！」

変わり者、過ぎるだろ。その場の誰もが、そう思った。

だが、本城那津の暴走はまだまだ止まらない。

「ね、水谷、その帽子貸して！」

「…は？いいけど、」

と、キャップをかぶり、

「ゴムあったよなあ、確か。…あーあ、何で髪伸ばしてんだろ私。短髪の方がそれっぽく見えるのにい」

「ちよ、那津……？」

「てか、女の命じゃないの？髪って。」

と、髪をまとめ、

「どっつ？男の子？」

くるっと振り向いてみた。

「……………」。

一同、沈黙。てか、啞然？みたいな。  
ちよっと、何か反応してくれないと痛いじゃないの、私が。

「…なんかさー、君らさつきから反応薄い。どうしたの、今日？」

訝しげに聞いてみると、とりあえず斎藤が答えてくれた。

「…いや。ナツちゃんが、どうしたの？テンションがいつになくおかしいけど。」

…失礼な。人を変人みたいに。

「だって、嬉しいじゃん」

「…男っぽい、が？」

「私、可愛いよりカッコイイの方が好きだから。で、どうよ国崎？ちゃんと見える？男の子に！」

ビシツと人差し指を突き付けると、突然振られた国崎はハツと我にかえったような顔をし、ファイと目を逸らした。

「……………あー、いいんじゃないか？」

…テキトーだな。果てしなく。

私は目を明後日の方向に向けながらそう言った男をジト、と睨みつける。

「見てねーだろ。どう思ってた聞いてん、……………うぶっ、」

「見てる、つての！いいから顔、こっち向けんな！」

何故か焦ったような国崎の声、と共に帽子のツバをグイッと下に引  
つ張られ、私の視界は原色に染まった。

……イキナリだったから鼻にツバが当たったじゃんか。どうしてく  
れんの。

「くちよ、何すんの！」

「お前、もうそれで歩け！」

「無茶言うな！前見えないしっ！」

何だ、私の力才が不服だったのか？君は！別にブサイクなのは、今  
に始まったことじゃねえだろ。

と、

「まあまあ、その辺にしましよ。うよ。」

「ここにいても邪魔だから、移動しようか。」

「はい、いこ、いこ。」

険悪な雰囲気私たちを乾・斉藤・水谷の順で、食い止める。

「……ああ、分かった。」

「……………」

心なしか気が緩んだような国崎。そして、ぶすつとした顔でヤツを  
一回睨み付け、私もしぶしぶその指示に従った。

「…んで、これからどーすんの。」

休日、昼間。

たくさんの人々が行き交う街道を、私と4人はブラブラと歩いた。特に、あてはなく。

…ちなみに、私は帽子に一纏めの髪、と男装(?)ルックのままである。

時々何か言いたげに見てくる国崎は無視だ。ふんだ。

「んー、別に予定とかはないけど。」

歩きながらこちらを振り向く水谷。

って、

「…は？予定なくせに私を呼んだわけ？」

「いやいや、あったよ。ナツちゃんにコンタクトを作らせるという目的が。」

「そうそう。」

ほお。やっぱソレ、決定事項だったわけね。

いやでも、それにしても用事ってそれだけかよ。どんだけ暇なの、君ら。

私は呆れて嘆息し、彼らに向き直った。

「じゃ、何もなければ」

「……あのお」

帰ってもいい？と続けようとしたら、誰かに遮られた。

誰だろうと思ひ、振り向くとそこには。

「…お兄さんたち、お暇ですかあ？」

女子が、数名いた。

高校生：「いや、同じ年くらいだろうか。意外と若そうなイマドキの女の子たちだ。」

化粧はもちろんバツチリ、ミニスカート、ショートパンツなど、各々露出高めの服を着ている。

「いや、キャミソール一枚は寒くね？まだ夏前だよ？」

顔立ちは綺麗というよか可愛いの方があつてる、かな。つーか自分の魅せ方を分かつてる、かな。

「…まあ、そんな感じの5人の女子が、私たちの後ろから突如現れた。」

そして、共通点としては。

「オニーサンたち、カッコイイですね〜！私たち今から遊びに行くんですけど、よかったです。」

「お名前なんて言うんですか？」

「私、その大学の……」

「…皆さん、一様にハンターの目をしていることが。」

「ちょ、カワイイ系で攻めたかったら、そのキラキラした目、どうにかしなよ。上目使い台無しだから。」

私は初めて逆ナンというものを目の当たりにし、ポカーンとするば

かりだ。

……いや、絡まれてる国崎は何度も見たけども、そついや、まとも  
にこつちサイドで見たこと無かったな。

…確かに、これはウザイ。あの3匹のギャル子を彷彿とさせるよ、  
うん。

しかし、対する彼らは慣れたものだ。笑顔で適当に女子らをあし  
らっていた。

…国崎にいたっては、ナチュラルシカトだ。何を話しかけられても、  
スルー。

すげえ。慣れてる。流石、国崎さん。半端ねえッス。

「……何、見てんだよ、那津。」

その様子をまじまじと観察していると、上から目線が降ってきた。

「やー、君は慣れてるなーと思って。」

「何がだよ。」

んー。なんつーか経験値が違うなあ、と。

「えーと、そつちの人は……男性？ですよね？」

「ん？」

そつこつしているうちに、彼女らの内の1人が私を指さしているこ  
とに気付いた。

……おっとお？ついにコツチ来たかー。

話すのメンドいなあ。というか、何話せばいいか分からないしなあ。とかなんとか。

瞬間的に色々と思うところはあるものの、

しかし、ホントにオトコに見えてるんだ

と、私は少し興味深く思った。

そして、

「ん？そうだけど……」

ソレが何か？といった感じで悪気なく、嘘八百をついてみた。ちなみに声は低めである。

途端、隣で国崎は呆れたように私を見下ろしてきた。

(…お前、何考えてんの?)

(るっさい。こんくらいの暇つぶしは許せよ。)

(…暇つぶして……)

(楽しいじゃん。擬似男の子体験！本気で勘違いしてくれてるみたいだし。)

(……………。)

ヤツと目線だけでざっとこのような会話をすると、女の子はパツと顔を輝かせ、さらに声をあげる。

「へえ、かわいいっ！誰かの弟さんですかあ？」

「…おと……っ?」

これは予想外。ぱちぱちと目を瞬かせる私。

ちょ、君マジか、そういう認識だったの？あ、そうか背が小さいからな！しっかし誰にも似てねえだろ。オイ。

…こりゃ、どうしたものか……

何かに期待しているようにこちらを覗いて来る女の子に苦笑を洩らす。

ん？でも、さ。　　そういう設定も、また楽しそうじゃない？

そう思い立った私はニヤリと笑いとびきり悪いカオをした。  
そして隣の男を指さしながら、言ってやる。

「ん、ああ、コイツ……聖悟の弟だよ。」

「は？」

無責任ワード、パート2。



ソレを聞いた途端、彼女は目を丸くしながら私とヤツを交互に見てくる。

「えーそうなんですか！なんか意外ですっ」

仲いいんですねー、とかなんとか言っただけで自己完結している女を横目に、国崎本人はというと 目を白黒させて固まっていた。

……ちょっと、君。なに動揺してんの。

確かにイキナリ振った私も悪いけど、どんな無茶ぶりもこなせるはずだろ、国崎ならっ！

私が生ろつと彼を睨むと、彼もコツチを向いた。

…まだ目線が泳いでいたが何とか顔を合わせ、そして小声で話しかけてくる。

(…っな、那津。)

(…何。)

(今の……………)

(だから、彼女の言うとおり、弟設定にしてみたんだって。しばらく付き合っよ。)

(や、それはどーでもよくて、)

(???)

えっ？ソレはどーでもいいんだ？？順応性早っ。

……あれ、じゃ、何が問題なの？

そうやって私が首をひねっているうちにまた目の前の女が話しかけてきた。

「……じゃ、弟サンも一緒に、皆さんで今から遊びに行きませんかあ？」

「ね、ボク。甘いもの食べたくない？」

……ボクって。私何歳に見られてんの、一体。

しかも私をダシに国崎と仲良くなりたいうって、魂胆見え見え。あー。怖いね、女って。

斎藤たちも遠巻きに私たちを見てるし。……何、面白がってんだか。見せ物じゃねっての。

冷めた目で彼らを一瞥し、私は口を開いた。

「やだね。俺、今日は聖悟と遊ぶんだからっ！」

そう言っつて、べっと舌を突き出して見せる。まさしく少年って感じじゃない？これ。

「え？」

可愛げのない私のセリフに、お顔を引きつらせるおねーサンたち。

「……………っ、」

んで、また絶句する国崎君。今度は口も押えてるし。

…えー、だから、なんでー？

「……ね、俺今すつげえ写メ撮りたいんだけど。」

「赤面聖悟……確かにレアだねー。」

「止めた方がいいですよ。携帯、ヘシ折られますよ。」

「…分かってるって。でも名前呼ばれてあんなに喜んでるって……」

「聖悟も意外に純じよ……っ……!？」

「（…お前ら、後で殺すからな。）」

那津には見えないように、だが確実に3人に向かって凍てつくような視線を送る国崎。一瞬で、彼らは時間が止まったかのように動かなくなつた。（特に水谷）

しかし3人がそんな状態になっているとは露知らず、私は満面の笑みを女子らに向ける。

「おねーさんたち、もっと自分を磨いてから来なよ。じゃないと聖悟は相手してくれないんだよ」

「んな……っ」

失礼にも程がある発言に、彼女らはたも眉を吊り上げた。

だが、今の私は国崎の弟（設定）。

女共も結構納得しているのか、悔しそうに歯がみするばかり。

……これ、ほぼ、最強のカードじゃない？やっぱり国崎ってすごい。

「…ってことで、じゃあね。早くしないと映画、始まっちゃうから

」！

「……あつちよつと!？」

私は口角を上げて満足そうな顔を作ると、ぐいと国崎の手を引き、その場を走り去つたのだつた。

午後3時くらいだろうか。

まあ、本当に行く所もなかったもので、最初の公園に戻ってきた私たち。しかし朝と違い、私はご機嫌だった。

「あゝ面白かったねー！」

ポニーテールを揺らし、んゝと伸びをする。すると、斎藤と乾が呆れ顔で私を見た。

「…いやいや、楽しんだの、ナツちゃんだけだからね。」

「信二なんか、凍死寸前ですよ？」

「…あら、ホントだ。」

後ろを見れば、睨みあっている国崎と水谷。……ただその眼光の鋭さは、獅子と猫くらい差があるけど。  
ん？そんで、なんでバトってるのかな？

「原因、なに？」

「貴女ですよ。」

「ええっ？」

乾、さらりと言ってくれたけど何それ！？…嘘だ。いつの間に不興買ってたの私！？

まっったく、身に覚えは無いが、ならば私が止めるべきだろう。慌

てて2人の元へ走った。

「ちよ、国崎。やめてあげなよ。」

なんかよく分からないままだが、間に入る私。すると、水谷はセー  
フティ（斎藤と水谷の所）に逃げて行った。

「……………」

「なに怒ってるの。さっきから。」

私は残された国崎に向き合い、声をかける。

本当に、今日のコイツはどっかがおかしい。…コンタクト作ってか  
らかな？

私はぐいつと帽子を上げ、仏頂面のヤツと目を合わせた。国崎はチ  
ラリと私を見下すと、また視線を逸らす。

「…………お前が、ムカつくから。」

「ハア!？」

なにそれ？

訝しげな表情をすると、国崎はさらに不機嫌そつな顔を作る。

「だって、いきなり俺の名前、呼んでくるし。」

「なまえ?」

「ん、呼んでみるよ。」

「え、国崎、でしょ?」

「そうじゃなくて……………」

「国崎聖悟、でしょ?」

……それが、なんなのさ？何の確認？

下の名前もちゃんと知ってるのに。…前と違って。

全く意図の読めない私に、国崎は『もういい……』と言って、ため息をついた。

???

意味分かんない。

意気消沈気味の国崎は、腕を組み、私をじっと見下した。

「…あと大体な、お前が男に見えるかよ。背は低いし、身体はガリガリだし。」

「…それは認めるけど……」

君が高すぎるんだよ。

てか、女子では身長高い方だし！女で160あれば結構いいでしょ？（何が？）

「で、でもあの人たちは騙されたじゃないか！」

「…そりゃ、顔が見えなかったからだろ。顔見りゃ誰だって……」

「誰だって、……何？」

じっと、目と目を合わせる。彼の言うとおり身長差があるので、見上げるよう格好。国崎の瞳に映った私が私を見ていた。

「……っ何でも無いっ！」

「ぶっ！？」

だが沈黙は、約5秒でブレイク。また帽子を深くかぶせられた。

痛い、と私が睨むと国崎は気まずそうにコホン、と咳ばらいをした。

「……とにかく、これから那津、コンタクト禁止。」  
「……ええーっ!？」

せつかく作ったのに?てか、なんでー!?

「な、何故？」

「ああ?俺が作ったんだし、文句あるか？」

「き、君だけじゃなくせに……」

「なんか言ったか？」

「……イエ何でも……」

い、威圧感半端ない。これ、水谷じゃなくても怖いわ。

結局、私はしぶしぶコンタクトの入った袋を国崎に差し出したのだ  
った。(1日用、3ヶ月分)

「よし。じゃあ、つけてるのもはずせ。今すぐ。」

「は?…面倒くさい。まだはずさなくていいでしょ？」

「ダメだ。早くしろ。」

再度、催促する国崎。私は

「……わか、った。」

…やっぱり、指示に従いますよ、はい。だって、怖いモン。

公園の女子トイレの鏡の前に、私は立つ。反射する自分の顔をまじまじと見た。

…しっかし、そんな不満かあ、私の裸眼。

なんか地味にシヨックだなあ。普段よりかは、マシな顔してると思っただのに。

…そんな、見るに堪えない顔だったとは。

「……まあ、でも。」

そろ、と右手を眼球に近付け、ゆっくりとレンズをはがす。半透明な物質が目から指に移り、視界がぼやける。

……うう、やっぱりキモイ感覚。慣れないな、これ。

右目のレンズをケースに戻し、左目も同じようにはがす。そして、いつもの黒縁眼鏡をポケットから取り出し、かけた。普段と全く変わらない私が鏡に映る。

「…やっぱり、これが『私』だよな。」

黒髪、眼鏡、…地味。

私のトレードマーク。いつもの本城那津。

その姿を見て、ほっとしている自分に気付く。なんか分からないがとても落ち着いた。

ああ、もしかして国崎もこれを言いたかったんだろうか？『そんなの私らしくない』って。

くすりと笑みを残した私は、鏡に反射する私に笑い、トイレを出た。



「あれ？コンタクト、はずしちゃったの？」

トイレを出ると、外のベンチに4人が座って私を待っていたのに気付いた。水谷の言葉に、私はちらつとある男の方を見て答える。

「ん、国崎がはずせてうるさいからね。」

「うるさいってなんだよ。」

「事実じゃん。コンタクトも、せつかく作ったのに没収とか言うし。」

「え、そこまでする?!」

「黙れ、宏樹。」

噛みつくように斎藤を睨みつける国崎。……今日の君、ほんとに沸点低いな。何があったんだか。

「…あー、いや。でも、もういいから。」

一触即発な空気を寸止めし、2人に手を広げて見せる。言うまでもなく、私はもう、満足したのだ。

なんだか今日はいろんな経験をした。

初めて人前で眼鏡をとってみたり、女の人に絡まれたり、「男」になっってみたり。そういう意味では、眼鏡なしというのは案外新鮮で楽しかったと思う。でも、

「やっぱ、私はコレでしょ。この眼鏡で、じゅーぶん。」

ニツコリ笑って自慢げに眼鏡を掛け直して見せる。

眼鏡大好きってわけじゃないが、やっぱりこっちのがしっくりきた。外見なんかもとより気にしちゃいないし、あれは不評のようだし。別に、私は私そのままでもいいんだからな。

「……ふーん、もったいないな。そういうもん？」

「うん。まあいい変装道具だとは思ってたけどねー」

「…確かに、変装レベルですね、あれは。」

頷く乾に私は眉を寄せた。

いや、だから君らの評価、どんだけ低いのか。裸眼でさらにブスになる女つて、私くらいじゃない？

や、いーんだけどさ。別に。

すこーし複雑な気分になった私はふう、と息をついた。

「…んじゃ、そろそろ帰っていい？私、レポートが終わってないんだ。」

「あ、そうなの？大丈夫？」

いや、ぜーんぜん大丈夫じゃないの、コレが。来週提出なのに、テーマすら決めてない。あははは。

「ちょっと、ヤバめ。だからとっとと帰らないと。」

「それなら言ってくれば良かったのにー。」

「今日、別に付き合うことなかったんですよ？」

ふん、君たちよく言うわ。選択権なかったくせにさ！

そう喉まで出かかった言葉を飲み込み、深呼吸。そして足を踏み

出す。

「……ま、いいって。じゃあ帰るねー。」

バイバイ、と友人に手を振り、自宅方面に向かって歩き出した途端。

「つぶ!?!」

何かにぶつかった。デカいなにこれ、と思って顔を上げると、それは。

「……送る。」

今日、絶賛不機嫌中の、国崎聖悟クンでした。

てくてくと、2人分の足音が聞こえる。私と国崎は並んで歩いていた。

「…家、すぐそこだよ?」

送る必要は無いのにと、私は不可解な顔を見せて呟いた。

「気にすんな、ただの気分だから。誰かさんと違って、俺は切羽詰まっていないしな。」

「…悪かったね、余裕なくて。」

…どこまでも小憎たらしい奴だ。

私はふん、と鼻を鳴らして正面を向くが、やがて口を開いた。

「ねえ国崎。」

「なんだ？」

せつかく送ってくれてるんだし、ものはついでとばかりに聞いてみることにした。

「そんなに変だった？私の裸眼。」

「は？」

「だって、国崎、今日ずうっと不機嫌だし。視界にも入れたくないくらいブサイクなのかなーと思ってさ。」

「っ、おまつ、そんなわけ……」

「あれ、違うの？」

と言うと、国崎はまた押し黙ってしまった。

ぴたり、と足を止めるから私も後ろを振り向く。国崎と目が合った。

「……………い……………った」

ボソボソと口を動かしているが、残念ながら所々しか聞こえない。

…なんだ？

「ごめん、何？聞こえない。」

「…いや、いい。そういえば那津は自分のことに超無関心だったしな……………」

「???.?」

ちよっと、全然分かんないんだけど。ぶつぶつ呟く国崎の声はその

まま私の耳をスルーしていく。

「那津。」

と、また名前を呼ばれた。

「なに？」

「…コンタクトは、時が来れば返してやる。」

「は？」

ここにきて、何？てか、時っていつ？人類最後の日とか、言わないよね？

「それまでは俺があずかる。いいか、絶対つけるんじゃねえぞ。」

「…言われなくても、別にいらないし。そんなリスクなこと進んでしないってば。」

相変わらず意味不明な国崎を一瞥し、また歩みを進めた。しかし、男は複雑な心情で女を見つめていた。

\*\*\*\*\*

つたく、この鈍感が。

なんで自分のことになるとなんにも気付けないんだろっつな、こいつは。

言っとくけどな、那津。

眼鏡とつたお前はな、……本当に、可愛いんだよ。馬鹿。

あんなの、誰にも見せてたまるか。付けるのは俺の前だけでいいんだよ。

だからコレは、お前が俺に落ちたら返してやる。

………ついでに名前も、嫌ってほど呼ばせてやるからな。

覚悟しろ、このドアホ。

それは、人知れず、とある男が決意を新たにした日であった。

END

### 03 (後書き)

時間軸的には、『美女、来襲』の章の前くらいでしょうか。  
このくらいのクオリティの小話の短編がこの後も続きます。

つきあいました。？（前書き）

\* n a t s u   s i d e \*

ここから本編の続きとなります。  
本編閲覧後にお読みくださいませ。



つきあいました。？

「本城さん。」

「ちよっと」

「いいかしら？」

「（……………すげえ）」

高低組み合わさった、お嬢様方の見事なハモリに驚嘆の限りです。いっそハネプ出てこい。君ら。

みなさん、御機嫌よう。本城那津です。

国崎 聖悟という恋人ができてから一週間。やはりというか、予想通りというか。男の方が有名すぎるので、カップル成立の噂が回るのはあつと言つ間で。

で、現在。

私は、陰険なお顔の女子の方々に囲まれております。

…まあ、これもある種予想通りだけどね。うふふ。

「…ちよっと、聞いているの！？」

んー、どうしよう。

ここで聖悟と待ち合わせだったんだけど、この女子壁で見つかるかどうか。

「返事しろよ、このブスが！」

ああ、でも逆に目印かな。分かりやすいって点で。問題はヤツの方か。この中に入ってこれるのかっていう。意外とヘタレだしなあ聖悟ってば。

「っ！聞・け・よ！！」

一番前にいる女子に、ガツと胸倉を掴まれる。

同時にスポン、とイヤホンが私の耳から滑り落ちた。

「……あ。ごめん聞いてなかった。」

「っこいつ、MP3で音楽聞いてやがった!？」

「なんて強者なのっ!？」

途端、ドヨツとざわめくメス共。

…ん、いや。単なる雑音シャットアウト手段だったんですけどね。私は仕方なく彼女らの方へと視線を向けた。

「…それで、何の用なんですかあ？」

この問答も何回繰り返したことだろう。呆れつつも律儀に聞く私ってすごいと思うよ？

「何、じゃねーだろ！お前…」

「はい？」

「とぼけないで！あんた本当に……」

はいはい、知ってますって。君らの言いたいことも、それに対する私の返答も。

…何回、同じこと繰り返してると思ってるの。

「聖悟君と、付き合ってるの！！？」

ハイ、キタ。決め台詞。女子特有の、キンキン甲高い声が非常に喧しい。

これで、…えーっと、通算で8回目かな。

…まったく。下らん噂回すんなら、それとセットで真偽も添えてくれたらいいのに。

私はため息交じりにコーヒーをひとくち飲み、ぼそりと答えてあげた。

「ええ、付き合ってますよ。」

「！……！！……？……？」

途端、信じられないように顔を引きつらせる彼女ら。

…符号、多。どんだけ驚いてるの。

「う、嘘よ！あんたの妄想じゃないの！？」

「どんな！どんな手を使ったの！？」

「黒魔術ね！本城さんならできる気がする……！」

「本当のこと言ってるよ。ね、怒らないから。」

私を囲む女子大生らは一瞬のフリーズの後、口ぐちに問いかけてくる。

…あーもー、相変わらず酷い言われようだ。今日のは特にバラエティに富んでるな、うん。

噂が出回ってて、ソレを肯定して、何が不思議なんだかなあ。

まあ、人って、受け入れたくない事実には目を逸らしたがるらしいしなあ。そういうことか。

「いやー、嘘とか言われても、事実ですけど。」

「違うっどうせアンタが無理やり言い寄ったんでしょ！」

パンツとテーブルを叩き熱弁を奮つ、…えっと、先頭のショートカットの女。

…いや、篠原さんみたいなこと言うな、この女。

どうでもいいけどカップ倒れた。ひじ濡れた。クリーニング代求む。

「…そんな信じられないんだったらさー、」

不機嫌顔で零れたコーヒーをふく私。そして、それを射抜くように見ている数多の目。

あーもう、めんどいなあ。

「聖悟に、直接聞いてみれば？」

……まあこつ聞くと、

「っ！？な、そんなこと、出来るわけないでしょ！？」

「わ、私が聖悟君と話すなんて…。」

「ム、無理無理！！！」

ブンブンと高速で首を左右に振る女子ら。

こう、返ってくるんだよな。

確実かつ決定的な方法なのに、それを選ばないのよね、この人たち。アイドル的な存在だから、単にヤツに近付けないのか、その決定打を受けるのが怖いのか。

……恐らく後者かな！。

「とにかくっ！」

紙コップをくしゃりと握りつぶし、ぼんやりとそれを観察していると、いきなりビシッと指を突き付けられた。

マスカラを塗りたくっている重そうなマツゲ……の下の瞳が、キッと私を睨む。

「あ、あんたが聖悟君と一緒にいるのはおかしいでしょ！」

「そ、そうそう！ちゃんと顔と相談してから来てよ！」

「ム力つくのよ！ていうか、正直邪魔！！！」

「……………」

…あ、今気になる発言あったな。顔と相談、て。…整形か？てか、結局そういう話になるんだよねえ。

私はまた、ため息をついた。

「…そんなん、知らないって。嫌だったら勝手に向こうから離れるんじゃない？」

そう言い終えると、女の子たちがまた目を吊り上げるのが見えたが、それより早く、背後から大きな影が私にかぶさってきた。

「それもそうだな。…まあ、離れるつもりなんか、ないけど。」

あれ、と思ったときにはもう後ろから男の両腕が絡まっていた。ぎゅっと背後から抱きすくめられて、椅子に体を縫いつけられる。

やっと来たか。

「…聖悟。」

「ごめん、待ったか？」

首を回して後ろを向くと、予想通り、噂の種の国崎 聖悟本人が笑顔で私を覗きこんでいた。

「っ!!!?!?」

「…え……っ!!!?!?」

女子共は声にもならないくらい驚いている様子。

口をぽかーんと開けた驚愕の表情は…なんていうか、見るにも堪えない。

……顔と相談するのは君らの方じゃないかなあ。

そう頭の片隅でちらりと考えたがしかし、それは私の気にするとこゝろに非ず。

私は首を元に戻し、正面を向いたまま聖悟に話しかけた。

「…聖悟、遅い。」

「ん、悪い。教授に呼び出されてさ。それより何？この人だから。」

「ゼーんぶ君のファンだよー。」

「…またか？というか、まだ居たのか？」

「どうも、私と君が付き合ってるのが信じられないらしい。」

「へえ。」

そこで、聖悟は初めて周囲の女子に目を向けた。目が合った女子はユデダコのように顔を真っ赤に染め、慌てて視線を逸らす。

「あのさあ、」

だが、聖悟も私同様に女子らのことは気に留めてないようで。気の抜けたような声を出し、おもむろに私を指さして、言った。

「こいつ、俺の彼女で間違ってるけど。」

その瞬間。

ガーン。

そんな効果音が聞こえてくるような雰囲気になった。

さっきまで顔を赤くしていた女子は皆、真っ白になって崩れ落ちる。

『嘘、嘘よこんなの……』

『これは白昼夢に違いないわ。ああ、夢なら覚めて……』

瞳に色を失くした女たちの亡霊のような声が所々聞こえてきた。

「って、そんなにショックか？」

「つか、怖い。さっきより数倍怖いよこの人たち。人間って、末期になるとこんななるんだ。…後ろの方、すでに失神してるし。」

「…聖悟お。」

声をひそめて、後ろの男を呼ぶ。

「んー？」

だが、大量に廃人を作った張本人をちらつと見ると、全く気にしていない様子。それどころか私の髪に顔を埋めたりしてる。

…相変わらず、自由な男だ。

「……なんか私、君と付き合っの、歓迎されてないらしいんだよ。」

「へえ。そうなのか。それで？」

いや、『そうなのか』じゃなくてさ。

見りゃわかるでしょ。言っつくけど、君のせいだからな。

少し責めるような気持ちで回されている聖悟の手を掴む。

「だからさ、この人たち、こんだけしつこくつけ回してくるんだと思っただよな。」

そう。この一週間、なんか色々大変だったんだよ、私も。

大学だから靴箱にゴミ、とかは無いけどさあ。何処から飛んでくるギラギラ痛い視線は、何とかしてもらいたいものだ。



…こうやってハッキリ聖悟の口から言っても、なかなか効果が無いからなあ。

「ふーん。……じゃあ、」

少しかがんだらしい聖悟に、コツチ向け、と言われて素直に聖悟の方を向く。

彼の顔面が視界いっぱい広がった。

…なんか知らんが、近い。

「で？なに………つむ？」

するとまたたく間に、聖悟の唇が私のに重なった。

「……！！？」

ちゅっと、リップ音を立てて離れる聖悟の唇。私は呆然とヤツの顔を見つめたまま、固まるばかりだった。

え、なに、これ。何が起こった………っ！？

「………こんなん、どうよ。」

聖悟はニヤリと笑みを作り、ぺろっと舌で自分の唇をなめた。同時に、私はやっと何をされたかを理解し、頬を真っ赤に染め上げる。

こいつは、いま、公衆の面前で………！！？

「っせ………「っきゃあーっ！！」

しかし抗議しようと口に出しかけた私の声は、その『公衆』に無

残にもかき消された。…そう、私と同じくヤツの暴拳に呆けていた女子の大群に。

聖悟は奇声を発したまま固まった女子を面白そうに一瞥し、またも彼女らに追い打ちをかけた。

「ん、こういうことだから。俺たち、超ラブラブなの。」

「…っ!？」

言うと同時に、私の体が宙に浮く。さっきまで座っていた椅子が下方に見えた。

見る間に、男は私を抱えあげたのだ。

「っ、降ろせ!！」

……もちろん私もたまったもんじゃない。中途半端な浮遊感が気持ち悪いし。小さい子を抱っこするような無様な格好が、嫌だ。

てか何してんの、君っ!

「あー、那津はコツチのが良かったっけ。」

足をじたばたとさせていると、両脇に添えられていた手はすぐさま、背中とひざ裏に回った。体が固定され、バランスが安定する。

ハイ、これでお姫様だっこの完成……て、違う!!そうじゃない!!

「聖悟っ!人の話……」「じゃ、そう噂広めていてくれる?あとこいつには手えださないようにね。」

ニツコリと嘘臭く笑い、周囲を見回す聖悟。

…うわ、やっぱり私完全スルーされてる。自分に都合のいいことしか聞かないつもりだ。付き合ってから、その辺全然変わんねええ

え!!

「じゃあ、俺ら帰るから。」

そして、私と私の荷物を抱えた聖悟は、颯爽とその場をフェードアウトしたのだった。

「コノヤロツ、いい加減、離せええええ!!」

「何で?歩かなくていいから楽だろ?」

ちがっ……そういう意味じゃねえ!分かってて言ってるだろ君!!

「人の視線が!視線が痛いんだってば!」

「んなもん、無視しとけ。」

「やだ無理!つか、君はなんでそう平然としてるんだ!」

ギャーギャーと、ごく近い距離にある、聖悟の耳元で叫ぶ私。しかし、がっしりと固定されている身体はまったく動かなかつた。

…そう、私は未だお姫様だつこの体勢のまま、どこかに連れられている状況。しかも、彼が解放してくれるそぶりは皆無だ。

なんだ、このある場面を彷彿ホウフツとさせるような状況はっ!!今は追われてるわけでも何でもないので!

というか、さっきといい今といい……何でこいつはこんな恥ずかしいことを人前でできるんだあああ!!

興奮と羞恥で顔を赤く染める私を彼はチラリと一瞥し、ぼそつと咳く。

「……分かったから、静かにしろ。」

「分かったんなら降ろしてよっ!」

「はいはい、もうちょっとだから我慢しとけて。」

ゴソゴソ……ガチャッ。

「どうぞ、お姫さま。」

ポスン。

「……へ?」

ぼかん、と口を開ける私。

『もうちょっと』は思ったよりも早かった。気がつけば、私は駐車場に停めていた彼の車の助手席に降ろされていた。

「じゃ、出発つと。」

ガチャ、ボタン。

カチ、ブロロロ……

ゆっくりと動きだす車。流れていく景色。

「……え、……は!??」

やっと我に返ったのは、男が運転席に乗り込み、キーを回し、

車を発進して駐車場を出たときだった。

私は混乱する頭を置いておいて、鼻歌交じりに運転している聖悟に掴みかかった。

「ちよ、何コレ!? 聖悟!」

「はあ? …俺の車だけ。お前、何回乗ったと思ってんだよ。」

だ・か・ら! ちっがーう!!

「んなこと知ってるわ! 何乗せてんだよ! 何処行くつもりだ!?!」

「ああ。俺ん家。」

……さらつと答えて下すつたこの男にドロップキックをお見舞いしてやりたい。

O・R・E・N・C・H・I だと?

あの、恐怖の魔城に? (多少の誇張表現があります。)

無理だよ!

「……………却下あ!」

嫌だ! 今度こそ生きて帰れないつてえ!!

「貴方に拒否権はありません、那津さん。あと、車内で騒ぐな。」

しれつと言っな! ポケナス! ああもう、誰かこいつに私の言葉届けて! 頼むから!

「つつ! 聖悟つ! まさか君……………このために今日呼ん……………」  
「つたりめえだろ。」

そこで聖悟はくるつと私の方を向き、耳元に口を近づけた。

「あと、遠慮せずに泊まってけよ？」

「……！！」

途端、ニヤリと歪んだ唇から、私は真つ赤になって飛びのく。

しかし、やたら上機嫌な男はハンドルを握っていた手を伸ばし逃がさない、とばかりに私の顔を押しさえつけた。

びっくりした私とヤツの目が、あった。

私を否応なしに動けなくさせる強い眼差し。今回も例外ではなく、私はカチンと固まってしまった。

「那津……………」

甘い声を含ませながら、聖悟の顔が近付く。びくつと体を震わせてしまう私。思わず目を閉じると、額に柔らかな感触が降ってきた。そして、短いソレが離されると、三日月の形に歪んだ彼の唇から言葉が紡ぎだされる。

「…愛してる。」

「……………」

耳元に残る甘い吐息が私をおかしくする。

赤い、暑い、熱い。もう、完全にノックアウト、だ。

ふしゅーつと、全身の力が抜けた私は軟体動物のように、くたりと男の肩にもたれかかった。それを聖悟は片腕だけで支え、運転を続行する。

「可愛いなあ、那津は。」

「…も、そんな、ことばっか言うから……っ！」

心臓が、持たねえ。ドキドキバクバク、今日も活発な私の左胸は『慣れる』ということなんて知らず。

どんどん、堕ちる。

「じゃ、行くか。」

「……………」

もはや、何も言える状況じゃない私。

半ば諦めの気持ちで嘆息し、素直に腕の温もりに身をまかせ、外をながめた。

車は、恋人たちを乗せ、快調に走った。

END

つきあいました。？（後書き）

カップルの初々しい感じが少しは出ましたかね…？  
次回は聖悟視点のお話です。



つきあいました。？（前書き）

\* s e i b o s i d e \*

つきあいました。？

「……………おい、聖悟。お前新しく彼女作ってたって、本当か？」  
「ん、ああ、そうだけど。」

ガタガタツ、バンツ！！

「っ！？なんだとー！」

途端、頭を抱え出す男たち。

「…マジかよー！お前のこと紹介してくれって言われたのに！」  
「聖悟がいねえと、もう合コンができなくなるじゃねえか！どうしてくれんだ！」

ギャーギャーと勝手に喚く男たちは、正直ウザい。しかも、醜い。  
…いや、知らねえし。お前らの都合なんて。

もはやおなじみの、大学近くのファミレス。  
その中のテーブル席で、俺は同学部の知り合いたちと昼飯を食っていた。

その数、5人。…男がつるむには多すぎるだろ。うざってえ。  
いや、そんだけあの噂が気になるってことか。……ほっとけよ。

「なア！俺どうすりやいいんだよ！今度、彼女にお前を連れてきてやるって約束したんだよ！」

まだ言ってるのか、それ。だから知らねえって。

「うるせえ。騒ぐなら店から出てけ。」

「ひどい！」

と言つて、泣きマネをする男。何故か信二を彷彿とさせる。

……殴つていいか？

「……でも、意外だったなあ。もう彼女を作るなんて。『今は別に女はいらない。』とか言つてたくせにさ。」

拳を握つていると、正面右側の男からなじるように声をかけられ動きを止める。

…ったく、どいつもこいつも……

「…別に、いいだろ。彼女作るくらい。」

はあ、とため息をつきながら興味津々に俺を見るヤツらを睨みあげる。

…騒ぎ過ぎなんだよ。女も男も、なんでこんなに気にしてんだ。俺が誰と付き合ってたって、関係ないだろ。

「いやいや、よくないって！」

すると、全員がガバツと、こっちに身を乗り出してきた。  
…あまりの食いつきっぷり、そして息の合いようにドン引く。俺は  
ウーロン茶を飲みながら眉をしかめた。

「ああ？何が？」

「だ、だって噂じゃ、お前が付き合ってたのって……」

そいつは恐る恐るといった風に、でもハッキリと言った。

「あの、本城那津だろ！？」

ピク。

自分の彼女の名前を叫ばれて、グラスを握っていた手に力が入る。  
だが興奮しているらしいコイツらは全く気付かない。

「どーいうことだよ！」

「なんで、よりよって本城さん？もつといい子いるだろ！？」

「聖悟も色んな子と付き合ひすぎて、なんか頭がおかしくなっ  
てんじゃない？」

……なんか、酷い言われようだ。那津が。

いや、認識が酷過ぎるだろ。

…ある程度予想はしていたが、実際言われるとすげえムカつく。

「……そうか？」

「そうだって！どう見ても聖悟には釣り合わないだろ、あの子。瘦  
せっぱっただし顔も平均的だし。」

「そう、中の下がせいぜいってとこだね。どこにでもいそうな感じ

だしー。」

「まあ、友達だったら楽しいかもだけど……彼女にはちょっと、ア  
レじゃないか？」

「……………」

そんな風に散々、好き勝手話す5人を冷めた目で見る。

ム力つきがピークに達しそうだったので、俺は落ち着いて気を静め  
た。

何も知らねえくせに誹謗中傷なんてガキか、こいつら。 那津のい  
いところは、そんなんじゃないってのに……

『女を顔と体だけで判断する男』ってコイツらみたいなことを言う  
んだろうな。

……つか、いい加減に黙れ、てめえら。

イラつきすぎて、この中の一人くらい軽く殺ッてしまいそうなんだ  
が。

「……………そういや、俺。 去年本城さんと授業一緒だったんだけど、」

と、隣に座っていた男がふいに口を開いた。

「へえ？ そうなんだ。 どんな感じだった？」

「いや、話してないしあんま記憶ない。 彼女、ほぼ寝てたし。」

「マジかよー男子みてえだな。」

「でも単位は取れてたらしいよ。 ある種、スゲエと思う。」

へえー、と一同は感嘆した。 ……若干笑いながら。

耳を傾けていた俺も、呆れやら感心やらで嘆息する。

……それはまあ、普通にスゴいな。つーか、やっぱり授業寝てんのかよ、那津。

夜中にバイトなんかするから、そんなことになるんだよ。やっぱり止めさせねえとな……夜のバイトは危険だって、何回も言ってるのに。

「……とにかく、」

「？」

那津に会ったら追求してやろう、と思っていたら、奥にいた男子が俺に向かってびしつと指を突き付けて来た。

「納得のいく理由を提示しろっ！」

「……何の？」

「だーからー！何で本城さんと付き合ってるか！ハッキリ言ってる理解不能なワケよ、俺ら。」

「別に、理解されようなんて、思ってな……」「いや！絶対、何かあるだろ！話せ！」

言いかけた言葉すら遮られ、先を促された。

……男5人に、鼻息も荒く詰め寄られるって本気でむさいな。

女子に囲まれてた那津もこんな感じだったのか。確かに面倒くさいな、コレ。マジで図々しすぎるだろ。

目の前の友人たちを本気で一発ずつ殴ってやろうか、などと考えながら、ストローを噛む。

……。

……まあでも、そろそろいいだろう。

俺は俺らの後ろの席に座っている人間に、ちらりと目を向けた。そして、口元に笑みを浮かべながら自然に声をかける。

「……だつてよ、那津。」

「えー!?!」

途端、表情が凍りつく男たち。呼んだ人物は素直に後ろを振り向いた。

「……いや、私に全部投げないでよ。どうしろっていうの。」

噂のカノジヨ、本城那津が。

「…別に、投げてるつもりはないけど?」

俺は肩の後ろに腕を回し、那津の頭を撫でた。那津は重い、とか言いながら俺の方をじろつと見てくる。

あー可愛い、可愛い。

「嘘つけ。じゃあなんでこのタイミングで呼ぶのさ?どうせ面倒臭くなつたんでしょうが。」

ばれたか。

「や、でも、百聞は一見に如かずって言うだろ?その通りに実行し

「たまでだ。」

「じゃあ私、何も言わなくて良くない？」

「何か、は言つとけよ。文句とか。」

「…そういや、ボロクソに言われてたね、私のこと。でも結構事実じゃない？通常反応だよ。」

「嘘、嘘。今のお前見て、んなこと言えるわけねーだろ。……なあ？」

「っひ!？」

那津といつもの掛け合いをしている合間にイキナリ振ってやると、男は青ざめた。

…しかし、

「…ああどうも、こんにちは。聖悟の彼女やってます、あの本城那津です。」

那津に顔を合わせられた瞬間、それが赤信号のごとく赤く染まった。…は、面白い。男でこんな真っ赤になるって、珍しいな。予想通りの反応に俺は、ニヤリと満足に笑う。

「……あ、あの、」

突然何も言えなくなった男を放置し、別の奴が那津に控え目に尋ねた。

「…何ですか？」

「本城さん……ですよね？」

「?ええ、そうですけど……。」



何の確認だろう、と那津は訝しげに首をひねる。  
男たちはまたざわついた。そして、言う。

「…いつものメガネは、どうしたんですか？」

そう、今の那津はいつもの黒縁メガネをかけていない。裸眼だ。  
…まあ、俺が指示したんだけどな。

彼女はキョトンと目を丸くした後、ああ、と合点がいったように

「あ、コンタクトしてるんですよ。どうですか？」

と言って笑った。

「っ」

その瞬間、俺の周りの男たちは一斉に口を閉ざし俯いた。  
とうとう誰も那津に目も合わせられなくなったのを見て、俺は再び  
口を開く。

「で。誰が俺と釣り合ってない、って？」

口に笑みを浮かべ、低い声でそう言ってやるとヤツらは縮みあがっ  
た。

愉快すぎる。

俺は内心で優越感たっぷり男どもを見下した。

「え？私が、でしょ？」  
「那津は黙ってる。」

ヤツらの表情と俺の言っている意味が分からないらしい那津は、不可解そうに首を傾げている。

ホント相変わらず、鈍いな。

てか、お前はもう少し自覚してくれねえかな？そうすりゃ、俺も苦勞せずに済むから。

そんなことを考えながらわたたと男どもが慌てふためいているのを見物していると、  
しばらくの間のこと。

「つすいませんでしたああああ！！」

「お似合いツス、マジで二人、ベストカップルツス！！」

「失礼しましたああ！！」

赤くなったり青くなったり白くなったり。忙しく様々な顔色に変化した男たちは、突如大声を上げて逃げ去った。

後に取り残されたのは、俺と那津のみ。

……お、よく見ると伝票も持って行ってってくれる。

ラッキー。今日の昼、タダになったな。

ふっとほくそ笑み、無人となった隣の席に何気なく那津を座らせた。那津は素直に俺の横に座ると、見上げるようにして視線を合わせてくる。

「……あの人たち、どうしたのかな？」

先程の光景にボーゼンとしている様子の那津。俺は口だけで笑った。

「ん、気にすんな。」

どうせお前には分かんねえだろうから。

「そうかな……」

うー、とうなりながらまだ納得がいつていない風な那津。その長い髪の毛をいじりながら、改めて彼女の全身に視線を送る。

「てか、今日マジで可愛いな、那津。どうした？」

「んー？」

那津の今日の服装。

ボーダーシャツに革のジャケット。白いミニスカート、夏らしいサングラス。

…見た感じ、超・女のコだ。いや、カワイイけど！こんな初めて見る格好だから、ちょっとビックリする。素直に感動していると、那津は少し苦笑気味に話した。

「あー、麗奈さんに頼んだらこうなった。つか、知らない間に買われた。」

「へえ。」

「なんか、他にもたくさんもらっちゃったから大体こんな感じになると思う。……変？」

「……いいや？」

むしろ、ナイスだ。

この那津を毎日見れるとか……うん、幸せかも。俺。

「…ちよつと聖悟、変な顔。」

那津に呼ばれて、無意識に緩んだ頬を慌てて直した。彼女はバカにしたようにふつと笑う。

そんな仕草さえ可愛らしいと思ってしまふあたり、ああ、マジでこいつに惚れてるんだな、俺。と思う。

彼女につられて俺も笑った。

「…それにしても今日、誰も私が本城那津だって気付かなかつたよ？さっきの人たちも驚いてたし。やっぱり、コンタクトって、変装道具じゃない？」

「……今だけ肯定しといてやるよ。」

そう呟いて、俺は那津の額に軽くキスを落とした。

END

つきあいました。？（後書き）

会話が多いなあ…。短編だし、こんなもんか？ W W  
小話的なノリで見えて頂けると助かります。

つきあいました。？（前書き）

\* n a t s u   s i d e \*

つきあいました。？

「へ？」

ハナシの冒頭は、そんな私の間抜けた声から。ステージは昼、理学部棟横のカフェテラスにて、だ。

今しがた聞いたコトが理解できなくて、私はばちばちと瞬きを繰り返した。

…ついでに、手からストローもすり抜けて床に落ちた。ちっ、最悪。聖悟に新しいの取りに行ってもらおう。

…いや、でもそんなことより。…今、彼女は何て言った？

「っ、つき、あつ、た……？」

「うん。そーだよ。」

「って、誰と、誰が……？」

「私と、信二君が、よ。」

…？…！！？  
な、

「なんだってえーっ！！？」

近所迷惑なほど大きく響いた私の声は、同席していた聖悟の手によ

って即座に封じ込められたのだった。

ビックリした。今世紀最大の衝撃。ってぐらいにビックリした。まさか、まさか……

最強お嬢様の麗奈さんと、馬鹿チャラ男の水谷が……  
付き合った！！？

衝撃の事実には愕然とする私。ただただ、ボーゼンとして動けなかった。

「……嘘、でしょう……？」

「……ナツちゃん、何その地球の終わりみたいな顔。しかも今、俺にすげー失礼なこと考えたよね？」

ちっ、うるせえボケが。別に君に聞いてないから。

ギロリと目の前の水谷を睨みつけると彼は、おー怖い、とか言っ  
て手を左右に振った。

すつと深呼吸をひとつ。少し落ち着いた私は、改めて前に座る二人、  
麗奈さんと水谷を見る。

麗奈さんはいつものように優雅にお茶を飲みながらニコニコして  
るし、水谷もいつものごとくジャラジャラとアクセサリーばかり付  
けてて、ウザい。

…この二人が恋人同士、だと…？

私は並んでいる二人を見、『コイビトドウシ』という言葉をつなげ



てみた。そして、あまりに不釣り合いすぎて鼻で笑ってしまった。

ハッ、ないだろ。

まったく何をバカな事を。っーか何故。どういう経緯で。

……大体、麗奈さん、失恋したばかりだったのに。

じつとりとした目線を送っていると、水谷の呆れ声が聞こえてきた。

「あのさ。別に、告って付き合いたってただけだよ？何も不思議なことはないだろ？」

不思議なことは、ないだと……？  
バンツ！

テールに叩きつけた左手の衝撃で、バスケットに入ったパンとナプキン、その他が宙に舞う。私は先程ふざけたことをほざいた男に、びしっと人差し指を突き付けてやった。

「絶対、ちがう！どうせ君、傷心の麗奈さんに適当に優しい言葉でもかけて無理矢理落としたんだろ！！」

「うっわ、酷い言われよう。ナツちゃんの中で俺ってどんだけ悪者なの。」

「へー、そうなのか？信二。」

「オイ、聖悟まで乗るなって！」

猛犬のごとく水谷に向けてうなる私と、それを横目で眺めながらニヤニヤしている聖悟を見て、水谷はため息をついた。

「…麗奈。なんとか言ってくれよ、この人たちに。」

そして、最終的に麗奈さんに泣きついたのだった。

「ふふ、そうね。」

すると、彼女は苦笑して、荒ぶる私の左手を握った。

「まあまあ、那津、落ち着いて。」

「麗奈さん……」

麗奈さんは私を見て、にっこりとほほ笑む。

やっぱ、この人超綺麗。超美人。……麗奈さん、マジ天使。  
それが、何で水谷なんか……！

握られた手に力をこめ、私は麗奈さんをじっと見つめた。

「……いいの！？水谷が勝手なこと言ってるのに、認めても！」

今なら間に合うよ！否定して！

「ちょ、事実なのに単なる噂程度までランク下げるなって！」

「うっさい、バーロー！俺は麗奈さんと話してるんだ！」

ひっこんでろ！てか君は話に入ってくるな！

「……ヤベエ、一人称まで変わった！？聖悟、そろそろナツちゃん、止めろって……」

「やー、当初に比べるとだいぶ表情豊かになったよな、那津も。」  
「しみじみ言ってるじゃねー！」

うんうんと、一人頷いている聖悟に、水谷のツッコミが飛ぶ。

そんな彼らの会話など、耳にも入らない私は、麗奈さんの返事をじっと待った。

「…そうね、貴女からしたら不思議かしらね。ついこの間まで聖悟君が好きだったのに、って。」

「!…そう。だから自暴自棄になってこんなヤツと付き合うコト、ないんだよ!」

「って、本人の前で言うか?それ。…ちょ、もう俺、凹み過ぎて立ち直れないかも……」

同じテーブルに同席しているのに、水谷の影が極端に薄くなったことを確認する。

敵のダメージは甚大。よし、もうちょつとだ。

「ねえ、麗奈さんもそう…でもね、那津。今は違うの。」

だが、同意を求めようと言いかけたセリフは突然止められた。水谷も聖悟も、彼女の方を向く。

麗奈さんはニコリと笑い、一瞬にして目が合つて。

私から目を逸らさないまま、形のいい唇が動く。

「今は、信二君が好きだから。」

「……………!」

そう、静かにはつきりと言うから、私は二の句が継げなくなった。先程以上のショックが襲う。

言いきった彼女の笑顔は、相変わらず美しかった。

そう。国崎聖悟に失恋した時と、まったく変わらずに。

まさか本当に……？でも、いや……

それは君の、本当の笑顔なのか？

「……嘘、だよ。」

「……那津。」

否。

ありえない。そんなこと。

…だって、君はあのおとき。傷ついていたじゃないか。私のせいで。私が聖悟を取ったせいで。

あの日泣きそうに笑っていた君のことを思うと、今でも胸が痛い。彼は、私なんか欲してはいけない存在だったのに。本当は麗奈さんと並んでいた方が、よっぽどお似合いなのに。麗奈さんはまだ聖悟のことが好きだったのに。

でも、譲らなかった。結局、聖悟は私の彼氏になった。

散々協力するとか言っておいて、最終的には裏切った私は、サイテーの卑怯者だ。

でも君は平気なフリをして、こんなにすぐに他の男と付き合っただけ。しかも相手は水谷だし。

そんなの、絶対、違う。

…君は私に、遠慮したんだろう？

「…那津、別に貴女のせいとかじゃないわ。本当よ。」

「……………」

曇った私の顔を心配してか、麗奈さんが話しかけてくるが、私は黙ったまま俯いてしまう。…何も、言えない。

だって、そんな。嘘だ。そんな優しい声でそんなこと言わないで。私が、悪いのに

「てかさ。」

と、割り込むように話し掛けてきたのは、水谷。不服げに髪をがしがし掻いていた。

「なんで、フツーに麗奈が俺に惚れた、っていう結論に至らないわけ？」

……………は？

彼の意味不明な発言に、私は眉をひそめる。いきなり何言ってるの、このアホ。

ってか、何この空気。私、シリアス入ってたんですけど。どんだけKYなの？死ぬの？  
空気って、読まないと爆死するんだよ？（え）

私は、ギンツとヤツの方に顔を向けてやった。冷たい眼差し込みで。あまりに強く睨んだからか、水谷はたじろいだ。

「……そんなん、ありえないからに決まってるじゃん。」  
「きっぱり言うなよ……。俺的にはナツちゃんたちの方が意外で仕方ないんだけど。」

「それは自覚してるからいいの。」

ふんつと鼻で笑って、口を尖らせてみせる。

まあ、私たちのことはともかくとして。

君と、麗奈さんが両想い？

…無いだろ。

だってさ……彼女は、聖悟が好きだったんだよ？

しかも紳士キヤラを作っていた品行方正、眉目秀麗な時の。

乾ならまだ納得したものの、何で水谷い？全く、タイプ違うじゃん。

顔はイケメンだけど、チャライシ。筋肉馬鹿だし。アホだし。馬鹿だし。

「…馬鹿、が多くね？」

「気のせい。」

「や、実際こいつ馬鹿だからな。一年の時、単位メツチャ落としたし。」

「マジで？真性だったんだ。救えねー（笑）」

「…もう、お前ら黙れっ！」

自分の馬鹿さ加減を露呈されて恥ずかしいのか、顔を真っ赤にして怒鳴る水谷。

…ハッ、いい気味。ザマアみやがれ。

つか、そんなバカとは思わなかったわー。うちの理学部って、そんなにレベル高かったっけ？

そんなことを考えながら、ちらりと横目で聖悟を見る。目が合つと、ヤツは笑みを作った。

「……ちなみに、聖悟は？単位。」

「俺が落とすつもりでも思ってたのか？」

「あ、やっぱり？」

…ですよー。そのドヤ顔はそうだと思いますよ。  
てことは、水谷は特別アホなんだ。うん。

…わー、カワイソー。みたいな、少々哀れんだ目線で水谷を見てやると、彼は、

「っだー！俺の成績の話はもういいっての！麗奈と俺のことを話してんだろ！？」

噴火した。

…そんなに気にしてたのかな、成績。

………って、そうだ！こんな馬鹿げた会話、どうでもよかった！  
私はハッと我に返り、飛び起きる。

「……麗奈さん！」  
「何？」

鬼気迫る勢いで麗奈さんに迫ると、彼女はきよとん、とした。  
…なんつー、のんきな。  
はあ、と息をつき、今度こそ私は真面目な顔を作った。

「……麗奈さん、本当にコイツが好き？」

再確認。

…もしも、麗奈さんが無理矢理付き合わされているんだったら、私も黙ってられない。

このふざけて、ニヤけた、不埒で、不潔な馬鹿男……

「…指、指さないでよ、ナツちゃん。」

黙れカス。お呼びじゃないよ、君は。余計な茶々を入れるな。

この、水谷信二を抹消しなければ。

まあ、頼めば聖悟も手伝ってくれると思うし。なにかいい計画を……

「好きよ？」

しかし、間髪をいれずに答えた彼女に、またもぎよっとする。

「え、ホントに…!?!？」



「ええ。」

「ホントのホント!？」

「ホントのホント、よ。」

ねえ、と水谷の方に顔を向ける麗奈さん。…その表情を見ても嘘をついている様子は、全くない。

照れている(キモイ)水谷と一緒に楽しそうに笑っている。それは、まるで恋人同士のように……

……………ん？

え、ちよつと待って。

本当に、本当……………?…この二人、もしかして、マジで両思い……………?

「君たち…りよ、両思いなの……………?」

恐る恐る聞いてみる、と。

「あたりまえじゃない。じゃないと付き合ったりしないわよ。」

「最初っからそう言ってるのにさ……………。ナツちゃん信じないもんなア。」

平然と、…否、若干笑いながら言われた。思わずポカーンとしてしまふ。

…いや、本気で水谷が単にそう公言してるだけかと思ってた。一方通行かと思ってた。

違うんだ?ホントに、付き合ってたんだ……………

「だから、那津。心配しないで。」  
「…ん、いや心配も何も。麗奈さんがいいならそれでいいハナシだし……………」

私が口を出せることでもないし。

「ホント、だつたんだ……………」

言葉と共にぽんつと音を立ててしほむ私のやる気。  
なんか、呆気にとられた……………」

私は、急に力が抜けたように椅子に沈みこんだ。それをニヤニヤみている男たちに殺意を覚え、少し居心地を悪く思っけて体を揺すり、そして。

「……………よかった。」

ぽつりと、呟いた。

「え?」

麗奈さんも、水谷も、聖悟も。みんな顔に「？」を浮かべた。

何が?誰に向けて?

そんな感じの疑問符だろうが、別に意味は分かってくれなくていい。

ただ、嬉しかった。

麗奈さんがまた恋をしたこと、それが本気のモノだったこと。とにかく楽しそうなこと。そして、私が、許されていたこと。

そのどれもが嬉しかったから。

無表情だった顔が緩み、自然と笑顔が形成される。

……まあ、相手は水谷ではなくてもいいと思うけどね。

ふいに、肩にぼんつと手がおかれた。みると、隣の男の右手が肩に乗っかっている。聖悟の手だ。振り向くと同時に彼の怪訝そうな顔と、ばっちり目があった。

「…那津、どうした？」

「ん、何でもない。」

「嘘」

「はー？ホントだつて。」

「どーせまた下らないことで悩んでんだろ。」

…断言された。いや、実際そうだけど別に分かってもらわなくていいつば。

『教えるよ』『教えない』と問答を繰り返し、じつと目を合わせたまま睨み合っている私たちを見て、何を勘違いしてるんだか、水谷はからからと笑った。

「はは、仲がよろしいことで。」

…どこが？どー見ても険悪なフニキだろうが。全く、こいつのK Yっぷりには頭が下がるわ。

私はギロリと睨む対象を変えたが、そいつはおもむろに時計を見るなり、頓狂な声を上げた。

「…おっと、もうこんな時間か。じゃあ、俺らそろそろ行ってもいい？」

「…ん？何、なんかあるの？」

「ああ、今から二人でデートしようと思って。」

水谷は照れくさそうに歯を見せて笑った。

…ほお。お熱いことで。まあ、本当の恋人同士なら当然、やるよね。付き合いたてだし。

まあ、自分が一件落着いた今、もうどうでもいいや。（酷）

そう思って、私は適当に言葉を選び……

「へーそうなんだ。じゃ、行ってらっしゃ……？」

しかし、言いながら、何かが引っかかった私。唐突に口を閉ざす。

デート。

…ん？でー、と？

確か、過去になんかあったような……？

『……デートの約束しようと頑張ってみたの……っでも……ダメだった……っ！』

……！

「あ——！——！」

一気にソレを思い出した私は、大きな声を上げた。当然のように、飛び上がる3人。水谷に至っては、椅子から転げ落ちた。

「…こ、今度はナニ!? ナツちゃん!」

「デート! デートだよっ!」

「はあ?」

意味が分からない、と首を傾げる彼を流し、興奮冷めやらぬ私はまたバンツと机をたたいた。

「麗奈さんと聖悟、まだデートしてないじゃん!」

「……はあ?」

私の言葉にいち早く突っ込みを入れたのは、水谷だった。気まずそうに顔を逸らす麗奈さんたちとは対照的に、本当に意味不明だ、といった顔を作っている。

あれ、そうか。これは水谷だけ知らなかったっけ。

「どういうこと? ナツちゃん。」

「っだから……むぐ!」

だが、事情を説明しようと椅子から身を乗り出した瞬間、聖悟に口ごと抑え込まれた。

「…んんっ! ふぁにふんの!」

「…それはこっちのセリフだ。何言ってるんだよ、お前は。」

聖悟はさらに左手をプラスして、私の頭をぐりぐりと押しつける。  
……身動きがとれない。  
ので。

「……！」

「ぶはっ！」

思いっきり、ガブリとその指に噛みついてやった。

慌ててひっこめられる彼の手。同時に解放される私の口と頭。

「ぶっ。」

脱出成功。

「っ、フツー、噛むか？」

「イキナリ塞いできた聖悟が悪い。」

「いや、人間として。」

「じゃ、前世が犬だったんじゃない？私。」

「な、アホな……」「なあ。そんなことはどうでもいいからさ。」

イライラしたような水谷が、会話を途中で遮る。

「どういうこと？聖悟と麗奈が、デートするはずだったのか？」

「そう、そうだよ！麗奈さんがしたがってたのに、聖悟ったらスッパリ断ったの！」

「……！な、那津。もうその話はいいから……」

麗奈さんが顔を赤くしてそう言うが、私はキッと彼女を睨みつけ、叫ぶ。

「や、ダメだよ！なんかやりきれないし、嫌な感じ！」

「……やりきれないって、お前が、か？」

「そう！」

「……………」

あれ、なに皆さん、その微妙な眼差し。

ええ、THE 自分勝手ですけど、何か？自重はしませんよ？

「……ってわけで！麗奈さん、行ってきて！！」

「……え？どこに？」

「だから、デートだって。聖悟と！」

「ああ？」

また何を言ってるんだコイツ、という眼差しを向けてくる聖悟。

あ、あと水谷と麗奈さん……って、全員か。

テーブルを囲んだ人全員が、私の方を見た。麗奈さんがおずおずと話し掛けてくる。

「…あの、那津。私はもう聖悟君のことは……………」

「…君が水谷と付き合ってるのはもう分かったって。でもさ、あんな形で失恋しちゃってオワリなんて悲しいでしょ。…聖悟と最初で最後の記念デート、してくればいいじゃん。こんな機会、もうないと思うし。」

嫌な出来事で締めくくるなんて、後味が悪いし悲しいことだ。

何故なら、最終的にそれしか、記憶に残らないから。

だから、彼女にこれくらいはやってあげたいと思う。



聖悟との最後の記憶はいい思い出で終わってほしい。

…結局は、私のワガママに変わらないが。

「でも……………」

未だ煮え切らない態度の麗奈さん。私はピンっと指を突き付けた。

「もー、いいから一回だけ行ってきてよ！そしたらスッキリするし！」

「…那津が、だろ？」

正解。

私は満足気に笑い、表情だけで返事を返した。

「ね、水谷。いいでしょ？」

「……………」

「水谷？」

問いかけると、彼はなんだか難しい顔をしてうんうんとうなっていた。

「…信二君……………」

そしてちらつと麗奈さんの方を向き、さらに考え込み……………

やがてガバツと顔を上げた。

「……………分かった、いいよ。麗奈が聖悟を好きだったのは知ってたし、

それで気が済むならどうぞ。」

「……はあ？信二まで何言つてんだよ!？」

「おお、さっすが水谷!!話分かる!!」

激昂する聖悟の隣で、私はしめた、とばかりに指を鳴らす。

ナイス、水谷!物分かりいいじゃん!

水谷を味方につけた私は、今度は聖悟の方をじっと見つめる。

「……ほら、聖悟もさ。一回くらい、いいでしょ。」

「……………」

「ね?頼むよ。」

「……………」

必死でお願いをするが、返ってくるのは無言のオンパレード。  
むすつとした表情を崩さない聖悟。

……なかなかしぶとい。別にいいじゃんかよー。一回きりなのに。  
何がそんなに嫌なんだろう、こいつ?

しかし、めげずに交渉を続け、最後には聖悟が折れた。  
……ケーキを焼いてやるのが交換条件だけだね。めんどくさ。  
私は人知れず、そっと息をついた。

「じゃあ…………行くね。」

ついにガタツと席を立ち始めた彼ら。なんだかんだでやっぱり嬉しいのか、麗奈さんは頬を染めていた。

よかったね、麗奈さん。

私はそれをニヤニヤと見つめながら、手を振った。

「お二人さん、行ってらっしゃーい！」

「…………おー。」

聖悟は力なく私の言葉に返事をし、麗奈さんに行くか、と促した。そして背を向け、歩き始める。

が、

「じゃ、ナツちゃんは代わりに俺とデートしようか。」

「あ、うん、いいよー。何処行く？」

数歩も歩かないうちにそれはピタリと止まった。

「……せ、聖悟君？」

「……………」

麗奈さんの呼び声も聞いてない。

ぎぎ、と踵を返し、さっきとは比べ物にならないくらいのスピードでテーブルに戻る聖悟。

私と水谷はそれに気付かず、話を続けていた。

「あ、またカラオケでも行く？俺、新曲歌えるようになったからさ。」

「へー、いいねえ。私も最近行ってないから行くつよ。」

「よっしゃ、歌うか！俺、安い所知ってるぜ？」

「おお！じゃ、それで」  
「オイ。」

途端、ガツと、頭を掴まれる感覚。  
ふと顔を上げると、今しがた歩いていったばかりの聖悟がすぐそばに戻ってきていた。

「ん？何、忘れ物？」  
「今、何て言った？」  
「へ？」

イキナリ、何。意図が分からん。てか、今の話聞こえたんだ。スゴイね。

私は首を傾げながらも、一応彼に答えた。

「今？カラオケのハナシ？」  
「…信二と二人で行くって……？」  
「ああ、君らがデートするから、私らも代わりにデートしようって……」

ガシ。

「へえ？」

発言は途中で止められる。

聖悟の手によって上を向かされ、頬を掴まれた。目の前に広がるのは、黒く笑う聖悟の顔。その顔を見るなり、私は冷や汗をだくだくとかいた。

あ、れ？

やばい、こいつ。……超怒ってる。

「……せ、聖悟、くん？」

麗奈さんのように可愛らしく言ってみようとしたが、大失敗。私の声は震えていた。

……いや、全身、ガタガタと震えが止まらない。何だ、この尋常じゃない瘴気。

しかし、聖悟は表情を崩さず私に目を向けたまま水谷を呼んだ。

「……ごめん、信二。やっぱり、お前と高宮さんで行ってくれないか。」

「……お、おお……？」

「俺、お前ほど大人じゃないみたいだ。」

「っひゃ！！？」

突然、ぐいっと腕を引かれ、立たされる。

そして、水谷や麗奈さんの返答を待たないままずんずんと歩きだしてしまった。

私の腕をしつかりと掴んで、だ。

「おい！聖悟！？」

後方から聞こえる、水谷の制止の声も何のその。聖悟は歩みを止めない。

「っちよ、何すんのお！」

私も若干混乱状態でバタバタと腕を振るが、効果はなし。気が立つ

ているのが掴まれている腕からも伝わってきて、私は恐怖した。

「うるせえ。お前はまだ誰のモノか分かってないみたいだな……」

「はあ!?!?」

「いいから、行くぞ。」

「え!?!?」

「俺ん家。」

「うわ、私の心と呼んだかのような鮮やかな回答! いや、待て! 何故そんな流れにいいいい!!」

じたばたと暴れ、逃亡を試み、最終的には担ぎあげられた女を人々は興味深そうにすれ違いざまに覗いた。

…ともあれ、複雑な心情の男と、哀れな悲鳴をあげる女は、そこから立ち去ったのだった。残されたのは、二人の男女。両者はしばらくの間、呆然として動かなかった。

「……………」

嵐が去ったように静けさが舞い戻ってくるテラス。ぼうつと前方を見ているだけだったカップルはとりあえずまた座りなおした。

「…はー、聖悟もやるなあ……」

よつやく、口が動く。信二はそうぼやきながら、隣の女をちらりと横目みて、ぼつりと声をかけた。

「……で、よかったのか？ 聖悟とデート。」  
「え？」

ハツとしたように麗奈は振り向くと、ふて腐れている彼氏の顔が見えた。思わず吹き出してしまふ。

「何？ して欲しかったの？」

いたずらっ子のような表情。 信二はバツが悪そうに頭を搔く。

「……いや、ぶつちやけ嫌だったけど。」

「だったら、止めればよかったじゃないの。」

「……う。でも、お前、聖悟が好きだったんだろ？ 麗奈が望むなら

「ううん。」

麗奈は男の言葉を遮って、ふふつと笑みを零す。

まったく、最近の男の子は、みんな可愛いんだから。

「いいの、別に。もういい思い出になったから。……それより、私の  
本当の望みは、ね。」

にこり。

「あの二人みたいにラブラブになることよ。よろしくて？」

輝くような笑顔でそう言いきる美女。

ぱちり、と目を瞬かせた信二は数瞬後、ようやく言葉を脳に送りこませ、弾けたように笑いだした。

「はっ、そりゃあ、また高いハードル設定してくれたな。」  
努力します、とだけ呟いて、男は女の肩を抱いた。

END



## 02 (後書き)

予想通りというかなんというか…嫉妬深い男ですね、聖悟は(笑)  
さて、次はまた聖悟視点のお話です。

遅れましたが、本年もよろしく申し上げます。

不安(前書き)

\* s e i g o s i d e \*

## 不安

「おい、那津。聞いてんのか？」

俺は眉に皺をよせながら目の前の女に話しかけた。

那津と付き合い始めて早…二週間と少し。

当初、うるさく騒いでいた周りもようやく落ち着き始めてきて、二人の時間を過ごす余裕ができた。

だが、問題はまだあった。むしろ、ここにこそ、だ。

「…ん？なに？」

那津はきよとん、と俺を見て、聞き返す。

那津の家。

彼女はゴロゴロと寝転がりながら本を読んでいた。

俺はその隣で胡坐をかき、那津の気のない返事に眉をしかめる。

話、聞いてないし。…また。

「だ・か・ら！デートだデート！俺ら付き合い合ってから一回もしてねーだろ！！」

俺は苛立ちをそのまま手のひらにこめ、バンツと勢いよく床を叩く。じいんと痺れが伝わり、かなりの音がした。

「ちよ、下に響くでしょ、止めてよ。」

「く、どんっだけポロいんだこの家!」

「その分家賃が安いんだっての。てか仮にも私が住んでる家にケチつけんな。」

むっとしたように眼鏡の下から睨んでくる那津。…あーもう、イライラする。そんな顔すんなっての。

「つか、そんなことはどうでもよくて!」

「デート、ねえ……」

「…暇な日、言えよ。せつかく今週は天気がいいんだ。どこか行こうぜ。」

「……んー。」

そう言うと、那津は何か考えているそぶりを見せる。そして、数秒後。パツと目を合わせると、

「無理。」

綺麗に一刀両断してくれた。

「…は、なんで?」

「バイト。今週毎日あるから無理。ごめん。」

淡々とそう言って、また本に目を落とす那津。

……冷たい。

「…バイトくらい、休めばいいじゃねーか。」

「いや、私の場合、生活費がかかってくるから。なるべく休みたくないんだよね。」

「……つか、そんなにバイト入れてるのか？」

俺よりもバイトを取るのか？…なんて女々しいことは言わない。や、思ったけど、一瞬。

それより毎日はやりすぎだろ。大学の授業もあるくせに。

深夜のシフトは入るなって言ったのに、まだやってるんだろつか、こいつは。

「だから、リアルにお金がないんだって。仕方ないよ。」

「でも、夜遅くに入るのは止めるよ。」

「深夜は時給高いから入りたいの！だーいじょぶだって。そんな危険な場所でもないし。」

「そういう問題かよ。」

「私にとってはそうだよ。」

「……………」

那津はあくまでも軽く、静かに言う。その様子を見て、とうとう俺は何も言えなくなってしまう。ため息も自然と出てしまう。

「…あー、そうかよ。もういい。」

ついには那津から背を向け、黙り込むという始末。イライラする。

……………なんだ、コレ。自分で自分が意味分かんねえ。

別に。那津の私生活にまでぐちぐちと口を出すつもりはない。

一人で何でもこなしてきた那津には重荷だろうし、うざったいと思

われるのも嫌だ。

俺だって色々と横から言われるのは腹が立つし、実際にそういうウザイ女もいたから気持ちも分かる。

…でも、心配なんだよ。時々、不安になる。

なんでも自分でやってしまつて、俺に頼ることなんて一切ない、俺の彼女。

そんな那津に、俺は必要とされているのか、って。

「……………」

ちらつと横目で彼女のほうを向くと、まだ熱心に小説を読んでいる。細い足を投げ出して、無防備にそばで寝転がっているこいつを、

…手を伸ばせばすぐに抱き寄せることもできるのに。  
ものすごく距離感を感じる。

…好き、とは言われたし、そうなんだろうけど。なんか、絶対俺のこと適当に扱ってるよなこいつ。

俺はっかりが好きで、あいつの気持ちはそれほどじゃないって証明されてるみたいで、なんだか気持ちが落ち着かない。

普段の俺はこんな小さなことに悩まされたりしないが…那津のこととなるとこのザマ。

マジで、まったく余裕がない。カッコ悪いな、ほんと。

思えば、『愛』を教えるとか大口をたたいたくせに、結局何もできていない。

というか俺自身、そんな不確かなもの、どうやって教えたらいいの  
か実際分らない。

でも離れてほしくない。つなぎ止める証が欲しい。

プレゼントでもしてみようか。

服？靴？靴？アクセサリー？あれ、俺、こんなときどうしたっけ？

……何をすれば、何をあげれば那津は喜ぶのか、全く思いつかない。  
思いつかない。

……今まで女を適当に扱ってきた俺への罰だろうか。こんなんじゃ……

「……ごめん。俺、帰るわ。」

ダメだ、那津じゃないけどこのままじゃどんどんネガティブに  
なる。なんだか本格的に落ち込んできて、俺はゆっくりと腰を上げ  
た。

「……ん、そう。じゃーね。」

那津のそんなそっけない返事にも若干傷つきながらも、俺は扉を開  
けて外に出た。

……那津が、そのときどんな表情をしていたのかも知らないで。

「と、いうわけなんだが……」

「…へえ。ちよつと質問いい？」

「何だ？」

「何故、それを俺に相談するかな？」

ニコリ、と音も無くほほ笑んだ斎藤 宏樹に背筋がぞくぞくつとした。

な、なんてプレッシャーだ…！俺は押し掛けた宏樹の部屋の中で、大げさに後ずさった。

「い、いやほら…お前暇そうだったし…」

「へ〜。電子工学と複素関数のテスト間近、さらに電磁気のレポートのメ切が近いって…この俺が暇、ねえ…」

さらに笑顔で俺を追い詰める宏樹。ゴゴゴゴ…と後ろで蔓延している黒いオーラが俺には見える。

…ヤバい、話題変換ミスった。つか、そんなに忙しかったのか。

「…悪い。でも、宏樹なら男心を分かってくれるかと思って…」  
「本気で殴ろうか？」

…結局何言ってもダメじゃねえか。

「まあ、何にしろ…」

はあ、と息をついた宏樹は煙草を一本取り出して口にくわえた。ライターで火をつけ、煙を細く吐き出す。…スポーツマンなのに喫煙者って、いいのか。

「いい薬じゃん。聖悟、今まで女の子のこと考えなさすぎたんだか



ら。」

「…それは、俺も思ったけど……」

「まあ、ナツちゃんはちよっとばかり特殊だからね。俺でもどうすればいいか分かんないかも。」

「だろ!？」

やっと同意が得られて、俺は身を乗り出す。

が、

「…でも、聖悟は分かってない。」

「は……?」

一気に撃ち落とされた。思わずぽかん、と目の前の喫煙者を見上げる。宏樹は煙草を指にはさんで放しながら、俺を睨みつけた。

「何か贈り物をしないといけない? 恋人同士って、そんな利害関係で結ばれてるもんなの?」

「……!」

「何かして欲しいって、ナツちゃんに頼まれた?」

「いや……」

「『愛』という名目で何かを与えて満足できる? 自分に置き換えて考えてみるよ。女に服だの小物だの貢がれて、心は動くか?」

……動かない。絶対。

そんなことしても、餌を与えられて飼われているような気分になるだけだ。それは、『愛』ではない。それは

「仮にそんなことをしても、満足するのは聖悟だけだろ。そういうのを『エゴ』って言うんだよ。」

宏樹の声が静かに室内に響いた。

「…そう、だよな……」

宏樹のセリフがじんわりと胸にしみこむ。俺はぼすん、と脱力したようにソファに沈んだ。宏樹は笑いながらそんな俺を見ていた。

「本当、変わった。聖悟もそんなの悩むようになったんだねえ。」

「…うっせ。らしくなくて悪かったな。」

「ま、大丈夫。大学生ならギリギリセーフだよ。」

「何の？」

「青春、の？」

アホか、とツッコミながら二人でまた談笑する。さつきよりだいぶ楽になった自分の心。すつきりとしていい気分だった。

「なあ、宏樹。俺、どうすりゃいいと思う？」

俺がついで、とばかりにそう聞くと宏樹はあきれ顔を返してくる。

「…流石にそれは自分で考えなよ。俺に聞かれても。」

「や、そうだけど……」

…少しくらい、いいじゃねえか。

露骨に愛情表現しても、全然伝わらないからな、那津には。

正直、俺には最初からお手上げ状態。…投げ出すつもりは毛頭、ないけど。

いやもしかしたら、俺も那津と同じくらい恋愛初心者かもしれない

……

ぶすくれた顔でまた悶々と悩む俺を見て、宏樹はじゃあひとつだけと助け舟を出した。

「…案外、単純かもね？ ナツちゃんの願い。」

「は？」

「だからさ」

「

意味ありげな笑みを覗かせて淡々と語られた言葉に、俺は目を見開く。

そして手短かに礼を言って、すぐに部屋を飛び出した。

「…まったく、慌ただしい。いつまでたっても手のかかるヤツだね

……」

嵐のように去って行った男の背中を見送り、煙を吐き出した後、憂鬱な課題を片づけるため宏樹はパソコンの電源を入れた。

P L L L …… P L L L ……

ピッ

『……はい、もしもし。』

「…那津か？」

『うん、今度は何？聖悟。』

「…入れてくれない？」

『は？』

「今、お前ん家の前にいる。」

手の中の電子機器に向かってそう呟くと、一瞬後に目の前の扉が開いた。呆気にとられた様子の那津が、俺を出迎える。

「ホントにいた……」

「嘘ついてどーすんだよ。」

「いや、てか、どこのメリーさんだよ…こっちがびっくりした。」

言いながら笑う那津はいつもと変わらない様子で。さっきのことはあまり気にしてないみたいだ。  
…でも。

「じゃ、邪魔するぜ。」

「…いーけど。」

俺には、話したいことがある。怪訝そうな那津の背中を見ながら、俺は再度彼女の部屋に入った。

「……………」  
「……………」

那津ん家に入ってから、数分経過。いきなりの無言。  
俺は気まずさに耐えきれず、視線をあちらこちらに送る。

いや、覚悟は決めてたはずなんだけど、どう切り出せばいいか分からねえ。

何だか知らないけど、さっきから那津はじーっと俺を見てるし。  
……………言いづらい。

「…なあ…」あのさ。「」

意を決して口から出した言葉は、那津に遮られた。  
真っ黒な瞳が俺を見つめる。

その目が思いのほか真剣で、俺は思わず委縮する。とりあえず話を聞こうと、隣に座る那津の方へ体ごと向いた。

「……………」  
「……………」  
「……………」

「…那津？」

何度か静止して、考え込む。それを繰り返す那津。その謎な動作はなにか躊躇しているように見えたが、しばらくしてようやく彼女は口を開いた。

「……えっと、これでいいのか分かんないけど、」

「…？なん……っ」

瞬間。

ふわっと舞う黒髪が視界に映ったかと思えば、ぎゅっと抱き締められた。

細い腕を俺の腰辺りに巻き付け、しがみついてくる那津。

「~~~~~！？」

途端に俺の心臓はドクン、と跳ね上がった。顔に熱が集中していくのを感じる。

俺の胸に顔を押し付ける那津には、自分の顔を見られないのが幸いだ。多分、今の俺の顔は見せられたもんじゃない。

何だ。なんだなんだ、何の畏だ、これは。

超、柔らかい。細い。小さい。これ、生物なのか、ホントに？

つか、いつも俺からだけど、那津から抱きつかれるのって、初めてじゃ……？

「……聖悟。」

「！」

色々と考えを暴走させていると、胸辺りから声が聞こえた。その吐息が服にかかるのが微妙に感じられる。

冷静ではいられない要素が溜まりまくっているが、とにかく落ち着こうと、俺も那津の身体に腕を回し軽く撫でてやる。そして、何だ？と小さく投げかけた。

すると、

「……………ごめん。」

「…は？」

返ってきたのは、そんな囁きのような謝罪の意思で。俺は顔の見えない彼女に疑問符をたき付けた。

「んーなんか、不安？…なのかな、と思って。」

ただどどしく、那津は少し悲しそうな声色でそう続ける。俺の胸に顔を埋めたままなので表情は見えないが、すごく不安そう。

俺なんかより、ずっと。

「……………ごめん、聖悟。デート、行けなくて。」

「……………。」  
「…あの、私、あんまり人と関わってこなかったから、こういう時どうすればいいか分かんないんだけど。」

これであつた？とおもむろに聞かれた。

「…いや、何情報だか知らねえが……………百点満点、だぞ。那津。」

その証拠に、俺が言いたかったことゼンブ頭から吹っ飛んだ。

普通に、嬉しすぎる。

ニヤけた顔を元に戻す暇も無く今度はすつと腕を離し、身体を起した那津。そして俺と向きあいながら再度口を動かした。

「私、君とどう接していいか分からないからいつも戸惑ってる。…彼女らしいことも、全然出来ないし。」

「…那津、」

「何も言えなくてごめん。私やっぱりこういうの、向いてなくて…」

ぼそぼそと吐き出される那津の本心に、心臓が落ち着いてくれない。…いかん。このままじゃ、俺、萌え死ぬ。

「…分かった、もう分かったから、「けど！」」

だが、那津は必死すぎて聞いてはくれない。

じいっと俺を見つめる大きな瞳。純粹に、綺麗だと思った。

「せ、聖悟とはいつも一緒にいたいと思ってる。…大好きだから。」

ずぎゅんっ!!

と、ハデな音を立てて、俺の胸が貫かれた。

前をガードしていたら、後ろからレーザー砲で貫かれた。…くらいの衝撃だった。一気に体温が上昇し、心臓が高鳴る。

ヤバい、何だこの破壊力。本気で、死ぬ。



「…マジで？」

「うん、ちゃんと……好き、だから。」

顔を赤らめながら、最後にそうポツリと言い残す那津。その仕草も、実に俺のツボを刺激してくれる。

……ああ、もう……無理。

限界。

可愛すぎるよ、お前。

「せい…っ!？」

刹那、俺は那津を抱き返し、そのままの勢いで押し倒した。一瞬だけ驚いたような瞳と目が合ったが、気に留めていられない。

「っ、せい…」

「もういい。少し、黙れ。」

ポソリと耳元で呟いてやると、返答も待たずに彼女の唇を塞いでやった。唇全てを覆い尽くすと、すぐに舌を出し自分のを那津のと絡めさせる。彼女すべてを奪い尽くすように深いキスを続けた。

もっと、深く、深く。

ぜんぶを、俺にくれ。

「……………ん、…っ、」

那津の苦しそうな声が俺の口内で消える。

でも、足りない。止まらない。

叶うなら、この感情のままどうにかなってしまいたい。

頭の中では、さっきの宏樹のセリフがリフレインしていた。

『彼女の望みなんて、簡単でしょ。どの女も一緒だよ。』

『彼氏と、一緒にいたい。』

そつだ。

証なんていらさない。縛る必要なんて、ない。

何もなくても、那津は俺を好きでいてくれる。俺だって、那津と一緒にいられば、他に何もいらさない。

それなのに、勝手に悩んで、不安になって。

何をしてるんだ、俺は。

「那津。」

「…ん……？」

そつと唇を離して、ほど近い距離を保ったまま那津に話しかける。彼女は薄く目を開き、ぼんやりと返事をした。

「俺も好き。大好き。」

「…うん、知ってる。」

「那津は？」

「さつき、言った。」  
「もういつかい。」

そう言つて、ちゅ、と頬にキスをすると面白いくらい目の前の顔が赤く染まる。この意外と照れ屋なところは分かりやすく好きだ。思わず喉を鳴らして笑つてしまう。

「…、からかうなっ」

「からかつてないけど？真剣、真剣。」

「…私は、君みたいに思考回路が直線で結ばれてないんだって。」  
「行動が直結しないってこと？言ってくれるまで待つから、別にいいぞ？」

「…この、腹黒。」

「なんだと、コラ。」

ムツと眉をつり上げてみると、今度は那津も楽しげに笑つた。

ふわっとしたこの笑顔は最近よく見る。これも、大好物。

まあ、怒つてる顔も不機嫌な顔も、ちょっと泣きそうになつてる顔も好きだけど。

今、このときもぎゅっとしがみついて来るこの華奢な手も。潤んだ瞳も、いつも甘い味がする唇も。

全部、好きだけど。

つまるとこ俺は、こいつに『べた惚れ』ってやつなんだろう。

……多分。

…ヤバいな、まったく。ハマりすぎだろこれ。

なんだか恥ずかしいくらい乙女思考なんだが。ああ、これもまた初体験か。

まあ、でも

「で？那津、はやく。」

「…まだ言うか。もういいでしょ。」

「やだ。言え。」

『なんかもう命令口調だし……』と呟く那津の言葉は聞こえないふりをして。抱き締めたままの腕にもう一度力をこめる。

悪くないな、こづいうのも。

「!?!?ちよ、くるし……」

「那津？言わないと……」

「っ、分かった、言うから!」

那津は慌てた様子で俺のセリフを遮る。

…へえ。前してやったことでも思い出したのか？学習効果はあるみたいだ。

…それはそれで面白くないけどな。

那津はなんだかもういっぱいはいっぱいの様子で俺を睨みつける。そして、ぐいっと俺の耳元に顔を近づけ、ぼそっとささやいた。

「…す、好き、って言ってるじゃんか馬鹿。」

それを聞いた瞬間、身体がなにか温かなもので包まれた感触がした。

『スキ』なんて安直で素直なただの言葉。

しかし、そんな些細なものでガキのように喜んでしまった俺は、よ

くできました、と口の中で言い再び彼女の口を塞いだ。

もうさっきまでの心配ごとなんて、きれいさっぱり消え去っていで、ただただ、満たされた。

話を聞いた那津は、パチクリと目を瞬かせた。

「へ？聖悟、そんな下らないことで悩んでたわけ？」

「……悪いが。」

下らない言うな。…フツーに凹む。

「……くくっ、変なの。君、顔真っ赤だよ？」

那津はそう言いながら俺を覗きこむ。急に短くなった距離にびっくりしながらも、

「うつせ、どけ。」

ぐい、と腕を掴んで彼女を引きはがす。那津はごめんごめん、と言っただけ笑った。

「…じゃあ、彼氏って、彼女に色々とプレゼントしてくれるものなの？」

「…つてのが普通だろ。でも那津は全然甘えてこないし。」

「……甘えるとか、そんな高等スキルは持ってないよ。無理無理。」

那津はあからさまに嫌そうな顔を作って、手を左右に振る。

「……ほらな、こついう奴だから、こつちもどうしていいか分からないんだよ。」

俺ががつくりと肩を落として見せると、那津はそつだなー、と考えながらまた口を開く。

「…まあ、そつだね。別に特に何もいらなし、欲しいものがあつたら自分で買う。」

「…な、そつ言うたろ?」

はあ、と息をつく。

やっぱり、オトゴゴゴロつてもんを何にも分かってない、こいつ。

「で、それが、何なの?」

「…なんか、嫌なんだよ。何もしてやれないみたいで。」

「ふーん?」

すると那津はすつと腰を上げ、隣の本棚に手を伸ばした。返ってきた右手が握っていたのは、小さな箱。それをひっくり返し、

「私は、これだけで十分だけどな。」

その中身を俺の目の前に突き付けて来た。シャラ、と軽い音をたて、キラキラと銀と青に光るソレは。

「……水族館で買った、ネックレス？」  
「うん。」

ぷらぷらと垂れる鎖を握り、那津は嬉しそうにはにかんだ。出てきた意外なものに多少驚き、じつと銀のペンギンを見つめる。そして素直に驚嘆の意を表した。

「…まだ、持ってたのか。」

正直、捨てたかと思った。結構色々あった時期だったから。

「ん、まあね。一時期ホントに捨てようかと思ったけど。」

「…おい。」

「ははは、でもいいでしょ。こうしてちゃんととっておいたんだしさ。これはこれで、記念だもん。」

軽く笑いながらも、大事そうに手の内のアクセサリを仰ぎ見る。そして、なにやら思い出したように彼女はほほ笑んだ。

「聖悟からの初プレゼントでしょ？これだけでいいよ、私は。」  
「……………」

そのセリフに、俺は口をつぐんだ。ため息混じりに顔を逸らす。

ああ、そうだ。こういうヤツなんだよ、那津は。

一見薄情そうに見えて、実は人の気持ちにもものすごく敏感で。俺のことだって、なんだかんだでちゃんと分かってくれてる。

たまに弄ばれてんじゃないかとも思うけど、な。非常に癪だ。

「…貸せ。」

「へ？」  
「つけてやる。」

言うが早いのか、俺は彼女からペンギンを奪い金具をはずす。そして向き合っていた那津の肩を掴み、後ろを向かせた。

「…何で、今？別によくない？」  
「いいから。」

ぶつくさ言う那津は無視し、カチリと銀の留め具をうなじあたりで留める。

「ほら、できた。」  
「ん、あり、がと？」

振り向く那津の首元で揺れる、青いトルコ石とつやつや光るペンギンのモチーフ。明るい電灯の元で見るソレは那津となんだかマッチしていて、自然に笑みがこぼれた。

「まあ、そうだな。考えてみりや初デートで買ったもんだし。」  
「あときは嫌々もらったけどね。思い出深いつて言えばそうだね。」

…んなコトは覚えてなくていいんだよ。  
いらぬことを言う那津に心の中で悪態をつきながら、彼女の腰に手を回し、もう一度腕の中に閉じ込めた。

「わっ！？ちよ、」  
「いい加減、慣れろつて。」  
「な、慣らしたいなら先に言つてよ！イキナリは嫌だ！」



突然引きずり込まれ、驚いたような声を上げる那津。わたわたと慌てる姿を見て少しいい気味に思った。

「…じゃあ那津。コレ、ずっとつけてるよ？」

「は、ずっと？」

「そ、ずっと。」

「えー、面倒くさいなあ。時々じゃダメなの？」

「ダメだ。それ、俺のだっていう目印にするから。」

「…わあ、俺様ですね。変わらないなー、そういう所は。」

「ほお、襲ってやるうか？」

「冗談です!!！」

途端、腕から離れようと暴れ出す那津。

もうそれが可愛くて愛しくて。つい、いじめたくなる。

俺は、ちょうど目の前にあるペンギンにちゅっとキスを落とした。

「那津、好き。」

さらに、そつと彼女の耳元に口を近づけ、甘い言葉をかけてやればもうイチコロ。真っ赤な顔をした那津が奇声を上げる。

「っ、ちょ、耳………！いや、ペンギンじゃなくて首にもキスマークつけただろ、今!!！」

「ああ、それも俺のだって、印。」

「わあああ！こんな目立つ所につけやがってええ!!！」

わあああと騒ぐ彼女。

全然、変わらない。変わりようがない、那津とのこの距離。

最終的に 俺は

なんだか自分が考えていたことなんて、バカらしくなってしまった。

…やっぱりうじうじ悩んでるのは性に合わない。

変化球だったら、それなりに対応してやったらいい話だ。

もう、俺は俺のやり方でこいつを愛してやる。

叫びまくる那津を黙らせるため、俺は何回目かのキスを落とした。

END

## 02 (後書き)

ちよつとは甘くなりましたか？(笑)

基本ドライな那津の貴重なデレを引き出すのが大変ですW W

## ショートストーリーそのいち(前書き)

さて、ここで短めのショートストーリーでも。  
基本ギャグです(笑)

## ショートストーリーそのいち

SS「最近の二人」

「あ、見ろよ宏樹。あれって、ナツちゃんと聖悟じゃね？」

「…ホントだ。」

歩きながら信二が指さす方をみると、確かに黒い車から降りてくる二人の男女が見えた。

車の持ち主である国崎聖悟と、本城那津だ。運転席と助手席から降りた彼らは、そのまま歩きだす。

「おっそい出勤だな。もう10時だぜ？ありゃ、また聖悟の家に泊まったんだなー。」

「最近ずつとじゃない？仲がよろしいことで。」

「半同棲みたいな感じだよな、最早。」

二人でぼやきながら彼らを観察していると、何やら言い争いながらこちらに向かってくる様子。足音もにぎやかに、突進する勢いだ。

「……だから、何で味噌汁に玉葱なんか入れるんだよ！ありえねー

だろうがっ！」

「うっさいな、ネギが無かったんだから仕方ないでしょうが！つか、あの貧相な冷蔵庫どうにかしてよね！！」

「んだと！？毎日送ってやってるのに、何だよその言い草！」

「君が君ん家に勝手に連れて行くんだからそれぐらい、トーゼン！むしろそろそろ実家（＝那津の家）帰らないと服とか無いし。」

「…ちっ、じゃあ送ってやる。今日、何限終わりだ？」

「もー、勝手に帰るからいいってば、そんなの！」

俺たちに気付いていないのか、ギャーギャーと騒ぎながら、カップルは目の前を通り過ぎていく。

会話の応酬を繰り広げながら、やがて彼らはそれぞれの棟に入って行った。

そして、その場に残された俺たち。

…まったく、イツらは全然変わらないな。

俺はやれやれと息をつく。隣の信一も呆れ顔だった。

「…なんか、もう彼氏彼女ってよりは夫婦だな、アレ。」

「数カ月後にはマジで結婚とかしてそっで怖いよ……」

苦笑しながら、俺は祝儀代でも貯めてやろうか、と本気で考えた。

END

「改ページ」

SS「ガールズトーク」

「さて、那津。今回の報告をしてもらおうじゃない。」

「……………」

私はずいといと詰め寄る女、 篠原未央をちらりと一瞥した。

…いつもながら、スゴい迫力だ。高級ティーカップを置き、小さく息をついた。

なんだかんだで、和解(?)し、今では名前で呼び合うほどの仲になった私と未央さん。そして、その隣で麗奈さんがニコニコと笑っている。

今日は一カ月に一回ペース(多い)で開かれる『麗奈さん家お泊まり会』だ。

「違う!『定期報告会』の間違いでしょ!??」

「…いや、そっちが違うだろ。場所提供、麗奈さんなわけだし。」

「シャーラップ。つべこべ言わずに、とっとと出しなさい!」

「……………」

…無論。こついう高飛車な所は友人になつてからもまつつたく、  
変わつていない未央さん。

…あー、面倒くさい。

「…まあ、いーけどさ。コレいつまで続けんの？」

「私に彼氏ができるまで。」

「成る程。じゃあ少なくともあと二年は続…」相変わらず、どんだ  
け失礼なのよ。」

ぐいつと胸倉を掴まれたので、私はその場で両手を上げ、ホールド  
アップ。

…冗談も通じないんだから、全く。

ハツと、鼻で笑い飛ばしてやる。…ま、もちろん心の中で、だけど。

しかし、これ以上刺激してやると拳が飛んできかねないので、私  
はヤレヤレとばかりに彼女の目的のブーツを見せてやることにした。

「んー、今回はコレ。」

パチン、と携帯電話を開きフォトフォルダーを開く。

そして、手慣れた操作で目的の画像を探し出し、未央さんの目の前  
に突き出してやった。

「……………っ！！？こ、これは…！」

液晶いっぱいに映し出されたソレを見た瞬間、未央さんは。

ぶしゅーっつと、効果音がつくくらい派手に鼻から血を出して倒れ  
込んだ。

「…え、ちょ、未央さん！？赤っ、血！血が！？」



(お高い) テーブル、椅子、カーペット。  
すべてが彼女の手(鼻?)により紅に染まり、それはどんと広がっていった。

言うならば、大惨事だ。

やべえ、何コレ。殺人現場みたいになっただけど。

致死量? え、これ致死量じゃない? あれ、これ私が悪いの?  
麗奈さんは『あらあら』とか言っただけで完全他人事にしてるし、  
どうすればいいんだ、この状況!?

おろおろと、とりあえずその辺の血を布巾でぬぐう。

すると、元凶の彼女が真っ赤な口を歪め、ニヤツと笑った。

「…ぐふっ、那津、なかなかのモン出すじゃない……。」

ゆら、と鼻から血をぬぐい、起き上がってくる彼女はさながら負傷した戦士のようなオーラを纏っている。

…いや、何と戦ってたんだ? この人。

……

…まあ大丈夫そうだからいいか? (適当)

それにしても、やっぱり今回の凄い効果なんだな。

「あ、えつと、うん。自信作だもん今回の。『寝顔聖悟』。」

そう呟いて、私はもう一度画面を見る。

そこには、シャツがはだけ鎖骨と首筋をちらりと覗かせながら寝て

いる私の彼氏の姿があった。

「うああああ！なんつてカワイイのおお！！反則でしょ、コレ！」  
「…まー、確かに普段とのギャップは凄いよね。」

と、私は一步引いて未央さんに同意する。

…分かったからハアハアすんな。あと、鼻血流すな。

あ、最近一緒にいて気付いたんだけど、やっぱりこの人ある種の変態さんだったみたいです。

合掌。

「……でも、聖悟君もこんな可愛い顔して眠るのね。」

と、横から麗奈さんが今日初めての発言をした。

携帯の液晶画面を私の横から覗きこみ、ふふ、と笑みを零す。

「…そーみたい、だね。私、この間初めて見たんだけど。」

まあ寝顔だけなら、こいつは本当に可愛い。いうなれば、お昼寝中の天使のようだ。彼女の方を振り向き、私もこくと頷く。

「あら、はじめて？」

「そ。いつも聖悟の方が先に起きちゃうからさ。この間、やっとアイツより早く起きたの。」

…だから、低血圧で朝は苦手なんだって。逆に何故、聖悟はスッキリと目を覚ませるのか知りたい。

「へえ。じゃあ彼も持つてるんじゃない？ ナツの寝顔。」  
「はー？ そんな変態なことするヤツ、この女以外いるわけ……」  
「だれーがっ！ 変態よ！！」

がし、と突然両肩を掴まれて、私はびくりと身体を揺らす。

……っうわ！？ もう復活した！？

くるりと後ろを向くと、やはり未央さんが立っていた。…鼻にティッシュをたくさん詰めて。

オー、美人、台無し。

「何、アホヅラしてんのよ。」

「……う、えっと、(血とか)大丈夫？」

「ふん、モチロンよ！」

あ、そうだ。これ、もうデータもらったからしまっていていいわよ。それよりこの携帯、画質悪すぎ！ 今すぐ最新のヤツに変えなさい！！

「いや、無茶言うな！」

「無茶じゃない！むしろこんな旧式持つてるのアンタくらいよっ！」

「わ、悪かったな！」

「悪いと思ってるならスマートフォンに機種変更しなさいよ！」

「ちょ、だからお金ないんだって！…いたっ、髪引っ張るなっ！」

またまた、ギャーギャーと喚き散らしながらやがて取っ組み合いになる私と未央さん。引っ掻いたり、足使ったり、何でもアリだ。私も負けじと応戦する。

…いや。つか、乙女がこの場から一人ほど消失したんだが、こんなお泊まり会で大丈夫か？

あれ？この話、確か副題が『ガールズトーク』のはずだったんだけどな？

いつの間にかこのぶっ飛んだ変態と本気バトルだと！？勘弁しろって！！

そんな、乱闘を続ける非乙女たちを横目に、麗奈さんは一人、ぼそつと呟いた。

「確か、信二君が……………」

\*\*\*\*\* at seiigo's house \*\*\*\*\*

891

「…おい、聖悟。何だそれ？」

「ん、見んな。」

「即答かよー？いーじゃねえかちょっとぐらい！携帯いじって何してんだよ。」

「あ？おい！」

ひょいっと聖悟から携帯電話を奪う信二。そして、どうやら彼が内蔵してあるデータフォルダを見ていたらしいことに気付き、

「…………？」

その内容に、目を瞬かせた。

「これ、ナツちゃん……?」

そう、その大半が最近撮られた那津の写真だったのだ。

「返せ。」

「いやいや、待てお前。いくら彼氏だからってこの量……」

…あ、寝顔もある。かわいい!。」

「見んな。」

「痛えっ!?!?」

ビシツと彼の両眼に目つぶしをキメ、聖悟は自分の携帯電話を取り戻した。そして、今日撮った分をしっかりとSDカードに保存する。

「……っ、お前な、ソレ隠れて撮ったんだろ?そーいうの、犯罪って言うんだぞ。」

信二は目を押さえながら低くうなるような声を出した。

こいつ、涼しげな顔して何してんだよ、と言外に言う。

「…ま、那津も撮ってるんだし、オアイコだろ。」

「は!?!ナツちゃんも撮ってるの?聖悟を?」

「本人はバレてないと思ってるらしいけどな。だから、俺もお返し。」

「……………。」

何気なく言う聖悟に、信二はジトつとした視線を送る。そして首を傾げながらぼそりと意見した。

「……………それは、果たして健全な付き合いなのか?」

「さあな。ま、いいんじゃないか?」

聖悟はもう一度保存したばかりの自分の彼女の顔を覗き、フツと笑みを零して携帯を閉じた。

END

## ショートストーリーそのいち（後書き）

ここにきてキャラの崩れっぷりが酷いですね。  
…ぞつしてこつなつた。

アンチ・ライヤー（前書き）

もしこの想いが嘘に変わるのなら、俺は、世界一の正直者になつてやろう。

それが出来ないから、

俺は俺の心までも騙して、全てを偽に塗り固めるのだ。

新キャラ登場。

先に言っておきます。長いです。



アンチ・ライヤー

「ねえ、国崎聖悟って知ってる？」

「ん？」

ベッドから身を起こしたとき隣にいた女にそう言われたのは、まだ早朝と呼ぶにふさわしい時間帯だった。

女の吐く息とともに白い煙がゆらゆらと揺れる。

煙草の匂いが得意でない俺は眉をしかめると、彼女はごめん、と言ってソレをもみ消した。

「…急に、何。」

「んーん。ただ知ってるかなーと思ってさあ。」

寝起きなので少し低い声でそう聞くと、彼女は笑って俺の腕に絡みついて来る。

ソレを見つめ、俺は無言で思った。

誰、だっけ。この女。

少し痛む頭をもたげ、昨日のことを思い返す。

ああ、そういえば昨日、友人の紹介かなんかで会ってくれって言われて……一夜過ごして……今に至った、っけ？

…まあ、いつもの感じだ。問題ない。

「…ちよつと、聞いているの？」

「ん、聞いているよ。ちゃんと。」

笑顔でそう呟き、女の頭を撫でてやる。嘘でも頭撫でて笑ってやれば女は安心するものらしい。

ほら、この人もすぐ笑顔になった。

今回限りなわけだし、印象は良くしておいた方が都合がいい。俺のヤサシサってやつだ

「国崎 聖悟、ねえ……そいつがどうしたの？」

それはさておき、今、とても懐かしい名前を聞いた。興味津々、と言った風に女に問いかける。

「あ、やっぱり知ってた？」

「うん、そうだね。高校の時の同級生だよ。」

いつも飄々として愛想が良い。しかし雲のように掴めない、茶髪  
の男。

高校卒業以来一度も会ってはいないが、一応、友達と呼べる関係だったはずだ。…一応。

へー、そうなんだ、と呟いた女は、派手に飾り付けたネイルを覗きながらまた話し出す。

「あのさ。彼、最近、彼女ができたんだって。」

「へえ。それが？」

「それが、全然釣り合っていないダツサイ女で、気に喰わないんだってさ。みんな言ってる。邪魔だつて。」

「へえ。それが？」

「…分かるでしょ？」

「さあ？何のことだか。」

女はちよつとムツとした顔を作るが、俺はニヤニヤしながらその先を促した。

まあ、分かつてるけど。

「盗ってきてよ。」

女の目がギラリ、と一瞬鋭く光る。俺の腕をぎゅっと握って圧迫し、拘束する。

怨恨？のような禍々しいものを感じ、背筋がぞくつとした。

ほら、女はこういうことを平気でするから怖い。男よりか、随分と狡猾に出来てるんじゃないかな。

俺は口角を上げた。

「…くつ、なんで俺がそんなことしなきゃなんないのー？」

「…噂、聞いたから。」

「ふっん。」

それがどんな『ウワサ』なのかは敢えて聞かない。つーか、聞かな

くても分かっているし。

強いて言えば。結構、名が通ってきたのかな、と思っただくらい。

「だから、お願い。別れさせてきてよ。」

「ハハ、『みんな』ってのは君が筆頭なんだね？」

「……!」

凶星のようだ。彼女は羞恥か怒りか、カッと顔を赤くさせた。

「……、そういうことよ！いいから、やってくれる？」

「ま、いいけど。いくらで？」

少しヤケになったような口調で依頼されると、俺はすぐさまこう返す。すると彼女は眉を吊り上げ嫌そうな顔を作り、俺を見返した。

「何、お金取るの？抱かせてあげたのに。」

「俺、お金しか信じない人だから。」

「……まったく、酷い男。」

女はふんつと不服気に鼻を鳴らし顔を歪めたが、しぶしぶベッドの脇に置いてあったバッグをとった。そして、突き出される福沢諭吉。

「これくらいで、いいでしょ。」

「ん、ありがとう。」

俺は笑顔でそれを受け取り、数える。

いち、にー、さん……

……お？

「あれ、こんなに？」

「ま、臨時収入が入ったから。」

「へー。」

「その代り、しっかりやってよ。…手段は選ばないわ。」

「はいはい。」

おっかねえ。どこのマフィアのもりなんだか。

俺は苦笑しながら起き上がる。手早く服を着、手にした万札を無造作に財布の中に入れて込んだ。

「じゃ、そろそろ行こーかな。」

まだ朝早い時間だが、ここにいってもそうやることはないし、この女とこれ以上いると危険な感じもするし。

「あら、もう？まだ早いんじゃない？」

「んー、もう始発は出てると思うし。…用もできたし、ね。」

「ふふ。そうね。」

そう言うと、女は目を細め、口元に弧を描いた。

「じゃ、またね。………拓史。」

「うん、またね。」

その時は来ないと思うけど。

俺は貼り付けた笑顔を見せながら背を向け、ホテルを後にした。

国崎聖悟と初めて出会ったのは、俺が高校2年生の時だ。初めて同じクラスになった時、その存在を知った。

いや、1年時から彼はそれはそれは有名だったから噂はそれなりに聞いていたが…

実際見てみると、まあ、男の俺から見てもいい男だと思った。

成績優秀、スポーツ万能、容姿端麗。

ヤツは何でも出来た。出来ないこと何かないんじゃないか？ってくらい。

しかしそれを自慢することも嫌みな性格でもなく。友人もたくさんいたようだし、先生からの信頼も厚い。そして当然のように、モテる。

そんな、欠点を探すほうが難しいと思えるような男に、俺は近付いた。

……なんとかその少ない「欠点」を探してやろうと思って。まあ、俺も若かったってことだ。

『国崎、聖悟くん？』

『そうだけど、何？』

『疲れるでしょ、毎回優等生やってるとか。』

『いや、別に？』

『たまには発散したい、とか思わないの？』

『バスケットかやってるし、そうストレスは溜まってない。』

『女の子と付き合いたい、とかは？』

『不自由しないけど。』

『（…この野郎………）』

初対面の会話は確かこんな感じで。

結局、何でもさらりと返されてしまつて、笑顔で睨みあつたまま膠着状態だつたっけ。

突っ込んだ質問してもまつたく堪えてない様子だつたし。

「そうやって。ずっと、完璧に、彼は彼のまま崩れることはなかった。」

「ムカつくヤツ、と最初は思つてた。」

でも、しばらく付き合つてみると不思議と彼に惹かれた。

それは

「…お、ここか。」

俺はびたり、と足と思考を止め、目の前にそびえるマンションを仰ぎ見た。

「…すつ、げー……」

目の前の建物を見上げ、俺は思わず感嘆の声をもらした。

みた感じ、とても一介の大学生が住んでるとは思えないほど綺麗な  
イイ物件。

「…いいところ住んでるんだな!。」

ぼろアパートに住んで今年で二周年の俺にとっては、まったくうらやましい限りである。

「さて、と。行くかな……」

俺はひとしきり眺めた後、書き留めてもらったメモを片手にそのマンションへと足を進めた。

そう、国崎聖悟宅に。

ピンポーン。

5階、奥から2番目の部屋。 聖悟の家だと言われた住所は、確かにここだ。

そう確認した俺は、特に何も考えずインターホンを鳴らした。

…まあ、約束も何もしてないけど、しかも会うの久しぶりだけど。…何とかなるだろ。

基本的に人を邪険には扱わないヤツだったから。まだ朝早いから出かけてもいないだろうし。

なんて、そんな風に楽観的に考えていた。すると、

「……はい、誰」

声が聞こえ、しばらくしてガチャリと扉が開いた。

出てきたのは、寝起きらしく髪が所々跳ねてる国崎聖悟、本人だった。



…一目見て、高校時代とあまり変わってないな、と思った。  
相変わらず背は高いし、お顔も憎らしいほど整ってるし、ボサボサ  
頭にも関わらず漂うイケメンオーラも健全である。  
記憶の中の彼とあまり変わらない姿に少し懐かしさを覚えながら、  
俺はぱつと笑顔を作り、手を上げる。

「あ、聖悟？久しぶりー。俺、覚えてる？」

「……ん？…ああ、拓史か？何の用だ？」

「や、別に特に用事は「なら帰れ。」

瞬時にボタン、と鼻先で閉められるドア。

ん？

え、あれ？ちょ………締め出された？俺。

「…っおい、聖悟！？」

少々思考がトンだ後、ハッと我に返った俺は慌ててドンドンと目の  
前の扉をたたく。

「うつせ。近所迷惑だろうが。」

「なら、入れるよ！」

「こんな朝っぱらから、しかも何の用もなく訪ねるお前が悪い。」

…いや、それは正論だと思うが！

「何だよ、高校時代の友人がせっかく訪ねて来たってのに！！」  
「だから、用件を言えよ。」

「ちょっとこの辺に来る用があったから寄ってみたんだっての。いいから上がらせるー！」

「迷惑だ、帰れ。」

ドアの向こう側から聖悟の淡々とした声が響く。

…どうやっても家に上がらせる気はないらしい。俺はちつと舌打ちをした。

…おかしい。この男、高校時代は友人付き合いが良かったはずなんだが…大学に入って変わった、ということなのか？

いや、 ということは、何か他に理由が？

「なんだ、誰か中にいるのか？」

「……いや、別に。」

そう思ってカマをかけてみると、数瞬後、聖悟から何とも曖昧な返答が返ってくる。

あ、当たりつばいな。しかもこの様子だと多分

「…聖悟ー？誰？」

「っ！おい那津、出て来るなって言っただろ！」

「何で？てか、玄関でそんな大声で話すの止めてよ。迷惑でしょ、近隣の人も。」

焦ったような聖悟の声と、少し低めの女の声。

次にそう扉越しに繰り広げられた会話を聞き、俺はニヤリと笑った。

…ラッキー。例の彼女、だ。

「もしかして、聖悟の彼女さんですかー!?」

少し声を大きくしてそう叫ぶと、そうですよーという気の抜けたような声と、特大の舌打ち（多分聖悟による）が聞こえた。

ま、もしかしなくてもそうだよな。部屋に入れる女なんて彼女くらしいものだ。

…付き合って、まだ数ヶ月だったけか？仲がよろしいことで。

「で、どちらさまですか？」

「俺？聖悟の高校時代のゆうじ…」他人だ。全く知らないヤツだ。だから入れる必要はない。」

ドア越しの声にそう答えると、聖悟が割って入ってきた。

他人で。ひでえ。

「ちょ、聖悟、勘弁しろって。せつかくここまで来てやったのに！」

「頼んでない。帰れ。」

「聖悟、友達でしょ？上がってもらいなよ。」

「那津、お前は黙ってる。」

「ほらー！彼女さんもそう言ってるし！」

「便乗するな、ウザイ。この家主は俺だ。」

頑として扉を閉ざしたまま帰れ帰れと繰り返す聖悟。

ちっ

本日二度目の舌打ち。

てか、扉の前で笑顔作ってるのキツイ。段々いらいらしてきた。

ガード固すぎだろ。そんなに俺が家に入るのが嫌なのか、もしくは彼女に会わせたくないのか……

……両方かもな、うん。

しかし、絶好のチャンスだ。無理にでも押しとおしたい。

聖悟をどうにか口説き落とすか、強硬手段か。

さて、どうやって入ってやるうか……

しかし。思考を張り巡らせていると、ふいにがちゃっと音をたて、ドアが面白いくらい簡単に開いた。

「え」

俺と聖悟の声が重なる。

開けたのは、彼女さんだったらしい。外側に開いたドアの前で憤慨する聖悟が見えた。

…その横でドアノブを持ちながら涼しい顔をしている女性も。

「おい、那津。何開けてんだよ！」

「まあ、いいじゃないの。はい、どうぞ上がってね。」

「あ、あざっす。」

「馴染むの、早え！」

「五月蠅い、聖悟。朝食抜きにするよ？」

「……！」

…そこで聖悟はぐうの音も出せずに黙り、会話は終了。

その様子を横目で見ながら、俺は靴を脱いで玄関を跨いだ。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3415x/>

---

脳内計算

2012年1月11日01時48分発行